貧乏同心御用帳

柴田錬三郎

講談社文庫

柴田錬三郎（しばた・れんざぶろう）
1917年岡山県生まれ。慶大支那文学科卒。在学中より「三田文学」に作品を発表。1951年「イエスの裔」で直木賞受賞。1956年創刊の週刊誌に「眠狂四郎無頼控」を連載、ニヒルな剣士と円月殺法は剣豪小説ブームを呼ぶ。1970年『英雄ここにあり』で吉川英治文学賞受賞。伝奇小説の醍醐味を堪能させる作品を多く残し1978年6月逝去。代表作『赤い影法師』『岡っ引どぶ』『運命峠』ほか。

カバー装画　守田勝治
カバーデザイン　CNT508

し2-45

柴田錬三郎

貧乏同心御用帳

講談社文庫

柴田錬三郎
し2-45
貧乏同心御用帳

講談社文庫
Y781

9784062750233
1920193007817

ISBN4-06-275023-6
C0193 ¥781E (O)

貧乏同心御用帳
柴田錬三郎
定価：本体781円（税別）

し2-45

剣は強いが情けに弱い。江戸町奉行所の町方同心・大和川喜八郎は32歳、独身なのに6歳から14歳までの孤児を9人同居させているかわりもの。黒羽二重の着流しに博多の帯を小粋に締めて、今日も悪を追って町を行く！　人情の機微と喜八郎の活躍をたくみに描く、連作短編4本を収録した柴錬の痛快捕物帳。

講談社文庫

柴田錬三郎作品

- 三国志 英雄ここにあり（上）（中）（下）
- 柴錬捕物帖 岡っ引どぶ
- 柴錬捕物帖 岡っ引どぶ（続）
- お江戸日本橋（上）（下）
- 鈴姫異変
- 柴錬三国志 英雄・生きるべきか死すべきか（上）（下）
- 浪人列伝
- 由井正雪 柴錬痛快文庫
- 三国志 柴錬痛快文庫
- 江戸っ子侍（上）（下）
- 貧乏同心御用帳

貧乏同心御用帳

柴田錬三郎

講談社文庫

講談社文庫

貧乏同心御用帳

柴田錬三郎

講談社

目次

南蛮船……五
埋蔵金十万両……一〇七
お家騒動……二四七
流人島……三三七
解説……四三八

南蛮船

その一

まことに、奇妙な家であった。

わずか三部屋（のみならず、そのうちの一室は、畳を横に六畳ならべた細長い、使いものにならないものであった）の家に、十人が同居していたが、主を除けば、のこらず、少年なのであった。

上は十四歳から、下は六歳まで、丸い顔、四角な顔、肥ったの、痩せたの、目やにをためている奴、四六時中くんくん鼻を鳴らしている奴、口笛の上手な陽気な子、むっつりして大人びた表情の子――共通しているのは、いずれも両親の顔を知らぬ少年たちが、起居しているのであった。

主の大和川喜八郎は、江戸町奉行所の町方同心で、三十二歳、いまだ妻帯したことはない。したがって同居させている少年九人のうち、自分の子は一人も含まれていない。

町奉行所の同心など、貧乏を裃にしてきている、といわれるくらいなので、妻子三人ぐらしでも、まともな三食を摂れる状態ではなかった。

食い盛りの少年を九人もかかえて、しのぎがつく道理はないのであったが、そこが、面白いところで、義理人情と心意気の尊重される江戸の市井では、かえって、この私設孤児収容所には、食いきれぬほどの品ものが贈られるあんばいで、むしろその点では、近隣の同役の台所よりもゆたかにさえみえる。

そればかりか、九人の少年が、いずれも、小ざっぱりした筒袖をまとっているのも、あちらこちらの世話やきのおかげであった。

大和川喜八郎が、特に子供好きであったという次第ではない。はじめは、やむなく、一人あずかっただけであった。

ある裏店に住んでいた西国出身の浪人者が、浅草奥山で、十歳あまりの浮浪児を使って、手裏剣の見世物をやっていた。

浮浪児を、三間あまりはなれた地点へ、戸板を背にして立たせておいて、この軀のまわりへ紙一重に手裏剣を打ち込む、という芸当を見せていたのである。

この浪人者は、酒ぐせがわるく、ある宵、浅草界隈の地廻りを十数人もむこうにまわして、乱闘した挙句、斬り殺されてしまった。

この事件をとりあつかった大和川喜八郎が、地廻りを数珠つなぎにして、小伝馬町の牢屋敷へほうり込んでおいて、自宅へもどって来ると、浪人者に養われていた浮浪

児が、ちょこんと坐っていたのである。

いわば、小さな押しかけ居候であった。

「しようがねえ。飯ぐらいはたけるだろう」

と、許してやると、十日も経たないうちに、一つか二つ年下の浮浪児を、つれて来た。

「あの町方は、孤児をやしなっている」

という評判が立つと、お節介な者が、わざわざ、遠くから、二、三歳の捨児をつれて来て、

「お願いします」

と、置いて行ったりして、この数年で、九人に増えてしまったのである。

喜八郎は、孤児たちをかかえてみると、少年同士で、ちゃんとくらしの秩序をつくることを、知らされたことだった。

こちらが、いちいち、教えずとも、少年同士が、勝手に、炊事当番やら掃除洗濯係りやらをつくって、輪番制をもうけ、また、年上の子は年下の子の面倒をみるし、すり傷の手当から寝小便の世話まで、一切、自分たちの手ですませてしまうので、喜八郎自身は、何もせずに、ただ眺めているだけでよかった。

喜八郎が教えることといえば、手習いだけであった。

九人も同居していながら、家の中は、きわめて静かであった。

時には、反目し合って喧嘩も起るが、その時は、裏の空地へ出て、正々堂々と、組打ちをやっている様子であった。着物はよごれるから、双方すっ裸になって、土まみれ傷だらけになって、へとへとになるまで、組打ちをつづけ、一方が「参った！」と悲鳴をあげて、終了すると、見物していた少年たちが、井戸端へつれて行って、きれいに洗ってやり、傷の手当をしてやって、喜八郎には、内緒にしておく、といった掟をつくっている。

喜八郎にとって、こういう少年たちの相互扶助のくらしぶりを眺めているのは、面白かった。

しかし、この狭い家では、九人が限度で、これ以上増えたら、やりきれないことだった。

残暑が、きびしい季節であった。

町奉行所の下役の家のならんだこの一廓は、窪地で、泥溝の水はけがわるいので、白昼でも、蚊が渦を巻いて、うなりをたてている。

縁さきで、少年たちが松葉をくすべて、どうにか、しのいでいるありさまであったが、そのために、屋内には、煙がこもって、かえって、午寐どころではない。

主の喜八郎の午寐の場所は、座敷の床の間であった。非番の日は、花莚薦を敷いて、ごろごろしている。

座敷の隅では、三、四人が、手習いをしていた。

寐がえりを打って、

「暑い！」

思わずもらした時であった。

「旦那様、お客さんです」

一番年長の壱太が、玄関から、告げた。

喜八郎は、この家へやって来た順番に、壱太、弐太、参太、四太、五太、六太、七太、八太、九太、と名づけていた。

座敷へ上って来たのは、数軒置いて住んでいる同じ町方同心の佐原三郎次であった。

佐原三郎次は、四年ばかり前から、肺を患って、禄盗人のかたちになっていた。

「暑いのう。今年は、梅雨からひきつづいて、霖雨で七月がつぶされたから、暑さが

秋を遠ざけたな」

そう云って、佐原三郎次は、いかにも、だるそうに、あばらの浮いた胸を蒼白い細長い手で、撫でた。

「金なら、ないぞ」

喜八郎は云った。

三郎次が、やって来る用向きは、きまっていたからである。

「金なら、ある」

三郎次は、こたえた。

「珍しいな。……どういうのだ？」

「うむ！」

三郎次は、宙へ、暗い視線を据えていたが、

「女房の奴、春をひさいで居るらしい」

と、吐き出すように、云った。

「証拠でもあるのか？」

喜八郎は、眉宇をひそめた。

町方同心の妻が、貞操を売っているとは、ききずてならないことだった。

「証拠は、ない。これは、カンだ。同心のカンが、こんなところで、役に立とうとは、皮肉な話だ」

三郎次は、苦笑してみせた。

「カンは、はずれることがある」

「あいにくだが、このカンだけは、はずれて居らんな。……しかし、わしが、文句を云えた義理ではない。女房が、春をひさいで居ろうと、乞食をして居ろうと、わしは、黙っているよりほかはないのだ」

「……」

「女房は、わしと二人の子供を、やしなってくれているのだ。これまで、やりくり算段で、愚痴ひとつこぼしたことはなかった。いよいよ切羽づまってからも、黙っていた。切羽づまった挙句、からだを売るすべしかない、と考えたに相違ない……わしが、それを、気づいても、止める力はないし、知らぬふりをしているよりほかはないのだ」

喜八郎は、三郎次の妻杉江の、面長な、整った容貌を、思い泛べた。

佐原家へ嫁いで来た当時は、貧乏同心の女房には過ぎた美人だ、と噂されたものだった。

独身者の喜八郎には、想像するだけで、それがどれほど苦悶に満ちたものか、判らぬが、三郎次の心臓を嚙みくだいている嫉妬は、名状しがたい激しさに相違あるまい。

「お主、杉江さんを、ずっと、抱いては居らぬのだろう?」

「うむ、もう二年も——。ところが、あいつが、春をひさいで居る、と気づいてから、わしは、抱きたい衝動に、毎晩、かられて居る。気が狂うほどの衝動だ」

「どうして、抱かぬのだ?」

「抱けぬ。手を、のばしかけては、止めてしまう。……お主には、この気持は、わかるまい」

「わからぬ」

「杉江のからだが、手のとどかぬものになってしまった、という恐怖が起るのだ。その恐怖で、どうしても、抱けぬ」

「抱いて、恐怖を、追いはらえば、よかろうに——」

「他人の男が、抱いた女房のからだを、亭主が、おなさけに抱かせてもらう——こんな屈辱が、またとあるか」

三郎次の顔面は、醜いまでに、ゆがんでいた。

喜八郎は、応える言葉がないままに、じっと、三郎次を見まもっていた。

三郎次が訪れた用件は、これまで借りたまった金の一部を、返すことだったが、喜八郎は、受けとらなかった。

三郎次は、去りがけに、少年たちが、夕餉のしたくをはじめたり、小さな庭へ打水をしたりするさまを眺めて、

「お主のくらしぶりが、うらやましい」

と、云った。

「これでは、女房の来手はあるまい」

喜八郎は、笑った。

「女を抱くのは、吉原か深川あたりの岡場所があるし、お主は、この独身ぐらしをつづけた方がよい。わしも、生れかわれるものなら、お主のまねがしてみたい」

三郎次は、そう云って、軽い咳をのこして、去った。

大和川家の壮観は、食事時であった。

壱太、あるいは、弐太が指揮をとって、一汁一菜が、十箇の箱膳にならべられ、全員これに就くと、一斉に、次の文句を唱和する。

「ひとつ、嘘を吐くまじ。
ふたつ、盗みを働くまじ。
三つ、生れ来たることに、よろこびを持つべし。
四つ、今日が過ぎれば、明日ありと思うべし」
この四箇条は、喜八郎が、つくってやったのである。
喜八郎自身、べつに、生きる上での信条を持っている次第ではなかった。なんとなく、つくってやったに過ぎない。
しかし、少年たちは、この四箇条にしたがって、一日一日をすごしている。
そのくらしぶりがあっぱれなので、大きな商家から、
「小僧に、ひとつ――」
と、のぞまれることがある。
喜八郎は、少年たちの意志にまかせているが、一人として、お店奉公に出ようとする者は、いなかった。
その代り、家に一文もなくなると、壱太、弐太、参太など、十三歳から上の少年たちは、臨時かせぎに出かけて行く。これも、喜八郎の指令ではなく、かれらの自主的な行動であった。

棒手振り、左官の泥こね、河岸の荷揚げ、泥溝さらい、朱引外（郊外）の田植えの手伝い、小鳥捕り、花売り、上野・両国・浅草の広小路での見世物小屋の下働きなど、少年たちは、あらゆる仕事を見つけて、働いた。その働きぶりは、蔭日向がなく、誠実でけんめいだったので、評判がよかった。
少年たちは、自ら、
「同心組」
と、称していた。
喜八郎としては、事件が起って、下手人探索に、なまじの経験を鼻にかけた岡っ引や手先を使うよりは、少年たちを使った方が、役に立った。少年たちが、その純粋な目に映した働き場所の裏表の生態が、大いに参考になったからである。
夕餉がおわった頃、この家に、また一人、訪問客があった。
しのびやかに、武家屋敷の駕籠が、乗りつけられた。
少年たちは、裏の空地で、花火に興じて居り、屋内には、壱太しかのこっていなかった。
「旦那様、お客さんです」
壱太が告げに来た時、喜八郎は、釣竿の手入れをしていた。これは、趣味ではな

く、食膳にのせるための仕事のひとつであった。もっぱら、夜釣りだが、その時は、少年を二、三人、つれて行く。

「誰だ？」

「女子衆です。お武家の、えらそうなお女中です」

「通せ」

座敷に入って来たのは、五十年配の、長い歳月を武家屋敷の奥向きですごした者共通の冷たい表情を持った老女であった。

「折入って、おたのみの儀が、あって、罷り越しました」

老女は、頭の高い挨拶をしてから、そう云った。

この時刻の訪問は、世間に知られたくない内密の依頼であり、こちらも、それに対する応対をしなければならなかった。

町方同心が、武家屋敷から、なにかの事件の解決を依頼されるのは、報酬がいいので、待っていました、とばかり引き受け甲斐があった。

しかし、喜八郎は、これまで、個人指名の依頼を引き受けたことがなかった。役人のくせに、頭を下げるのが、きらいな男だったからである。

こうした場合、喜八郎は、事件の内容をきく前に、いきなり、途方もないほど高い報酬を、ふっかけた。

それで、たいがい、対手は、慍って、立ち去った。

いまも——。

「はじめに、おことわりいたしておきますが、この大和川喜八郎、個人としてご依頼を受ける場合、百両を申し受けることにいたして居ります」

そう云った。

しかし、老女の方は、すこしも、慍らず、あきれた顔つきにもならなかった。

「礼金の儀は、いかほどでも——」

頷いてみせた。

——よほど、困惑した事が起ったとみえる。

喜八郎は、頸根に、食いついた蚊を、ぴしゃりと叩きつぶしながら、思った。

その二

ここで、江戸町奉行所の構成を、述べておく。

江戸町奉行所は、南北ふたつがあった。その職務が、あまりに複雑多岐にわたって

いたからである。

いわば、都知事と警視総監と裁判所所長と東京駅・上野駅の駅長と、そして自衛隊の隊長を兼ねているようなものであった。

南町奉行と北町奉行は、月番で一月交替であった。

月番にあたる町奉行は、奉行所の裏門をひらいて、その月の新しい公事訴訟を受けつけ、江戸市中の民政をつかさどり、治安維持に責任を持つ。

奉行所の白洲では、罪人に刑を申し渡す。

その日常は、多忙をきわめ、毎日朝四つ（午前十時）に登城して、八つ（午后二時）に奉行所へ帰って来てから、夕刻までに数件の訴訟を片づけた。

非番の町奉行は、奉行所の大門を閉ざすが、実際には、月番の時に受理した事件の整理、処理にあたって、結構忙しかった。

町奉行の下には、与力と同心がいた。

与力・同心という称びかたは、町奉行配下だけではなく、留守居年寄、納戸頭、大番組頭、書院番組頭、旗奉行、先手弓頭、先手鉄砲頭の配下も、そう呼ばれていた。

したがって、町奉行配下の与力・同心は、町方または八丁堀与力・同心という通称を持っていた。

町奉行の下には、与力二十五騎、同心百二十人がいた。

江戸の府内外は、ざっと五里四方、八百八町よりすこし多く九百数十町。人口は、百三十万ぐらいであった。

百三十万の人口は、当時として、世界最大であった。ロンドンが八十万、パリが五十万だったからである。

但し——。

江戸では、武家地が六〇パーセントを占め、武家の人口が五十万前後であった。

この武家地の支配は、町奉行ではなかった。大名自身、旗本自身であった。

ほかに、寺社地が二〇パーセントを占め、この人口は、五万前後で、寺社奉行が支配した。

さて——。

町奉行所の八丁堀与力・同心の格式・身分であるが……。

与力も同心も、一代限りの採用ということになっていた。これを、御抱席という。

御抱席というのは、本人が死ぬと、息子は、その職を継ぐことができぬ。息子が、継ぐ場合は、新規召抱えであった。

しかし、これは、法規上のことであって、実際の手続きは、世襲であった。

与力・同心の伜たちは、十三、四歳になると、見習として奉行所へ出仕し、父親が死ぬと、そのあとを確実に継いだ。

少年の時から、親を見習い、奉行所に出仕するのであるから、その事務には熟達した。いわば、生きている六法全書となり、さらに、市井生活の表裏を、熟知していた。

八丁堀の組屋敷に生れて、育って、物心ついた頃から、親の為すこと云うことを見聞して、その子がまた、自分の伜へ伝えてゆくのであったから、町方役人が、他の与力・同心とちがって、おのが職務に関する限り、すばらしい熟練者であることは、当然であった。

町方与力・同心に、出世はなかった。昇進も転任もなく、死ぬまで同じ職をつとめるのであった。

南北合せて、五十騎の与力と二百四十人の同心が、武家地・寺社地を除く町地の八十数万の庶民の治安を守り得たのも、かれらが、市井生活の表裏を、熟知していたからである。

ところで——。

与力は、身分は御家人に属しているが、禄高は旗本並み（二百石取り）で、槍一

筋、馬上の武士であったが、同心は、貧しかった。

同心は、裃をつけることを許されず、格は三等四種中の最低、身分は下から二番目であった。同心は、与力に昇進する道があったが、事実上は、閉ざされてしまっていた。

与力には、年番方と吟味方というのがあり、これは、町奉行所の花形で、奉行さんも容易に口を出せぬ特権を持っていた。年番方というのは、総務部長兼人事部長と考えてよく、吟味方は、罪人の取調べ役、いずれも、ずいぶん、袖の下の役得があったらしい。

同心の特権は、定廻り、臨時廻り、隠密廻りのうちの定廻りで、いわば、市中パトロールであった。これもまた、町家からのつけとどけが多かった。

竜紋裏、三つ紋黒羽織の着流し、刃引の大刀一本だけを落し差して、朱房のついた十手を、わざと、よく見えるように、脇差わきに差して、大店などへ、のそりと入ると、

「これは、八丁堀の旦那、ようこそ——」

と、二分とか三分とか、ひねり銭が、そっと、さし出された。

尤も、しばしば、現れれば、眉をしかめられるので、滅多に、町家には立ち寄らな

かった。

同心は、三十俵二人扶持――これでは、一年をしのげなかった。

江戸には、どこでも、一町に一箇所、自身番があった。定番という番人がいた。建物は、ひろい往還に面した、九尺二間の構えで、裏の腰障子に、「自身番」と記してあった。

同心は、巡廻の途次、必ず、自身番に、

「変りはないか」

と、声をかけた。

月番奉行所の同心百二十人が、市中を四つのコースにわけて、巡廻した模様である。

定廻りの同心は、四十歳から五十歳までの、ヴェテラン中のヴェテランであり、二十年も三十年も、同じコースを巡廻しているから、どこの町内には、どんな人間が住んでいるか、悉く知っていた。

臨時廻りは、定廻りを助ける役目であった。これは、ほとんど、五十歳以上の年配者で、永年定廻りを勤めあげた、いわば隠居格の人であった。経験がものをいう役目であるから、下手人の逮捕など、この臨時廻りが、実際上の指揮をとった。

隠密廻りというのは、その名称の通り、町奉行から特にえらばれた少数の熟練者で、人に知れないように、服装をかえて、秘密に捜索の仕事をした。隠密廻りは、同心の中から、優秀な人物が、いくつかのきびしいテストを受けて、任命されたようである。三十歳前後の者が多かった。

この物語の主人公大和川喜八郎は、隠密廻りであった。

剣を把っては、同心はおろか、幕臣中、右に出る者がないくらい、異常なまでの強さであった。平常は、飄々乎として、とらえどころのない挙措動作を示し、曾て、いかなる難事件に対しても、顔色を動かしたことはなかった。

同心の下には、中間、小者、そして岡っ引がいた。

中間は、奉行所から同心につけられた者で、年に三両の給金をもらったが、主人の同心の特権をそっくりぬすむ者が多く、大店や料亭から、ひねり銭をもらったり、かくし賭場、もぐり売春宿をおどして、かすりをせしめた。南北奉行所あわせて数百人の中間がいた。

小者は、捕物の時に動員される者で、十手と捕縄の手練を積んでいた。同心の家に住み込んでいる。いわば、同心の使傭人であった。

岡っ引は、正しくは手先と呼ばれて、無給で、奉行所でも、人員名簿にその名を記してはいなかった。蕎麦屋とか古着屋や銭湯などの副業をもち、その点では、中間や小者などより、ふところは、裕福であった。

岡っ引は、同心から手札と十手をもらっていたが、副業の方が繁盛すると、乾分を三人も四人も持つ者がいた。

同心は、たいてい、三、四人の岡っ引を使っていた。その岡っ引は、親分と称される者は、七、八人の下っ引を使っていた。

しかし、岡っ引という存在は、江戸市民には、あまり歓迎されなかった。

特権を利用して、相当ないやがらせをやる者が多かったからである。

また、同心は、世間の裏側を看るために、小伝馬町の牢獄から出て来た刑期終了の小悪党を、岡っ引にとりたてて、犯罪の摘発に利用する例が多かったからである。

岡っ引には、博徒とか巾着切とか、旧悪の所有者が多かった。またそういった者の方が、実際に役に立ったのであるが、弊害も多かった。

八代将軍吉宗は、岡っ引を廃止する意嚮を持ち、三度までもその禁令を出している。

吉宗は、町奉行に向って、

「同心どもが、悪者を天下の政事に使うのは、見識のないことである。当局者に力がないことを示しているようなものではないか。奉行以下の役人が、よく精励して、目明しなどを廃止すべきであろう」

と、云っている。

しかし、その便利さに、ついに、岡っ引の廃止は不可能であった。

当時――。

町人職人たちは、別にうしろめたさはなくとも、奉行所の白洲へ呼び出されることだけで、おぞ気をふるった。現代の市民が、警視庁へ出頭させられる比ではなかった。

そのために――白洲へ出ないためなら、どんな袖の下でも、つかった。そこが、岡っ引のつけめであった。

例えば、女が出来心で万引などした時、その女一人だけではすまずに、町役人、家主一同がうちそろって、白洲へ呼び出される慣例であった。

そこで、岡っ引は、

「お目こぼしということがある」

と、もちかけて、町役人、家主から、いくばくかの金をまきあげたのである。すな

わち、恐喝であった。

江戸の庶民は、極度に「お上」をおそれたのである。

大和川喜八郎は、九人の少年をやしなっているくせに、岡っ引は、豆六という男一人しか、使っていなかった。

隠密廻りであるから、中間・小者をひきつれて、市中巡廻をする必要はなかった。尤も、喜八郎は、常に、仕事をするには、孤独を好み、町奉行も与力も、喜八郎の人柄と熟練ぶりを充分みとめていたので、本人の好むがままに、まかせていた。

岡っ引豆六は、刀槍の研師であった。

数年前、十数人を斬殺した狂気の浪人者と、わたりあって、これを斬った時、刃こぼれがして、喜八郎は、豆六にたのんだのがきっかけで、豆六の方から押しかけの手先になったのであった。

豆六は、変窟者で、自分の気に入らぬ刀は、決して研ぐのを引き受けなかった。しかし、いったん引き受けると、見事な研ぎあげかたをするので、研料も高かった。

独身者で、子供もないし、充分暇があるので、自分から進んで、喜八郎の手先になったのである。

喜八郎が、

「なぜ、岡っ引などになりたがる？」

と訊ねると、豆六は、にやにやして、

「旦那に惚れたんでさ」

それだけこたえた。

旗本納戸頭・八千石・伏見小路甚十郎の老女須摩という女が、喜八郎宅を訪れた——その翌朝、豆六が、ふらりと現れた。九人の少年たちに、大福餅の手土産を持って来て、

「なにか、ありそうなにおいがしましたので、へい——」

と、喜八郎に、ぺこり頭を下げた。

豆六という男は、全く奇妙なカンの働く男であった。

喜八郎が、なにかの事件で動き出そうとすると、必ず、姿をみせたのである。

喜八郎は、恰度、差料を抜いて、手入れをしているところであった。

「豆六、こいつは、無銘だが、村正にはちがいないという自信がある。お前は、どうしても、村正とは鑑定しないが、どこが不服で、みとめないのだ？」

喜八郎は、訊ねた。

「沸、匂い、鎬の高さなど、まさしく、村正でございます。しかし、切先が、気に食わねえ」

豆六は、こたえた。

「どう気に食わぬ？」

「大鉈子に、いやみがあります。そいつが、気に食わねえ」

「いやみ？」

「名刀ってえのは、どの部分にも、みじんのいやみもあるものじゃございません。まして、村正ってえとなると——あっしは、村正こそ、天下第一の名刀と信じて居りますが——いやみなんぞ、塵っけもあっちゃならねえのに、それが、大鉈子にあります」

喜八郎は、じっと、切先を、瞶めた。豆六がいういやみを感ずることは、できなかった。

これは、大和川家唯一の宝なのである。

家の中には、そのほかには、ろくでもないガラクタしかない。

「研師が、なんと申そうと、おれは、これを、村正と信じる」

断言しておいて、喜八郎は、畳の上に、午寐している稚い子らの寐顔へ、視線を投

げた。

「豆六、どうだ——こんな無心な、美しい寐顔を、おれたちも、曾ては、持っていたのだぞ」

と、云った。

「全くで……」

うなずいてから、豆六は、

「それにしても、旦那の趣味が、捨児をかきあつめて、養いなさることとは、今更ながら、あきれるやら、感心するやら——とても、そこいらの人間のまねのできることじゃありませんや」

と、云った。

「好きでやって居るのではない。むこうから、勝手に押しかけて来たのだ。そういうお前も、押しかけ手先だ」

「旦那、あっしは、においをかいで、やって来たんですがねえ」

「うむ」

喜八郎は、うなずいてから、

「旗本納戸頭の息女が、行方知れずになった」

と、告げた。
「へえ――？」
「おれは、百両で、さがし出す約束をした」
「百両で！」
「わるくなかろう」
「見当は、ついてなさるので？」
「目下は、雲をつかむような状態にある」

その三

その宵――。
岡っ引豆六を相伴させて、一家十人の夕餉を摂り了えた大和川喜八郎は、
「さて、出かけるか」
と、腰を上げた。
「どちらへ？」
豆六が、仰いだ。

「これから、行方知れずの旗本の息女をさがしに行く」
「へい、待ってやした」
喜八郎は、豆六がついて来るのをこばまなかった。
のみならず、玄関を出がけに、ふと思いついて、見送る九人の少年を、ふりかえると、
「五太、ついて参れ」
と、命じた。
五太は、赤児の頃、佃島の沖あいにただよう舟に、置きすてられていた少年であった。どうやら、両親は、抜荷の手先をつとめて、その品を、こっそり江戸へはこび込む仕事をしていたらしい。そこを、何者かに襲われて、荷を奪われ、夫婦は殺されて海中へ投げ込まれ、五太だけが、舟に置きすてられた模様であった。五太は、佃島の漁師にひろわれた。三日後に、女の死体が、佃島へ流れついたが、それが、五太の母親らしかった。
去年の秋、喜八郎が、夜釣に出て、佃島の近くまで舟を出していると、筏らしいものが、流れ寄って来た。
その上に、ちょこんと、子供が一人、乗っていた。

喜八郎が、舟に移らせて、事情をきくと、
「おいら、江戸で大泥棒になってやるんだ」
と、こたえた。
家へつれ戻ってみると、からだ中が、折檻の傷あとだらけであった。
ひろいあげてくれた漁師は、子無しであったので、物心つくまでは、犬猫扱いではあったが、べつに不幸ではなかった。ところが、男の子が生れてから、五太は、養母から憎まれて、絶え間ない折檻を加えられるようになり、食物もろくに与えられなくなった。
その日、五太は、空腹に堪えかねて、釜底にこびりついていたこげ飯を、手づかみでくらっているところを、養母に見つけられ、気を失うほど、擲られ蹴られた。
そこで、ついに、九歳の少年は、一大決心をして、流木をつなぎ合せて筏を組むと、江戸へ渡ることにしたのであった。
こうして、五太は、大和川家の小さな居候の一人に加えられたのである。しばらく、置いているうちに、喜八郎は、五太が途方もないくらいの糞度胸を持っていることを知った。喧嘩をやる数も五太が一番多かった。
——これでは、養い親に憎まれる筈だ。

と、うなずけた。
喜八郎は、その五太を、豆六とともに、供にした。
「旦那——」
八丁堀を出て、河岸道を歩きはじめた時、豆六が、云いかけた。
「ここらあたりで、奥様をおもらいになっちゃ、いかがです？」
「九人の餓鬼がごろごろしている家に、女房になろうという物好きな女は、居らんだろう」
「それが、居りやす」
「ふうん——」
「小えんでさ。昨日、小えんに会って、きいたら、二つ返辞で、承知しましたぜ」
小えん、というのは、辰巳芸妓であった。深川随一の売れっ妓で、踊りの名手でもあった。一中節の「辰巳の四季」を踊らせれば、右に出る者はなかった。
幕府が、御用船天地丸を修復して、品川湾にうかべた時、この祝賀の催しに、若年寄堀田正敦は、小えんを呼んで、船上で、「辰巳の四季」を踊らせた。
それが、問題となって、堀田正敦は、若年寄を辞さなければならなかった。
小えんをねらう客は、大大名の留守居をはじめ、かぞえきれぬほどいたが、いま

だ、小えんは、一度もなびいたことはない。

隅田川の水でみがいた肌は、絖のようななめらかな艶をもち、眉目の鮮やかなつくりは辰巳女でなければ見られないものであり、踊りできたえたからだの線は、ふるいつきたいほどの色香を湛えた美しさであった。

その辰巳芸妓が、貧乏同心の女房になることを、承知した、という。

「旦那、あっしゃ、旦那をかついでいるんじゃありませんぜ。小えんは正気で本気で真剣でさあ」

「どういう風の吹きまわしかな」

喜八郎は、べつに、生唾をのみ込んだ様子もみせなかった。

「旦那に惚れているんでさ。……去年、小えんの家に、盗人が入ったことが、ござんしたね。自身番へ、小えんがとどけに来た時、恰度、旦那が、居合せていなすって、金やら衣裳やら盗まれた、ときくと、旦那は、笑い乍ら、からだは盗まれなかったのだろうと、仰言ったそうですね。小えんが、むっとすると、旦那は、売れば千両にもなるからだだろうが、からだはただでくれてやるものだ、と仰言った。その言葉が、耳にのこって、小えんは、爾来、旦那のことが忘れられなくなった、というわけでさ」

喜八郎は、豆六のすすめに、返辞をしなかった。

ただ、この一年あまり、月に二度か三度、名を伏せて、少年たちに、そろいの着物とか、饅頭とか羊羹とか、枇杷とか蜜柑とか、鰻の蒲焼から生鯛まで、いずれも吟味した品を、贈って来る者があったが、

——あの贈り主は、もしかすれば、小えんかも知れぬ。

と、思いあたった。

これまで、喜八郎は、女に惚れられたことは、幾度かある。

しかし、据膳を食ったことはない。

喜八郎は、欲情処理は、もっぱら、吉原の小格子女郎とか、深川の櫓下の伏玉とか、時には夜鷹とか、最下級の女を買うことに終始していた。

最下級の売笑婦の中に、女の哀しさを視て、あわれを催すのが、喜八郎は好きだったのである。箸にも棒にもかからぬ、あばずれの娼婦が、ふっと、示す女の哀しみは、喜八郎の胸を打たずにはおかなかった。どんな女も、春をひさぐために生れたわけではないのであった。そこまで堕ちるには、人には語れぬ苦しい経緯を辿っているのであった。

町方同心としては、その惨めな来しかたを知るのも、役目のひとつといえた。
綺羅を張った、えらばれた美貌の辰巳芸妓など、町方同心にとって、無縁の存在であった。
喜八郎は、小えんの美しい容子を思い泛べたが、べつに、心は動かなかった。
むっつりと沈黙を守って、吾妻橋を渡ると、左折して、すこし、急ぎ足になった。
旗本納戸頭・八千石・伏見小路甚十郎の屋敷は、浅草阿部川町にあった。
旗本屋敷は、初更（午后八時）を越えると、いかなる訪問客も、受けつけぬならわしであった。裏門の潜りもかたく閉ざして、出入厳禁であった。
喜八郎は、その刻限に、間に合わなければならなかった。
阿部川町に入った時、時の鐘が、ちょうど初更を告げはじめた。
喜八郎は、伏見小路邸の裏門前に立つと、
「大和川喜八郎が参上いたしました、と奥へお取次ぎを――」
と、云った。
「刻限でござる」
「刻限ゆえ、参上いたしました」
喜八郎と豆六と五太が、みちびかれたのは、母屋ではなく、東側の紅葉の林にかこまれた別棟であった。

別棟といっても、貧乏同心の家の数倍はある。
書院もあって、喜八郎たちは、そこへ通された。但し、豆六と五太は、控えの小部屋に坐らされた。
待つほどもなく、書院に入って来たのは、大和川家を訪れた老女須摩であった。
喜八郎は、須摩から、三方にのせた礼金百両の切餅をさし出されても、すぐには手を出そうとせず、
「御用人にお願いの儀がありますが、貴方様から、おつたえ下さいましょうか」
と、申し入れた。
「なんでありましょう？」
「ご当家の伝家の宝刀を、拝見つかまつりとう存じます」
大名旗本の家には、必ず、二振や三振、先祖代々伝えられている名剣がある。
「なんといたしますぞ？」
老女須摩は、不審の視線を、喜八郎にあてた。
この町方同心を、人目にたたぬように、刻限に、屋敷へ呼んだのは、行方不明になった息女八重の探索に、手がかりをつかませるためであった。

当然、喜八郎は、息女八重が、屋敷から姿を消した時のことを、くわしく訊ねるものと、須摩の方では、考えていた。

喜八郎は、訊ねようともせず、伝家の宝刀を見せて欲しい、と申し出たのである。

「てまえは、お引き受けしたからには、てまえの流儀で、やります。……何卒、ご当家ご自慢の名剣を、拝見させて頂きとう存じます」

須摩は、立って、出て行った。

喜八郎は、すっと、床の間に寄って、掛物を観た。

それは、元禄の頃に流行した濃彩金碧燦爛たる花鳥画であった。

しかし、じっと凝視していた喜八郎は、

「尾形光琳とみせかけたにせだな」

と、呟いた。

かなり待たせてから、老女須摩は、もどって来たが、五十年配の武士をともなっていた。

「当家用人増田嘉門である」

名のって、携げて来た刀を、前に置くと、

「これが、当家に伝わる宝刀である。銘はないが、正宗であることにまちがいはない」

と、云った。

「拝見つかまつります」

喜八郎は、金襴の袋から、刀をひき出した。

柄、鞘のつくりは、見事であった。

懐紙を口にくわえて、鞘をはらった喜八郎は、白刃を直立させた。

瞶めるのに、さほどの時間を費やさず、喜八郎は、白刃を鞘に納めた。

「正宗と申されましたな？」

「いかにも――」

用人増田嘉門は、うなずいた。

「まことに失礼なことを申しますが、てまえは、いささか、疑いを抱きます」

「なに？　これを、正宗ではない、と否定するのか？　ばかなっ！」

「てまえが、ひきつれました手先は、研師でありますれば、拝見をお許し下さいますよう――」

用人は、老女と顔を見合せた。

須摩が、なにか、意味ありげな表情で、増田嘉門に、意(こころ)をつたえるのを、喜八郎は、見のがさなかった。

「よ、よろしい」

用人は、許した。豆六が、呼ばれた。

「正宗といわれる。鑑定してくれ」

喜八郎から手渡された豆六は、

——自分をつれて来たのは、この役目があったからなのか。

と、合点した。

豆六が白刃をしらべる時間は、喜八郎が費やしたそれよりも、短かった。

黙って、鞘に納めて、返すと、頭を下げた。

「どうじゃ？　正宗と鑑定いたしたか？」

用人増田嘉門が、苛立(いらだ)たしげに、問うた。

「これは、正宗ではございませぬ」

豆六は、はっきりと否定した。

増田嘉門は、ものも云わず、刀を把ると、急ぎ足に出て行った。

老女須摩が、ほっと、吐息した。その吐息に、なにか、ふかい意味がありそうであった。

「あの宝刀は、門外不出であったのですな？」

喜八郎は、訊ねた。

「ただの一度も、持ち出されたことはありませぬ」

須摩は、こたえた。

程なく——。

荒い跫音(あしおと)が、紅葉林の中を近付いて来た。喜八郎が、待っていた跫音であった。

書院に入って来たのは、立派な風貌の、長身に熨斗目(のしめ)を着流した人物であった。

「当家のあるじ伏見小路甚十郎だ。……お主は、この名剣を、正宗ではない、と断定いたした由。にせと看(み)た理由をきこう」

憤りの色を、面上にあふらせていた。

「豆六、申し上げるがいい」

喜八郎は、促した。

豆六は、鎬、峰、鉾子、沸、匂いなど、正宗の特長を挙げ、この刀はまことによく正宗に似せてあるが、あきらかににせものである旨を、説明した。

しかし、伏見小路甚十郎は、納得しなかった。

「わしは、祖父からも、父親からも、これが正宗であることを、きかされて参った。寛永年間に、三代様より下賜されたこの名剣は、当家をおとずれたあらゆる客に、見せられた。わし自身も、目ききの客に、見せて居る。これまで、一人として、これを、にせものと疑った客は、居らぬ。……お主らが、はじめてだ。きこう！　どういう存念で、伝家の宝刀を見せろ、ともとめ、それを、にせものと断定いたしたのか――？」

場合によっては、致し様があるぞ、とばかり、伏見小路甚十郎は、喜八郎を睨みつけた。

「慮外とおいかりの儀は、ご尤もでありますが、十中の十、正宗でないことはたしかでありますれば、まず、その証拠をごらん頂き、それから、てまえの申し上げることを、おききとどけ下さいますまいか」

「証拠だと？　よし、正宗でないという証拠を見せろ！」

「かしこまりました」

喜八郎は、控え部屋から、十歳の少年を呼んだ。

――旦那は、いったい、どうするつもりなんだろう？

豆六は、不安をおぼえるままに、五太を、つれて来た。

その四

「五太――、ふところから、ちゅう公を出して、頭へとまらせろ」

町方同心は、下座にかしこまった小さな居候に、命じた。

五太は、けげんな面持で、喜八郎を見やったが、黙って、ふところから、一羽の雀をつまみ出して、自分の前髪へ、のせた。

喜八郎は、五太が、どこへ行くにも、よく飼い馴らした雀を、懐中にしているのを、知っていたのである。

少年たちは、小さな動物が、好きである。みなそれぞれ、なにかを飼っていた。なかには、小蛇を取って来て、寝る時も、抱いている子もあった。

なかでも、五太は、小鳥飼いの名人であった。いま、あたまへとまらせた雀は、まことによく訓練されていて、まわる独楽にとまって自身もぐるぐるまわったり、燈心をくわえて、神棚へ飛んで、燈明をつける芸まで、仕込まれていた。

喜八郎は、まず、伏見小路家の家宝である刀を左手に携げて、やおら、立ち上った。

当主はじめ、用人も、豆六も、何が為されるのか、と興味をわかせて、見まもっている。

喜八郎は、すらりと、白刃を抜いた。

五太が、肩をすくめて、

「旦那様、ちゅう公を殺すのは、かんにんして下され」

と、たのんだ。

「心配無用だ」

喜八郎は、ゆっくりと、大上段にふりかぶった。

前髪にとまった雀は、しきりに、きょときょとと、首をまわしている。

喜八郎は、無言の気合で、雀めがけて、白刃を振り下した。

瞬間——。

雀は、ぱっと飛んで、鴨居へとまった。

喜八郎は、白刃を鞘に納めると、用人に返しておいて、こんどは、控えの間から、自分の差料を持って来た。

「五太、もう一度、ちゅう公を、頭へとまらせろ」

「はい——」

五太は、口笛を鳴らして、雀をてのひらへ飛びもどらせると、再び、前髪へのせた。

喜八郎は、伏見小路甚十郎に向って、

「これは、貧乏同心の差料でありますれば、もとより、名もない刀にすぎませぬ。しかし乍ら、当人は、これを、あるいは村正かと考えて居ります」

そう云いおいて、鞘をはらった。

前と同様、大上段にふりかぶった喜八郎は、ややしばらく、間を置いた。

「えいっ！」

こんどは、凄じい気合もろとも、雀めがけて振り下した。

雀は、飛ばなかった。

前髪の上で、小さくうずくまったなり、微動もしなかった。白刃は、その上で、ぴたりと停止していた。

喜八郎が、白刃を鞘に納めるのを待って、五太は、雀を、てのひらに移した。

蘇生した雀は、急に、啼き声をたてて、てのひらをつつくと、さっさと、五太のふところへ、もぐり込んでしまった。

喜八郎は、座にもどると、

「ご当家の宝刀が、まことの正宗ならば、雀は、飛び逃げはいたさなかったに相違ありませぬ。……ごらんなされたごとく、ご当家の宝刀は、この貧乏同心の差料にも劣る鈍刀ということに相成ります」

と、云った。

甚十郎は、不快の念をかくせぬ表情になっていた。

「よい。では、かりに、にせもの、ということにしておこう。……だが、それが、それが娘の八重の行方知れずと、なんのかかわりがある、というのか？」

「失礼乍ら、ご当家は、旗本八万騎の中でも、最高の石高をお持ちであり、納戸頭という地位におありであるにも拘らず、その床の間の掛物も、尾形光琳とみせかけたにせ、こころみに拝見いたしました家宝の刀もにせ、ということは、よほど内証が窮迫されて居る、と推察つかまつります。この儀、つつみかくされずに、おきかせ頂きとう存じます」

「……」

甚十郎は、すぐには、返辞をしなかった。

喜八郎は、すぐに、言葉を継いだ。

「貴方様は、この家宝の刀を、正宗であるとかたく信じて居られた、とお見受けいたしました。とすると、あるいは、ご尊父でも、いつの間にか、家宝の品々を、つぎつぎと、売却なされて、にせで補い埋められたのではありますまいか」

「――む！」

甚十郎は、ひくく呻いた。思いあたることがあったに相違ない。

喜八郎は、甚十郎の返辞を、待った。

下座に控えた豆六が、

――じれってえな。

と、肚のうちで、呟いたくらい、長い沈黙が、座を占めた。

「もうよい！」

不意に、甚十郎が、不快をこめた語気で、吐き出した。

「娘の捜索かたを、町方同心などに依頼したのが、当方の考えちがいであった。……たのまぬ！」

この言葉を、廊下に控えていた老女須摩が、きいて、あわてて、入って来た。

「お殿様、そ、それは――」

「須摩！　その方のさし出がましい振舞いが、藪をつついて蛇を出す結果を、まねく

ぞ！　……同心――、ひきとってくれてよい。他言無用だ！」

こめかみに、癇癖の筋を匍わせておいて、甚十郎は、さっと座を立つと、書院を出て行った。

老女須摩が、必死の声をかけたが、

「たわけ！」という呶号が、かえされたばかりであった。

喜八郎は豆六と五太をつれて、伏見小路邸を出た。

「もったいねえ！」

往還をひろい出してから、豆六は、大声をあげた。

「なにが――？」

「百両でさ、百両！　百両ありゃ、旦那、神田祭に、山車をつくって、九人の子供に曳かせて、見物人をうならせることができまさあ」

「ちげえねえや」

五太が、小生意気に、相槌を打った。

「たしかに、百両をフイにしたが、その代り、もしかすると、千両の儲けになる仕事かも知れぬ、この仕事は――」

「へえ？　ほ、ほんとですかい？」

「内証窮迫した伏見小路家が、娘の捜索に、百両をなげ出そうとしたのだ。……これは、ただの行方知れずではない筈だな」

「成程――。じゃ、旦那は、このままでは、手を引かねえ、と仰言るんで？」

「うむ。……そうだ。お前たち、一足さきに去んでいてもらおうか」

「へい――」

豆六は、喜八郎が、伏見小路邸へひきかえすのだ、と看てとった。

喜八郎が踵をまわして闇に溶けるのを、見送って、

「おっさん、旦那様は、あぶねえ橋を渡るのじゃ、ねえのかい？」

五太が、利いた風な口をきいた。

「うむ、まあな」

豆六は、五太の肩へ手を置いて、歩き出し乍ら、

「滅法、強えのさ、旦那は――。おめえのあたまへ、そのふところの雀をとまらせておいて、ねむらせちまったほどの腕前だからな」

「うん――」

「心配無用さ。……それよりも、おめえら、旦那が、奥様をもらうってえ話は、どうだい？　奥様になるのは、辰巳芸妓で、江戸中さがしたって、二人と見当らねえ、と

びきりの別品と来ている。気っぷは、いうまでもねえやな。金がなくなりゃ、てめえの黒髪を、ばっさり切って、売りとばしても、おめえたちを飢えさせねえ心意気を持っているんだぜ。こういう姐さんを、奥様と呼ぶのは、わるかあ、ねえだろう。どうだい？」

「そうだな。わるかあ、ねえな」

五太は、こたえた。

「ほかの連中も、いやとは云わねえだろうな！」

「みんな、いやだと云うだろうぜ、おっさん――」

「おいおい、おめえ、いま、わるかあ、ねえ、と返辞したじゃねえか」

「云ったさ。相槌ってやつさ。うれしがったわけじゃねえや」

「江戸一番の別品で、心意気があって、よろこんでおめえたちの母親代りになってやろうというのが、うれしくねえ？」

「うれしくねえな」

「どうしてだ？」

「どうして、ったってよ、おっさん、見てるだろ、家は、万事うまくいってるじゃねえか。旦那様とおいらたちと、ちゃあんと、うまく、やってらあ。奥様なんか、要らねえや」

「うまくいっているのは、みとめるぜ。しかし、奥様を迎えりゃ、この上さらに、うまくいくじゃねえか。そうは思わねえか」

「わからねえのかなあ、おっさんは――」

「なにが、わからねえんだ？」

「どんな立派な女子衆か知らねえが、そいつが、奥様になったら、おいらたちは、やっぱり、住みにくくならあ」

「餓鬼のくせに、よけいな気をまわすことは、ねえと思うんだが……」

「おいら、知っているんだぜ、おっさん」

「なにを知っているんだ？」

「夫婦というのは、契るんだろ？　一緒に、牀の中に寝て、契るんだろ？」

「びっくりさせやがる。おめえ、もう、契るってえことを、知っているのか？」

「男が、ちんぽこを、女子衆のあそこへ、くっつけるぐれえのことは、おいらだって、知ってらあ。……おっさん、旦那様が、奥様もらって、契る部屋なんか、家には、ありゃしねえじゃねえか」

「……」

流石に、豆六も、五太にそう云われて、かえす言葉がなかった。

——成程、こんな小まっちゃくれた餓鬼どもを、九人も養っていちゃ、旦那は、当分、やもめを通すよりほかはあるめえ。

喜八郎は、豆六の推測通り、伏見小路邸へひきかえして、高塀を越えていた。

喜八郎のカンは、的中していた。

その離れの書院には、老女須摩と用人が、途方にくれた面持で対座していたのである。

「……つまり、貴女は、御先代が、いつの間にか、家宝の品々を、ことごとく、贋物とかえてしまわれた、と申されるのだな？」

「そうとしか、考えられませぬ」

「御先代は、しかし、遊興ひとつあそばされては居らぬ」

「……」

「どうして、多額の金子が必要だったのか、貴女には、見当がつくであろうか？」

「たぶん……」

「たぶん？」

「御先代は、晩年は、南の文庫蔵で、一日の大半をおすごしなさいました。……蔵の中を、調べてみれば、きっと、この謎は、解けるかと存じます」

「須摩殿。南の文庫蔵の鍵は、お嬢様が、お持ちでござった」

用人が、声をあげた。

「そうでした！　お嬢様が、お持ちでした。うかつでした。忘れて居りました」

「待たれい。お嬢様のお部屋を、もう一度、調べて参る」

用人は、いそいで、出て行った。

喜八郎は、老女が思案にあまった様子で、一人、膝で両手を組んで、俯向いている姿を、しばらく、ぬすみ視ていてから、

「ごめん——」

声をかけておいて、その前へ、姿を現した。

はっとなった須摩は、喜八郎を見ると、なかばそれを予期していたように、べつに咎めの声もあげなかった。

喜八郎は、座に就くと、

「ご当主は、たしか、ご養子でありましたな？」

と、きり出した。

須摩は、黙って、うなずいた。

「失礼乍ら、御先代と御当主は、あまり仲がよろしくなかったのではありませんか？」

「……」

「御先代は、孫娘の八重殿だけを、大層可愛がられた。そば近くに、自由に寄るのを許されたのは、八重殿だけであった。そうですな？」

「どうして、そのことを？」

須摩は、眉宇をひそめた。

「御用人との会話を、ぬすみぎきさせて頂いて、そうではあるまいか、と想像しただけのことです。どうやら、当りましたな」

「たしかに！」

須摩は、うなずいた。

「御先代は、お亡くなりになる際、ご自分が常に一人ですごされて、誰人も一歩も踏み入れさせなかった南の文庫蔵の鍵を、御当主に渡されずに、孫娘の八重殿に渡された。……これは、御先代が、御当主を憎んでおいでになった証左であるとともに、ご自身が、南の文庫蔵の中で、どのような晩年をすごされたか、孫娘の八重殿にだけは、知らせていた——ということが、あきらかですな」

「……」

須摩は、喜八郎の推理を、みとめざるを得なかった。

「とすれば、八重殿が行方知れずになったことも、南の文庫蔵の中を調べれば、おのずから、あきらかになる、と申せますな」

「用人殿が、いま、その鍵をさがしに、行かれて居ります」

「鍵は、おそらく、見当りますまい」

「……」

「錠前をこわして、開けるよりほかにありませんな」

喜八郎は、云った。

その五

喜八郎が、伏見小路邸を、忍び出たのは、もう程なく夜が明けようという頃あいであった。

南の文庫蔵を、丹念に調べるのに、長い時間を費やしたのである。

収穫といえば、いま喜八郎の懐中にある書物一冊だけであった。

それは、びっしりと横文字の活字のならんだ、革表紙の、部厚い西洋の書物であった。

南の文庫蔵には、これと同じ書物が、およそ数百冊もならんでいた。

そのほかには、これは、と目をひく品物は、何ひとつなかった。

喜八郎は、天井を破り、床板を剝いでみたが、何も発見することはできなかった。

——つまり、伏見小路家の先代は、あの蔵で、南蛮書を、せっせとひもといていたことになるのか？　そう想像せざるを得なかった。

用人の話では、南の文庫蔵には、先祖代々の貴重な品が、かなりあった筈であった、という。

用人自身も、入ったことがなかったので、どんな品ものがならんでいたか、見とどけてはいないが、あったことはまちがいないのであった。

それが、いつの間にか、消えうせて、がらくただけがのこっていた。貴重な品々は、数百冊の南蛮書にすりかわった、といえる。

南蛮書は、たしかに、当時は高価で、またなかなか入手し難いので、数百冊もそろえようとすれば、相当な金子を必要とすることは、事実であった。

それにしても、家宝の名剣をはじめ、邸内すべての貴重の品を売りはらわなければ、購入できなかった、とは考えられぬ。

喜八郎は、伏見小路家の先代が、壮年の頃、長崎奉行を勤めたことがあるのを、老女須摩からきいて、

——この書物は、その頃、入手したのかも知れぬ。

とも、考えた。

すくなくとも、二十余年奉公している用人増田嘉門の記憶では、先代が、晩年に南蛮書を購入した、という事実はないのであった。

南蛮書を、長崎時代に購入したのだ、とすれば、邸内の貴重な品が、あるいは贋ものにすりかえられ、あるいは消えうせたことは、いよいよ奇怪といわねばならぬ。

——文庫蔵を調べたために、さらに、五里霧中となったとは、皮肉だな。

喜八郎は、苦笑し乍ら、じろじろと地面の浮いた人気のない往還をひろって行く。

懐中の書物は、それがどんな内容のものか、目に一丁字もない喜八郎には、判断もついていない。

田原町から広小路に出た時、夜はすっかり明けはなたれた。

しかし、まだ、往還には、虚無僧が一人、ゆっくりと近づいて来るだけで、商いに

出かける町人たちの姿も、見かけられなかった。
腕ぐみした喜八郎は、虚無僧とすれちがった。
瞬間——。
静寂の冷気を截って、抜きつけの一撃が、喜八郎の背中を、襲った。
跳び躱すいとまもなく、喜八郎は、大地へ向って、おのが五体をたたきつけるようにして、辛じて、のがれた。
虚無僧は、倒れた喜八郎めがけて、二撃、三撃をあびせかけて来た。
喜八郎は、おそろしいすばやさで、転び乍ら、切先をかわしていたが、敵が一呼吸を置いた隙をとらえて、はね起きた。
「意趣か！」
問う声音に、すこしのみだれもなかった。
喜八郎は、職業柄、怨恨を買っているおぼえがある。寐刃を合せている者は、多いはずであった。
いつ、どこで、突如として、襲撃をくらうか——その覚悟は、できていた。
対手は、無言で、青眼につけて、じりじりと迫って来る。
喜八郎は、十手を所持していなかった。

やむなく、差料を抜いて、峰をかえした。
喜八郎の剣は、常に守勢のものであった。対手が襲って来ない限り、動かぬ。
八双に構えて、対手を、じっと見据えている。
虚無僧は、天蓋をすてていたが、覆面をしていた。
喜八郎は、動かず、迫るにまかせ乍ら、
——なんの匂いか？
と、不審をおぼえる余裕を持った。
その香は、虚無僧のからだから、ただよい出るものであった。ただの匂いではなかった。伽羅のような、すすんで身につける香ではなく、なにかの理由で、消し得ない異様な体臭にも似た匂いのようであった。
「お主——」
喜八郎は、冷ややかに、云いかけた。
「お主がただよわせる匂いは、それは、なんだ？」
返辞の代りに、猛然たる突きが来た。
喜八郎は、正法の鮮やかさで、白刃をはねあげざま、峰撃ちを肩に加えた。

にぶい音とともに、虚無僧は、よろめいた。肩の骨が、折れた模様であった。

喜八郎は、虚無僧が常夜燈へ凭りかかって、しだいに海老のようにからだを曲げるのを、じっと見据えていてから、つと、近寄ろうとした。

その時、背後の茶屋町の横丁から、蹄の音もせわしく、ぱっと躍り出て来た者があった。

喜八郎を蹄にかける凄じい勢いで、疾駆するや、常夜燈わきへ至った。

虚無僧を馬上へひきあげざまに、花川戸町の往還へ、駆け去った動作の見事さは、喜八郎を見惚れさせたくらいであった。

浪人ていであったが、虚無僧と同じく覆面をしていた。

「どういうのだ？」

喜八郎は、追跡することもできぬままに、みるみる遠ざかる姿を見送って、呟いた。

予感としては、伏見小路家を訪れた自分を、尾け狙ったようである。

「待って居れば、敵の方から、姿を現す、というやつだな」

喜八郎は、歩き出した。

伏見小路家の息女八重は、何処かに拉致された、と考えてよさそうであった。

――この夜明けに、おれと偶然、行き逢うた、ということにはならぬ。おれが、伏見小路家を昨夜のうちに、訪れたのを、あの者どもは、知って、辛抱強く、おれが出て来るのを待ちかまえていたことになる。息女をさらった一味とみなしても、見当はずれではないようだ。それに、おれの腕を、高く評価してくれた、と受けとってもよかろう。……こちらにとっては、歯ごたえがある。

こうした場合、喜八郎は、かえって、おちついて、敵の出様を待つ態度をえらぶ。

喜八郎は、雷門をむかいに眺める茶屋町の飯屋に入った。

そこにはもう、二、三人、朝の早い職人が、丼飯をかき込んでいた。

喜八郎は、豆腐の味噌汁と新香だけで、ゆっくりと朝食を摂った。

「八丁堀の旦那――」

むこうから、楊子をつかい乍ら、職人の一人が、声をかけて来た。

「旦那でございますね、親なしっ子を、たくさん、やしなっていなさるのは――」

「うむ」

「あっしの長屋に、一人、可哀そうな子が、いるんでございますがね。ついでのことに、ひきとっちゃ下さいますまいか」

「もう、一杯だ。この上、増えると、玄関の土間へこぼれ落ちてしまうな」

「いえね、旦那、その子の父御は、西国のどこかの藩から、ごく最近、浪人なすった御仁で、江戸へ出て来なすって、切腹なすったのだそうで……。母御と二人で、あっしどもの長屋に移って来なすった時、はきだめに鶴が降りた、という風情でね、それァもう、綺麗な後家様と上品なお嬢さまでございました。その母御の方が、十日前、どこかにいなくなっちまったのでございますよ」

「子供を置きざりにして、雲がくれした、というのは、あまり性のよくない女だな」

「いや、それが、嬶どもに云わせりゃ、こんな優しい、気だてのよいおひとは、見たことも聞いたこともない——そんな母御だったのでございますよ。お子の躾は、きびしく、それァ見事なもので、まだ七つの女の子に、きちんとした朝夕の挨拶をされて、あっしどもがまごついているくらいでございますからね」

「女の子は、ちと、困る。おれの家の居候は、九人とも餓鬼ばかりだ」

「旦那、かえって、それァ按配がいいのじゃございますまいか。九人の男の子の中へ、一人、器量よしの、躾のいい女の子を加えりゃ、なんとなく、なごやかになりますよ」

「勝手なことを、云うな。……それにしても、ちょっと妙な話だな」

「へえ、たしかに、妙な話でございますよ。あの優しい奥様が、お嬢さまを、置きざりにして、雲がくれなさるなんざ、どうも腑に落ちませんや。……あまり綺麗なんで、ひょっとして、さらわれたのじゃあるまいか、と噂もして居ります」

「お前の長屋は、どこにある？」

「八間町の、清水稲荷の裏にあたりやす。……一度、その子を、ごらんなすって頂きとう存じます。近所には、ろくでなしがごろごろして居りやすから、もしかすると、さらって、吉原へでも売りとばしかねねえのでね。是非、お願い申しますよ」

喜八郎は、陽が高く昇って、今日も相変らず蒸し暑くなった時刻、わが家へもどり着いた。

知りあいの蘭学医のところへ、立ち寄って来たのである。

伏見小路家から持ち出した南蛮書をみせて、もし読めるならば、どんな内容か教えて欲しい、とたのんだのである。

「これは、イギリス国の本ですな」

蘭学医は、イギリス語はほとんど読めなかった。

しかし、しきりにめくっているうちに、いくつかの絵図を見つけて、

「どうやら、歴史を記述したものらしい」

と、見当をつけてくれた。
それだけでも、判れば、見つけものであった。
但し、息女の失踪とは、あまり関係がないように思われた。
喜八郎は、蘭学医に、その書物を預けておいて、帰宅したのである。
豆六が、詰めていて、庭で、少年たちに、相撲をとらせていた。
「お帰んなさいまし。つい先程、佐原の旦那が、おみえになって、急用がある、と仰言って居りましたが、お呼びして参りましょうか？」
「ひとねむりしてからだ」
喜八郎は、座敷の床の間の花莚（ござ）に、ごろりと横になった。
すぐに、睡魔がおそって来た。
どれくらい、ねむったろう。
「おい――」
佐原三郎次の声で、目がさめた。
喜八郎は、起き上ってみて、三郎次の顔が、胸を患ってただでさえ蒼白い上に、さらに、ひどく緊張しているために、薄気味わるいものになっているのを、みとめた。
「どうかしたか？」

「女房が、昨夜、もどって来ないのだ」
「……」
「春をひさいで居るらしい、とはカンで知っていたが、いままで、一度も、家をあけたことはなかった。……とうとう、昨夜、もどらなんだ」
「……」
「杉江のやつ、もどって参らんのではないのか。そんな気がする。……お主（ぬし）、どう思う？」
「さあ、どうとも云えぬな」
「杉江は、春をひさいでいるうちに、好きな男が、できたのかも知れぬ。それとも、身を売って、わしら父子をやしなっているのが、つくづく、いやになったのではなかろうか」
――この男は、女房に身を売られても、それを、杉江さんに向って、口に出せぬほど、惚れていた。
喜八郎は、思った。
――だから、女房などというものは、持たぬにかぎる。
「杉江が、もどって来ないとなると、わしは、どうすればいいのだ？」

「もどって来たら、黙って、許すか？　昨夜、どこへ泊った、などと訊ねずに――」
「訊ねるものか。わしには、訊ねる資格などない」
喜八郎は、今日一日待ってみることにしたらどうだ、となだめて、三郎次をひきあげさせた。
豆六が、次の間から現れて、
「どうも、お気の毒で、佐原の旦那のお顔が、まともに、見れませんや」
と、云った。
喜八郎は、腕を組んで、
「伏見小路家の息女は、大層な美人であったそうだ」
「へえ？」
「浅草の八間町の裏店に住んでいた浪人者の後家も、美人であった、という」
「なんです、それァ？」
「佐原のかみさんも、貧乏同心には過ぎた美人だったな」
「……？」
「美人が、つぎつぎと、家から姿を消した、というわけだ」
「旦那！」

「まだほかに、しらべれば、美人が幾人もいなくなっているかも知れぬ」
「御府内に、人さらいがいる、なんて、まだきいたことがありませんがねえ。近所の猫なら、もう五、六匹、さらわれて、いまごろは、三味線の皮になって居りやすが――」
「美人が、さらわれると、どうなる、豆六？」
「どこかの廓か、淫売宿へ売りとばされる、と考えるのが、まあ、常識というやつですがねえ」
「旗本大身の息女を、女郎や淫売に売るのは、いささかもったいないではないか」
喜八郎は、薄ら笑った。

その六

朝――巳刻（午前十時）になると、八丁堀の往還には、町奉行所へ出勤する与力・同心の姿が、現れる。
与力は、裃をつけ、若党に御用箱を持たせ、雪駄の音をたてていた。
同心は、黒羽二重の着流しで、博多の帯を、小粋に締めていた。

町方の、これらの役人は、どんな遠くからでも、一瞥で、それと知れる。いでたちに、こまかな神経をゆきとどかせて、しゃれた渋味をみせているのであった。

その髷も、小銀杏といい、八丁堀独特の結い方であった。月代をひろくして、小鬢まで剃り、頭に髪がぴったりくっつかないように髭を出し、髷の一文字もわざと短くして、刷毛先をちょっとひろげただけである。

尤も——。

すべての町方が、いでたちを凝っているわけではなかった。

九人の少年たちに、見送られて、家を出た大和川喜八郎などは、着流した黒羽二重も、だいぶ色あせて、着くたびれていたし、印籠も携げていなかったし、小銀杏も、髪結に結ってもらったやつではなく、子供たちに結わせているので、あまり恰好はよくない。

そういえば、喜八郎の家が、近隣とくらべて、構えが最も貧弱である。

八丁堀では、与力が三百坪、同心が百坪、宅地を拝領して、これに、自分好みの家を建てていた。与力の屋敷は、いずれも、旗本風に冠木門で、門外には小砂利を敷きつめ、式台つきの玄関は、千石取りの構えをみせていた。

同心の組屋敷は、与力のそれに比べて、当然、がたっと落ちるが、それでも、かなり立派な構えの家も見受けられた。

与力の俸禄は、二百石。同心は、知行取りではなく、蔵前取りで、年俸三十俵二人扶持。三十俵すなわち、四斗俵で十二石、たったの十二両。

——これで、くらしが成り立つわけがない。女中でさえ、年三両の給金である。

与力・同心が、この薄給で、くらしが成り立っているのは、別途収入があったからである。

与力には、諸大名から、応分のつけとどけがあった。

江戸に、上屋敷、中屋敷、下屋敷を持つ大名がたは、いついかなる時に、どのような事件が起るか知れない。その際、町奉行所といざこざを起さぬよう、また解決方法をたのむ場合もあるので、平常から、与力には、つけとどけをしておくのである。

たとえば、家中の定府あるいは勤番の士が、町人を殺傷した、といった不祥事を起した場合、町方与力の裁量によって、主家に傷がつかぬようにすることができる。

したがって、大名がたでは、代々頼み、というたのみかたさえもあった。すなわち、薩摩藩では何某に、また、仙台藩では何某に、といったあんばいに、代々、依頼する町方与力をきめて、年何回か、つけとどけをしておく習慣になっていた。大藩になると、一回のつけとどけが、二十五両というのが常識のようであった。

したがって、代々頼みの大名を、たくさん持っている与力は、非常に裕福であった。一年に三千両も別途収入のある与力も、数人はいたのである。

同心の中にも、定廻りや臨時廻りで、大名がたから、つけとどけのある者は、貧しくはなかった。さらに、富裕な町家からつけとどけがある同心は、むしろ、数百石の旗本よりも、台所がゆたかであった。

妾宅を三軒も持っている同心さえ、いたのである。

貧乏なのは、隠密廻りの同心であった。

大名または旗本の屋敷から、なにかの事件の解決を依頼されて、臨時報酬を得るほかには、隠密廻りには、どこからも、つけとどけはなかったのである。

隠密廻りの大和川喜八郎が、常に、懐中無一文であったのは、やむを得なかった。

「喜八郎――」

うしろから、呼ばれて、振りかえると、内与力の佐野主膳が、一歩毎に、大きく右へ上半身を傾け乍ら、近づいて来た。

内与力というのは、町奉行つきの、いわば私設秘書役で、町方の中から特に熟練者がえらばれて、その任務に就いていた。南北両奉行所に、三人ずついた。

佐野主膳は、容貌も醜く、生来片足が不自由であったが、奉行所随一の利け者といわれていた。もう五十を越えていた。

この佐野主膳が、最も信頼を置いていたのは、喜八郎であった。

「やしなって居る子供は、幾人になったかな？」

佐野主膳は、肩をならべると、訊ねた。

「九人になりました」

「米一石が一両二分にもはねあがった当節、食い盛りを、九人もかかえて、よくしのげるのう」

「よくしたもので、米櫃が底をついた頃、どこからか、一升二升と、贈られて来ます。諸侯の附届けよりも、この方が、心がこもって、有難い次第です」

「ふうん。そういえば、お主、その利け腕を、一向に、臨時かせぎには、役立てて居らぬ模様だな」

「昨夜、百両をもうけそこねました」

喜八郎は、伏見小路家に起った事件を、包まず、手短かに、話した。

「伏見小路家の先代甚左衛門とは、少しは、面識があった」

佐野主膳は、云った。

「蘭学狂いで、しきりに、日本は異邦に対して開港すべきだ、と主張していたが、……ふむ、その孫娘が、行方知れずになったか」

その時は、それだけ口にして、内与力は、あとは、沈黙した。

喜八郎には、その沈黙は、なにか思案をめぐらすためのもののように、受けとれた。

はたして、奉行所で、午后もかなりおそくなって、喜八郎は、佐野主膳に、用部屋に、呼ばれた。

「伏見小路甚左衛門のことだが、一昨年逝去する直前に、評定所に、奇妙な訴状を提出して居る」

「どのような訴状を――？」

「お主も、そのむかし、隣邦から、倭寇とおそれられた日本海賊の働きぶりは、つたえきいて居ろう」

「きいて居ります」

「倭寇はやがて衰えて、御朱印船が起り、日本人は、ぞくぞくと、万里の海表を往来し、南洋諸州に、つぎつぎと、日本人町をつくったのじゃな。呂宋をはじめ、シャム、カンボジヤ、ジャワ、安南などにな。……公儀は、寛永年間に、耶蘇教をしめ出

すために、鎖国令を出した。爾来、わが国の民は、一人も、海を渡ることはできなんだ。とともに、異邦に在った日本人も、帰国を禁じられた。御朱印船の航行も禁じられ、南洋諸州に、町をつくった日本人は、帰国の途をうしなった。安南に在った日本人が五人、ひそかに小舟を駆って、帰国したところ、たちどころに捕えられ、誅殺された、という記録も、のこって居る。公儀は、法令の威を示すために、敢えて、この誅殺をした次第だ。ここにいたって、海外に在った幾万の同胞は、全くの孤立無援の悲運に陥ちた。……天保の今日、呂宋にも安南にも、シャムにもカンボジヤにも、もはや、草亡木卒、日本人町の遺跡すら尋ねることはできなくなった、と想像されて居った。ところが、伏見小路甚左衛門は、南蛮書をひもといているうちに、今日なお、高砂にも呂宋にも安南にもカンボジヤにも、日本人町が、存在し、勇敢なる先祖の血筋を、脈々として絶えることなく、享け継いで居ることが判明いたしたゆえ、何卒、法度を曲げて、かれらの帰国をご許可ありたい。そういう訴状を呈出したのだ」

「……」

喜八郎は、黙って、佐野主膳の視線を、受けとめている。

「評定所では、この訴状を、蘭学狂いの老人の妄想にすぎぬ、としりぞけ、甚左衛門を召して糾問することもせなんだ。甚左衛門は、重ねて、訴状を呈出したが、もとよ

り、再検討される余地はなかった。……甚左衛門は、大層憤激した模様であったな。憤激のあまり、死期をはやめたと思われる。……孫娘の失踪は、このことと、なにか、関連がありそうな気がする」

佐野主膳は、そう云ってから、ひと綴りの書類を、喜八郎の膝の前へ、投げた。

「これは、中川の見張番所が、この五年間に出入した船の名と積荷の内容を、一覧にしたものだ」

中川番所というのは、箱根の関所に対する、海の関所で、江戸の海手の監視所であった。小名木川の入口、東北の岸に設けられている。

寄合席の旗本三千石以上の大身が、五日間ずつ交替で、中川御番衆として勤めていた。というと、いかにも、大役であるが、元禄以降の泰平つづきの時代に、抜荷がはこび込まれるような事件など、ひとつも起らず、この番所の役人は、上下とも、最も退屈な閑職のひとつになっていた。

「この一覧を調べてみて、ひとつ、お主の頭脳を働かせてもらおうかな」

佐野主膳は、命じた。

「かしこまりました」

喜八郎は、書類を懐中にした。

それから、あらためて、主膳を視かえして、

「ところで、海洋諸州に、いまなお日本人町が在る、という訴えは、蘭学狂いの老人の妄想と、佐野様も、お考えでありましょうか？」

と、訊ねた。

「わし個人の意見では、妄想とは思わぬ。異邦の地で、町をつくれば、たとえ母国に見はなされても、いや、そのためにかえって、互いにかたく団結して、町を守りつづけようとするのは、人情であろう。もちろん、つぎつぎに客死して、滅びた町もあろうが、いまなお、血統を絶やさずに、日本人のみが聚落をつくっている、と想像しても、これは、妄想ではあるまいな」

「わかりました」

奉行所を出て、帰途についた喜八郎の脳裡には、昨夜、自分を襲撃した曲者のことが、うかんでいた。

虚無僧姿になった暗殺者の使った剣の業は、喜八郎の識る流儀にはないものであった。

いうならば、実戦の経験によってつくられた攻撃法とも、受けとれた。無二無三に斬りつけて、撃ち損じた刹那におのが身に隙が生じることなど一切考慮しない、とい

う凄じい攻撃法であった。

現在の道場では、あのような兵法を教えてはいない。

——あれは、戦国の頃の、戦場剣法といえるかも知れぬ。

喜八郎は、その敵を峰撃ちでしりぞけた直後、仲間が馬を駆って、出現するや、負傷者を馬上にひきあげざまに、遁げ去った鮮やかな光景を、思いうかべて、

——あの見事さも、戦場に於ける味方救助の修練といえるようだ。

と、考えた。

今日の武士は、馬責めにあたって、あのような稽古などはせぬ。

帰宅した喜八郎を、待っていたのは、佐原三郎次であった。

「女房のやつ、もう永久にもどって来ぬ、と判った」

悲痛な面持で、三郎次は、告げた。

「手紙でも、寄越したのか？」

「いや、手紙ではなく、品物を、とどけて来た」

「品物？」

「うむ。……見てくれ」

三郎次は、わきに置いた包みものを、ひらいた。

現れたのは、三寸ばかりの高さの仏像であった。金色であった。

喜八郎は、手に把ってみて、ずしりとした重さに、

「これは、金無垢だな」

「そうだ。それを、女房は、おのが身とひきかえに、わしら父子にのこして行った」

「……」

喜八郎は、じっと、仏像を瞶めた。

あきらかに、これは、異邦製であった。

「手紙は、そえられてなかったのか？」

「いや——」

三郎次は、かぶりを振り、

「どこかの見知らぬ旅商人ていの男が、お宅の奥様にたのまれて、おとどけにあがりました、と云って、置いて行った。こっちに、なにかたずねるいとまも与えずに、さっと、立ち去り居ったのだ」

「……」

「金子をのこすのなら合点できるが、こんな仏像をのこすとは、どういう料簡なの

か？」

「おそらく、……杉江さんの身柄を買った対手がたは、小判を持っていなかったのだろう」

「どういうのだろう、それは？」

「つまり……、杉江さんは、日本の金子を持たぬ徒党に、身を売って、どこか、遠くへ——海のむこうの異邦へ、つれて行かれようとしている、というわけだろうな」

「おい！　そんな徒党が、江戸へ現れている、というのか？」

三郎次は、こめかみを痙攣させ、肩を喘がせた。

「まだ証拠をつかんだわけではない。しかし、わたしのカンでは、そういう筋書きになる」

「どうすればいい？」

「お主にたのまれるまでもなく、わたしが動いてみるが、杉江さんをつれもどすことができるか、どうか、受けあえぬな」

わざと冷たくこたえてから、喜八郎は、

「壱太、豆六を呼んで参れ」

と命じた。

豆六が、大急ぎでやって来ると、喜八郎は、

「八間町の、清水稲荷の裏手にある裏店で、西国浪人の後家が、七歳ばかりの娘を置き去りにして、姿を消して居る。その娘の許へ、金無垢の仏像が、とどけられたかどうか、調べて来てくれ」

「へい、かしこまりました」

豆六は、とび出して行った。

半刻も経たずに、豆六は、馳せもどって来た。

「たしかに、まちげえなく、その娘の許には、金無垢の仏像が、とどけられて居りやした」

「これと、同じやつだったろう」

喜八郎は、三郎次が持参した仏像を示した。

顔を寄せた豆六は、

「全く、すんぶんのちがいもありませんや」

と、こたえた。

その七

その夜、喜八郎は、水瓜畑のような光景を呈している座敷の片隅で、少年たちの寐言や寐返りの音をきき乍ら、内与力佐野主膳から手渡された書類を、丹念に調べた。

子刻（午前零時）の時鐘をきいた時、喜八郎は、書類を床の間へ投げた。

「長崎屋か」

一言、呟いた。

日本橋本石町三丁目の長崎屋源兵衛のことであった。

長崎屋は、唐物屋であった。長崎に本店を構え、江戸は支店であったが、大層な構えで、富有を誇っていた。

当時、長崎出島のオランダ商館から、オランダ人が、五年に一度ずつ参府して、将軍家に目通りを許されるならわしであった。さまざまな珍奇の品を献上し、また老中・若年寄以下係りの諸役人にも、それぞれ土産物を贈ったので、オランダ人参府は、大いに歓迎された。

このオランダ人の宿泊するところが、長崎屋であった。長崎屋には、店の奥に、洋

館が設けられ異邦人を泊める設備がしてあったのである。

喜八郎が、書類を調べたところ、長崎屋の船の長崎・江戸間の往復が、この五年間に、次第に、回数を増していることが、判った。

五年前には、年に二度ぐらいであったのが、今年に入っては、半年間に三度も、往復している。

オランダ人が参府して来たのは、二年前であるが、その時は、長崎屋では、特に船を二艘に増して、江戸へ航行させている。

オランダ人は、規定によって、陸路をやって来る。献上物は、長崎奉行配下によって、守られて、運ばれて来る。

べつに、長崎屋が、その運搬方をひき受けている次第ではない。したがって、オランダ人参府にあたって、船数を増して、江戸へ航行させる必要はないようであった。

しかし、中川番所では、

「オランダ人参府ゆえ、長崎屋も、なにかと多忙らしい」

と、受けとって、べつに、積荷を調べてもいないようであった。

いや、中川番所では、長崎屋の船には、閣老がたへの土産物が積まれている、と解釈して、調べることを遠慮した様子である。

——どうやら、ここらあたりに抜穴があるらしい。

これは、隠密廻りの同心としてのカンであった。

翌朝——。

喜八郎は、豆六を呼んで、

「長崎屋の船は、どこに錨をおろしているか、調べて来てくれ」

と、命じた。

「へい、承知しやした」

豆六は、半刻も経ずして、報告にもどって来た。

「長崎屋の船は、三日前に、長崎へ帰って行った、ということでさ」

「三日前？」

喜八郎は、首をひねった。

「東海道を追いかけると、どこかで追いつくのじゃありませんかね」

「その必要は、あるまい」

「へえ——？」

「三日前に、出帆した、ということは、まだ、船は、近くに碇泊している、ということも知れぬ」

喜八郎は、つじつまの合わぬ言葉を、口にした。

「どういうんで——？」

「わたしのカンがあたっているとすれば、そうなるのだ」

「どこにかくれているか、見当がつきやすか？」

「夜までには、見当をつける」

「夜？　ずいぶん、のんびりしていなさる」

「急いては、事を仕損ずる。……おい、お前たち——」

喜八郎は、九人の少年たちにむかって、

「怪しい奴が、近所を、うろついていたら、かまわねえから、塩をぶっかけてやれ」

と、云った。

美しい女性を神かくしに遭わせた対手がたの、当面の敵は、この大和川喜八郎なのである。

当然、こちらがどう動くか、監視しているに相違ないのである。

夜——初更（午后八時）。

「そろそろ、出かけるか」

喜八郎は、腰を上げた。

九人の少年たちは、黙って、喜八郎を見上げている。

「この中で、舟を漕げるのは？」

喜八郎は、訊ねた。

参太と五太が、手を挙げた。

参太は、木更津と江戸を往復するこやし船の伜であった。大時化をくらって、船が転覆して、父親が溺死し、孤児になったのである。

「よし――、二人、ついて参れ。あとの七人は、家の中で、合図を、待て。合図があったら、とび出して行って、怪しい奴らを、面くらわせる騒動を起せ」

少年たちは、午すぎと夕餉前に、怪しいと思われる男が、しきりに、この家をうかがっているのを、見とどけていた。

その一人は、何気ないふりで、玄関まで近づいて来て、いきなり、物蔭から、塩をぶっかけられて、あわてて、逃げている。

喜八郎は、玄関から出るかわりに、長六畳の部屋の押入れを開けた。

そこから、梯子段で、屋根へ抜け出られるつくりになっていた。

往来とは反対側の勾配へ抜け出て、そっと匍って、上棟から顔をのぞけた喜八郎は、数軒へだてた空地の前に、甘酒の屋台が出されているのを、みとめた。

「あいつだな」

喜八郎は、参太に、「合図しろ。敵はあの甘酒屋だ」と教えた。

参太は、するすると、匍いもどると、天窓から、待機した七人の少年たちに、

「おもての甘酒屋を、やっつけろ！」

と、つたえた。

次の瞬間、七人の少年は、わあっ、と叫びをあげて、家からとび出した。

敵味方にわかれたわけではなく、対手かまわず、とびかかり、つかみあい、なぐりあいつつ、次第に、甘酒屋に近づいた。

甘酒屋は、年配の夫婦者らしくみせかけた男女であったが、旋風を起して、殺到して来た少年の群れに、はっとなって、顔を見合せた。

まっさきに、駆けたのは、壱太であった。これに、すぐあとを追った四太が、甘酒屋の前で、とびついた。喚きたてた二人は、組みあうや、屋台へぶっつかった。

あとの五人が、これに加わって、忽ち屋台をひっくりかえして、滅茶滅茶に、あばれまわった。

他目には、少年たちが集団喧嘩をしている光景であり、甘酒屋は、そのとばっちり

をくらって、ひどい目に遭っているかたちであった。

甘酒屋に化けた男女は、あわてて、難を避けるふりをして、大和川家へ近づこうとした。

すると、少年たちの旋風は、かれらを押し包んで、狂いまわった。

その隙に——。

喜八郎と参太と五太は、裏の空地へ降りて、奔っていた。

それから、しばらくして、三人をのせた小舟が、大川へ出ていた。

参太が漕ぎ、五太は舳先に、喜八郎は胴の間で舷によりかかり、ひくく、小唄を口ずさんでいた。

愚痴も出る筈　女じゃものを
嫌なものなら　なぜまた初手に
気強く云われりゃ　あきらめる

風はなかったが、もう川の上は、涼しかった。下弦の月が、東の空にかかって、白い。

参太は、「海へ——」と命じられて、黙々と、けんめいに、漕ぎつづける。

永代橋の下の闇に入った時、喜八郎は、

「行先は、石川島だ」

と、告げた。

「旦那様、人足寄場へ行くんですか？」

参太が、訊ねた。

「いや漁師町の波よけ場だ。五太が育ったところだ」

「はい——」

「お前たち、今夜は、生命がけの仕事になるかも知れぬぞ。覚悟をしておけ」

参太は十四歳だが、五太は、まだ十歳であった。

不敵にも、喜八郎から、そう云われると、「面白えや」と呟いたのは、五太であった。

喜八郎は、それが、どんな危険な仕事か、すぐには、教えなかった。

少年たちに、危険な仕事の手伝いをさせるのは、はじめてのことであった。

舟が、石川島の漁師町に近づくと、喜八郎は、五太をそばへ寄せて、頭から孤をかぶり、櫓を持つ参太には、ふんどしひとつの素裸にならせ、向う鉢巻をさせた。

参太は、体格がいいから、遠目には、一人前の男に見える。

漁師町と人足寄場のあいだは、入江から掘割になっていて、時化の際は、多くの船が、ここに避難できるようになっていた。

舟は、ゆっくりと、その入江に来た。

喜八郎は、菰の蔭から、鋭い視線を送った。

大小の船が、入江に錨をおろしていた。

――あれだな！

喜八郎は、二本檣（マスト）を持った千石船を、すかし視て、見当をつけた。

外観は、似関船（にたりぶね）である。似関船は、上廻りが関船（軍船）に似ているためにつけられた名称で、荷船と関船の両様に用いることができる。

「参太――、あの似関船のわきを、抜けて、掘割に入れ」

「合点――」

「いそぐな。ゆっくりだぞ」

喜八郎は、船体にふれんばかりにして、行き過ぎ乍ら、月光に照らされた船の特長を、観察した。

――ただの商い船ではない。舳先の船首材も、胴体の鉄板張りも、檣の高さも、これは、西洋式技術を採って造ったやつだ。似関船どころか、これは、軍船として造られてあるのだ。

五百石以上の軍船は、製造を禁止されている時世であった。

ただの商家が、千石の軍船を所有するのは、奇怪である。

――中川番所が、これを、ふつうの似関船としか、見なかったとは、よほど、間抜けだ。

巧妙な偽装がなされているが、いやしくも、海上警備の任に就いている者ならば、その構造に、不審をおぼえぬのが、おかしい。

中川御番衆など、閑職中の閑職なので、下役たちも、だれきっていて、軍船と商船の区別もつかぬほど無知識になっているに相違なかった。

そのわきを過ぎて、そっと振りかえった喜八郎は、

――あの艫（とも）の遮浪装置だけ見ても、これが、日本で造られたものではないことが、明らかではないか。

中川御番衆とその配下たちに対して、腹が立った。

掘割のずっと奥へ、舟を漕ぎ入れさせておいて、喜八郎は、菰をはぐりすてて、

「お前たち、あの千石船の中に乗っているのは、ただの船頭や水主（かこ）どもではない。ひとつ、船内をしらべたいが、やれるか？」

と、少年たちに、云った。

「やります、旦那様」

参太が、勢い込んでこたえた。

「待て、お前は、すこし大きすぎる。……五太、お前の方がいい。お前は、この佃島で育っている。こそ泥になれ」

「はい」

「見つかった時のために、何か珍しいものを盗んでおいて、船内をしらべるのだ。うまくやらぬと、そのまま、船で、どこか遠いところへ、つれて行かれるぞ。いいな、臍の下に、胆っ玉があるか、一度、撫でてみろ」

五太は、撫でてみて、

「ある！」

と、こたえた。

「よし、行け」

五太は、岸辺にとびあがると、走った。

その千石船を、むこうに眺める地点で、着物を脱ぎすてた五太は、そっと、水中に入ると、巧みな平泳ぎで近づいて行った。

物心ついた頃から、海を遊び場所にしていた五太は、遠くからこの入江にやって来た船に、そっともぐり込んだ経験は、一度ならず持っている。

のぼるのは、艫よりも、舳先の方が、発見されないことも、知っていた。

猿に似た身軽さで、ひょいひょいと、のぼって行き、やり出し（舳先に突出した帆柱）に、とりつき、しばらく、甲板の上に、人影があるかないか、窺った。

人影もなく、船内は、ひっそりとしていた。

五太の小さな裸身は、舳先から、甲板へ、すばやく掠めた。

非常な速力で、小舟が、この入江へ、入って来たのは、その時であった。

四つの人影が、その中にあった。いずれも、おもてを包んでいた。

小舟は、千石船の船腹へ、ぴたりと着いた。

妙な合図の声が、かけられた。

すると、船腹の上部の窓がひらかれ、そこから、鎖梯子が、音たてておろされた。

四人の男は、それをのぼって、つぎつぎと、船内へ、姿を消した。

このさまを、喜八郎は、岸辺からすこしはなれた場所で、ひきあげられてある老朽船の蔭から、眺めていた。

——五太は、つかまるおそれがある。

不吉な予感が、脳裡に起った。

その八

五太は、鼠のようなすばやさで、船内へもぐり込んでいた。
船内は、いくつかの室が設けられていて、三室ばかりに、燈が入っていた。
話声も、きこえる。
——なにを盗んで、やろうかい。
五太は、まず、暗い室をえらんで、そっと忍び込んだ。
明り取りの丸窓から、さし込む月光があったので、五太の目は、すぐ闇に馴れた。
大きな積荷ばかりで、手につかめるような品ものは、ひとつもなかった。
——ちえっ！
五太は、次の室へ忍び込んだ。
「あれ？」
その室もまた、五太にとって、興味のない品ものばかりが、積み込まれてあった。
畳表とか、等身大の仏像とか、簞笥とか——。

鎧櫃がいくつもならべてあったので、そのひとつの蓋を開けてみると、ちゃんと具足が入っていた。
「なんでえ、しようがねえや」
五太は、通路へ出た。
燈のある室を、そっと窺ってみる気になった。
忍び足で、その一室に近づいた五太は、戸の隙間へ、片目を寄せた。
——へえ！
思わず、胸のうちで、つぶやいた。
佐原の旦那の奥様が、ここにいたぜ！
まさしく、丸窓の下に坐って、俯向いている女の顔は、五太たちが、ちょいちょい見かける佐原三郎次の妻杉江のものに、まぎれもなかった。
そのほかに、三人ばかりの女が、はなればなれに、ひっそりと坐っているのを、覗くことができた。
五太は、このことを報告すれば、自分の役目はすむのだ、と合点した。
すばやく、通路を掠めようとした——その時、燈のある別の室の戸が、開かれた。
「おっ！」

出て来た男は、五太の姿をみとめて、声をあげた。
「わっぱがいっぴき、忍び込んで居るぞ！」
叫び声をあびて、五太は、はねあがって、奔った。
「わっぱをのがすな！」
各室から、船の男たちが、一斉に、どっと出て来た。
五太は、甲板へ、とび出したところを、頭髪をわし摑みにされた。
「捕えたぞ！」
そう叫ぶ男の胸へ、五太は、むしゃぶりついて、思いきり、噛みついたが、突きころがされ、したたか、腹を蹴られて、なかば気をうしなった。
集って来た男たちの一人が、五太を覗き込んで、
「やはり、そうだ。隠密廻り町方同心の大和川喜八郎が養っているわっぱの一人だ」
と、云った。
「どうするかのう。やむを得ぬから、連れて行くか」
「そうするよりほかは、あるまい」
その時、船内から姿を現した者が、ゆっくりと、近づいて来た。
六尺を越えた長身の人物であった。

「そのわっぱが、忍び込んだところをみると、近くに、大和川喜八郎が、忍んで居るということだな」
そう云ってから、舷に寄ると、大声で、
「町方同心に、物申す」
と、呼びかけた。
「お主が、当船に忍び込ませたわっぱを、捕えたぞ。どうする？」
喜八郎は、やむなく、廃船の蔭から、身を起した。
「その子をはなして頂けるならば、代って、それがしが、そちらへ参る」
喜八郎は、こたえた。
「わっぱいっぴきと、おのが身を、交換すると申すのか？」
「その子は、それがしが、忍び込ませたものゆえ、責任を取らねばならぬ」
「生きて還れぬ、と覚悟の上だな？」
「左様――」
「よし、お主の小舟を寄せろ」
その時、五太が、声をあげた。
「旦那様！　いけねえや！　……この船には、佐原の旦那の奥様が、いますぜ。それ

から、ほかの、女のひとも――」

喜八郎は、自分の見当がはずれていなかったのを、知った。

「参太、舟を、あの船へ漕ぎ寄せろ。おれが代って、五太が降りたら、いのちがけで、漕いで逃げるのだ。やれるな？」

「やれます。でも、旦那様は――？」

「おれのことは、心配無用だ」

喜八郎は、参太をして、岸辺を奔らせた。

掘割の奥から、参太が小舟を漕ぎ寄せて来ると、喜八郎は、とび乗った。

「旦那様！　おいらのことは、いいんだ」

けなげにも、五太が、絶叫した。

「おいら、呂宋でも安南でも、どこへでも、つれて行かれてやるんだ。旦那様！　ここへ来るのは、止めて下さいっ！」

「五太！　わたしの云う通りにするのだ！」

喜八郎は、鎖梯子が、おろされると、それを、中ほどまで、のぼった。

「子供をおろして頂こう」

五太は、綱でくくられて、するするとおろされた。

喜八郎と五太は、宙で、すれちがった。

「旦那様！　死んじゃ、いやだ！」

五太は叫んだ。

「家へもどって、待って居れ」

喜八郎は、云いのこした。

参太は、五太を乗せると、必死の力で、南蛮船から、はなれた。

「子供どもが、遁げるぞ！」

「遁がすな！」

どよめき立つ船の男たちを、頭領が、制した。

「すてておけ」

「しかし、あやつらが、もどって急報すれば、奉行所からの追手が――」

「幕府の軍船で、この船に追いつけるのはない。第一、この同心は、子供らに、奉行所へ急報せよ、と命じては居らぬはずだ。そうではないか？」

頭領は、喜八郎に、訊ねた。

「左様――。このたびのことは、それがし個人が解決する肚で居る。談合の余地があ

る、と存じたので、こうして、単身で、上って参った」

「町奉行所の同心に、お主のような胆力をそなえた人物がいたとは、不明にして知らなかった」

頭領は、月明りに、皓い歯をみせて、笑った。

「まず、談合の前に、訊問させて頂く」

喜八郎は、数十人を前にして、声音を冴えさせた。

「この船は、どこから、参ったのか？」

「呂宋のサンミルゲより、参った」

「そこに、日本人町が在る、といわれるのか？」

「いかにも——。二百年前には、三千余人が住み、いまなお、六百七十六人が、サンミルゲに住む」

「祖国へ帰って来た目的は？」

「祖国の品々を、はこぶためだ」

「品物のみならず、婦女子を拉致しようとするのは、許せぬ」

「待て——。サンミルゲに在る日本人六百七十六人中、女子は、わずかの六十三人だ。のみならず、若い女子は、三十二人に過ぎぬ。……これでは、われら同胞が、年

毎に減少するのは、必定。われわれは、民族の純血を保つために、異邦民らと婚姻をむすぶことを、かたく排除して参った。それゆえに、寛永十三年の鎖国時には、三千余人をかぞえたにも拘らず、女子の尠きために、逐次人口は減少して、いまや、七百にも満たぬさびしさと相成った。……サンミルゲ日本人町に必要なのは、祖国の品々よりも、祖国の女子なのだ」

「しかし、暴力を以て、拉致することは、許せぬ所業ではないか」

「われわれは、暴力を以て、拉致しては居らぬ」

「……？」

「お主自身が、船室へ降りて、たしかめるがよかろう。われわれは、決して、いやがる者をとらえて、連れ去ろうとして居るのではない」

喜八郎は、その船室に、降りた。

喜八郎が一歩踏み込むや、それぞれ板壁ぎわに座を占めていた七、八人の女が、一斉に顔を擡げて、視線を集めた。

悲鳴に似た小さな叫びを発したのは、佐原三郎次の妻杉江であった。

杉江は、しかし、すぐに、ふかくうなだれた。

喜八郎は、一人一人の顔を、ゆっくりと視た。

いずれも、眉目整った女ばかりであった。そして、共通しているのは、娘ではなく、人妻あるいは後家であったことと、貧しさにやつれていることであった。

喜八郎は、八人のうち、一人だけ、娘がまじっているのを、みとめた。武家娘で、容貌も際立って美しく、身装も立派であった。

喜八郎は、その前に進んだ。

「貴女は、伏見小路家のご息女八重殿ですな？」

そう問われて、武家娘は、

「はい」

と、みとめた。

「この船に乗って居られるのは、貴女ご自身の意志ですか？　それとも、拉致されて、やむなく、覚悟をきめられたか？　いずれか、おうかがいいたしたい」

「わたくしは、自らすすんで、呂宋へ参ろうとして居ります」

「何故に？　旗本納戸頭の息女、というめぐまれた身分をすてて、法を犯してまでも、見知らぬ異国へ渡って苦労をされようというのは、如何なる存念であろう？」

「これが、祖父甚左衛門の遺志でありますれば……」

八重は、こたえた。その表情は、かたい意志を現して、むしろ明るいものであった。

「貴女が、男子であるならば、祖父の遺志を継いで、海の彼方に勇飛する、というのも判らぬではないが……、女子の身で、渡海を決意されたのは、どういうものでありましょうか？」

「同心殿は、頭領殿から、話をきかれたはずです。呂宋の日本人町では、祖国の女子をもとめて居ります。わたくしは、そこへ往き、日本人町を守る男子を、産みます」

八重は、きっぱりと、こたえた。

「ご立派な決意と申せる」

喜八郎は、この娘の心をひるがえさせることは不可能事と、さとった。

次に――。

喜八郎は、八間町の清水稲荷裏手の裏店に住んでいた、七歳の娘を置き去りにした女性はどなたか、と見まわした。

「わたくしでございます」

返辞が、あった。

「貴女は、金無垢の仏像とひきかえに、心ならずも、身を売られたわけですな」

「はい」
「なろうことならば、いますぐにも、わが家に帰りたい、と思って居るのではあるまいか？」
「いえ、もう覚悟はできて居ります。国許へ手紙を送り、良人の伯父より、娘をひきとってくれる返事をもらって居りますゆえ――」
「成程――」
喜八郎は、あらためて、他の女性たちを見やって、
「いったんは、覚悟をしたが、いまは、異国へ渡りたくない、と後悔しはじめているひとは、居らぬのか？　居るならば、申し出て頂こう」
と、促した。誰ひとり、応える者はいなかった。

まだ、夜の明けぬ時刻であった。
佐原三郎次の家の玄関で、喜八郎の声がした。
ほとんど睡らずに、牀の中にいた三郎次は、はね起きて、玄関へ出た。
喜八郎のうしろに、妻の杉江が、俯向いて、佇んでいるのを見出して、三郎次は、なにか云おうとしたが、言葉が見出せぬままに、突っ立った。

「三郎次、なにも訊かずに、杉江さんを許して、迎えてくれ」
喜八郎は、云った。
「う、うむ――」
「杉江さんは、もうどこへも行かぬ、とわたしに、誓った。……三郎次、杉江さんは、春をひさいでいたのではなかった。日本橋本石町の長崎屋が、呂宋の日本人町へ送る品物を集めるのを、手だすけしていただけだ。町方同心の妻が、抜荷の手つだいをしていたことは、いかに良人に向っても、打ち明けられなかったのだな」
「……」
「許してやれ。過ぎたことだ」
「うむ……」
三郎次は、うなずいた。
喜八郎は、杉江のわきを抜けて、おもてへ出た。
その後姿へ向って、杉江は、感無量の謝意をこめて、頭を下げた。
喜八郎は、九人の小さな居候の待つわが家へ、帰って行き乍ら、
「つれもどせたのは、たった一人か」
と、呟いた。

他の七人の女たちは、再び帰宅しようとはしなかったのである。それぞれに、人には語れない苦労の挙句、覚悟をきめて、呂宋へ渡ろうとしているのであった。喜八郎は、ひとたび決意した女の強さというものを、まざまざと見せられたのであった。

——せめて、佐原夫婦が、幸せな家庭をとりもどしてくれれば、こんどのことは、やり甲斐があったのだが……。

喜八郎は、自分に、云ってみた。

はたして、三郎次と杉江の間が、しっくりとゆくかどうか？

杉江が、こっそり身を売っていたことは、かくしてやったし、杉江にも、絶対に良人に自白してはならぬ、とさしとめておいた喜八郎であった。

「面倒なものだ、人間が生きるということは——」

その独語をのこして、喜八郎は、わが家へ入って行った。

埋蔵金十万両

その一

うたた寐(ね)の
夢の浮橋　あと絶えて
渡りもやらぬ心のもつれ　と来た
やぞうをきめて、首をすくめた若い職人が、巧みに小節をまわし乍(なが)ら、織るような雑沓の中を、進んで行く。
解くに解かれぬ鬢櫛(びんぐし)は
いつ青柳の三日月か
しめりがちなる枕紙(まくらがみ)
その目つきは、しゃれた文句とはおよそ程遠い鋭さで、数人をへだてて、さきを行く一人の浪人者へ、食いついていた。
この目つきに、気がついた者が、浅草海苔(のり)の問屋の店さきにいた。
隠密廻り町方同心・大和川喜八郎であった。
——白魚の吉の奴(やっ)、仕事をしようとしているな。

喜八郎は、微笑した。

白魚の吉は、巾着切であった。

江戸の市井には、いたるところに、掏摸がいた。この時代には、押込み、辻斬りなどの強盗は、重い罰を加えられたが、掏摸は、ごく軽い罪とみなされていた。

掏摸自身も、

「盗人といわれちゃ、人ぎきがわるい。おれたちゃ、指さきをきたえた職人だ」

と、うそぶいていたし、すられた被害者の方も、自分に油断があったのを、みとめて、あきらめることにしていた。

いわば、自他ともに、その技術を高く評価していたのである。

尤も――。

やりそこなって、見つかった場合には、野次馬の袋叩きに遭い、技術の未熟を嘲罵されるならわしになっていたので、掏摸は、仕事にいのちを賭けて、真剣にならざるを得なかった。

とうてい不可能と思われるむつかしい仕事を、見事やってのけてこそ、掏摸は、おのが技術を誇り得るのであった。

しばらく前の話である。

当時、江戸には、三名人と称される巾着切たちがいた。髪結いの五助、茶釜の栄坊、若衆の藤七――この三人の腕前は、神技であった。

ある時、町奉行所附・内与力佐野主膳が、神田今川橋を渡って来て、橋袂の水茶屋で、この三人が一緒になっているのを見かけた。

五助、栄坊、藤七は、しばしば小伝馬町の牢へ入れられ、主膳も、その吟味に立ちあって、顔見知りになっていたので、

「お前ら――」

と、呼びかけた。

内与力に前に立たれて、三人は、神妙な態度になった。

「ひとつ、お前らの腕前を、見てくれよう。わしは、これから、深川八幡まで、所用で参るが、その間に、その方らのうち、わしの懐中を抜きとってみせたならば、こん後、捕えた時、ごく軽い刑ですませてやろう。しかし、三人とも、抜き取ることが叶わなかったならば、自今、江戸の掏摸は、捕えると、のこらず、佐渡の金山送りにいたす。……どうだ、やってみせぬか」

巾着切の名人三人は、そう云われて、顔を見合せた。

茶釜の栄坊が、

「旦那、恐れ入りやすが、明日のことにして頂けますなら、あっしが、やらせて頂きます」

と、申し出た。

「どうして、今日では、いかぬのか？」

「三人とも、酒をくらって居りやす。ほんの盃一杯でも飲んでいちゃ、あっしらの指さきは、にぶってしまうのでございます。明日のことにして頂けるなら、必ずあっしが、旦那の紙入れを頂戴いたしやす」

「よし。では、明日、この時刻に、ここへ参る」

佐野主膳は、約束した。

次の日は、陰気な曇り日で、午からぱらぱらと落ちはじめた。

主膳は、渋蛇目の傘をさして、今川橋へやって来た。

水茶屋から出て来た茶釜の栄坊は、

「あっしは、朝から、ここに居りましたので、傘を持って居りませんので、恐れ入りやすが、旦那のお傘へ入れて頂きとう存じます」

と、願った。

「よい――」

主膳は、茶釜の栄坊を、左わきに入れてやった。

主膳は、栄坊を同道して、鍛冶町から鍋町へ、と歩き乍ら、掏摸の修業について、いろいろと訊問した。

鍋町通を過ぎたところで、栄坊が、足を停めて、

「旦那、とても、いけませんや。旦那は、全く油断というものがございません。これじゃ、いつまで、お傘に入れて頂いても、旦那の懐中物は頂戴できそうもありません」

と云った。

「あきらめるのは、まだ早いぞ」

「仲間には面目ねえ次第でございますが、この仕事は、五助か藤七に、ゆずりたく存じます」

そう云ってから、栄坊は空を仰いで、

「旦那、雨は、あがって居ります」

と、告げた。

主膳は、傘をたたむと、

「一杯馳走してくれよう。ついて参れ」
と、命じた。
新石町、須田町を経て、昌平橋御門の広小路へ出ると、そこの料亭田川屋の奥二階へ、上った。その間、主膳は、やはり、一瞬も油断をしなかった。
半刻後、主膳は、勘定しようとして、懐中へ、手を入れてみると、紙入れはなくなっていた。
「旦那、勘定は、あっしが――」
にやにやし乍ら栄坊が、ふところからとり出したのは、まぎれもなく、主膳の紙入れであった。
「どこで、すりとった？」
主膳は、あきれて、訊ねた。
「へい。鍋町で、あっしが、とても抜きとれません、とお詫びしてから、雨があがりました、と申しますと、旦那は、ちょっと、空を仰いでごらんになりました。その隙でございます」
栄坊は、答えた。
「成程。これは、わしのうかつであった。兜を脱いだ」

主膳は、いさぎよく、巾着切の高等技術に頭を下げて、爾来、すり取っている現場をとり押さえても、牢に入れるのは、せいぜい十日あまりで、手くびに入墨を入れる刑も加えずに、釈放するように、同心岡っ引たちに命じた。
こうなると、掏摸を、その現場で捕縛しても、手柄にはならぬので、同心も岡っ引も、見て見ぬふりをすることが多くなった。
「すられた奴が、間抜けなのだ」
そういう考えかたが、庶民たちのあいだにゆきわたり、すりそこなった掏摸に対してだけは、町奉行所の役人に代って、野次馬が私刑を加えるならわしになったのである。
「もっと、腕をみがいて、出直して来い」
袋叩きにしておいて、許してやる時も、決して、商売道具である手の指を、折ったり、切断したりするようなことはしなかった。
さて――。
いま、一人の浪人者の懐中を狙っている白魚の吉とは、喜八郎は、十年近くもの顔馴染であった。
喜八郎は、二度ばかり、吉を捕えて入牢させたことがある。

吉は、喜八郎に捕えられたほかは、やりそこなったことなど一度もなく、髪結いの五助、茶釜の栄坊、若衆の藤七の三名人が、隠退してしまったいまは、江戸随一の腕前と、仲間たちから挙げられていた。

——妙だぞ。

海苔問屋の店さきから、すっと出て、吉のあとを歩き出した喜八郎は、不審をおぼえていた。

吉がその懐中を狙っている対手は、いかにも尾羽打ち枯らした、内職やつれのした浪人者なのである。

「あっしゃ、土蔵に千両箱を積んでいる大町人のふところしか、狙わねえ」

平常、吉がそううそぶいているのを耳にしている喜八郎としては、これは、合点しがたい仕事であった。

——これには、なにか、裏がありそうだ。ともかく、やらせてみよう。

喜八郎は、しばらく、尾けてみることにした。

浪人者は、雑沓を抜けて、横丁に入り、やがて、河岸道に出ようとした。

河岸道に出ようとしたところで、いつの間に、先まわりしたか、白魚の吉は、河岸道の方から、浪人者に近づいて来た。

いかにも、急用ありげに、せかせかした足どりになって、浪人者の前に来ると、何かにつまずいたふりで、つんのめった。

浪人者は、さっと、避けた。

辛じて地面に匍うのをまぬがれた吉は、

「粗相いたしまして、ごかんべんを——」

と、浪人者に、詫びた。

浪人者は、二歩ばかり行き過ぎた。

とみた——瞬間。

振り向きざま、抜きつけの一撃を、吉に向って、あびせた。

吉が、両断をまぬがれて、まるで水へでも飛び込むように、地面へわが身をたたきつけておいて、一廻転したのは、浪人者の抜き討ちが鮮やかな迅業であっただけに、その敏捷さは、見事であった、といえた。

浪人者が、二の太刀を加えるべく、一歩出たところへ、喜八郎が、奔り寄った。

「待たれい！　罪を罰するのは、町方の役目でござる」

すると——。

白魚の吉が、はね起きて、
「冗談じゃねえ！」
憤然たる形相をみせた。
「旦那、あっしゃ、なにもしてやしませんぜ」
「なにもして居らぬ？　お前は、この御仁の懐中物を狙って、ずっと尾けまわしていたではないか」
「とんだめがねちげえだ。……旦那、あっしのような者には、真昼間、江戸の道を歩かせねえ、とお達しでもござんしたかい」
吉は、食ってかかり乍ら、すばやく、喜八郎に、目くばせした。
喜八郎は、浪人者に、
「懐中を、おあらため頂きたい」
と、云った。
浪人者は、ふところへ片手を入れて、眉宇をひそめた。
すられたとばかり思っていた紙入れが、ちゃんと、あったのである。
「こやつ、まだ、すっては居らなんだのか――」
「するもすらねえも、あっしゃ、お前様の紙入れなんぞ、狙っちゃいませんぜ」

吉は、居直ってみせた。
喜八郎は、微笑し乍ら、
「被害がなかったのであれば、どうぞ、おひきとり頂きたい。この者の処置は、町方におまかせ頂きとう存ずる」
と、云った。
浪人者は、頷くと、白刃を腰に納めて、足早に遠ざかって行った。
喜八郎は、吉に、
「ついて来い」
と、命じて、歩き出した。
「旦那、ちゃんと、見とどけなすったので――？」
「うむ」
喜八郎は、近くの自身番に入ると、
「見せろ」
と、片手をさし出した。
「旦那の目をごまかすわけには、いかねえか」
吉は、しぶしぶ、腹に巻いた晒に、片手を入れた。

喜八郎の掌にのせられたのは、数枚の小判であった。

吉は、あの時、何かに蹴つまずいたとみせて、のめった一瞬、浪人者の懐中から、紙入れをすり取り、たたらをふみつつ、この小判を紙入れから抜いておいて、浪人者に詫び乍ら、紙入れの方を、その懐中に返しておいたのである。

尋常一様の技術ではなかった。

「そうか、お前は、これを狙ったのか」

喜八郎は、掌にのせた小判が、ただの小判ではないのを、みとめて、うなずいた。

いま通用している小判ではなかった。ずっとむかしの小判であった。のみならず、それは、江戸時代に入ってから鋳造されたものではなかった。

幕府は、慶長小判のあと、元禄小判、乾字小判、正徳小判、享保小判、元文小判、文政小判、と鋳造しているが、この小判は、そのいずれでもなかった。

一両という極印があるが、葵の紋は入れてないのであった。

「金座へ持参して、調べてもらわねば、判らぬな。どだい、小判など、われわれには、縁がないのだからな」

喜八郎は、そう云い乍らも、小判を噛んで、純度をしらべた。文政小判などとは、桁ちがいに、それは高いものであった。

「吉――」

「へい」

「お前は、どうして、あの浪人者が、この小判を持っている、と看てとった」

小判というものは、一般庶民にとって、全く無縁で、ほとんど流通していなかった。生涯一度も、小判を見ないで、死ぬ者が大半であった。

小判の補助金貨として、一分判（小判の価額の四分の一）があり、これは、いくらか、市井ぐらしの中に入っていたが、町人たちは、これをふところにして、外出する時は、神経を遣ったくらいである。

一分金一枚を後生大事に握っているのを、「素一分」といった。

裏店住いに相違ない、尾羽打ち枯らした浪人者が、小判を懐中にしているなど、とうてい考えられないことであった。

その二

「ない！」

神戸源三郎の顔色が、一変した。

膝の前には、財布からおとされた銭がちらばっていた。豆板一枚のほかは、孔あきの銅銭ばかりであった。

座敷には、もう一人、床柱に凭りかかっている者がいた。

同じ浪人者だが、神戸源三郎のように尾羽打ち枯らした風体ではなかった。

黒羽二重の揚羽蝶の紋つきをつけ、大層派手な玉虫色の袴をつけていた。

抱いている刀の鞘も、螺鈿づくりで、鍔は金色に光っている。とうてい、浪人者が所持する品ではない。

天王寺左膳という。彫の深い風貌に、凄味があり、口もとに、性情の酷薄さが刷かれている。

「掏摸にやられたのか？」

「う、うむ」

神戸源三郎は、すられた時の状況を、くわしく、語った。

相槌も打たずに、黙って、きき了えた天王寺左膳は、

「町方同心が、お主に、懐中をあらためろ、と云ったのだな」

「そうだ」

「共謀だな、その町方同心と巾着切は――」

天王寺左膳は、薄ら笑い乍ら、云った。

「共謀!?」

「多分――というより、まちがいなく、共謀だ。お主のようなうすよごれた貧窮浪人の懐中を狙うのは、なにか曰くがある、とその町方同心は、にらんだ。そこで、尾けて来た。相当、頭脳の切れる奴だ。……どんな男だった？」

問われて、神戸源三郎は、その町方同心の風貌、年恰好を、説明した。

「そうか」

天王寺左膳はうなずいた。

「そやつ、大和川喜八郎という男だ。まず、十中八九までまちがいはない。これは、町方同心の中で、ずば抜けて、頭脳も切れるし、腕も立つ」

「お主、知りあいか？」

「十年前、鹿島の道場で、同門だった。師に無断で、おれの方から挑んで、真剣の野試合をしたことがある」

天王寺左膳は、その時の光景を想起して、双眼をほそめた。

厳冬であった。

二里四方茫々たる枯草の原野のただ中に、古びた一宇の閻魔堂が、建っていた。

そこが、左膳の指定した決闘場であった。

陽がさしそめた頃あい、さきに姿を現したのは、大和川喜八郎であった。

べつに、決闘仕度もして居らず、のんきそうに笹を口にくわえて、ふところ手であった。

喜八郎は、貧乏な隠密廻りの町方同心の次男で、元服の翌年、江戸を出て、放浪の旅に出て、鹿島へ現れたのは二十歳の年であった。

鹿島道場に入門して、三年の歳月が経っていたが、いつの間にか、天王寺左膳と竜虎と称される地位に就いていた。二十歳で入門した時、すでに、我流乍ら必殺剣を会得していたようであった。五年の流浪を、無為にすごしていなかったのである。

刃物のように鋭い神経を風貌に現している左膳と、飄々として人におそれをおぼえさせたことのない喜八郎は、まことに、対蹠的な存在であった。

未熟な門弟たちと、立合う時でも、左膳は、五体にふれさせもしなかったが、喜八郎の方は、わざと、さんざん打たせて、時には、

「痛い！」

と、悲鳴をあげたりしたものであった。

竜虎両名を、宿敵状態に追い込んだのは、むしろ、周囲の者たちであった。

左膳が、挑んで、喜八郎が、これを受けたのである。

「お主を斬ることが、どうやら、おれの剣の至る極点となったようだ」

左膳が、そう云い、喜八郎は、微笑で受けて、

「氷炭相容れぬ、というやつか。やむを得ぬ」

と、こたえたことであった。

喜八郎は、闇魔堂の前を、ぶらぶらと歩きまわった。

約束の時刻よりも、半刻も過ぎていたが、べつに苛立った様子もなかった。まるで、左膳が、おくれることを、看透していたように、おちつきはらって、いかにも、無心気であった。

足もとに落ちた自分の影法師が、しだいに長くなった。

喜八郎が、両手を空にさしのべて、大きなあくびをした——その時であった。

女の頭髪が、無数に結びつけられた陰気な格子戸が、開かれて、左膳が、のそりと出た。

左膳は、喜八郎よりさきに、ここに来て、闇魔堂の中に、ひそんでいたのである。

「喜八郎、待たせた。半刻ばかり早く到着したので、この中で、睡っていた」

左膳は、云った。
睡っていた顔ではなかったが、それと看て取っても、喜八郎は、べつに何も云いかえさなかった。
左膳は、閻魔堂の濡れ縁に立ったままで、
「参る！」
そう云って、差料を抜いた。
喜八郎は、二間をへだてて、草地の中に佇立していた。
左膳が抜刀すると、喜八郎は、
「今日は、小太刀を使う」
と、告げた。
そういえば、喜八郎は、一尺八寸の刀一本だけしか、腰に佩びていなかった。
「……？」
左膳は、喜八郎の心底が看破れぬままに、白刃を、頭上にふりかぶった。
鹿島神道流は、一撃必殺を極意とする。
あくまで、攻撃の太刀である。受け太刀は、勿論組み入れられているが、受けた刹那、その太刀を、凄じい攻撃の迅業に転化するのであった。

受けて、ひっぱずして、後退したり、跳び躱すことは、絶対にせぬのである。
当然——。
攻撃一方の剣法は、まず、地歩の有利を占める必要がある。
左膳は、閻魔堂の濡れ縁に立つために、さきに到着していたのであった。
濡れ縁上を、ゆっくりと、移動し乍ら、左膳の眼光は、次第に凄じいものになった。
これに対して、喜八郎は、一尺八寸の白刃を、左手で、胸前に直立させて、左膳の動きに合せて位置を移した。
受けの太刀であるが、左手だけを使うというのは、奇妙であったし、また、右手を挙げて、たとえれば、人に別離を告げるがごとく、左右へゆっくりと振っているのも、納得しがたい所作といえた。
濡れ縁の端まで移動した時、左膳は、ようやく、宙で振られる喜八郎の右手を、わずらわしいものに感じた。
喜八郎の右手の所作が、こちらの攻撃一方の迅業を封ずる巧妙な工夫である、と気づいた時、左膳は、憤りをおぼえた。
「ええいっ！」

満身からの気合もろとも、左膳は、濡れ縁を蹴った。
脳天から唐竹割りにしてくれよう——その闘志と敏速さと力の配分の、見事な一如の猛撃は、尋常の受けでは、とうてい躱し得ぬものであった。
喜八郎は、しかし、この猛撃を、鮮やかに、躱した。
喜八郎には、意外の工夫があった。
喜八郎は、その一瞬、かかとで、地面を宛然氷の張った湖面を滑るように、蹴って、左膳の跳躍した足下へ向って、仰向けに、自ら倒れたのであった。
倒れざまに、小太刀を、横へ薙いだ。
切先は、存分に、左膳の右脚を斬った。
その敗北で、いまも、左膳の右脚はかなり不自由である。
その時から、左膳にとって、喜八郎は、終生の宿敵となったのである。
左膳は、神戸源三郎がしてやられた町方同心の風貌と年恰好をきくと、
——喜八郎だ！
と、確信を持った。
左膳が、江戸へ現れた目的のひとつは、喜八郎を討つことであった。
「対手が、大和川喜八郎なら、お主では、勝負にならぬ」

左膳は、冷ややかに、云った。
源三郎は、むっとした様子になった。
源三郎も、兵法者として充分に自負のある男であった。
巾着切を斬り損じたとはいえ、これまで、幾人かの強敵を斬った経験を持っていた。
「あの小判は、その——大和川喜八郎へ渡った。となれば、わしは、それを、とり返さなければならぬ」
源三郎は、云った。
「そうしなければなるまいが、大和川喜八郎は、いま頃は、金座の後藤家へ、あの小判を持参しているかも知れぬ」
「猶予はならぬ！」
源三郎は、あわてて、立ち上った。
この二人をやとっている人物が、いた。只者ではなかった。その人物が、小判をすられたときいたならば、源三郎を容赦しない筈であった。
左膳は、冷ややかな眼眸を仰がせて、
「大和川喜八郎が、金座へ持参してしまったのであれば、もう間に合わぬ。まだ持参

してないのであっても……、お主の腕では、あの男は、斬れまい。となれば、あわてもしかたがない、ということだ」

「天王寺！　言葉が、過ぎはせぬか！」

源三郎は、左膳を、睨んだ。

「お主を悩らせるために、云って居るのではない。あの男が強い証拠がある」

「……？」

左膳は、自分の袴と着物の裾を、まくりあげた。

右脚の膝の前に、一筋の深傷の痕が、のこっていた。

「あの同心に、斬られた、というのか！」

源三郎は、眉宇をひそめた。

「うむ、十年前にな。……おれは、その時まで自分は、剣を使うために生れて来た人間だ、と思っていた。そのおれが、まるで遊戯のように竹刀をもてあそんでいたあの男に、敗れた」

同じ頃あい――。

大和川家では、喜八郎の前に、白魚の吉が、膝がしらをそろえて、かしこまっていた。

喜八郎は、自分の休息処である床の間に、胡座をかいていた。

「どうした、わたしに、かくしていても、はじまるまい」

喜八郎は、微笑し乍ら、吉を見据えている。

「へい――」

吉は、目を伏せて、ぺこりと頭を下げた。

喜八郎に危急を救われた吉は、その時、

「お前は、どうして、あの浪人者が、この小判を持っている、と看てとった？」

と、訊ねられて、返辞をしぶったのである。

「明日、お宅の方へ、うかがいやす」

そうこたえておいて、そそくさと、喜八郎から、はなれて行ったのである。

約束通り、やって来たものの、なぜか、吉は、その小判が、あの浪人者の懐中に在ったことを知っていたわけを、すぐに、口にしようとせぬ。

喜八郎は、こういう場合、ゆっくりとかまえることにしていた。「啼くまで待とうほととぎす」という態度をとる。

「お前は、女房は、いなかったな？」

喜八郎は、話を変えた。
「へい」
「惚れた女は、いるのか？」
「へえ……」
「いるのだな！」
「居りやす」
吉は、ちらりと、喜八郎を、上目遣いにして、こたえた。
「どこの女だ？」
「……」
「岡場所の女か？」
「いえ、そうじゃありません」
「水茶屋の女か？」
「ちがいます」
「まさか、仲間の莫連じゃなかろう」
「とんでもねえ。あっしは、これでも、色の道は、つつしんで居ります」
「それでは、どこかのかたぎの家の娘にでも、惚れた、というのか」

「旦那、かんべんしておくんなさい」
吉は、また、頭を下げた。
「わたしは、お前が、巾着切らしくもなく、律義なところがあるのを、知っている」
「……」
「お前が、もし、かたぎの家の娘に、惚れているとすれば、その娘のために、どんなことでもして、つくそうと思っているに相違ないな」
「旦那！」
吉は、一瞬、鋭い表情になって、
「旦那は、もう、ちゃんと、あっしのことを、調べあげていなさる？　調べあげておいて、あっしの口から吐かせようとしていなさるので――？」
「べつに、お前の近頃の行状を、調べたりしては居らぬ。ただ、これは、町方のカンだな」
喜八郎は、ひくく笑い声をたててみせた。
「旦那には、敵いませんや」
吉は、覚悟をきめた様子になった。
「あっしは、たしかに、ある娘さんに、惚れて居ります」

「ふむ、それで――？」
「その娘さんのために、あっしは、あの浪人者のふところを、狙ったんでさ」
「その娘というのは？」
「あるご浪人さんの娘御なんで――」
「浪人者の娘か。それでは、お前とは、つりあいがとれぬな。いかに尾羽打ち枯らしていても、二刀をたばさんでいる父親を持っている娘と、巾着切とでは、縁があるまい」
「旦那はあっしのいちばんつらいところを、衝きなさる」
吉は、肩を落した。
喜八郎は、吉の次の言葉を待った。

その三

白魚の吉が住んでいる神田明神下の裏店に、佐久間重左衛門とその娘千江が移って来たのは、今年の春さきであった。
佐久間重左衛門は、移って来たその日から、臥牀して、近隣に、その姿も見せなかった。しかし、べつに、医師に診てもらおうともせず、娘の千江が、薬餌をもとめて出歩く様子もなかった。
向い合せに住む吉は、秘密ありげなこの浪人父娘に、興味を抱いた。
ひとつには、千江がういういしく、品のある娘であったこと、もうひとつは、どうやら、佐久間重左衛門が、ただの病気ではなく、手負うているのを、察知したからであった。
ある日、吉は、佐久間家の格子戸を開けて、首だけのぞけた。
出て来た千江に、吉は、
「これを、親爺様に、お塗りなさいまし」
と、筍の皮で包んだ薬を、さし出しておいて、千江がためらっているのをかまわずに、去った。
数日経ってから、吉は、千江から、父が会いたいと申して居ります、と招かれた。
予想していたことであった。
重左衛門は、吉がかしこまると、
「妙薬を、忝じけない」
と、礼を述べてから、

「お主は、身共が、手負うていることを、どうして知られたのか？」
と、訊ねた。
「へえ、まあ、なんとなく、そんな気がいたしましたので……」
吉が、自分は堅気ではない、と打ち明けると、重左衛門は、うなずいて、
「このことは、内聞にねがいたい」
と、たのんだ。
その裏店で、吉だけが、佐久間父娘と親しく交際するようになったのは、そのことがきっかけであった。
佐久間重左衛門も、他の浪人者と同様、逼迫したくらしぶりをみせた。
傷が癒えると、重左衛門は、外出が多くなった。行先は、不明であった。五十も半ばを過ぎた身では、随身の希望もないに相違なかったし、泥こねのような労働も出来かねると思われた。
吉は、それとなく、千江に、訊ねてみたが、千江にも、父親が、どこへ出かけて行くのか、判らないようであった。知っていて、かくしている様子ではなかった。
千江が、吉に、内密の相談をしかけたのは、つい十日ばかり前であった。
重左衛門が、出かけたあと、千江は、吉の家へ、そっと入って来て、

「お願いがあります」
と、云った。
「へい。どんなことでも、仰言って下さいまし」
吉は、はじめて相談されて、胸をはずませた。
千江は、紙包みを、吉の前に置いた。
吉がひらいてみると、一枚の小判が出て来た。
ただの小判ではなく、ずっとむかしに鋳造されたもので、吉もはじめて見る品であった。
「これを、いまのお金に両替できぬものでしょうか？」
千江は、たのんだ。
「これは、珍しい小判でございますから、しまってお置きなさいまし。少々の銭なら、あっしが、ご用立ていたします」
吉が云うと、千江は、かぶりを振り、
「父から、三年前に、もらったものなので、わたくしが勝手に処分しても、さしつかえはないのです。ただ……、わたくしにも、よく判りませぬが、この小判は、世間の目にふれてはならぬ、と父に、かねて、申し渡されて居りますので、今日まで、両替

せずに参りました」

この秘密の小判を、ついに両替しなければならぬほど、いよいよ、佐久間家の台所は窮迫した、というわけであった。

吉は、その夜、文政小判五枚のほか一分判、二朱判などをいくつか、千江に手渡した。

好事家の蔵前札差に、そっと、替えてもらった、と告げたが、実は、吉が、つくったのであった。その小判は、そのまま、吉が、取って置いた。

佐久間家で、重左衛門の激しい呶号が起ったのは、それから三日後の夜であった。

吉は、重左衛門が、娘を打擲している音を耳にして、仲裁にとび込んだ。

重左衛門は、大きく肩を喘がせ乍ら、

「お主は、よけいな親切をしてくれた」

と、吉を、睨みつけた。

千江は、それをきくと、

「お父様、わたくしがいけなかったのです。吉五郎さんを、咎めるのは、止して下さい」

と、云った。

「たわけ！　あの小判が、人手に渡っては相成らぬのだ。たとえ、飢え死にしても、あの小判だけは、かくしておかなければならなかったのだ！」

吉は、悲痛な呻きを含めたその言葉を耳にすると、黙って、胴に巻いた晒の中から、千江に渡されたその小判を、とり出して、重左衛門の膝の前へ、置いた。

「蔵前の札差に、替えてもらったというのは、嘘でござんした。おしまい下さいまし」

「……？」

重左衛門も千江も、目をみひらいて、まじまじと、吉を見まもった。

吉は、なかば照れ乍ら、

「あっしは、すこしばかりたくわえがありましたので、お嬢様のお話をうかがって、他人に替えてもらうよりは、と思って、ご用立てしたまでなんで……、どうか、お納め下さいまし」

と、頭を下げた。

次の日、やはり重左衛門が外出したあとで、千江は、礼を述べに来て、ひとつの秘密を打明けた。

「父は、あれと同じ小判を、二十枚ばかり、所持して居りました。いずれ、鋳つぶして、それから、いまのお金に換えるつもりであったろうと存じます。……ところが、仔細は存じませぬが、これを、父の手から奪おうと、狙う浪人衆が、現れました」

重左衛門が、手負うたのは、その浪人者に襲撃されたためであった。

重左衛門は、左肩をしたたか斬られて、小判を奪われたのであった。

千江が、三年前にもらった小判一枚だけが、佐久間家には、残った。

奇怪であったのは、重左衛門が、手負うたことを、世間に知られないように、努めたことであった。

それまで住んでいた浅草馬道の裏店をひきはらって、この明神下に移って来たのも、手負うたことをかくすためであった。

吉は、千江に、下手人の浪人者について、訊ねた。

千江は、その浪人者を知っていた。

「神戸源三郎という人で、家にも二、三度みえたことがあります」

「どこに住んでいるか、ご存じで――？」

「いえ、存じませぬ。……ただ、父と話していたのを、小耳にはさんだことがありますが、裏店住いをせず、あちらこちらの旅籠を、転々と泊りあるいている方が、気楽だ、と……」

「それだけ、判りゃ、充分でさ」

浪人者が泊り歩く旅籠といえば、およその見当が、つくのであった。

吉は、五日ばかり、歩きまわって、ついに、神戸源三郎が馬喰町の旅籠に泊っているのを、つきとめた。

それから、尾行をはじめたのである。

吉は、鮮やかに、佐久間重左衛門から奪った小判を、すりとったのであった。

喜八郎は、白魚の吉に白状させると、

「面白い話だな」

と、微笑した。

「旦那、あの小判は、いったい、どんなしろものなんで――？」

「まだ、金座へ持参して、調べては居らぬが、たぶん、甲金だ」

「へえ？　甲金と仰言いますと？」

「甲斐の武田家がつくったやつだ」

「へえ――？」

「甲金が、いまの時世まで、残っている、というところに、この話の面白さがある」

喜八郎は、云った。

吉は、この町方同心に対してだけは、畏怖をおぼえる。

その前に、かしこまっただけで、肚の裡を看透されているような気がするのであった。

「お前に、もう一度か二度、その手を借りねばならぬようだ」

喜八郎から、そう云われると、吉は、一も二もなく、

「へい！」

と、頭を下げざるを得なかった。

午后になって、喜八郎は、八丁堀を出て、本町一丁目の金座事務所におもむいた。

金座の長は、御金改役で、これは、後藤庄三郎家が、累代、幕府の准官吏として、世襲していた。

後藤家以外に、御金改役に就任した者はいなかった。

尤も、後藤姓を称する御金改役の家系は、実際には、三変していた。

慶長年間、初代庄三郎光次が、その役に就いて以来、十一代庄三郎光包にいたるまでは、何事もなく、世襲がつづいた。

光包に至って、私曲が露見して、文化七年に、伊豆へ流され、この後藤家は、断絶した。

幕府は、ただちに、後藤分家の銀座年寄である後藤三右衛門に、御金改役を命じた。

これが初代三右衛門であって、二代目光亨に至って、政治をそしったのと、驕者の罪に問われて、死刑に処せられた。

幕府は、旧故を重んじて、その年、後藤庄三郎の師家である大判座後藤十六代方乗の嫡子吉五郎に、御金改役を命じた。これが、明治維新後、金座廃止まで、つづいたのである。

喜八郎が、金座事務所をおとずれた時は、御金改役は、二代目後藤三右衛門であった。

「これを、ごらん頂きたい」

喜八郎から、さし出されて、三右衛門は、その一枚を、掌にのせてみて、

「ほう、これは、珍しい！」

と、云った。

「わたしは、これは、甲金ではあるまいか、と存じたが……」

喜八郎が、云うと、三右衛門は、うなずいた。

「たしかに、これは、甲金ですな。元は、丸い玉金であったのを、このように、牛舌金に、打ちのばしたもの、と思われます。これに、一両と記したのは、おそらく、慶長も末になってからでありましょうな」

三右衛門は、明快に、判断してみせた。

甲金。

これは、徳川家康が、武田家が滅亡した後、駿河国を得、つづいて、織田信長が本能寺に果てたのち、甲斐、信濃を収めて以来、異常な熱意で、入手した黄金であった。

家康が、甲斐国を領したいと久しく狙ったのは、甲金を手に入れたいためであった。

武田信玄は、甲金つくりに、才能を発揮し、当時、鋳貨の技術は、卓抜していたのである。

戦国時代には、二十八箇国にわたって、およそ金貨三十五種類、銀貨七十種類が、

その地方の諸豪族によって、鋳造されて、流通していた。

この中で、武田家の鋳造する金貨銀貨が、最も純度が高かった。

家康は、甲斐国をわがものにすると、古府中に入って、ここに金座を設け、武田家がのこした技術を、そっくりそのまま、とり入れ、その甲金を改鋳すると同時に、甲斐中の金鉱から金を集めて、三十万両をつくった、といわれる。

甲金には、百三十三品があったが、そのうち、家康は、天下を統一してからも、古金大判、同一両判、同二分判、碁石金、露小判、大鼓判、板金、竹流金などの金貨の流通を許した。

いうならば、徳川幕府の鋳貨の制は、武田家のそれに、拠ったのである。

いったい——。

家康が、幕府を創立するにあたって、とり入れたのは、すべて武田信玄のつくった制度であった。

幣制をはじめ、民政、軍制、刑制、すべてであった。武田家の刑罰には、重罪人を、煮えたった大釜で殺す、という処刑法もあったが、家康は、これさえも、採り入れようとして、本多忠勝に諫止されたくらいであった。

家康は、文禄四年、後藤庄三郎を招致して、武蔵墨判を鋳造させたのちも、甲金に

対する旧恋を忘れず、慶長年間、大久保石見守長安を甲府代官として、州内の金鉱をひらかせ、佐渡の金工を呼んで、吹所を建て、甲金をつくったのであった。

元和以後は、松木五郎兵衛をして、この地に、金座を設けさせた。

この金座は、元禄年間まで、つづいた。

したがって——。

武田家が鋳造した金貨は、すべて、徳川幕府によって、集められ、改鋳されたはずであった。

天保のこの時世に、このような古い小判が、残っている、というのは、奇蹟に近いことに、思われる。

どうして、残っていたのか？

後藤三右衛門も、いぶかりつつ、これを、くわしく、鑑定して、焼金場で、吹きもどしてみることにした。

この金座には、諸方から引替えに、古金がたくさん集められて来ている。しかし、それらの古金は、いずれも、慶長以後の品ばかりであった。

武田家が、鋳造したこのような小判が、もたらされたのは、はじめてのことであった。

その四

大和川喜八郎は、宵闇が落ちてから、金座を出ると、まっすぐに、神田明神下に向った。

佐久間重左衛門という浪人に、会うためであった。

途中——。

喜八郎は、誰かに尾けられているのを、感じた。

——町方が、逆に、尾行されるとは、お笑い草だな。

喜八郎は、べつに、ふりかえりもしなかった。

それぱかりか、わざと、薄暗い、人影のない道をえらんでやった。尾行者は、一定の距離を保って、ずうっと尾けて来ていたが、ある地点で、気配を消した。

——はてな？

喜八郎は、かえって、そのことに不審をおぼえた。

明神下が、すぐ、そこに近づいていた。

——おれが、明神下へ行こうとしているのを、さとって、姿を消したか。

ひとつの不安が、喜八郎の脳裡にわいた。
急ぎ足になって、その裏店の木戸を通った。
激しい気合と、物音と、絶叫と悲鳴が、裏店の一軒で起ったのは、恰度その時であった。
「しまった！」
喜八郎は、奔った。
その家から、ひとつの黒い影が、とび出すのをみとめて、喜八郎は、
「待て！」
と、鋭く咎めた。
瞬間——。
つづけさまに、手裏剣が三本、投げつけられた。
一本を頭上にかわし、一本を十手で払い、最後の一本が襟を縫った時、黒い影は、翼でも持っているかのように、向いの家の屋根へ、跳びあがっていた。
ただの刺客ではなく、忍びの術の達人と受けとれた。
喜八郎は、追跡をあきらめて、その家へ踏み込んだ。
血まみれ姿が、上り框へ、首を落して、俯臥せて居り、壁ぎわに娘が、気絶して、

凭りかかっていた。
喜八郎は、血まみれのあるじを、抱き起してみた。
一太刀で、胴を薙ぎ斬られていた。
まだ、微かに脈があった。
「佐久間重左衛門殿！」
耳もとで、呼びかけると、薄目をひらいた。瞳孔はもうひらいていた。
「遺言は？　遺言があれば、きこう」
喜八郎が、云ってやると、唇をわななかせて、
「む、むすめに……、こ、こよりを——」
と、呟くように、もらした。
「こより？」
「う、うむ。……こ、甲府へ……行って、……叔母に、こ、こよりを——」
そこまで、告げて、佐久間重左衛門は、事切れた。
「旦那！」
白魚の吉が、とび込んで来て、肩を喘がせた。
「なきがらを、寝かせてもらおう」

喜八郎は、命じた。
吉が、遺体を牀に安置して、死顔に白い布をかぶせるのを待ってから、喜八郎は、千江という娘に、背活を入れて、意識をとりもどさせた。
千江は、父親の変りはてた姿へ、視線を送って、しばらく、気のぬけたように、じっとしていたが、不意に、畳へ俯伏して、慟哭しはじめた。
「えれえことになっちまった！」
吉は、喜八郎を見て、首を振った。
「わたしが、刺客を案内した」
「え？　なんですって？」
「結果が、そうなった」
喜八郎は、尾行者に先廻りされたことを告げた。
「じゃ……、あっしが、あの小判をすった神戸源三郎の仕業なんですかい？」
「ちがうな。あの男ではなかった。……どうやら、徒党を組んでいるらしい」
喜八郎は、腕を組んで、宙へ冷静な眼眸を置いた。

ようやく、千江が、泣きやんだ。

それを待っていた喜八郎は、自分が八丁堀町方である旨を告げて、
「ふたつ三つ、たずねたいことがある」
と、云った。
千江は、泪をぬぐって、頭を下げた。
「江戸へ出て来たのは？」
「昨年、春さきでございました」
「それまでは、何処に住んで居られた？」
「今市でございます」
「日光のてまえの――？」
「はい」
「甲府に住んでいたことは？」
「ございませぬ」
「甲府には、そなたの叔母御が、くらして居られるようだが……？」
「え？」
千江は、顔をあげて、けげんの視線をかえした。
「どうして、それを、ご存じでございますか？」

「お父上が、息をひき取られる間際に、云いのこされた」
「……」
「むすめに、甲府へ行って、叔母に、こよりを——そこまで、云いのこされた。こよりを、どうせよ、と云おうとしたのか、そなたに、判断がつくかな？」
「こよりを？　……判断がつきませぬ」
「こよりを、もらえ、という意味であったのかな？」
「……」
「甲府には、叔母御がくらして居られるのだな？」
「はい、尼になって、すごして居る由にございます。……わたくしは、まだ一度も、会ったことはございませぬ」
「ところで——」
喜八郎は、一枚だけ懐中にのこしておいた甲金小判を、とり出して、
「お父上は、この小判を、どこで、手に入れられたか、そなたに、打ち明けられなかったか？」
「いいえ——」
「いつ頃から所持されていたか、ご存じか？」

「存じませぬ。三年前に、父からもらった時、はじめて、知りました」
「その頃、今市でのくらしぶりは？」
「貧しゅうございました。父は、手習いの師匠をいたし、わたくしは、菊作りをして、ほそぼそとしたくらしでございました」
「お父上をたずねて来た者を、そなたが、思い出される限り、挙げて頂こう」
「今市で、わたくしの家へたずねて参られた客は、一人もございませぬ。……江戸へ出て参ってから、神戸源三郎という御仁が、二度ばかり、みえられ、激しい口論をされたことがございます」
「口論の内容は？」
「対座なされて、空気が険しくなると、父から、使いに出されました。戻って参ると、おもてにもきこえるほどの大声の争いが、つづいて居りましたが、わたくしが家に入ると、神戸殿は、すぐ、座を立たれました。あとで、父は、いまいましげに、小判を寄越せと談判に参り居った、はねつけてやったが、渡さねば、斬られるかも知れぬ、と申して居りました。それから、十日ばかり過ぎてから、父は、神戸殿に襲われて、重傷を負うたのでございました」
泪のかわいた千江の双眸には、しっかりした気性が示されていた。

「そなたに、甲府へ行ってもらうことになるが、よいか？」
「はい」
千江は、承知した。
「吉、お前が、葬儀万端、世話をしてから、この娘御の供をして、甲府へいくのだ」
「へい、かしこまりました」
「たのむ」
喜八郎が、おもてへ出ると、吉は追って来て、小声で、
「旦那、こんどは、敵は、お嬢さんの生命を狙うのじゃありますまいね？」
「対手は、わたしが、佐久間重左衛門から、何か訊き出すのを、おそれて、先廻りして討ったのだ。娘の生命まで奪うほど、血迷っては居るまい。但し、要心するに越したことはない」
「だって、旦那、守るのがあっし一人だけじゃ……」
「お前は、あの娘に、惚れているのだろう。男の腕の見せどころではないか」
喜八郎は、笑っておいて、歩き出した。
広い往還に出た喜八郎は、
——次に、狙って来るのは、こっちの生命かも知れぬ。

と油断なく、まわりに神経を配った。
——それにしても、数の多い町方の中で、甲金探索に乗り出したのが、この大和川喜八郎ということが、対手がたに、よくわかったものだな。
その疑念が、脳裡にわいていた。

喜八郎が、八丁堀の自宅へ着いた時は、もう四つ（午后十時）をまわっていた。
幼い子供たちは、睡っていた。
壱太と弐太と参太と五太が、まだ起きていて、喜八郎を待っていた。
「旦那様、七太が、どこかへ行っちまいました」
壱太が、そう報告した。
少年たちのうちには、不意に姿を消して、三日も四日も戻って来ない、放浪癖のある者がいた。
七太という少年は、九人のうちでは、最もおとなしい子で、放浪癖などはなかった。まだ、八歳で、喧嘩ひとつしたことのない、いつも片隅に、じっと、縮こまっている。無口な、目立たない存在であった。
「夕餉の前か後か？」

喜八郎は、眉宇をひそめて、訊ねた。
「後です。こいつらが、寝床にもぐった時に、いねえことが、わかったんです」
「ふむ」
喜八郎は、ふっと、不吉な予感をおぼえた。
「これから、手わけして、さがしに行きましょうか？」
「すてておけ、そこいらをさがすのは、無駄だろう」
喜八郎は、止めた。
突然、格子戸がひき開けられ、一本の手裏剣が、投げ込まれたのは、それから半刻も経たないうちであった。
手裏剣は、少年たちが寝息をたてている上を飛んで、喜八郎の休息処である床の間の壁に、ぶすりと突き刺さった。
喜八郎は、金座の後藤三右衛門が貸してくれた「甲金造幣次第」という古びた本を、ひもといていた。
鋭い唸りを生じて、壁に突き刺さった手裏剣に、封じ文がくくりつけられてあるのを見て、
——いよいよ、おいでなすった！

と、思った。
封じ文をひらいてみると、
警告。甲金探索から手を引くべし。手を引かぬ上は、小童が次々と、行方知れずになると覚悟すべし。手を引くことを承知ならば、甲金持参の上にて、小名木川の夜鷹舟に来れ。小童の身柄と交換いたすべし。
そう記してあった。
「小名木川の夜鷹舟か」
喜八郎は、呟いた。
小名木川には、およそ三十艘あまりの夜鷹舟が、うかんでいる。
どの舟をたずねて来い、とは記していない。
七太の身柄を取りかえすのは、かなり面倒なように思われる。
喜八郎は、少年たちの寝床から、ひとつの視線が向けられているのを、感じて、顔をまわした。
壱太が、じっと、こっちを瞶めていた。
喜八郎は、起きて来い、と目で合図した。
壱太は、夜具から、するりと、抜け出して来た。

「七太が、さらわれた」
喜八郎は、小声で、告げた。
壱太は、緊張した表情で、黙って、うなずいた。
「対手がたが、お前の仲間をさらう卑劣の手段に出て来ることを、予想しなかったのは、わたしのうかつであった。……七太をとりかえさねばならぬが、こっちは、わざと、動かぬことにする」
「……」
壱太は、まばたきもせずに、主人を瞶めている。
「わたしが、七太をすてておけば、対手がたは、必ず、また一人、さらって行く。その時だな、こっちの動くのは――」
「はい」
壱太は、合点した。
「明朝、お前から、みんなに、よく云いきかせるのだ。わざと、さらわれるのだ。……さらわせておいて、お前でも弐太でも参太でもよい。あとを尾けて行く。行先を、つきとめる。……途中で、まかれたら、三番目が、さらわれた時に、あとを尾けて行けばよい」

「はい」
「よいな。さわいではならぬぞ。さらわれた先がどこか、それをつきとめるのが、お前たちの役目だ。さらわれることを、逆に、こっちが利用してくれるのだ」
「わかりました」
壱太は、いきいきと目をかがやかして、こたえた。
「七太は、いま頃は、必ず救い出されると、信じて、ぐっすりねむっているにちがいない。心配するな」
喜八郎は、壱太を、寐床へもどらせると、再び、古書へ、視線を落した。
――純度の高い甲金が、どこかに、十万両も埋蔵されている、ということになると、これは、やり甲斐のある仕事だな。

その五

卯下刻（午前七時）――。
大和川家では、すでに、少年たちは、朝餉を摂っていた。
九人がそれぞれ自分の箱膳に就いて、味噌汁とたくあんと麦七分の御飯を喰べるの

であったが、きわめて、ものしずかであった。
主人の喜八郎が、まだ、睡っているからであった。
「ごちそうさん」
その声も、口のうちで云い、箱膳を持って、台所へ行き、きれいに洗って、片隅に置くと、それぞれの仕事に、とりかかるのであった。
物音をたてるのをはばかるのは、同じであるが、同じ一杯を喰べるのには、遅速がある。あっという間に、三杯かき込んで、台所へ行ってしまう者があれば、その時まだ、一杯目の御飯をもぐもぐと嚙んでいる者もいる。
「はやく、しろい、六太」
五太が、かたわらの少年を小突いた。六太は、九人中最も、のろいのである。箸でひとすくいした御飯を、口に入れると、見ている者が苛々するほど、くちゃくちゃと嚙みつづけているのだ。
六太がやっと一杯目を平げた時、気早な少年は、もう箱膳を台所に置いて来て、自分の座にもどっていた。
六太が、三杯目を茶碗に盛った時、他の少年全員が、そろった。
今朝は、壱太から、

「ごはんのあとで、話がある」
と、通告されていたのである。
壱太は、六太に勝手に喰べつづけさせておいて、
「ゆうべ、七太が、もどらなかったのは、何奴かに、さらわれたからだ。旦那様は、そいつが、今日もまた、一人、かどわかすだろう、と仰言った。お前らは、それを覚悟するんだ。旦那様が、きっと、救い出して下さるんだから、安心していろ。いいな」
と、云った。
少年たちは、黙って、うなずいた。
「かどわかされるのは、旦那様のお仕事に、役に立つことなんだからな。そいつが、襲って来たら、じたばたせずに、さらわれるんだぞ。どこへ、さらって行くか、その場所を、つきとめてやるんだ。わかったな」
少年たちは、再び、黙って、うなずいた。
壱太は、六太へ視線を当てた。
「六太、生薬屋へ行って、鼠取りを買って来な」
「うん――」

六太は、突如、おそろしい早さで、御飯をかき込みはじめた。
壱太は、玄関を出ようとする六太を呼びとめて、
「弐太が、ずっとはなれて、おめえのあとを行く」
と、告げた。
「七太の次は、おいらの番かい？」
十二歳の少年は、べつに、怯える気色もみせずに、訊ねかえした。
「まだ、わからねえ。覚悟だけは、しているんだ」
「うん！」
六太は、にやっとしてみせた。
組屋敷のならんだ通りを、六太の姿が、彼方に小さくなった時、これを弐太が追った。
辻を境にして、町家の地域になる。
江戸の朝は、早い。
もうこの時刻には、きれいに掃除され、打水された往還を、さまざまな人が、往き来していた。
物売りの声も、あちらこちらから、きこえた。

肥桶を天秤にかけ、さらに、肥取り馬を曳いて、
「ええ――下掃除！　おわいやでござい」
と、呼び歩いて行くのも、すでに、この時刻には、どの家でも朝餉が終っている証拠であった。
江戸市民百数十万の食事のおかずは、野菜であった。それを出荷して来るのは、江戸近郊地区の百姓たちであった。
近郊農民は、米作りよりも、野菜づくりに精を出し、これを、毎日、江戸市場――神田多町と京橋大根河岸に、はこんでいた。
江戸っ子は、初物食いに、見栄を張るならわしがあった。
誰よりも一足さきに、茄子を喰べたことが、自慢の種になるのである。そのために、初物野菜の値段は、べらぼうな高さであった。幕府では、「早出来の野菜を高く売るべからず」とか、「初物を買うべからず」とか、しばしば、町触を出しているが、江戸っ子の見栄を押えることはむつかしかった。
近郊農民としては、味のいい初物をつくるには、良質のこやしが必要であった。
江戸市民は、口がおごっているから、当然、下肥も良質であった。
近郊農民は、そこで、あらそって、江戸市中の糞尿を汲み取りにやって来たのであ

る。

糞尿もまた、当時としては、近郊農民にとって、必要な商品であった。

数百人以上も住む大名屋敷などでは、農民の方から汲み取り金を納めさせて、その便所を組み取る権利を与えていた。

練馬あたりの大名屋敷では、汲み取り金を年二両と定め、金の代りに、沢庵千五百本を納入させている、という。

旗本屋敷では、用人が、下肥を売って、それを自身のへそくりにしていた。

山手方面は、城北城西の農民が汲み取りにやって来たし、日本橋から浅草にかけての地域、また、本所・深川などの下町には、葛西方面から、汲みに来た。

汲み取った肥は、馬の背につけて、運んで行くか、または、肥船という一種別様の船で、漕ぎ帰った。

したがって、どこの川岸、堀端、桟橋の船つき場にも、肥船がつないであった。

六太が、生薬屋で、鼠取りを買いもとめて、すたすたと辻に出て来た時であった。恰度、肥取り馬を曳き、肥桶を天秤にかけたおわい屋が、むこうからやって来た。六太の背後から、同じ汲み取りの百姓ていの男が、すたすたと近づいて来た。

六太は、二人のおわい屋に、前後をはさまれたかたちになった。肥桶と肥桶の間に、六太の姿が、通行人の目から、かくれた。

次の瞬間、六太の姿は、地上から消されていた。

通行人は、誰一人、その変事に気がつかなかった。

いや、一人だけ、それに、鋭い視線を投げている者が、とある店の用水桶の蔭にいた。弐太であった。六太が、当て落されて、肥桶の中へ、投げ込まれるのを、弐太は、見とどけた。

――畜生め、やりやがったな！

弐太は、肚の中で、唸った。

かどわかす手段として、肥桶を利用したとは、巧妙な智慧であった。

おわい屋は、江戸市中いたるところに見受けられるし、他の品物をあつかうのとはちがって、これに、近づいて来る者はいない。肥桶にかくして、はこべば、発見されるおそれは、まず、ないのである。

弐太は、おわい屋二人を尾行して行った。

大和川喜八郎の前で、岡っ引の豆六が、仏頂面になっていた。

「……冗談じゃありませんや、全く」

豆六は、首を振って

「さらわれたまま、じっとしていて、また、次の子が、さらわれるのを待っているなんて、そんな間抜けた話は、ありませんや。旦那は、どうかしてますよ」

と、つッかかった。

喜八郎は、微笑をうかべて、きいている。豆六が、憤然となっているのを、おもしろがっているようであった。この変窟な研師が、こんなに険しい気色になって、喜八郎に食ってかかったのは、はじめてのことであった。

「どうもして居らぬ。これが、目下のところ、一番良策だと思っているだけだ」

「冗談じゃありませんや。敵は、いま頃、もう七太を——、あの子が、冷たくなっていたら、どうしなさる？」

「その心配がないから、こうしておちついて居る」

「対手は、佐久間という浪人者を斬り殺しているおそろしい野郎どもというじゃありませんか。子供の一人や二人、殺すことぐれえ、なんとも思っちゃいねえかも知れませんぜ」

「もうそろそろ、弐太が戻って来る頃だ。そうすれば、場所が判る」

喜八郎が、そう云った時、玄関の戸が開かれた。

「ごめん下さいまし」

「へい——」

豆六が、出て行った。

玄関に立っていたのは、絵草紙から抜け出て来たような、辰巳芸妓であった。

「あ——おめえさんか」

豆六は、ちょっと狼狽した。

「親分が、あたしに、今朝、こちらへおうかがいするように仰言ったのですよ」

「そうだ。そう云った。すまねえ。おめえさんに、どうでも、この家の奥様になってもらう算段だったんだが……、あいにく、とりこみの最中なんだ」

「なにが、起ったんですか？」

「子供の一人が、さらわれたんだ」

「え？」

辰巳芸妓小えんは、美しい柳眉をひそめた。

「敵は、次々と、子供をさらう、とおどかして来ていやがるのだ。……こっちは、吉日をえらんだつもりだったが、とんだ厄日だった。姐さん、すまねえ」

豆六は、頭を下げた。

「いいんですよ、あたしのことなんか——。それより、さらわれた子供さんの身は、大丈夫なんですか？」

「旦那は、おちつきはらって、一向に腰を上げる様子はねえのさ。そいつが、あっしにゃ、気に食わねえ」

その時、奥から、喜八郎の声が、かかった。

「豆六、美女の到来なら、会うぞ」

豆六は、舌打ちした。

「あたし、戻ります」

小えんは、出て行こうとした。

「待ってくれ。旦那が、ああ云ってなさるんだ。上ってもらおう」

「だって——」

「いいんだ。上んなさい。あっしが、是非にと、あんたにたのんだのだからな」

豆六は、小えんを、座敷に通した。

喜八郎は、小えんに挨拶されると、

「この二年あまり、月に二度か三度、どこの誰とも判らぬ人が、子供たちに、いろいろな品物を贈ってくれているが……、もしかしたら、辰巳の姐さんじゃないか、と思っている。そなたに、心あたりはないか？」

と、訊ねた。

「いえ、あたしは、なにも……」

小えんは、あわてて、かぶりを振った。

「世の中には、奇特な人もいるものだ、とひそかに感謝している。もし、心あたりがあって、その人に会うようなことがあったら、そなたから、礼を云っておいてくれぬか」

「は、はい——」

小えんは、面はゆげに、うなずいた。

弐太が、馳せもどって来たのは、その時であった。

「旦那様、六太がさらわれて——」

息をはずませる弐太を、喜八郎は、「おちつけ！」と叱りつけて、

「どんな奴だった？」

「おわい屋に化けた野郎で、六太を、肥桶へ、押し込んでおいて……」

「小名木川のこやし船へ、はこんで行ったか？」

「はいっ！」
「よし――」
喜八郎は、にやりとすると、
「豆六、こういうあんばいだ」
と、云った。
「参りやした！」
豆六は、自分の頭を、拳で叩いた。
さらに、また一人、少年をさらった、という矢文が、射込まれたのは、午すぎであった。
「へっ！　こん畜生！　こっちは、どこへさらって行ったか、先刻ご承知よ」
豆六は、吐き出した。
その時、すでに、喜八郎は、家には、いなかった。
小名木川沿いの道を、尾羽打ち枯らした、内職やつれのした浪人者が、編笠に顔をかくして、ひろっていたが、それが喜八郎であった。
先日、白魚の吉が懐中を狙った神戸源三郎の風体に、そっくり似せたのである。
小名木川には、さまざまな舟が、つないであった。

――夜鷹舟に来い、と指示していたが、実は、こやし船だった、というわけか。
そのこやし船も、数艘見受けられた。
――こちらから、かぞえて、三番目といったな。
編笠の窓から、その船へ、視線を当てて、ゆっくりと近づいて行く。
船には、百姓ていの男が、舳先で、煙草を喫んでいた。
喜八郎は、そのわきを、いったん、通り過ぎた。
――肥を満たす船腹に、敵が、幾人もひそんでいる、と考えられる。
下手に、乗り込んで行けば、少年たちの生命が、危険にさらされることになる。
ここは、一番思案しなければならぬところであった。
喜八郎は、ものの半町も行き過ぎてから、踵をまわした。
――さて、どうするかな？
とっさに、思いつかぬままに、再び、その船へ近づこうとした折であった。
むこうから、釣舟が、漕ぎすすめられて来るのをみとめた。
その漕ぎ手を、一瞥して、喜八郎は、はっとなった。
参太だ！
これは、命じていなかった参太の勝手な行動であった。

その六

——よし！

大和川喜八郎は、参太の漕ぐ釣舟が、そのこやし船のわきに来た時、なぜ参太がやって来たか、さとった。

次の瞬間、喜八郎は、船上へ、跳んでいた。

舳先にうずくまっていた百姓ていの男が、視線を向けて、

「どなたで——？」

と、問うた。

目つきが、鋭かった。

「神戸源三郎が、ここに来ているだろう」

喜八郎は、云った。

「神戸さんは、まだだが——、あんたは、どなたで？」

「おれか。おれは、奉行所の町方さ」

喜八郎は、編笠をあげてみせた。

男の顔色が、一変した。

次の一瞬、懐中から短剣を抜くがはやいか、猛然と突いて来た。

ひっぱずした喜八郎は、とりおさえる代りに、たたらを踏んだ奴を、もんどり打たせた。

凄じいひびきが、船内にかくれている者たちを、愕然とさせたに相違ない。

艫に、とび出して来たのは、浪人者が三人であった。

「なんだっ？」

「そいつは——？」

たたきつけられた男が、どこかの骨を折った苦痛の顔を、擡げて、

「八丁堀の、町方だ」

と、告げた。

すると、浪人者たちは、一斉に抜刀した。

喜八郎は、ゆっくりと、舳先へ退って、

「お主ら、たった三人か？」

と、あざけるような語気で、訊ねた。

「なにっ！」

「五人も、ひそんでいるかと思ったぞ」
「笑止な！　五人もいると予想し乍ら、どうして、一人で、やって来た？」
まず、一人が、ツツツと進み出て来た。
喜八郎は、かれらの後方で、参太が、風のような迅さで、釣舟から、艫へ跳んで、船内へもぐるのをみとめておいて、やおら、腰から白刃をすべり出した。
「今日は、お主らと同じ風体だ。町方であることを忘れて、久しぶりに、これを使わせてもらう」
そう告げておいて、青眼につけた。
対手がたは、いずれも、腕には自信がある様子をみせた。
間合を見切った一番手は、殊に業前を誇っている男らしく、秒刻も置かず、
「ええいっ！」
と、突きを放って来た。
宙に、血飛沫が、撒かれた。
その右手が、手くびから刎ねられて、柄を摑んだまま、水へ落ちた。
「ううっ！」
呻きつつ、膝を折って、うずくまった脇を、二番手が、

「くそっ！」
と、奔った。
しかし、結果は、一番手と同じ運命が、渠を待っていた。
右手を喪うと、その右手と刀を、船上へのこして、軀の重心の崩れをふみこたえかねて、高い水音をあげた。
一人だけが、のこった。
「お主も、斬られたいかな？」
そうあびせつつ、喜八郎は、参太が、六太と七太をつれて、艫へとび出して来て、釣舟へ移るのを、見た。
残された浪人者の顔面には、あきらかな怯懦の色が、滲み出た。
「斬られたくないのであれば、刀をすてて、降伏することだな」
喜八郎は、命じた。
浪人者は、迷う気色を示した。
「どうする？　こっちは、急いで居る！」
厳しく、あびせて、喜八郎が、一歩出た。
その刹那、浪人者は、

「ああ！」

と、口を一杯にひらいて、前へのめった。

仆れたその背中に、手裏剣が突き刺さっているのを見出して、喜八郎は、視線を、道へ向けた。

数間をへだてて、こちらと同じく、編笠をかぶった浪人者が、路上に佇立していた。

喜八郎は、第二の手裏剣が、自分を襲って来るのにそなえて、構えを変えた。

第二、第三、第四と——つづけさまに、対手は、手裏剣を放って来た。

しかし、それらは、いずれも、喜八郎を狙って飛んで来たのではなかった。

第二の手裏剣は、喜八郎にたたきつけられた百姓ていの男の咽喉を刺し、第三の手裏剣は、右手を喪った浪人者の胸を貫いた。そして、第四の手裏剣は、舳先のむこうの水面へ、浮かびあがった浪人者の首を狙って、飛び、その眉間に突き立った。

仲間すべてを、殺したのである。

——面妖しい？

三人の少年をつれて、家路を辿り乍ら、喜八郎は、解きかねる疑問に、口をひきむすんでいた。

仲間が奉行所へ曳かれるのを阻止するために、冷酷な仕業をえらんだことは、判る。

しかし、この町方同心に向って、なぜ、一本も放って来なかったのか？

——当然、おれも、狙うべきであったのに、まるで、お前だけは、さっさと立ち去れ、といったあんばいに、仲間を片づけておいて、姿を消してしまったのは、どういう料簡だったのか？

——あれほどの手練者ならば、おれに対して、勝負を挑んで来てもよかったではないか？

——仲間の仇であるおれを、むざむざ、生かして還したのは、なにか、こんたんがあってのことだろうが、それが、判らぬ。

喜八郎は、途中、蕎麦屋へ立ち寄って、少年たちに、もりを喰べさせ乍らも、腕組みをしていた。

「旦那様は、召上らないんですか？」

参太が、けげんな眼眸をあてて来た。

「血のにおいをかいだので、食欲がない。……ところで、七太、お前は、昨夜から、

あの船の中へとじこめられていたのだが、浪人どもが、どんな話を交していたか、きいたか？」

「はい。……いろいろな話をしていました。女の話や、ご政道の話や――」

「お前が、わたしに報せたいと思った言葉が、その中に、あったか？」

その問いに、七太は、ちょっと、考えていたが、

「……わしらは、もしかすると、あのふようめに、だまされているのかも知れぬぞ、と一人が、云っていました」

と、こたえた。

「ふよう？　たしかに、そう云ったのだな！」

「はい」

「ふよう――芙蓉の意味だろうが、まさか、女の名ではあるまい」

喜八郎は、酒を一本、注文した。

「旦那様――」

六太が、思慮ありげな表情になって、

「あいつら、ずいぶんたくさん、仲間がいるらしいです」

と、云った。

「どうして判る？」

「仲間の名を、つぎからつぎに、口にしていました。あまり仲がよくないようでした。あいつは駄目だとか、こいつはずるいとか、悪口ばかり云っていましたよ」

六太は、食事を摂るのも、動作も、仕事も、万事のろい少年だが、意外に観察眼をそなえているようであった。

「七太も六太も、怕かったか？」

喜八郎は、微笑し乍ら、訊ねた。

「怕かったです」

七太は、正直にこたえた。

しかし、六太の方は、

「面白かったです」

と、こたえた。

「町方の家で、やしなわれていると、これからも、こういう目に遭わぬとは限らぬぞ。どうだ、いやではないか？」

しかし、六太も七太も、黙って、横にかぶりを振った。

「どんな目に遭っても、わたしの家にいたいか？」

「あたりまえです」
参太が、すこし慍ったような口調で、こたえた。
「そうか」
喜八郎は、三人の顔を見くらべた。
——なんという佳い顔をしているものだ。こういう純粋な顔を、大人になっても、持ちつづけられないものなのか。
つくづく、そう思わずには、いられなかった。

根岸。
ここは、まだ当時、朱引外（郊外）で、豊島郡金杉村の一部であったが、ふるくから鶯の名所として知られ、文化年間に、文人墨客が集うようになってから、にわかに、風雅の里として栄えた。
風雅の里として有名になると、当然、金持が目をつける。
蔵前の札差はじめ、江戸には、土蔵に千両箱を積み重ねた大町人が、数を増していた。土蔵に金がうなれば、人情として、奢侈を好み、風流の道をえらびたくなる。
文人墨客が集う根岸の里に、かれらが目をつけたのは、当然のことであった。

つぎつぎと、「寮」と称する別荘が、建てられ、いまは、「同じ垣根の幾曲り」というあんばいになっていた。
そのために、くれ竹の根岸の里は、春が巡って来ても、鶯の方は、人影をおそれて、さえずらなくなり、文人墨客の足も遠のいてしまっていた。
鶯の代りに、三味線を爪びく唄声が、あちらこちらの家からきこえて、いわば、囲い者の里の観を呈していた。
その一軒に、この日、不風流な人ていの男たちが、十人あまり詰めかけていた。
いずれも、浪人者であった。
その中に、天王寺左膳、神戸源三郎の顔も、見受けられた。
天王寺左膳は、相変らず、性情の酷薄を口辺に刷いた冷たい目つきで、刀を抱いて、床柱に凭りかかっていた。
「天王寺——」
浪人者の一人が、視線を向けた。
「志村と町田と小笠原と榊原を、お主は、手裏剣で、殺ってしまったらしいが、どうして町方同心の方を、殺らなかったのか、皆は、疑惑を持っているぞ」
「ふん——」

左膳は、鼻さきで、薄い嗤いをもらした。
「お主らの知ったことではない」
「そうは云わせぬぞ。志村らの口を封じる前に、何故、町方同心を殺らなかったか、これは、どうしても、解せぬことだ。町方を殺って居れば、志村らを救うことができたはずではないか。あの世へ送らずにすませられたのだ」
「……」
「われわれは、お主の弁明を、もとめて居る。仲間が仲間に殺られたのでは、たまったものではない」
「あの町方は、大和川喜八郎という男だ」
「それが、どうした？」
「手裏剣などで、かんたんに仕留められるような男ではない」
「それは、弁明にならぬ！」
「弁明になろうとなるまいと、こうこたえるよりほかはない」
「なにっ!!」
一座の空気が、濾に険悪なものになった。
その時、襖が開かれて、一人の町人が、姿を現した。

この「寮」のあるじ山城屋金兵衛であった。蔵前の札差の中でも、最も、利け者として、閣老にも顔がつないである商人であった。
まだ四十そこそこで、風貌はむしろ青年の若々しさを保っていて、なじみやすい。
「どうも、お待たせしましたな」
気さくな態度で、座に就くと、
「お集り頂きましたのは、二つ三つお願いの筋がありましてな」
と、微笑を含んだ視線で、見わたした。
浪人者たちは、黙って、じっと、山城屋の顔を、凝視している。
「てまえは、これまで、三度、お手前様がたの甲金小判を、両替させてもらいました。これで、打切りにさせて頂きとう存じます。ついては、こんどは、両替料金を倍にしてさしあげます。それをお持ちになって、ひとまず、江戸から退散して頂きとう存じますな」
「神戸源三郎が、すられて、町方の手に渡ったので、危険だというのか？」
「それもございますな。甲金を手に入れた町方が、ただの同心ではなく、大和川喜八郎という御仁だったのが、いけませんでしたな。……いまも、天王寺さんが仰言っていましたが、大和川喜八郎という隠密廻りは、敵にまわすと、これは、おそろしい。

げんに、こやし船に、さらった子供をかくしたのを、忽ちかぎつけて、やって来て居りますよ。……それはともかくとして、お手前様がたは、もう、芙蓉様から頂く甲金は、ないのではありませんかな？」

そう云って、山城屋は、一人一人の顔を眺めやった。

「そんなことはない。今年はないが、来年になれば、また、分配される約束だ」

一人が、慍ったように、こたえた。

「どうでしょうかな。芙蓉様というお方は、そう甘くはないと存じますが――」

「約束だ！」

他の一人が、呶鳴った。

「お手前様がたが、勝手に、そう思いきめておいでになるだけではありませんかな」

「ちがう！　芙蓉殿は、はっきりと、来年になっても、考慮する、と云われたのだ」

「考慮する？　それが、曲者ですな。……ま、それはそれとして、お手前様がたは、てまえに両替させるのが、惜しくて、まだ、甲金をお持ちになっている。これは、芙蓉様の最もきらっておいでになるところではありますまいか。しかも、どこかへかくしておかずに、絶えず、懐中にしていなさるから、神戸さんのように、巾着切にすられるような不覚をとりなさる。そのために、刀を抜かねばならぬはめに陥る。てまえは、殺傷沙汰は、いちばんきらいでしてな」

山城屋の顔面が、急に、別人のように冷酷な色を示した。

その七

三更（午前零時）を過ぎてから、十人の浪人者は、山城屋金兵衛の「寮」を、忍び出て、おもいおもいの方角へ、散って行った。

天王寺左膳と神戸源三郎は、肩をならべて、西へ向った。

「天王寺――、お主は、どうして、味方四人を殺っておいて、大和川喜八郎を殺らなかったのだ？」

神戸源三郎は、「寮」の座敷で浪人者たちが責めた疑惑を、あらためて、口にした。

「あいつは、おれの宿敵だ。雌雄を決しなければならん。しかし、雌雄を決するには、時と場所をえらぶ必要がある」

左膳は、こたえた。

その言葉は、源三郎には、納得できるようで、できなかった。

「あの町方同心を殺るのは、一刻も早い方がよいのではないか。ぐずぐずしている

と、町奉行が網をひろげて来るおそれがある」
「甲金が出た、というだけで、町奉行は、動かぬ。第一、大和川喜八郎は、隠密廻りだ。甲金の出処をつきとめるまでは、奉行所にも口をつぐんで居るに相違ない」
「出処をつきとめようとして、躍起になっているのだろうな」
「……」
「お主、あいつが、つきとめるまで、黙って、見て居るつもりか？」
「そういうことだな」
左膳は、冷然としてこたえた。
「わからんな。……すてておいて、とりかえしのつかぬ事態になって、勝負しても、手おくれではないのか」
「神戸！」
「……なんだ？」
「おれたちは、芙蓉殿から、雀の泪ほどの甲金を与えられて、こうして、追いはらわれた。……甲金は、すくなくとも、十万両はある。それが、どこかの地下に、むねって居る。芙蓉殿が、これを一人占めするのを、おれたちは、指をくわえて、見ていなければならぬのか。ばかげて居る。……芙蓉殿が、おれたちを追いはらったのは、甲金の埋蔵場所に、見当がついたからに相違ない」

「うむ」
「尤も、おれたちも、芙蓉殿をだし抜いて、埋蔵場所をつきとめようとして、お主は、佐久間重左衛門を、問い詰め、その挙句、手負わせた。佐久間重左衛門は、たしかに、埋蔵場所を知っている一人であった。……芙蓉殿は、忍びの者を放って、この佐久間を、殺した。ということは、埋蔵場所に見当がついたので、そこを知っている佐久間を片づけた、と考えられる」
「そうだな」
「見て居るがいい。芙蓉殿は、こんどは、おれたちを一人ずつ、片づけようとするだろう。そういう人物だ。……こっちは、その裏をかいて、甲金を、横取りすることを、考えるべきだろう。そのためには、大和川喜八郎という隠密廻りを、生かしておく必要がある。喜八郎は、糸をたぐって、必ず、埋蔵場所をつきとめるに相違ない。おれたちは、喜八郎の動向を見張って居ればよいのだ。……雌雄を決する時と場所は、喜八郎の方が教えてくれることになるではないか」
「成程！　しかし芙蓉殿が、その前に、甲金を掘り出してしまうおそれがあるぞ」
「今日までの芙蓉殿の態度から推量して、何事にも、あせらず、じっくりと腰を据え

てかかる人物であることが、判るではないか。十万両分の甲金を、いちどきに掘り出したところで、通用する小判ではなし、山城屋にしても、これをぜんぶ今日の小判に換えることはできぬ。となれば、すこしずつ掘り出して、山城屋に換えさせることを考えて居るに相違ない。喜八郎が、その場所をつきとめる前に、掘り出してしまうことは、おそらくないだろう」

「芙蓉殿は、大和川喜八郎に対して、刺客を送るのではないか？」

「襲わせるだろうな」

「われわれは、子供をさらって、大和川から、甲金をとりもどそうとしたが……、芙蓉殿は、喜八郎を暗殺することだけしか、考えぬだろう」

「刺客に殺られるような男ではない、あいつは――」

左膳は、語気つよく、云った。

「殺るのは、このおれだ！」

――今日も、尾けられているな。

喜八郎は、町奉行所から、出た時、それを察知した。

この三日あまり、喜八郎は、外出するたびに、尾行者があるのに、気づいていた。

そして、そ知らぬふりで、尾けられるにまかせている。

奉行所から、まっすぐに、金座に行き、事務所で後藤三右衛門に会い、先般渡した小判に就いて、吹きもどしの結果をたずねた。

小判は、まちがいなく甲金であった。それも、武田信玄がつくらせた丸い玉金であったのを、牛舌金に打ちのばした品であった。

「おそらく、甲府のどこかの屋敷に、玉金のままで、たくわえられていたのを、慶長も末になり、天下がすっかりおさまってから、牛舌金に打ちのばして、一両と記したのでありましょうな。これは、慶長の頃でも、一両どころか、五両以上のねうちがあったのを、そうと知らず、一両として使おうとしたものです」

「しかし、使ったのであれば、当然、この金座へ集められる古金に加えられていたに相違ない。使おうとしたが、使わなかった」

「そうでありましょうな」

古金が、そのまま、使用されたのは、元禄頃までであった。

古金は、すべて、金座へ集められた。古金一両は、その純度によって、二両にも三両にも換えられたので、人々は、よろこんで、提出したのである。

甲金が、そのままのかたちで残されているのは、使われなかった証拠である。天保

のこの時世では、十両ものねうちのある甲金を、一両として使う間抜け者はいない筈である。

「どこかに、まだ、たくさんの甲金が、かくされている、と想像していいことだな」

喜八郎は、笑った。

「胸がおどる話でありますな」

後藤三右衛門も、笑った。

「十万両もかくしてあるとすれば、これは、さがし出せば、来年の公儀の歳費は、まかなえる」

「その通りですな」

喜八郎は、金座事務所を辞去すると、往還をひろい乍ら、

――この尾行は、相当しつっこいが、あの浪人連中とは思われぬ。

と、感じた。

喜八郎は、七太や六太を拉致した浪人者たちとは、別に、風のようにすばやい刺客を使う者が存在することを、さとっていた。

神戸源三郎という浪人者は、今春、佐久間重左衛門に重傷を負わせている。刺客ならば、必ず生命を奪っている筈であった。

先日、佐久間重左衛門を殺害したのは、ただの浪人者ではなく、忍びの術に熟達した曲者であった。

神戸源三郎らが徒党を組んでいる浪人者たちは、七太や六太を拉致していることでも判るが、自己防衛の態度である。

ところが、もう一方には、容赦のない凶刃をふるう者が、いる。浪人者たちのように人間臭さを持たぬ酷薄な人物が、どこかにいるのだ。

こやし船で、浪人者たちは、自分たちは、もしかすると、あの芙蓉めにだまされているのかも知れぬ、と語らっていたというが、その人物こそ、何者であるか、つきとめなければならぬ元凶に相違ないのである。

――それにしても、芙蓉とは、凶悪な首領としては、あまりにも優しい通称だが……？

喜八郎は、尾行者をしたがえたままで、外神田の御成道へ出た。

御成道の入口は、広場になっている。

その片隅に、筵を敷いて、古い書籍を陳ねている本屋が、あった。もう数年前から、ここに店びらきをしているのであった。

かなりの老爺で、人々は、この本屋を、記録本屋と呼んでいた。

学者が書屋に積んでおく本などは一冊もなく、「商売往来」とか「都路往来」とか「今川古状揃」とか、表紙がよごれ、ところどころ破れた古い虫食いの記録本ばかりを、陳列していた。

老爺自身は、素麺箱を横にして、机代りにし、瀬戸焼きの墨壺に禿筆を染めて、いちばん安い黄半紙に、せっせと、なにやら文章を書きつづけているのであった。

広場なので、すこし風が起っても、砂塵を吹きあげて、いちめん煙に包まれたようになるが、老爺は、一向に頓着なく、悠々と筆を動かしているのであった。

客が値切ろうとしても、一銭も引こうとはせず、おそろしい変窟者と見受けられた。

喜八郎は、ふと、思いついて、その記録本屋の前に寄った。

「私鋳銭に関する古本は、あるまいか？」

と、たずねると、

「勝手にさがしなされ」

にべもない返辞がされた。

喜八郎は、陳列本の前にしゃがんで、あれこれとさがした挙句、「三貨図彙」という本を見つけた。

めくってみると、戦国時代、諸侯がそれぞれ、鉱山を採掘、製錬を行って、貨幣を鋳造した事実が、記されてあった。

山城の堀川小判、尾張の名古屋小判、相模の大磯小判、小田原小判、武蔵の弁定小判、上総の東金小判、下総の千葉寿命小判、子安小判、常陸の水戸松岸小判、土浦小判、近江の戸笹小判、信濃の善光小判、上野の吉豆小判、陸奥の永安小判、出羽の月山小判、土佐の土佐小判、越後の高田小判、丹波の亀山小判など……。

甲金――甲州金は、甲州だけで使われていたが、天産ゆたかな金をとって、定位貨幣、及び切遣い金をつくり、日本一の純度を誇っていた。

武田家が設けた金座は、そのまま、徳川家にひき継がれ、元禄まで、さかんに鋳造された。

この支配は、甲府勤番支配がつとめた。

「そうか！」

不意に、喜八郎は、高い声をあげて、その古本で、膝を打った。

「わかったぞ！　芙蓉とは、何者か！」

甲府勤番支配は、四千石以上の旗本がつとめる。

ずいぶん重い役目で、身分は、江戸城の芙蓉の間詰めであった。

したがって、甲府では、甲府城の支配者たるその人物を、芙蓉殿と呼ぶならわしになっているものと、想像される。

甲府勤番支配の下には、二百人の旗本がいる。いずれも、小普請組から、えらばれている。

江戸に生れて育った旗本たちは、山国の任地を嫌悪したので、甲府勤番は、一種の懲罰の意味をもってえらばれ、甲府勝手とか、山流しといった。

――そうだったのか。元凶は、甲府勤番支配であったのだ。

喜八郎は、老爺に価を問うて、その銭を支払おうとした。

その瞬間――。

一本の手裏剣が、背中を襲って来た。

身を沈めて、これを頭上に流した喜八郎は、ゆっくりと、尾行者に向い立った。

町人ていの尾行者は、つかつかと迫って来た。

「……」

喜八郎は、黙って、凝視し乍ら、尾行者が忍者であることを、確認した。

数歩に迫るや、尾行者は、地を蹴った。

目に見えぬ翼でも持っているごとく、宙を翔けつつ、双手から、手裏剣を、放って来た。

喜八郎は、地面をすべりざまに、抜きつけの白い閃光を、頭上の敵へ送った。

血飛沫が、虹となって、散りまかれた。

記録本屋の老爺のむこうへ、降り立った尾行者は、いったん大きく背を反らせた。

深呼吸でもするように、口を一杯にひらいたが、棒倒しに地ひびきをたてた。

喜八郎は、しずかに、刀を腰に納めて、髷に刺さった手裏剣と、襟もとを縫った手裏剣を、抜きすてていた。

身のひねりかたで、脳天と心臓を貫かれるのをまぬかれたのだが、こっちの業がまさった、というよりは、運があったといった方がよさそうであった。

喜八郎が、歩き出そうとすると、

「待たっしゃい！」

老爺が、不機嫌な声音で、呼びとめた。

「血汐によごれた本は、売りものにならん。弁償してもらいましょうかの」

血汐によごれたくらいで、売りものにならぬような立派な本は、一冊もなかった。

いずれも、破れたり、虫が食った、よごれた古本ばかりなのであった。

「あいにく、持ち合せがないが、これらの書物をのこらず、買ってもよい」
喜八郎は、苦笑し乍ら、云った。
「明日にでも、北町奉行所へ、持って来てもらおうか。金を用意しておく。わたしは、大和川喜八郎という」
「町方殿、わしは、ここであきないをして居りますのじゃ。ここへ代金を持参して、書物をどこへなりとはこびなされ」
老爺は、ずけずけと云いはった。
斃(たお)れている者へなど、一瞥(いちべつ)もくれようとはしないのである。
「売れなくなった書物なら、半額割引にでもしてくれるか？」
「いいや、一文も値引はしませんぞ」
「こっちは、ごらんの通り、忙しい身だ。そのうちに、引きとりに来よう」
喜八郎は、歩き出した。
「明日じゃ。明日、代金を持ってござれ！」
老爺は、叫んだ。
——明日か。明日は、甲府へ向って、旅をして居る。
喜八郎は、胸のうちで、こたえていた。

その八

甲州街道は、大木戸を抜けて、朱引外（郊外）となり、内藤新宿の猥雑(わいざつ)な通りを過ぎて、武蔵野がひらけた。
成子、中野、堀の内までが、一里半。
代田を経て、下高井戸。そこから一里半を歩いて布田五ケ宿に至る。
布田五ケ宿は、遠いむかしの由緒ある神社や寺院があって、ただの宿場町ではなく、三十余丁つらなるたたずまいは、城下町のおもむきを保っていた。
宿の入口の立場茶屋に、編笠をかぶった浪人者が三人、腰を下していたが、一人が急に、編笠をあげて、
「どういうんだ、あれは？」
と、声をあげた。
「お！　あれは、八丁堀の、大和川喜八郎が養っている餓鬼どもだが——」
「妙だな？」
あとの二人も、街道へ視線を向けて、不審の声をもらした。

九人の少年が、背丈の順に、きれいに一列をなして、西をめざして、歩いて行くのであった。

真新しい手甲脚絆をつけ、頭を立て、胸を張り、わき目も振らずに、すたすたと行くさまは、人々の目をひいた。

子供たちだけで、長い道中をするなど、この当時としては、考えられないことであった。

見受けたところ、引率者もいなかった。

——いったい、どこへ行くのか？

見知らぬ人々でさえ、好奇心をそそられる。まして、これらの浪人者は、大和川喜八郎から甲金を取りかえそうとして、六太や七太を誘拐した者たちであった。

「大和川は、あの餓鬼どもを、どこへ行かせるつもりだろう？」

「甲府ではないかな」

「なんの目的で——？」

「さあ……？」

九人の少年の姿が、遠く、小さくなった頃あい、さらに、三人の浪人者が、江戸の方角から歩いて来て、この立場茶屋で、合流した。

「大和川喜八郎が、九人の餓鬼どもを、甲府へ向って、道中させて居る」

その報告を、きかされた後の組の者たちは、

「あの隠密廻りは、よほどの利け者らしいゆえ、これには、なにか、カラクリがあるに相違ない」

「追うか」

「餓鬼どもを、捕えて、知っていることを、泥を吐かせてくれよう」

と、気負い立った。

先の組の中で、ちょっと、しぶる者もいたが、皆が一斉に、街道へ出ると、やむなく、跟いて出た。

布田五ケ宿から府中までは、一里二十三丁。

上飛田給、下染屋、車返し、上染屋、常久、八幡宿とつづく。

六人の浪人者は、大股に、少年たちを追跡した。

古びた人家が、十数軒ならんでいる車返しで、少年たちの行列を、みとめた。

「よし！　つかまえるぞ」

一人が、地を蹴った。

とたん——。

少年たちが、危険を感じたけもののように、ぱっと、奔り出した。
「やはり、怪しいぞ！」
浪人者たちは、本気になって、どっと追いかけた。
少年たちは、途中から、右手へ折れた。
雑木林がひろがって居り、街道から、そこまでの野径は、短かった。
九人の少年の姿は、あっという間に、雑木林の中へ消え、浪人者たちが、踏み込んでみると、影も形もなかった。
「面妖しいな！」
浪人者たちは、あたりへ目を配り乍ら、しだいに、奥へ入った。
どこにも、少年の姿は、ひとつも見当らぬ。
狐にでも化かされたような気分であった。

「どこかに、隠れているには相違ないのだが……？」
一人が、云い、また一人が、
「餓鬼どもは、囮だったのかも知れぬぞ」
と、云うと、他の者たちも、遽に、不安なものをおぼえた。

とたん——。
頭上から、驟雨のような音をひびかせて、黒いものが、大きく拡がりつつ、落下して来た。
それは、網であった。ただの網ではなく、鉄のくさりで編んだものであった。
浪人者たちは、もがいただけ徒労であった。
二十人あまりの捕方が、欅の幹をつたって降りて来て、
「神妙にせい！」
「もがけばもがくだけ、傷を蒙るだけだぞ！」
と、叱咤した。
鉄のくさりには、鋭くとがった釘状のものが無数につけられていたのである。
浪人者たちが、観念したところへ、姿を現したのは、大和川喜八郎であった。
「幾人獲れた？」
捕方頭へ、訊ねた。
「六名でござる」
「そうか。……すると、まだ、三、四人残っていることになるようだ」
喜八郎は、文字通り、浪人者たちを、一網打尽にすべく、この策をえらんだのであ

った。

少年たちが、落葉をかきわけて、いくつかの穴から匍い出して来るのを、喜八郎は、眺めやり乍ら、

「どうするかな？　同じ柳の下に、泥鰌は二ひき、居るまい」

と、独語した。

芙蓉と呼ばれている人物が、甲府勤番支配と看破った喜八郎の、打つ手はすばやかった。

栗島玄蕃というその人物の、江戸屋敷の用人を、うむを云わせずに、奉行所へ曳きたてて、知っている限りの秘密を、白状させたのであった。

用人は、肝心の甲金に就いては、全く何も知らされていなかったが、今年はじめ帰府した主人から、

「御熊野横丁に住む浪人者どもが、押しかけて参っても、一切、受けつけては相成らぬ。門前払いをいたすように――」

と、命じられていた。

はたして、二度ばかり、数人の浪人者に押しかけられたが、用人は、追いはらった。

その白状によって、喜八郎は、岡っ引の豆六を、御熊野横丁へ、むかわせた。

御熊野横丁というのは、青山久保町にあった。青山の大半は、武家屋敷であったが、久保町だけは、町家の一廓であった。

そこに、熊野権現社があり、それに通ずる横丁を、御熊野横丁といった。

どういうわけか、この御熊野横丁にならぶ裏店には、武家屋敷出入りの大工や左官や庭師のほかに、致仕したり、あるいは追放になった旗本御家人が、逼塞していたのである。その父親が浪人して、ここにひきこもり、息子もやむなく、食いつめ乍ら、動かずにいる、といった家も多かった。

岡っ引豆六は、よく利く鼻でかぎまわって、御熊野横丁には、今年になってから、甲府の方から江戸へ帰って来た浪人者が、十人あまり住んでいることを、つきとめたのである。

のみならず、豆六は、その一軒の床下に忍んで、

「甲府へ行って、芙蓉殿に談判しようではないか」

「それに限る。場合によっては、非常の手段に訴えて、甲金の半分を、こっちのものにしてやろう」

そういう密談を、ぬすみぎいて、喜八郎へもたらしたのであった。

喜八郎は、

——徒党を組んでいるが、奴らは、どこやら間抜けたところがある。

と、合点して、この一網打尽の策を工夫してみたのであった。

顔やら手足やら、ひっかき傷で、血まみれになった浪人者六人を、ならべて土下座させた喜八郎は、

「お主らの仲間で、甲府へおもむく者は、あと幾人居る？」

と、訊問した。

浪人者たちは、すぐには、こたえようとしなかった。

「お主らのほかに、すくなくとも、三、四人は、仲間が居る筈だ。……げんに、神戸源三郎という男の姿が、見当らぬ」

喜八郎が、そう云うと、

「神戸は、もはや、われらの仲間ではござらぬ」

という返辞がされた。

「というと？」

「神戸源三郎は、天王寺左膳に順いて行き申したゆえ、仲間ではござらぬ」

「天王寺左膳⁉」

喜八郎は、眉宇をひそめた。

「貴公自身、見とどけられた筈だ。天王寺左膳は、貴公を殺す代りに、志村、町田、小笠原、榊原の四人を、手裏剣で斃し申した。……貴公を殺さなかった理由を、天王寺は、弁明いたそうとはせなんだゆえ、われわれは、袂をわかち申した。……天王寺と神戸が、甲府へおもむくかどうか、それは、われわれの関知せぬところ——」

——そうか！　あれが、天王寺左膳だったのか！

喜八郎は、合点した。

天王寺左膳があの時、仲間を殺し乍らも、この大和川喜八郎に対して、手裏剣を放って来なかったのは、終生の宿敵だったからに相違ない。

——左膳は、おれと一騎討ちの勝負をやる肚をきめて居るのだ。

喜八郎は、十年前、鹿島の原野に建つ閻魔堂の前に於ける決闘を、思い泛べた。

あの時、左膳には、十割の勝算があったに相違ない。おのれが敗北することなど、夢にも考えてはいなかったであろう。

にも拘らず、左膳は、この大和川喜八郎に、敗れたのであった。

その無念は、十年を経ても、いささかもうすれてはいない、と想像される。

——そうだったのか。あれが、左膳だったのか。

喜八郎は、微笑して、

——左膳ならば、おれと勝負をつけるためにも、必ず、甲府へおもむくだろう。

と、うなずいた。

あらためて、喜八郎は、視線を、六人の浪人者の面ていへ、戻して、

「お主らが、甲府へ行こうとして居るのは、甲府勤番支配に、甲金をせびる目的であることは、すでに、こっちは、見通して居る。……ここで、お主らに、ひとつだけ、訊問したいことがある。誰が一体、甲金を発見したのか——そのことだ」

「……」

浪人者たちは、いずれも、不貞腐れた顔つきで、沈黙を守っている。

「お主ら仲間のうち、誰かが、発見したに相違ない。……いや、甲金が、甲府のどこかに、今日まで、隠匿されている事実を、お主ら仲間の一人が、偶然、知った。誰が、知ったのか？」

「……」

「今更、かくしだてしても、はじまるまい。正直に、こたえてもらおう。……目下のところ、お主らの罪は、この町方同心が養っている子供を二人、拉致したことだけだ。わたしが、不問にすれば、この罪は公にならぬ。とすれば、お主らは、処罰されることはない。……しかし、わたしに、協力せぬ、というのであれば、お主らを、佐久間重左衛門殺害の廉で、入牢させ、場合によっては、打首に——」

そこまで云った時、一人があわてて、

「ち、ちがう！　それは、ちがう！　われわれは、佐久間重左衛門を、殺しては居らん！」

と、叫んだ。

喜八郎は、こちらの罠に、まんまとひっかかって来たのを、ゆっくりと愉しむ表情になった。

「しかし、神戸源三郎は、佐久間重左衛門を、手負わせて居る」

「そ、それは、重左衛門が——つまり、その……」

「甲金が、どこから出たか、それを知っていたので、お主らは、その隠匿場所を、佐久間重左衛門の口から、吐かせようとした——そうなのだな？」

「う、うむ」

「つまり、佐久間重左衛門が、甲金を所持しているのを、お主らのうち、誰かが知った。甲金騒動は、そこから、はじまった、という次第だ」

「左様――」

「それで、お主らが、血眼になって、甲金の隠匿場所をつきとめようとしているのを、甲府勤番支配に、知られてしまった。甲府勤番支配は、佐久間重左衛門を呼びつけて、その隠匿場所を、訊問した。重左衛門は、やむなく、白状した。そうなのだな？」

「た、たしかに――」

「その場所からは、いくらの甲金が出たのか？」

「三万両がほど……」

「ところが、お主らは、重左衛門が、まだほかに、隠匿されている場所があることを、知っていて、甲府勤番支配に白状して居らぬのではあるまいか、と疑った。……しばしば、重左衛門を責めたが、埒があかず、その挙句が、神戸源三郎の凶刃がふるわれる結果となった。そうなのだな！」

喜八郎の推理が、みじんの狂いもなく、的中するのに、六人の浪人者たちは、ただ、あきれて、みとめざるを得なかった。

「さて――」

喜八郎は、云った。

「ここらあたりで、お主らの役目は終ったようだ。出番がなくなれば、舞台からひっ込むことになる。こんどの幕は、この町方同心が主役となって、あげさせてもらう」

その九

八王子から一里二十六丁を歩いて、駒木野の関所を通る。上りは、男女とも手形が必要だが、下りは不要である。

駒木野から、街道は、いよいよ険しくなり、やがて小仏峠である。

その急坂の途中で、大和川喜八郎は、尾行者を察知した。

二十歩ばかりあとを登って来る旅の薬売りが、それだった。

――ただの尾行ではなく、おれを殺す使命を負うている。筋書通りにゆけば、そうなる。

喜八郎は、小仏宿の旅籠へ、つと入った。

「昼寝をさせてもらう」

そうことわって、二階へ上ると、すぐに、横になった。二階は二間であった。

――隣りの部屋へ、やって来るかな？

そう思ったが、一向に、階段をのぼって来る気配は、なかった。

——外で見張るのか。襲って来るのは、中の茶屋あたりにしたか。

四半刻も経った頃、一人の飛脚が、旅籠の土間へ入って来た。

飛脚には、いくつかの種類があった。三度飛脚というのが、ふつうで、これは、宿次ぎ通信を持って歩く、いわば今日の郵便配達夫である。それぞれの町へは、月に三度やって来る。そのために、三度飛脚と称され、そのかぶる笠が、三度笠とつけられた。三度笠は、博徒のものではなかった。

早飛脚——一刻（現代の二時間）に一里三丁三十間を走った。

早の早飛脚——これは、二里九丁を走った。

通し飛脚は、例えば江戸から京都まで、一人で走った。これが、一刻一里三丁三十間を正確に持続した。

継ぎ飛脚は、宿から宿まで、つッ走ればよいから、早の早ならば、おそろしい速さであった。記録では、オリンピック・マラソンよりも、時速にして、一キロ早かった。着物をつけ、荷をかついでである。

例えば——。

江戸両国広小路で、巳刻（午前十時）に、人の懐中からすり盗った財布が、継ぎ飛

脚の早の早で手渡されて、その日の申刻（午后四時）前には、もう、沼津にいる仲間の手に渡っているあんばいであった。

いま——。

旅籠に入って来たのは、継ぎ飛脚の早の早であった。

「ちょいと、横にならせてもらうぜ」

とんとんと、階段をのぼって行き、中段で一度立ちどまってから、また駆けあがった。

それが合図であった。

横になっていた喜八郎が、

「ここだ」

と、呼んだ。

飛脚に化けていたのは、巾着切の白魚の吉であった。

佐久間重左衛門の娘千江の供をして、甲府におもむかせるにあたって、喜八郎は、落ちあう日時と場所を指定しておいたのである。

「謎は、解けたか？」

喜八郎は、吉が膝を揃えると、すぐ、問うた。

佐久間重左衛門は、落命する際、千江に、「甲府へ行って叔母にこよりを――」と遺言したのであった。

「比丘尼になっておいでの叔母御ってえおひとは、二日もかからずに、たずねあてやしたが……西青沼ってえ町のはずれに、松風庵という小さな庵をつくっておすまいでございましたが――、そのこよりってえのが、どうも……」

「どうした？」

毎日、百本ずつ、こよりをつくりなすって、それで、鶴をつくっておいでなんでさ。庵室には、もう千以上の、鶴だらけなんで――へい」

「こよりで、鶴を、か。……千羽鶴の悲願なら、色紙で折る筈だが――」

「こよりでおつくりになったのは、折鶴なんぞとは比べもならねえ、見事なものでござんしてね。それも、大きいのや小さいのや、それアもう――高さ三尺ぐれえのしろものが、いまやまさに飛び立とうとしているかたちなんざ、生きているような見事さでござんした」

「……」

喜八郎は、腕を組んで、しばらく、じっと考えていたが、

「吉――」

「へい」

「ここで逢ったついでに、もうひとつ、たのまれてもらおうか」

「へい。それア、旦那のお命じになることなら……」

喜八郎は、差料を携げて、ゆっくりと立ち上った。

次の刹那――。

抜く手もみせぬ迅さで、抜きつけの一閃を、天井へ送った。

吉は、天井板へぶすっと切先が突き立つや、忽ち、白刃をつとうて、鮮血が流れ落ちるのを、ただ、驚愕の目で、見まもった。

喜八郎は、ほんのしばし、そうしていてから、白刃を抜き取った。

「息をひき取ったらしい。……お前にたのむのは、死体を、誰にも気づかれないように、無縁仏として、始末することだ」

その夜は、喜八郎は、与瀬から一里ばかりはずれた山中にある古い寺の庫裡で、泊めてもらった。

住職は、もと寛永寺の末寺のひとつで、ながらくくらした僧侶で、喜八郎とは、懇意であった。ここが、自身の故里であった。

喜八郎は、囲炉裏をへだてて、このたびの一件を、包まずに、語った。

「ほう！　甲金が、何万両も、かくされているとな。……黄金伝説というものは、とかく、まやかしが多いが、まことなのじゃな？」

住職は、興味ありげに、訊ねた。

「武田勝頼が、滅亡に当面して、黄金をかくした、とすれば、さしずめ、どこをえらぶか、ご坊には、見当がたてられますか？」

「ふむ。さての――？」

古稀を迎えた住職は、首をかしげた。

天正十年三月十一日、武田勝頼は、天目山の麓の、田野という村里の仮屋で、織田信忠の軍勢五千に、包囲されて、屠腹し、ここに、武田家は、滅亡したのであった。

――もはや、これまで！

覚悟をきめた勝頼は、重臣某に、無言で、うなずいてみせた。

心得た重臣は、ただちに、不動明王の画像を描いた巨大な朱塗りの太鼓を、摺り打ちに、四十九打した。

この太鼓は、戦国武将中屈指の仏教信者であった武田信玄が、曹洞禅に参じた際、信濃の竜雲寺の北高全祝から、贈られた家宝であった。

信玄は、北高全祝を、来世首魁の師として、崇敬していたので、常に、傍に据えて、おのが運を、その鼓音に托した。すなわち、出陣にあたって士気を鼓舞する際には、七打し、戦勝を祝う時には、十三打する、といったあんばいに、またその打ちかたも、遅速自在に変えるように定めていたのである。

そして、遺言の中にも、

「武田家が、もし万一、滅びるような日を迎えたならば、摺り打ちに、四十九打せよ。……四十九打したのち、この太鼓は、永久に鳴らぬであろう」

という一条を加えておいたのである。

その一打一打に合せて、仮屋にめぐらした柵に、つぎつぎと、燃えるような緋色の幟が、立てられていった。

太鼓が鳴りおわった時、仮屋は、四十九本の赤い雲霓によって、包まれた。

織田の軍勢も、これが武田家の降旗と知ったか、急に、矢弾を撃つのを止め、鯨波を絶った。天地は、嘘のように、静寂に還った。

それから半刻のち、四十九本の赤旆が、同時に、音もなく、地べたへ倒れた。

「おう――武田勝頼の自刃がおわったぞ」

粛としてしずまりかえっていた包囲陣は、にわかにどよめいて、どっと、柵をのり

こえて、仮屋へ殺到した。

惨たる死の世界が、そこに、あった。

およそ二百をかぞえる武人が、おのおのの座をきめて、武田家の面目を保つ見事な最期を示していたのであった。

「……滅亡に際して、これだけあっぱれな最期ぶりをみせた武田勝頼とその股肱らじゃからのう。信玄がのこした莫大な軍用金も、絶対に、人に知られぬ場所をえらんで、隠匿いたしたに相違ない」

老住職は、粗朶火をかきたて乍ら、云った。

「武田信玄という武将は、それほど、莫大な軍用金を残したものでしょうか？」

「たしかに！　……およそ、覇権というものは、礦脈を趁うて、移る、といわれて居り申すな。戦国時代に於ても、そのようであった。当時、甲州には、黒川山、芳山、黒柱山、栃代山、金山嶺、五座石などの金山があった模様じゃな。特に、黒柱山は、日本一の豊富を誇って居ったらしい。……信玄は、これらの金山から採った金で、いわゆる甲州玉金をつくって居る。目方一匁より十匁に及び、円形で、裏面に桐の紋と、周囲に七つ星を刻したもので、その純度に於て、最高のねうちがあったらしい。信玄が、しばしば、大軍を四境の外に出して、なお、いささかも困弊しなかったのは、この玉金のおかげであったに相違ない。……信玄がひとたび手に入れたる国民は、二度と反きたる例なし、と故書にも、記されてある。つまり、信玄が、大金持で、惜し気もなく、山吹色を、領民に撒いてやった証拠であろうな」

「とすれば、莫大な黄金が、地下に、かくされたのは、疑う余地もない、と申せますな」

「と、愚禿も、信じ申すわい」

「わたしが見たのは、甲州玉金を、牛舌金に——薄く打ちのばしたもので、桐の紋も、七つ星も消えて居りましたが、……いまなお、玉金のまま、どこかにねむっている、と考えられます」

「左様じゃな。しかし、それが何処か、見当はつかぬ」

「これまでに、ただの一個でもよい、玉金を発見した者がある、という噂を、きかれたことはありませんか？」

「さあ——？」

老住職は、白いあご髯をなでた。

「信長公も、太閤も、また東照神君も、何百人かの忍び衆を放って、甲州一円を、捜

させたということであったが、……見つからなかったらしい。この時代に、発見した者があるとは、ついぞ、きかなかったのう。いや、もし、発見した者が居ったとしても、これを、得意気に、吹聴するバカは居るまいが――」

その言葉をきき乍ら、喜八郎は、ふっと、ひとつの想念をわかせた。

――それほどの見事な滅亡ぶりを示した武田家一統が、甲州玉金を隠匿したまま、それなりに、すてておく筈はない。必ず、その場所には、金守を置いたに相違ない。

――もしかすれば、その金守が、佐久間重左衛門の先祖ではなかったか？

喜八郎は、前途に、光を発見した思いになった。

同じ時刻――。

甲府城内の勤番支配屋敷の一室では、あるじの栗島玄蕃が、ひどくにがい面持で、絶え間なく、金の煙管に、莨をつめては、一服喫い、すててはまた、つめかえていた。

廊下に近づいて来る跫音があって、障子の外で、

「大場、只今、帰着つかまつりました」

と、云った。

「入れ」

栗島玄蕃は、入って来た町人ていの男を、睨むように見据えて、

「まずいぞ！」

と、云った。

「は――？」

「黒辺が、昨日、小仏宿で、大和川喜八郎に、殺された、と報告が入った」

「はっ!?」

大場という男は、眉宇をひそめた。

「あの隠密廻りの町方は、よほどの手練者と存じます。……先日は、御成道の広場で、清水が殺られて居りまする」

大場という男は、江戸から、急遽戻って来たのであった。

「浪人者の中に、大和川を斬る腕を持っている者は、いなかったのか！」

「一人、居りましたが……」

「それが、どうした？　なぜ、斬らなかった」

「天王寺左膳と申す者、挙動に不審があって、仲間はずれに相成りました」

大場は、小名木川のこやし船で、天王寺左膳が、仲間四人を手裏剣で殺し乍ら、何

故か、大和川喜八郎と一騎討ちを避けたことを、報告した。
「どうして、避けたのか、当人も口にせず、仲間としては、全く見当もつかなかった由にございます」
「しかし、そやつ、大和川にまさる業を持った男なのだな？」
「と存じます」
「そやつに、斬らせるのだ、大和川を！　よいな、大場！　急使を遣して、甲府へ、天王寺左膳を呼べ！」
「仰せられるまでもなく、左膳には、甲府へ参るよう、好餌を投げておきました」
大場は、そうこたえて、うすい冷たい笑みを、口辺に刷いた。
玄蕃の手足となって、江戸で動き、山城屋と裏取引し、浪人者たちを厳しく見張り、また、たづなをとっていたのが、この男であった。
玄蕃は、ようやく、ほっとした表情になり、
「わしを、いつまで、こんな山流しにしておくつもりか」
と、いまいましげに、吐き出した。
江戸城へもどれば、どんな辣腕でもふるってみせる自信が、この人物には、あるようであった。

その十

「ここか」
大和川喜八郎が、足をとめたのは、松の疎林にかこまれて、ひっそりとわだかまる茅葺きの庵の前であった。
粗末な門に、「松風庵」と彫られた古びた額が、かかっていた。
喜八郎は、柴折戸をひらいて入ろうとして、ちょっと、うしろを振りかえった。
甲府城下に入ってから、またもや、尾行されはじめたが、喜八郎は、平然と尾けられるにまかせたのである。
この西青沼という町のはずれへ、旅籠からまっすぐにやって来たのであるが、べつに、尾行者を追いはらおうとも、まこうともしなかった。
かなりはなれた距離で、尾行者が、松の幹にすばやく姿をかくすのを、喜八郎は、視野の片隅に入れておいて、ゆっくりと庵に近づいた。
案内を乞うと、出て来たのは、千江であった。
「叔母上に、お目にかかりたい」

喜八郎は、千江にあかるい視線をあてて、云った。
「はい」
千江は、いそいそと、奥へ入って行ったが、すぐもどって来て、
「庭の方へおまわり下さいませ」
と、招じた。
別の庵室が、庭をへだてて、建っていた。
白絹で頭を包んだ尼僧が、庭に立って、待っていて、喜八郎を、その庵室にみちびいた。
喜八郎は、庵室に一歩入ってみて、
「成程！」
目をみはった。
無数の鶴が、そこにいた。
畳の上に、餌をついばんでいるのや、いま飛び立とうとしているのが、いっぱい群れていて、足も踏み込めないありさまであったし、天井からつるされた飛翔中のも、かぞえきれぬ。
「見事なものですな」

「二十年も、つくりつづけて居りますと、一羽や二羽は、お目にかけても、はずかしくないのが、できまする」
「なにかの悲願によって、つくられて居られる？」
「悲願と申せば、悲願に相成りましょうか？」
「おさしつかえなければ、おうかがいいたしたい」
「この松風庵は、武田家が滅亡したのち、勝頼夫人にお仕えしていた一人の侍女が、尼となって、建てた庵でございます」
「勝頼夫人の霊をとむらうために――？」
「はい」
武田勝頼の正室は、北条氏康の六女であった。勝頼に嫁した時は、十五歳であった。
二十歳の時に、武田家は滅亡した。
北条氏政が、末妹を、武田家へ呉れたのは、関東へ伸びて来る上杉方の勢力を押えるために、武田家と同盟をむすぶ――いわば、政略のひとつであった。
しかし、夫人は、勝頼のこよなき伴侶となって、嫁した翌年、良人と兄氏政が不和となり、公然と敵対するに及んでも、妻は良人にしたがうものと、小田原からの帰国

のすすめに応じなかった。

戦国武将夫人として、亀鑑となるべき女性の一人であった。

夫人は、気品たかい麗容のひとであるとともに、才媛で、蘭渓と号した歌には、名歌があった。

勝頼は、織田信忠に、信州高遠城を陥落せしめられ、累代重恩の家臣たちから、つぎつぎと叛かれて、ついに、新府の城をすてなければならなくなった時、夫人に、

「小田原へ帰るがよい」

と、すすめた。

しかし、夫人は、小田原へ帰る代りに、善知識快川和尚のいる恵林寺におもむいたのであった。侍女二人をつれただけの、ひそやかな避難行であった。

勝頼が、天目山の麓で自刃して、相果てて二日後、恵林寺もまた、織田勢によって、伽藍方丈ことごとく焼きはらわれた。

その時、快川和尚は、本堂須弥壇前に、結跏趺坐したまま、黒焦げとなった。

後世に、

「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」

その言葉をのこした。

快川和尚は、武田家滅亡の報がとどくや、夫人の自害を見とどけ、その遺体を、奥津城にねむらせた。

夫人の方は、左の辞世をのこした。

黒髪の乱れたる世ぞはてしなき
思ひに消ゆる露の玉の緒

「蘭渓様は、鶴をお好きだった由にございます。それで、比丘尼となった侍女は、千羽鶴を折ってみ霊をおなぐさめしたのでございます。爾来、松風庵の庵主は、代々鶴をつくりつづけました」

「折鶴ではなく、こよりでつくられるようになったのは？」

「それは、五代目になってからでございます」

「どうして、こよりにかえられたのか、理由がお判りですか？」

喜八郎は、じっと尼僧を、見まもった。

「わたくしの先祖の佐久間家のむすめが、五代庵主になったためでございます。佐久間家は、武田家に仕えて、こより職と称されて居りました」

「こより職とは？」

「ただいまで申す、勘定奉行の下にいる出納係でございました。おびただしい書類を綴じるこよりを、それはもう、目にもとまらぬ早さで、つくる名人であったので、こより職と称されたのでございます」

「佐久間家は、武田家滅亡の後、存続されたわけですな」

「はい。当主は、勝頼様にしたがって、天目山に相果てたのでございますが、その嫡男と次男は生きながらえました。嫡男は、牢人いたしましたが、次男の方は、徳川家に随身して、旗本におとりたてにあずかりました」

「その嫡男が、貴女らの先祖にあたられる？」

「はい。佐久間重左衛門という名を、代々継いで居ります。松風庵五代庵主に、曾孫娘がなって以来、なんとなく、庵主には、佐久間家の子女が、比丘尼となってつとめるならわしに相成りました」

「佐久間家の屋敷は、どのあたりに？」

「釜無川の東岸に沿うて、二十五丁の堤がございます。いわゆる信玄堤でございます。その堤の近くにございました」

「いまも、屋敷跡がありますか？」

「いえ、あとかたもございませぬ」

喜八郎は、そこで、肝心の質問を口にすることにした。

「ところで、貴女の兄上の佐久間重左衛門殿は、三万両相当の甲金を、発見された由、その場所は、どこであったか、ご存じですか？」

「いえ、噂だけを耳にしただけでございます。兄は、ずっと、日光の今市に住み、絶えて、甲府に参らなかったのでございます」

「しかし、佐久間殿は、この甲府で、甲金を発見して居られる。……こっそりと、甲府へやって来られて、発見されたものに相違ないのです」

「……」

「わたしが、想像するに、佐久間殿は、先祖代々住んで居られた屋敷跡から、発見されたのではあるまいか？　つまり、佐久間家は、武田家が隠匿した甲州玉金の金守として、当主の嫡男が、その任に就いたのではあるまいか？　……とすれば、その屋敷のどこかに、甲州玉金は、埋蔵されたことになる」

「……」

「貴女の兄上は、佐久間家当主になった時、すでにそのことを知らされていたか、あるいは、伝家の古文書によって、知ったか——いずれにしても、今市から、こっそ

り、この甲府へやって来て、たしかに、甲金が、その場所に隠匿されていることを、つきとめられた」

「……」

「その時、兄上は、手に持てるだけの甲金をとり出し、大部分は、なお、そこにのこしておかれた。……運わるく、兄上は、甲金を所持していることを、知りあいの浪人者どもに、かぎつけられた。浪人者どもは、兄上に、隠匿場所を知らせろ、と迫った。兄上は、頑として、はねつけられた。浪人者どもは、あせった挙句、群をなして、この甲府へやって来て、血眼になってさがしまわった。その挙句、甲府勤番支配の怪しむところとなり、ついに、甲金隠匿の事実が知られてしまった。勤番支配は、貴女の兄上を呼びつけて、きびしく訊問して、その場所を、白状させた。その結果、三万両に相当する甲州玉金が、勤番支配の手に入った。当然、この金は、公儀へさし出されるべきであった。ところが、勤番支配は、おのが私服をこやす欲心を起し、蔵前の札差山城屋金兵衛を味方にひき入れて、秘密の私鋳所を設け、当世の小判に改鋳することにした。……浪人者どもには、口封じに、いくばくかの甲金を呉れて、これを山城屋の手で、両替させる、という狡猾な手段をとった」

「……」

尼僧は、黙って、耳を傾けている。

「さて――、勤番支配は、武田家が滅亡に際して隠匿した軍用金が、三万両相当の甲金である筈がないと考えた。必ず、何十万両かの莫大な甲金が、なお、どこかに埋蔵されているに相違ない、と考えた。そして、ひそかに、さがしつづけたが、徒労であった。勤番支配は、配下を送って、佐久間重左衛門に、隠匿場所を白状させようとしたが、これも、徒労であった。その挙句、刺客に、重左衛門を殺させた。これは、おそらく、重左衛門から、贋の古文書でも渡されて、激怒したためであったろう、と想像される。あるいは、重左衛門が、度重なる脅迫に堪えかね、またいずれ公儀の知るところとなるに相違ない、と思い、自身の罪を軽くしてもらうために、公儀へ訴え出るおそれもある、と推量したためであったろう、とも想像される」

「……」

「庵主殿に、お考え頂きたい。兄上が、千江殿に、こよりを――、と遺言されたのは、いかなる意味であったか――。この謎が解ければ、兄上の仇討もできるのです」

長い沈黙があった。

尼僧が、ようやく、喜八郎へ、眼眸を当てた。

「わたくしに、考えられることは、ひとつだけございます」
「ふむ。どんなことを――？」
「松風庵庵主は、わたくしで、十三代でございます。……庵主がみまかった時、たくさんの鶴が、のこります。それを、次の庵主が、埋めて、鶴塚をつくるならわしになって居ります」
「成程！」
「かぞえますれば、折鶴の塚が四つ、こより鶴の塚が八つ、ならんでいるわけでございます」
「それは、どこに――？」
「はじめ、松風庵は、恵林寺の裏手に建てられました。五代になってから、こちらに移ったのでございます。……鶴塚は、はじめの松風庵の庭へ築かれ、それは、十二代まで、そこにずっとならべられているのでございます」
「……」
「兄が、こよりを、と遺言いたしましたとすれば、あるいは、その鶴塚のことを、指して申したか、とも思いまする」
「……」

――軍用金の金守ならば、その場所に、家を建てているのが当然であるが……？
喜八郎は、腕を拱ねた。
しかし、浪人者たちも、勤番支配も、それぐらいの推測はしたに相違ない。
佐久間家の屋敷跡は、いちめん掘りかえされているであろう。
「鶴塚か」
喜八郎は、呟いた。
と――。
その時、喜八郎は、床下に、人の気配があるのを察知した。
喜八郎は、目くばせで、尼僧にじっとしているように命じておいて、差料を把って、立った。
喜八郎が、音もなく障子戸を開けるのと、その縁側の下から、黒い影が忍び出るのが、同時であった。
外は、宵闇が濃くなろうとしていた。
「おい！」
喜八郎の呼び声に、黒影は地上を一廻転して、ぱっと突っ立った。
「貴様、勤番支配の手の者だろうが、いささか、しつっこすぎるな」

「……」

対手は、抜刀すると、上段に構えた。

こちらの業前を知っていて、遁走は不可能とおのれに云いきかせた様子である。

喜八郎は、縁側から庭へ降り立ったが、まだ抜刀しようとしなかった。

対手は、二歩ばかり後退した。

喜八郎は、するすると進んだ。

瞬間——。

対手は、上段に構えた白刃を、喜八郎めがけて、投げつけた。

喜八郎がこれを頭上に流すや、対手は踵をめぐらして奔り出した。

喜八郎は、追わなかった。

背後に、小さな呻きがあがるのを、耳にしたからである。

曲者が投げた白刃は、尼僧の胸を貫いていた。

「許されい！」

抱き起した喜八郎は、その死相を看て、暗然となった。

「首尾よく……お、おはたらきのほどを——」

尼僧は、微かな声音で、そう云いのこすと、事切れた。

喜八郎は、千江に、このことを報せるのがつらかった。

——やむを得ぬ。

尼僧に、胸で両手を組ませておいて、喜八郎は、庵を出た。

あるいは、千江が、十四代庵主になるかも知れぬ。

その十一

「ほう——これか、宝の山は！」

枝ぶりのみごとな老松がちらばる広い台地に、整然と竝んだ鶴塚を、眺めやって、甲府勤番支配栗島玄蕃は、にやりとした。

玄蕃のわきには、案内した腹心の大場が控えているだけであった。

甲府勤蕃の旗本は、一人も、連れていなかった。

台地の麓には、二十数人が控えているが、かれらは、玄蕃手飼いの忍者どもであった。

玄蕃が、甲賀と伊賀から呼び寄せた連中で、いずれも、平常は、城下で、ごくありふれた商人として、くらしている。

甲金発掘が、勤番の旗本たちに知られてはならないのは、当然であった。厳しく秘密を保持するためには、忍者を手飼いにして、露見をふせがねばならなかった。玄蕃の智慧であった。

甲賀・伊賀には、いまもなお、服部半蔵以来の忍びの術をうけ継いで、修業を怠らぬ地下浪人たちがいることを、玄蕃は、京都所司代の下で与力をつとめている頃、知ったのである。

――いつか、折あらば、かれらをやとって、大きな仕事をやってくれよう。

その考えが、あったのである。

いまこそ、その考えが、実をむすんだのである。

忍者の一人が、大和川喜八郎のあとを尾けまわした挙句、一人の尼僧との問答をぬすみぎきして、莫大な甲金の隠匿場所をつきとめて来たのであった。

「鶴塚とは、うまいかくし場所であったな」

玄蕃は、大場に笑ってみせた。

大場の方は、不安な面持で、

「天王寺左膳が、まだ、参りませぬが……」

と、云った。

玄蕃は、昨夕、甲府へやって来た天王寺左膳を引見し、大和川喜八郎と一騎討ちして、絶対の勝算があることを、念を押していた。

「おっつけ参るであろう」

玄蕃は、自信のある態度であった。

大和川喜八郎が、今朝、この鶴塚へ、姿を現すことは、疑う余地はない。

そこで、莫大な甲金がその中にねむる鶴塚の前で、喜八郎と左膳を決闘させ、喜八郎を斃しておいて、ゆるゆると、発掘する。

それが、玄蕃の思案であった。

玄蕃は、腹心の大場が、妙に不安がるのが、むしろおかしかった。

大和川喜八郎は、単身で、甲府へ乗り込んで来たのである。

江戸からは、喜八郎を援護する者は、一人もやって来てはいないのであった。それは、関所で、厳しく監視して、たしかめておいてある。

玄蕃は、待っていればよいのであった。

喜八郎が現れ、左膳がやって来て、決闘を演じてくれれば、それで、片がつくのであった。

いずれが勝とうが、それは、一向にさしつかえない。

玄蕃の懐中にあるオランダ製の短銃が、勝った方を撃ち殺すことになっている。
玄蕃は、短銃の業には、充分の自信があった。
甲府へ来てから、その修練を、一日も欠かしたことがない。山城屋金兵衛が、ひそかに、とどけてくれる密輸入の短銃が、玄蕃の手許には、もう十挺を越えているのであった。
玄蕃が、おちつきはらっている所以であった。

同じ時刻——。
天王寺左膳は、恵林寺に至る野道をひろっていた。
昨夕、栗島玄蕃から、
「大和川喜八郎を討ち殺してもらいたい」
と、依頼され、その場所と時刻を告げられたのであった。
左膳としては、願ってもない好機であった。
「もし、お主が、勝てば、旗本に推挙しよう」
玄蕃から云われて、思わず、胸がおどったものであった。
——おれは、勝つ！　必ず、勝つ！

おのれに、幾度、云いきかせたことだろう。
道は、松林に入った。
左膳は、決闘場へおもむくおのれを、地面に匍う影法師に瞶めて、一歩一歩、ゆっくりと、踏みしめて行く。
と——。
行手に、人が立つ気配に、われにかえって、左膳は、顔をあげた。
はっ、と足を釘づけにした左膳は、もう一度、見なおした。
行手をさえぎって、微笑している顔は、大和川喜八郎に、まぎれもなかった。
「……」
左膳は、待ち伏せされたことに、激しい屈辱をおぼえた。
喜八郎は、微笑を消さずに、云った。
「天王寺左膳ともあろう兵法者が、甲府勤番支配ごとき者の犬になることはない、と思うが……」
「犬になど、なっては居らぬ！」
左膳は、喜八郎を睨みつけた。
「お主の立場は、まちがいなく、犬だな。しかも、ひどくあわれな犬だ」

「なにっ！」

「栗島玄蕃は、わたしを片づけるのに、お主をえらんだようだが、かりに、お主が、首尾よくわたしを斬ったとしても、お主に、くれるほうびが、何か、目に見えて居る」

「……」

「わたしが調べたところでは、栗島玄蕃は、短銃撃ちの稽古を、毎日つづけている模様だ。……とすれば、勝ったお主にくれるほうびは、短銃の弾丸に相違あるまい、という予想が、容易につく」

「……」

「わたしは、お主が、ここから、踵をまわすことを、忠告するために、待っていた」

「……」

「これは、江戸町奉行所の町方同心としてではなく、曾てともに鹿島道場で学んだ大和川喜八郎個人として、お主に忠告するのだ。……どうか、ひきかえしてもらいたい」

その忠告に対して、左膳は、しばらく、返辞をしなかった。

やがて、左膳は、口をひらくと、

「おれは、十年前、お主と真剣の立合をした時、云った。お主を斬ることが、おれの剣の至る極点になった、と。……お主は、それに応えて、氷炭相容れぬ上はやむを得ぬ、と云った。

……おれは、いまここでも、同じ言葉をくりかえすぞ。お主も、同じ返辞をせざるを得まい」

と、云った。

「左膳、なぜ、わたしとの立合を、そのように、執念とするのか？　お主が、剣のみに生きているとは、思えぬが……」

「おれは……、大和川喜八郎という男が、この世に生きていることが、気に食わぬのだ！」

左膳は、呶鳴りざま、抜刀した。

喜八郎は、眉宇をひそめて、じっと、左膳を見まもっていたが、

「わたしに、やはり、十年前と、同じ返辞をさせるのか」

と、呟くように云った。

「抜け、大和川！」

左膳は、青眼に構えて、叫んだ。

「左膳、わたしは、ここで、お主に負けるわけにいかぬ。わたしは、町方同心として、やらなければならぬ仕事がのこって居る」

「おれの知ったことか！」

「そうだ、お主の知ったことではない。しかし、わたしは、そのために、負けるわけにいかぬ以上、勝つ！」

「勝ってみせろ！」

「わたしが、勝つことは、お主が、死ぬことだぞ。犬死にだと思わぬか？」

「思わぬっ！　……問答無用だ！　抜け！」

左膳は、ツツ……と進むや、上段にふりかぶった。

喜八郎は、左膳が、構えを変えるのを見て、やおら、差料を、鞘走らせた。

十年前、喜八郎は、小太刀を使って、意外の工夫によって、左膳の右脚を斬った。

それは、喜八郎として、左膳を死に至らせたくなかったからである。

いまは、それだけの余裕は、喜八郎になかった。

左膳が、この十年間に、多くの人を斬っていることは、問わずして、明白であった。

喜八郎には、剣鬼とも剣魔とも称ぶことができる左膳に、絶対に勝てる自信はなかった。

それゆえにこそ、わざと、「勝つ！」とうそぶいてみせたのである。

そして、わざと、左膳を憤らせて、構えを変えさせたのであった。

喜八郎は、地摺りの下段をえらんで、すっと、一歩退った。

受けの太刀であった。のみならず、柄の握りかたを、右手と左手を逆にしていた。

すなわち、左手を上にしたのである。

これは、全くの受け一方の使い様しかないことを、左膳に、示したことであった。

勝つと高言してみせ乍ら、自ら攻撃を封じる構えを示した喜八郎を、左膳は、

——なんの工夫か？

と疑った。

なんの工夫か、左膳には、判らなかった。

判らぬままに、左膳は、じりじりと肉薄した。左膳には、十数人の敵を、ただの一撃で、あの世へ送った豊富な経験があった。

剣というものは、百本の立木を両断する稽古よりも、一人の生身を斬る実戦の方が、その腕に、強さを加えるのであった。

左膳には、その自信があった。

間合をきめて、左膳は、さらに、双腕を挙げた。
一撃必殺の剣気を、高くかざした白刃にみなぎらせ、左膳は、妖しいまでの殺意の炎を、双眸に燃やした。
秒刻が、固着の対峙の中に、きざまれた。
汐合が、きわまった。
「えいっ！」
左膳の剣は、正確に、凄じい刃音を起して、喜八郎の頭上へ、振りおろされた。
「むっ！」
喜八郎は、その猛撃を、これまた、正確な受けの形で、頭上に受けた。
はがねの悲鳴がほとばしるとともに、喜八郎の剣は、ま二つに折れた。
——勝った！
左膳が、胸中で叫ぶのと、喜八郎の右手が、脇差を抜きざま、胴を薙ぐのが、同時であった。

甲府城内に、深夜が来ていた。
支配屋敷の一室には、まだ燈があり、栗島玄蕃の前には、十数個の鉄製の櫃が、ならべられていた。
甲州玉金は、鶴塚の中に、隠匿されていたのである。
玄蕃は、各櫃の中から一個ずつとり出した玉金を、膝の前にならべて、眺めていた。
もう一刻以上も、眺めつづけていて、すこしも、あきないのであった。
十万両に相当する莫大な金であった。これが、完全に、わがものになったのである。
発掘に、なんの邪魔も入らなかった。
天王寺左膳からの使いという町人が、やって来て、恵林寺の近くの松林の中で、大和川喜八郎を不意に襲うて、討ち果したが、自分もかなり手負うたため、数日を療治にあてて、あらためて、参上つかまつる、と伝言して行ったのであった。
玄蕃は、自身が手を下さず、忍者どもに、左膳を片づけさせることになっただけだ、と薄ら笑って、いよいよ、発掘にとりかかったことであった。
そして、つぎつぎと、現れる櫃に、五体がしびれるほどの歓喜をおぼえたものであった。
——これは、夢ではないのだ！

玄蕃は、玉金のひとつを把って、ぎゅっと摑みしめた。
その時であった。
跫音もひびかせずに、廊下を近づいて来た者が、無言で、障子を開いた。
玄蕃は、大場が入って来たものと思い、視線も向けずに、
「山城屋を、この甲府へ呼んで、ひとつ、眺めさせてくれようか。さぞかし、びっくりいたすことであろう」
と、云った。
すると、大場ならぬ別の声が、こたえた。
「お呼びになるまでもなく、ご自身の身柄と一緒に、江戸へはこばれるがよろしかろう」
ぎょっとなって、視ると、見知らぬ男が、そこに坐っていた。
「江戸町奉行所町方同心大和川喜八郎です。お見知りおきを――」
「そ、そんな！　……貴様は、天王寺左膳の手で、討ちはたされた――」
「ということにして、お手前様を、一時安堵させたのは、町方同心が、よく使う手であります」
玄蕃は、あわてて、つッ立った。

床の間わきの戸袋には、十数挺の短銃が、置いてあるのだ。
喜八郎は、平然として、玄蕃の行動を、見まもっていた。
玄蕃が、短銃をつかみとったとたん、
「わるあがきをされぬことです。お手前様の留守中に弾丸は、ぜんぶ抜いてあります。四千石の直参ならば、罪が露見した上からは、いさぎよく、自らを裁かれることを、おすすめいたします。……帰府して、恥をかかれるよりは、この場で、見事な最期をみせて頂ければ、こちらも面倒な手つづきがはぶけて、有難いのです。……乱心による切腹、という報告をすることぐらいは、お引き受けできます。ご子息の半地相続、ということをお考え頂きたい」
喜八郎の声音は、きわめて、おだやかなものであった。

お家騒動

その一

正月元旦。

江戸で、正月元旦に、あきないをして銭をもうけるのは、辻に店を出した紙鳶売りだけであった。

正月らしい、あかるい朝がひらけた江戸中は、どの町家も、大戸をおろして、ひっそりとして、往還には人影ひとつない。

犬が、あちらこちらに、のんびりと寐そべっているばかりである。

夜明けがたまでは、あわただしい雑沓をきわめていたのが、まるで、嘘のような、年にただ一度の静寂が、朝陽の昇るままに、まかせている。

やがて——。

屠蘇を汲み、雑煮を祝いおわった頃あい、あちらこちらから、子供たちが、とび出して来て、辻に走る。

辻には、葭簀囲いの紙鳶屋が、子供たちを待っていた。

あきなわれる凧は、大きいのは十二枚張り、中は四枚張り、小さいのは一枚張り。

奴凧、とんび凧、三番叟、扇凧、剣凧など種々さまざまである。大方の絵は、勇ましい武者だが、一字だけ白く浮かせて、その親の稼業を——例えば、魚屋ならば魚という字で——あらわしているのも、子供はよろこんでもとめた。

八丁堀の辻にも、与力・同心の子弟たちが、駆け出して来て、紙鳶店へ集って来た。

中間、小者、そして岡っ引の倅たちもまじって、この日ばかりは、家門身分の差はない。

立春の季に、空を仰ぐのは、養生のひとつだ、といわれていて、子供たちが凧あげをするのは、通行の邪魔になるが、大人たちは、野暮な叱声をあげなかった。

旗本大身といえども、子供たちが夢中になっているわきを、黙って、通り過ぎて行く寛容なならわしになっていた。

大和川喜八郎の家からも、壱太、弐太、参太を除いて、六人の少年たちが、とび出して、辻へ奔った。

大晦日からの約束で、いずれも、二枚半張りの喧嘩凧を買いもとめて、

「やるぞ！　さあ、来い！」

と、一列横隊にならんだ。

その向いに整列したのは、与力の子息たちであった。

どうやら、平常、大和川家の小さな居候たちは、与力の子息たちにさげすまれて、罵られたり、あざけられているのに、じっと堪えて来たらしい。

そのくやしさを、喧嘩凧で、はらしてくれようという次第であった。

凧は、つぎつぎと空高く舞いあがって行った。

凧と凧をからめ合わせ、敵の凧を奪うには、上手下手があった。風に巧みに凧を乗せて、凧糸をひきしぼったりゆるめたり、緩急自在にあやつるには、コツを必要とした。

大和川家の少年たちのうち、最も上手なのは、意外にも、六太であった。

万事なにをやらせても、のろくて、仲間たちをいら立たせる六太が、いったん凧をあげると、なんとも鮮やかな糸さばきで、忽ち、敵の凧をうばってしまうのであった。

今朝も——。

敵がた——与力の子息たちの凧のひとつを、あっという間に、たたき落したのは、六太であった。

「わああっ！」

四太、五太、七太、八太、九太が、歓声をあげた。
六太は、もう、次の敵を物色していた。
「ほう、やるのう」
小さな居候たちのうしろに立って、微笑し乍ら、声をあげた大人がいた。
まだ二十歳ばかりの、眉目秀でた長身の青年であった。
髷や衣服は、武士のものだが、無腰で、無紋の黒羽二重を着流していた。
この八丁堀では、見かけない顔で、髷は旗本のものではなかった。といって、どこかの藩士というにおいもなかった。
「おい、あいつを、やっつけてしまえ」
青年は、六太の肩をたたいて、次の獲物を指示した。

与力の子息の列の後方には、与力や同心が、見物に出て来ていたが、
「妙な男だな、あれは――」
「うむ。刺青をして居るな」
と、私語し合った。
六太に指示して、空を指さした時、袖が腕をすべって、朱桜の刺青が、ちらっとのぞいたのである。

「どこの何者か、訊ねてみるか？」
「止せ、今日は、元日だ。対手が大泥棒でも、見のがしてやらねばならん」
青年の方は、そんな私語に気がついたか、踵をまわして、その場をはなれた。
青年が、ふらりと入ったのは、辻から程遠からぬ湯屋であった。
大晦日から正月にかけて、最も忙しいのは、湯屋であった。
湯屋の数は、定められていて、みだりにその数を増すことは許されていなかった。
江戸っ子は、入浴を好んでいたので、湯屋は一年中にぎわっていた。しかし、毎朝はやくから客を入れる代りに、火元厳重の取締りのために、昏れがた点燈後一刻ばかり――八時頃――には、戸を閉ざさなければならなかった。
しかし、大晦日だけは、終夜営業を許され、夜明け前にいたって、客足がとだえた頃、大いそぎで、湯を落し、水を汲みかえて、わかしておく。すると、明鴉の鳴く頃あいには、初風呂の心地をあじわうために、客がやって来る、というあんばいであった。
湯屋は、元日だけは、湯銭を取らなかった。
その代り、客は、湯屋の奉公人への心づけを、寛永銭三つを白紙にひねって、番台

の三方盆へのせるならわしであった。

青年は、すぐに湯には入らず、二階に上った。

湯屋の二階は、庶民の手軽な遊び場であった。

三十畳ばかりの手広さで、表の方を掃き出し縁にして、酒楼か妓楼に似せていた。階段の上り口近くに、茶釜、火炉、茶碗、土瓶など茶道具を置いて、二階番頭というおやじがひかえている。

その左右の台には、羊羹、お市豆、ねじ松風のたぐいの菓子が、箱にならべてあった。

酒は、置いてなかった。

湯上り酒は、酔いがはやく、喧嘩が起るおそれがあったからである。

この湯屋の二階へ上ってくる客は、近辺一丁半四方くらいの、町内顔なじみの連中ばかりであった。

遊里からの朝帰りに、家の敷居が高くて、まずこの二階へ上り、湯にも入って、自宅の首尾をさぐってから帰るという輩もいた。囲碁・将棋の好きな連中が、朝湯にやって来て、とうとう、午食の迎えを受けて、あわてて帰って行くなど、日々のことであった。

気心の置けぬ顔ぶれなので、逢えば、話に花を咲かせ、色里の女の品さだめから、芝居・相撲の評判、寄席芸人の芸の批評、近所の常磐津の女師匠の噂、はては、前夜の火事騒動まで、種はつきず、ついつい油を売ってしまうあんばいであった。

いわば——。

見知らぬ若い武士が、無腰で、ふところ手で、たった一人、ふらりと上って来たのは、いかに正月とはいえ、場ちがいの感があった。

すでに、十人ばかり、菓子をつまみ乍らしゃべったり、将棋をさしていたりしていた客たちがいたが、青年が姿を現すと、

——おや？　なんでえ、このさむらいは？

と、一斉に、けげんな視線を、集めた。

「失礼する」

青年は、ことわって、縁側ぎわに座をえらんだ。

客たちは、すぐに、おのおのの愉しみにもどり、青年一人が、ぽつんととりのこされて、沈黙を守ることになった。

しかし、青年は、すこしも、場ちがいなところへやって来た、と悔いる気色もなく、近くで、職人同士がさしている将棋へ、視線を向けて、微笑していた。

「と、と、と、と金だあ！　そっちは、胸がどきんだろう」
「おっと、どっこい、桂馬をこうとばしたら、香車の道筋だぞ。と金を動かしやがったら、王手と来らあ。どうだ、参ったか？　それとも、一手待ってやろうか」
「男前に生れると、十六の時から、女を待たせるのに馴れて居るがのう――」
「置きやがれ」
「去年のことになったから、打ち明けるが、実は、伊勢屋の後家と出来てよう――じれて待つ夜に、障子を開けりゃ、舌を出すよな雲の月、って、おれの代りに、月を袂で、ぶったとさあ」
「おっと、なにをかくそう、その伊勢屋の後家を、一昨年振ったのが、このおれよ」
「おい、本当か？」
「顔色変えやがって、なんでえ。はやく、香車くり算段しろい」
「くそ！　こっちの気分をかきまわして、手をごまかそうとの兵法だな」
腕ぐみして、首をひねるのへ、青年が、横あいから、
「と金の右わきへ、角を打って、王手だな」
と、教えた。
「旦那、忝じけねえ、このお礼は、あとで、肩をおもみして――」

「冗談じゃねえ、旦那、ここで、脇から教えるのは、ご公儀からのかたいお達しで、禁じられて居るんですぜ」
大和川喜八郎が、この二階へ上って来たのは、半刻ばかりのちであった。
喜八郎は、常連であった。
客一同から挨拶を受けて、喜八郎は、
「辰巳屋の隠居は、まだか」
と、訊ねた。
喜八郎は、囲碁も将棋も、ずば抜けて強く、対抗できるのは、辰巳屋という古着屋の隠居だけであった。
「あいにく、隠居は、暮から風邪をこじらせて居りやす」
「そうか、それは、ざんねんだな」
「旦那は、どうにも強すぎるんで、困っちまうんだな。飛車、角に、香車を落しても、敵わねえんだから、これが、ほんとのやりきれねえというやつだ」
すると――。
寐そべっていた青年が、むっくり起き上って、

「わしが、対手になろうか」
と、申し出た。
喜八郎は、青年を視た。
——旗本でもなく、どこかの藩の定府でもないようだが……？
いぶかり乍ら、
「おねがいいたしましょう」
と、応じた。
職人の一人が、さっそく、将棋盤を、はこんで来た。
喜八郎は、五、六手さしただけで、青年が、強いことをさとった。
——敵わぬかも知れぬ。
予感通り、喜八郎はたてつづけに、二番負けた。
将棋に於ける限り、不敗を誇っていただけに、喜八郎は、猛然と闘志を燃やした。
「もう一番、お願いいたしましょう」
喜八郎が、申し入れると、青年は、微笑して、
「八丁堀の面々も、元日は、ひまとみえる。こちらは、一年中ひまをもてあましているので、願ってもない勝負対手を見つけた」

「では、ひとつ、じっくりと腰を据えて、挑戦つかまつる」
喜八郎は、必死の思考の挙句、ようやく一番をわがものとした。
その頃、二階の客は、ほとんど入れかわっていたが、喜八郎も青年も、まわりに視線を移す余裕はなかった。
一手一手に、長い思考をこらすので、見物人の方が、じりじりした。
午がすぎたが、二人は、午食を摂るのも忘れて、盤面を睨みつづけた。
昏れがたになって、壱太が、心配して、顔をのぞけたが、喜八郎の必死の様子をみとめると、にやっとして、階段を駆け降りて行った。
夕餉の時刻が来た。
二階番頭が、喜八郎のそばへ寄って来て、
「旦那、弁当がとどきました」
と、告げた。
「うむ」
喜八郎は、青年がさした意外の手に、飛車も金もすてて、せめて雪隠詰めからまぬかれようとするどたん場を迎えていて、弁当どころではなかった。
「弁当を持ってみえたのは、辰巳の小えん姐さんでございますよ」

「うむ」

喜八郎は、なんの反応も示さぬ。

「頂戴いたそうかな」

心のこもった御節供に、さきに箸をつけたのは、青年の方であった。

喜八郎は、腕組みしたまま、思案をつづけていたが、ようやく、起死回生の一手を思いついた。

「ほう、これは！」

青年は、目を瞠った。

こうして、夜に入り、時の鐘が何刻を報せようと、喜八郎も青年も、われにかえる気色はなく、勝負をつづけた。

子刻（午前零時）を過ぎると、流石に、二階へ上って来る客足はとだえた。

二階番頭が、大あくびをつづける中で、喜八郎と青年は、互いに、姓名を知らぬまま、将棋をさしつづけ、ついに、ひきあげる気配を示さなかった。

「旦那がたは、どうやら、七種までも、ぶっ通しで、さしつづけるあんばいだな」

湯屋のあるじが、顔をみせて、あきれ乍ら、二階番頭に、ささやいた。

事実——。

正月二日の朝が明けても、まだ、喜八郎と青年は、その座を動かずに、一手一手に、思考をこらしていたのである。

その二

時刻は、そろそろ巳刻（午前十時）になろうとしていた。

湯屋の二階には、もう四、五人、湯上りの客が、上って来て、福茶を喫んでいた。

尤も、いずれも、商売を仆にゆずった楽隠居の身分の連中であった。

正月二日は、仕事はじめで、どの家も、あわただしいのであった。

元日を、ここですごした老爺もいて、上って来てみて、大和川喜八郎が、見知らぬ青年と、まだ、将棋をさしつづけているのを見出して、あきれて、

「夜っぴて、ぶっ通しで、おやんなすったとは、いやはや、どうも……いくら、目星をつけた曲者を追って、夜明しの張り込みになれていなさるから、といって、おどろいたものだ」

と、首を振った。

しかも、この両者、一向に、休息する気色はないのだ。

やがて――。

喜八郎も、ついに、腰をあげる時が来た。

岡っ引豆六が、階段を駆け上って来たのである。

「旦那！　御用ですぜ」

「なんだ？」

喜八郎は、ふたまたかけられた角と金と、どちらをすてようか、と思案の最中であった。

「正月早々、縁起でもねえ人殺しでさあ」

湯屋の客たちは、豆六の報せに、一斉に、耳をそばだてた。

「誰が、殺された？」

「誰がって、つまり、そのう、首無しなんで――」

「首なし？　大川の百本杭にひっかかっていた、とでもいうのか？」

「それが、あきれたことに、初登城の大名行列の、登城駕籠の中に――」

その報せには、流石の喜八郎も、盤面から視線を上げざるを得なかった。

「大名が、登城駕籠の中で、首がなくなっていた、というのか？」

「そ、そうじゃねえんで――。つまり、登城駕籠の中にいた首なしは、初出のいでたちをしていた鳶なんでさあ」

「鳶が、登城駕籠の中で、大名とすりかわっていたというのか」

「どうも、そうらしいんで――」

「その大名自身は、どうした？　行方知れずか？」

「そいつが面妖しなことに、ちゃんと、屋敷のお居間に、もどっておいでになった、というわけでさ」

つまり――。

初登城すべく、行列が、しずしずと屋敷から出た時、たしかに、藩主は、登城駕籠に乗っていた。にもかかわらず、行列が、下乗門に到着して、供の者が、駕籠の引戸をひらくと、乗っていたのは、首なしの鳶であった、というわけであった。

「どこの大名だ？」

「備中の木下淡路守――二万五千石なんで」

豆六が、告げたとたん、喜八郎と対座していた青年が、

「なにっ!?」

と、顔色を一変させた。

喜八郎は、青年へ、視線を移した。

青年は、唇を、びりびりっとふるわせたが、急に、すっと立って、
「失礼する」
と、一揖して、二階を去った。風の迅さであった。
「へえ？　あのお武家、木下淡路守と、なにか、かかわりあいがあるのかねえ」
豆六が、首をかしげた。

喜八郎は、豆六とともに、湯屋を出た。
大名旗本がひき起した事件は、町方が首を突っ込む筋合ではなかった。
ところが、登城駕籠の中で首なし死体になっていたのは、初出のいでたちをした鳶の者であった。当然、これは、町方がのり出して、取り調べることになる。
殺されたのが何者か不明で、しかも、奇怪な事件なので、死体が、牢屋敷へはこばれると、内与力の佐野主膳は、使いをはしらせて、大和川喜八郎を、呼んだのである。
「今年は、春から縁起が、わるいな。忙しい年になるようだ」
喜八郎は、腕組みして、歩き乍ら、云った。徹宵した顔ではなかった。
朝陽にあたると、むしろ、艶のある明るい顔色であった。

「どういうんでござんすかねえ。登城の途中、お殿様と首なし死体が、駕籠の中で、すりかわるなんて、奇術じゃあるめえし、考えられませんや」
「その謎が解けりゃ、いっぺんに、事件はかたがつくだろう。容易に謎が解けねえから、隠密廻りという役が、成立つ」
小伝馬町に到着すると、待っていた内与力の佐野主膳が、
「まず、死体をしらべてもらおう」
と、云った。
死体は、獄死した囚人の置場ではなく、揚り屋の一室に、安置されてあった。
雲に大稲妻の色ざし袢纏、鼠色の革羽織、蒲色の手甲脚絆、黒足袋、草鞋。
いずれも真新しく、たしかに、この日の初出の式にのぞむためにまとったものと思われた。
――これは、加賀鳶らしいな。
喜八郎は、呟いた。
大名火消の中でも、加賀前田百万石の本郷屋敷がかかえている加賀鳶の名は、特に高かった。
加賀鳶は、その髷が独特なので、一目で判る。あいにく、この鳶は、首が無かっ

た。

——加賀鳶が、どうして、備中の小大名の登城駕籠の中で、首なしになっていたかだ。

その頸の切断口は、一太刀で刎ねたもの、と喜八郎は、看て取った。

喜八郎が、用部屋へ戻って来ると、奉行所随一の利け者の内与力は、ひと綴りの書類を、膝の前へ投げて寄越した。

「木下家の藩屏譜じゃ。目を通しておけば、なにかの参考になろう」

「お借りいたします」

「噂は、明日には、もう江戸中にひろがろう。木下家では、ただ、とんだ迷惑を蒙ったことにしたいらしいが、さて、どういうものかな。……死体を調べて、何か、気づいたことはないか？」

「加賀鳶のいでたち、と思いましたが——」

「わしも、そう思って、本郷へ、同心を一人、行かせた。……一番手、二番手、三番手、一組二十人——三組六十人が、一人も欠けずに、威勢よく、屋敷からくり出して、街道で梯子の立曲乗りをやっていたそうな」

「もう一度、貴方様が、木下家の家中から聴きとどけられました登城の際の様子を、おきかせ頂きとう存じます」

「うむ」

佐野主膳は、木下家の留守居役からきかされたことを、そのまま、喜八郎に、つたえた。

大名の年賀の登城は、辰刻（八時）であった。大大名は、霞ヶ関とか外桜田とか、江戸城の目の前に上屋敷を持っていたから、自家の門を出るのは、おそくてもよかった。芸州浅野藩など、先頭の者が、大手御門をくぐった時、まだ、殿の者は、霞ヶ関の上屋敷の表門の前にいたくらいであった。

備中足守藩木下家は、上屋敷が、大久保にあった。したがって、登城行列は、まだうす暗いうちに、出発しなければならなかった。

登城の刻限は、辰刻であっても、その時刻に、三百諸侯が到着すると、大混雑をひき起すので、格式にしたがって、小大名から大大名の順番で、到着するしきたりになっていた。二万五千石の、城なし大名の木下淡路守は、すくなくとも、卯下刻（午前七時）には、大手御門をくぐらなければならなかったのである。

今朝——夜明けとともに、木下淡路守は、表玄関で、登城駕籠に乗った。

ならわしによって、木下家の行列は、甲州街道をまっすぐに通らず、余丁町から、

市ヶ谷月桂寺門前を通って、牛込納戸町へ出、小石川を過ぎて、ぐるりとまわる道順を、進んだのである。

その間、べつに怪しむべきことは、何ごとも起らなかった。

大名旗本が、登城駕籠から降りるのは、大手御門を入って、まっすぐにつきあたった下乗橋ぎわの門であった。

駕籠は、四人の人足がかつぎ、さらにいつでも手代りできる者が四人つき添って居り、草履取りも控えていたことだし、とうてい、駕籠の中の人間が、すりかわるということは、不可能であった。

ところが——。

下乗門で、駕籠がおろされて、引戸をひらいた小姓が、なかを一瞥して、仰天した。

首なしの鳶姿の人間が、乗っていたのである。

馬廻り役に、老巧の定府がいて、小姓の口を封じ、主君がいかにも急に発熱したとみせかけて、直ちに、行列をひきかえさせたのである。

したがって、供の者の大半は、主君が加減がわるくなって、登城を遠慮した、と思ったのである。

ところが——。

大久保の上屋敷の藩主の居室には、いつの間にか、淡路守が、戻って来ていた。

意識を喪って、屏風の蔭に、倒れていた、という。

小姓の介抱で、目覚めた淡路守は、登城駕籠に乗ったまではおぼえているが、あとは全く記憶がない、と云って、そのまま、臥牀してしまった。

「なんとも、奇怪な異変だが、木下家の留守居から、死体が鳶の者ゆえ、何卒、町奉行所扱いにして、解決願いたい、とたのまれると、ことわるわけにも参らぬ」

佐野主膳は、苦笑し乍ら、

「お主の腕前で、ひとつ、解決してもらおう」

と、命じた。

喜八郎は、用部屋から下ると、牢屋医師に会って、首なし死体について、二、三質問した。

死体を診た医師は、

「鳶の者にしては、骨格がやわで、しかも、年齢が四十を過ぎて居りますな」

と、こたえた。

「つまり、鳶のいでたちをさせられているだけで、別の職業の者かも知れぬ、と云われる？」

「どうも、そんな気がしますな」

「武士か町人か――そのちがいまで、お判りにならぬか？」

「どうも、そこまでは。……ただ、武士にしても、武芸とは無縁なくらしをした者に相違ありますまい」

喜八郎は、死体の手を視ている。武芸に精進した者の手なら、一瞥しただけで、

――これは、武士だな。

と、断定できるのであった。

喜八郎自身、判らなかったくらいであるから、医師の言葉は、正しいようであった。

喜八郎は、牢屋敷を出た。

元日とちがって、街中は、初荷やら年始礼やら町火消の出初やらで、大層なにぎわいが、黄昏どきまで、つづいていた。

物売りも、多い。

猿まわし、三河万歳、獅子舞い、鳥追いなど、正月でなければ見られない景物もある。

ゆっくりと、雑沓の中を歩いているうちに、喜八郎は、尾行者があることを、直感した。

これは、本能にちかい直感力であった。

はっきりと、どんな奴が、尾けて来ているか、背後に視線をまわして、看てとったわけではなかった。

――尾けているな。

一瞬、ぱっと脳裡にひらめいたのである。

そし、この直感は、これまで、錯覚であったことは、一度もなかった。

――さてと。

喜八郎は、にやりとした。

――この尾行者が、こんどの異変とつながっている奴ならば、しめたものだが……。

これまでも、そうであったが、こっちが、かぎまわるより、むこうの方から、しかけてくれる方が、喜八郎としては、のぞむところであり、こうした場合、尾けさせるにまかせることにしている。

両国広小路に出た。

喜八郎は馴染の水茶屋に入った。

「旦那、途方もない人殺しが、起ったそうですね」

落間の床几にいた客の一人が、話しかけて来た。

「なんのことだ？」

「おとぼけで……。もう、そこいら中、噂でさあ。お大名の登城駕籠の中に、鳶の首なし死体があった、って――」

「噂をまいたのは、どこのどいつであろうな」

「お駕籠をかついでいた人足のうちに、口の軽いのがいやがったんでさ」

「人の口には、戸は立てられぬか」

木下家の馬廻り役が、いったんは、周囲の者の口を封じたが、それは、せいぜい、行列を屋敷へ帰着させるまでのことであった。

駕籠人足は、小大名などでは、奉公人の忠義心など持ってはいないのである。渡り奉公の者ばかりであるから、屋敷を一歩出れば、たちまち、べらべらとしゃべりちらすのであった。

――この噂で、当分、府内は持ちきりになろう。

そう思って、憮然としている喜八郎に向って、不意に、店さきを通りかかった猿まわしの小猿が、白い歯をひきむいて、とびかかって来た。

さっと、躱した――瞬間。

喜八郎の顔面へ、白くきらめくものが、あびせられた。

吹き針であった。

その三

「なんでえ、あの猿まわしのざまは――」

「猿まわしが、猿にされて、八丁堀に、しょっぴかれて行く、ってえやつか」

「今年の干支は、申だから、正月早々、いろいろ、申年に難儀があらあ。そういやア、おめえ、申年生れだったのう」

「ぶるぶる、七里けっぱい、縁起でもねえことをぬかすねえ」

広小路に出て来た屠蘇気分の人々は、後手にしばられて、町方同心に連行されて行く猿まわしを眺めて、がやがや、云いたてた。

小猿は、主人の肩で、きょとんとしている。

大和川喜八郎は、猿まわしを、番屋に入れると、土間へひき据えた。
番屋には、番人のほかに、町火消が三、四人、あぶらを売っていたが、遠慮して、こそこそと出て行った。
「誰にたのまれて、おれを、狙った？」
喜八郎は、穏やかな口調で、訊ねた。
猿まわしは、顔を伏せて、こたえぬ。
喜八郎は、片手に、吹き針をもてあそんでいた。
「猿まわしが、猿の芸当のほかに、吹き針の芸当もしてみせる、とは、今日はじめて知ったが、……町方の目を狙うとは、ちょっとばかり、大胆不敵すぎたな。意趣か。それとも、金でやとわれたかな」
「……」
「泥を吐かせるまでの根くらべには馴れている。……おい！　この大和川喜八郎を、すこし甘く見くびっているのじゃないのか」
喜八郎は、俯向いて身じろぎせぬ猿まわしに、吹き針を持った左手を伸ばした。
猿まわしが、本能的に、顔をそむけようとしたが、喜八郎は、そのいとまを与えなかった。

吹き針は、猿まわしの上唇を、ぷすりと刺した。
猿まわしの呻き声に、小猿が、その肩から高く跳んで遁げた。
「もう一本あるぜ。これを、下唇の方へ刺してくれるか」
「ま、待っておくんなさい」
猿まわしは、血だらけの唇をふるわせた。
「きこう」
喜八郎は、冷ややかな視線を当てて、促した。
「た、たのまれたんで……」
「誰に――？」
「おさむらいに――」
「どこのさむらいに？」
「それが、つい、さっき、通りすがりに、呼びとめられて、た、たのまれたんで……。どこの、どなただか、さっぱり……」
「いくらの金で、やとわれた？」
「十両で――」
喜八郎は、その上唇から、吹き針を抜いてやった。

「お前は、忍び崩れらしいな」
「へ、へい。甲賀生れでございまして……。忍びの術は、少々心得て居りますが、この十年あまり、この小猿にかせがせて、律義にくらして居りましたが、十両渡されて、つい、魔がさして……、ごかんべん下さいまし」
喜八郎は、番人に、猿まわしの懐中をしらべさせた。
たしかに、十両を所持していた。
「律義にくらしていた、などと殊勝気な面をするな。たたけば、ほこりの出るからだだろう。まあ、いいだろう。今日のところは、見のがしてやろう。その代り、この十両は置いて行け。貧乏な子供たちの凧代にしてやろう」
「忝じけのう存じます」
喜八郎は、十両でやとった武士が、どこかの藩の定府らしかった、とききとっただけで、猿まわしを解き放ってやった。
「旦那の目をつぶそうとしたふとい野郎を、どうして、あっさり、許しておやんなすったので？」
番人が、けげんそうに、問うた。
「雑魚は、泳がせておけばいい」

喜八郎は、背のびして、大あくびをした。
「ねむい」
ようやく、徹夜がこたえて、喜八郎は、この番屋で、ひとねむりしたくなった。
備中足守藩木下家の、大久保余丁町にある上屋敷は、古色蒼然たるものであった。
寛永時代に建てられたもので、欅林にかこまれているおかげで、江戸の名物の火事に、まだ一度も、遭っていなかったのである。
表門の屋根は、まだ藁葺きであった。
表門から、玄関までの、左右の植込みも、老樹の列であった。
屋敷が古いと、因習も久しいとみえて、渡り奉公の小者中間は、木下家では、あまり長くつづかないようであった。
建物自体が、ひどく陰気で、大久保界隈から、女中奉公に上る娘は、いなかったくらいである。
登城駕籠に、藩主とすりかわって、鳶の首なし死体が乗っていた、という噂をきいた近所の住人たちは、
「いずれ、そんなことも起るのじゃあるまいか、と思っていたよ」

と、したり顔で、ひそひそと私語しあった。

その藩主は、翌三日の午后になって、ようやく、牀から起き上った。

木下家も、江戸城のくらしに准じて、表と奥が厳重に区別され、藩主が表に寝る場合は、小姓が二人ずつ、枕許で伽をつとめたし、奥で寝る場合は、中年寄が、不寝番をつとめた。

淡路守は、二日の午后まで、表でやすみ、それから、奥へ移って、一夜をすごしたのであった。

厠からもどって来た淡路守は、中年寄が、台所からとどいた料理を書いた板をさし出したが、一瞥もくれず、

「粥なら、食わぬぞ」

と、云った。

中年寄は、おどろいて、主君の顔を仰いだ。

淡路守は、これまで、板に書かれた料理を、拒否したことは一度もなかったのである。

木下家のしきたりとして、藩主は、台所からさし出される料理を、すべて喰べなければならなかった。四季の料理は、きまりきって居り、藩主は、それを、多く喰べたり、また少く喰べたりすることは、許されなかった。

もし、喰べかたが減ると、調進の仕方がわるい、ということになり、台所奉行が責任をとらねばならなかった。

藩主は、好ききらいが許されず、茶漬の量さえもきめられていたのである。茶漬の場合は、たくさんよそった飯に茶をかけるのではなく、喰べのこしたほんのすこしの飯に、茶をかけるのであった。お代りなどできなかった。

代々の藩主は、このしきたりをおとなしく守って来たのである。

ところが——。

今日はじめて、淡路守は、苛立たしげに、粥を拒否したのであった。

加減がわるくて臥牀したあとは、粥ときまっていたにも拘らず、淡路守は、

「茶漬をくれ」

と、所望した。

「それは……」

中年寄は、ためらった。

「茶漬だ！」

淡路守は、呶鳴った。

台所奉行が、報せをきいて、いそいで、伺候した。
淡路守は、茶漬を食うぞ、とくりかえした。
やがて、異例の午食を摂り了えた淡路守は、さっさと、また、牀に横たわった。
老女が、入って来て、医師を呼んである旨を告げると、淡路守は、むこう向きに寝たなりで、
「医者など不要だ。それより、酒を持って参れ」
と、命じた。
老女は、仰天した。
酒は、夕餉に出されるしきたりであった。昼間、酒を飲むなど、あり得ないことであった。
「お殿様、どうして、本日に限って、そのように、おしきたりをおやぶりあそばします？」
老女は、屹となって、語気をきびしいものにして、問うた。
「どうしてだと？　……わしは、藩主だ。藩主が、あらたに、しきたりをつくって、わるいのか？」
「おしきたりと申すものは、一年半年でつくられたものではございませぬ。百年も、それ以上の歳月をかけて、ご家風とともに、つくりあげられたものでありますゆえ……」
「うるさいっ！」
淡路守は、ぱっとはね起きると、老女を睨みつけた。
睨みつけているうちに、淡路守の双眸が、あやしげな光を加えた。
「そちは、今年、幾歳になる？」
「え？」
老女は、眉宇をひそめた。自分の年齢など、きいて、どうするというのか？
「幾歳になるか、ときいて居るのだ」
「四十七歳に相成りまするが……？」
「そうか」
淡路守は、立って、老女のそばへ寄ると、猿臂をのばして、その手を、むずとつかんだ。
「なにをあそばします」
「こっちへ、参れ！」
淡路守は、老女を、無理矢理に、上段の褥へ、ひっぱって来た。

「そなた、まだ、男を知らぬのだろう？」
「……」
老女は、息をのんだ。
淡路守が乱心した、と思った。
「女と生れて、男の味を知らずに、老い朽ちるのは、あわれだぞ。……わしが、知らしてくれる！」
「お、お殿様！」
「さわげば、手討にするぞ！」
淡路守は、きめつけた。

老女は、褥の上へ、押しつけられた。
主人が、いかなる所業に及ぼうとも、女中はさからってはならぬしきたりであった。尤も、これまで、むたいの乱行を起した藩主は一人としていなかった。
乱心した主人を、どうやって、とりしずめてよいのか、老女は、知らなかった。
ただ、この狼藉を、他の女中たちに見せてはならぬ、という心だけが、働いた。
淡路守は、忽ち、老女の下半身から、重ねた下着も、丈長襦袢も、腰巻も、捲りあげた。
肥り肉の、ぽってりと太い脛、膝、太腿が、白昼のあかるみの中へ、あらわにされた。
老女は、必死に、口からほとばしろうとする叫びを、咏えた。
老女は、十六歳で木下家へ奉公に上り、爾来、着換える時と入浴の時以外は、そのからだをあらわにした経験がなかった。
羞恥と困惑が、全身をかけめぐった。
——いま、自分は、男女の営みを、させられようとしている！
老女は、開かせられようとする下肢を、ひらくまいと、そのことに、必死になることで羞恥と困惑に堪えようとした。
しかし——。
藩主淡路守の二十歳を出たばかりの若い力には、反抗すべくもなかった。
老女は、思わず、大きく口をひらいて、喘いだ。
その口が、口でふさがれ、舌が押し入って来た。
その瞬間——。
老女は、乱心した主人のために、自分一人が犠牲になって、他の者に知らせないよ

うにするのだ、という自己弁解を、脳裡に生んだ。
老女は、からだから、力を抜いた。
下肢は、思うさまに、大きく押し拡げさせられた。
「よいな！」
淡路守が、一語云った。
「……」
老女は、ひしと目蓋を閉じて、死人のようになっている。
その上で、野獣となった主人が、うごめいた。
不意に——。
老女は、下腹部に、巨きな、固い異物が、押し入って来る痛みをおぼえた。
押し入って来たそれは、下腹部いっぱいに、塡った。
「ああ……」
老女は、眉宇をひそめ、喘ぎの声をたてた。
それなり……。
淡路守は、老女の上で、動かなかった。
老女は、ようやく、羞恥の念がうすれ、いささかの心の余裕をとりもどした。

しかし、目蓋をひらくことは、できなかった。
突然、熱いものが、下腹部を衝き、老女は、異様な刺戟で、身をよじった。
さっと、淡路守が、その上から、身をはなした。
むこう向きに横になった淡路守は、微動もしなくなった。
老女は、のろのろと起き上って、身じまいをした。その箇所には、微かな疼痛がのこっていた。
身じまいをととのえてから、老女は、そっと、主人を、視やった。
そこに寝ているのは、主人ではなく、男であった。
老女は、その意識を、あわてて、振りはらうと、上段から、降りた。
「お殿様——」
「……」
「お殿様、これで、お気がすみあそばしたなら、あとは、何卒、平常心におなりあそばすよう、お願い申し上げます」
両手をつかえて、老女は、云った。
自分が生贄になった、ということに、快感めいたものを、老女は、おぼえていた。

その四

静かな朝であった。

九人の少年たちは、黙々として、手習いにはげんでいたし、喜八郎は、自分の座である床の間で、内与力佐野主膳から渡された木下家の藩屏譜を披見していた。

木下家は、名門であった。

その先祖は、豊臣家定といい、太閤秀吉の正室北政所の兄であった。

家定は、尾張の住人杉原助左衛門の嫡男で、秀吉にずっと長く仕えて、のちに木下の家号をもらった。

家定は、子沢山で、六人がいた。長男勝俊は、若狭九万石を領した。勝俊は、慶長五年の東西手切れに、徳川家康と戦うのを好まず、留守居をしていた伏見城を去って、京都の北政所を守護した。

関ヶ原役が終ってから、勝俊は、所領もうしない、洛東霊山の麓に、草庵をむすび、長嘯子、あるいは、天哉翁と号して、風月のみを友として、世を終った。

次男利房は、北政所からきらわれ、亡父の遺領をもらうことができなかった。利房は、関ヶ原役では、石田三成に従ったので、役後、ようやく死罪をまぬかれた。

しかし、大坂役では、利房は、家康に従って出陣し、その賞として、二万五千石を、備中国賀陽郡足守に給与された。

三男延俊は、関ヶ原役の頃から、家康に志を通じていたので、役後、豊後国速見郡日出、一万五千石を領した。

四男俊定は、若死した。五男は、関ヶ原役で、三成を裏切った小早川金吾中納言秀秋である。

すなわち——。

徳川期に入って、生きのこったのは、次男利房の子孫足守木下家と、三男延俊の子孫日出木下家の二家であった。

いずれも、柳間詰の大名であった。

豊臣家の血統は秀頼をもって絶え、北政所の血統だけが、木下家と浅野家によって、継がれた、という次第である。

このたび、異変を起したのは、利房を先祖とする足守藩木下家であった。

当主淡路守利政は、当年二十一歳。

性情は、しごく穏やかで、文武の道にもかなりはげんだ、まずまずの大名である、

という。

藩屏譜だけを読むと、これまで、家が傾くような騒動など、一度として起したことはなく、豊かではないが、さりとて台所窮迫して首がまわらぬという貧しさでもなく、きわめて目立たぬ小大名の地位を保っている家であった。

「どうということもないか」

喜八郎が、呟いた時、岡っ引豆六が、顔をみせた。

「大久保へ、行って参りました」

木下家の上屋敷を、さぐりに行ったのである。

「うむ」

「なんとも、陰気な、幽霊屋敷みてえな家でござんした」

豆六は、日出木下家の中間に化けて、異変お見舞いの酒を、とどけて来たのであった。

「あの屋敷から、首なし死体が、登城駕籠に乗って出て行っても、べつにふしぎはないような……そんな薄気味わるい空気が、こもって居りましたぜ」

「屋敷のまわりは、欅の林にでもかこまれて居るか？」

「へい、そうなんで。……つまり、一度も、火事をくらったことがねえんですね」

「お前のことだから、渡り中間の部屋へ、入ったろう？」

「ちょっと、ひとやすみさせて頂く、とことわって、入ってみました。殿様に対する中間どもの評判は、わるくはござんせんよ。気軽に声をかけて下さるお方なので、屋敷内は、薄気味わるいが、がまんしている、と云って居りました。……但し、江戸家老というのが、万事しきたりずくめの、顔を見ただけでも、むなくそのわるくなるイヤな野郎だ、とののしって居りましたが……」

「当主に、夫人は居らぬらしいが、側妾はいるか訊ねたか？」

「それが、どうも、女っ気なしのくらしらしいんで……、中間どもも、首をひねって居りました」

喜八郎は、豆六から、その他二つ三つ、きき出して来たことを報告されたが、べつに参考になるような事柄はなかった。

「ところで、旦那――。あっしは、空っ風がひどくて、埃まみれになったんで、ちょっと、柳の湯に寄って来ましたが、二階に、例の、あのおさむらいが、寝そべっておいでしてね、あっしの顔を見ると、町方に会わせてくれぬか、と仰言いましたぜ」

その青年武士は、異変を起した大名が、備中の木下淡路守ときくと、顔色を一変さ

せるほどの驚愕を示して、立ち去っている。
「よし――」
喜八郎は、立ち上った。
「会いにお行きになるんで――？」
「もしかすれば、あの二階にまた現れるような気がしていた」
そう云ってから、喜八郎は、壱太を呼び、ついて来るように命じた。
喜八郎が、柳の湯の二階へ上って行くと、寐そべっていた青年は、起き上った。
心なしか、顔色が冴えず、眼眸に暗い色がただよっていた。
「お呼びして、申しわけない」
「また、徹夜をおのぞみですか？」
「いや――」
青年は、かぶりを振って、
「それがし、松本竜太郎と申す」
と、名のった。
「なにかのご相談にあずかるわけですな」
喜八郎は、じっと、松本竜太郎と名のる青年を、凝視した。

ちょっと沈黙を置いてから、松本竜太郎は、云った。
「木下淡路守の登城駕籠に、首なし死体が乗っていた件に就いて――」
「貴方にかかわりのある件だと申される？」
「かかわりがない、とは申さぬが、それがし自身、第三者の立場にある。……お主が、隠密廻り同心として、この件に就いて、探索をはじめて居るのに、手をひいてくれ、とたのむつもりであったが、どうやら、たのんでも、無駄のようだな」
「無駄ですな」
喜八郎は、あっさりとこたえた。
「しかし、お主が、手を引かぬ限り、その身に、危険が及ぶ」
「すでにもう、及んで居りますな」
「首なし死体が、鳶の者の初出のいでたちをしていたゆえ、町方が、取調べにあたるのであろうが、もし、それが、鳶の者でなかったならば、べつに、町奉行では、吟味する必要もあるまい」
「鳶の者であるかないか、それが、判明するまでは、手を引けませんな」
「……」
松本竜太郎は、腕組みして、おもてを伏せた。

——松本竜太郎、か。この場で思いついた仮名だな。

喜八郎は、そう看てとっていた。

急に——。

青年は、顔をあげて、喜八郎を見据えた。

鋭い眼光であった。

「あの首なし死体は、鳶の者ではない！」

斬りすてるように、断定した。

当然、喜八郎としては、「どうしてお判りになるのです？」と、訊ねるべきであった。

喜八郎は、そう訊ねなかった。

ふっと、薄ら笑って、

「まるで、貴方が、淡路守殿と首なし死体を、すりかえた張本人のような云いかたをなさる」

と、云った。

「木下家の異変は、木下家で、解決すべきなのだ。町方は、手を引いた方がよい。お主は、腕の立つ御仁かも知れぬが、大名の家の内情を、のぞこうとすれば、のぞかれる方は、必死になって、これをふせごうとする。……止めてもらえぬか？」

「乗りかかった船ですから、乗ることにします」

喜八郎は、きっぱりと、拒絶した。

松本竜太郎は、ふうっと、吐息した。

「やむを得ぬ。……お主が、どんな危難に遭うことになろうとも、知らぬぞ」

すてぜりふをのこして、立ち上った青年を見上げた喜八郎は、

「ひとつだけ、こちらから、おうかがいしたいことがあります」

と、云った。

「……？」

「貴方は、武士にあるまじく、からだに、刺青をほどこされている。なぜです？」

その返辞は、奇妙なものであった。

「それがしが、生きのびるために、そうしたまでのこと」

青年は、さっさと、階段を降りて行った。

喜八郎は、窓辺へ寄った。

往還をへだてて、向いの染物屋の店さきに、壱太が立って、待っていた。

喜八郎は、合図した。

壱太は、おもてへ出た松本竜太郎のあとを、尾けはじめた。

大名屋敷というものは、上屋敷が江戸城の近くにあり、下屋敷は遠くにあるのが、常識であった。

木下家の場合は、逆であった。

その下屋敷は、今川小路にあった。

尤も、敷地は、せいぜい四、五百坪の、ごく目立たぬ構えであった。

おそらく、ここは、藩主の憩い場所ではなく、登城中に、なにかの急務で、大久保まで帰れなくなった場合、着換えの衣服をとり寄せたりするために、近くに下屋敷を構えているものと思われる。

松本竜太郎と名のった青年が、まっすぐに、到着したのは、その下屋敷であった。

下屋敷の表門は、閉じられていた。

壱太は、渠が、潜り門をくぐって、邸内へ姿を消すのを、見とどけて、爪を噛んだ。

——どうしてやろうかな。待ってやろうかな。それとも、とんで帰って、旦那様に報せようか。

迷ったが、しばらく、待ってみることにした。

松本竜太郎の方は、玄関に立った。

取次ぎの士は、青年の顔を一瞥すると、おどろきの目をみはった。

「多喜殿に、お会いしたい」

「は——」

「取り次いでもらおう」

「し、しかし……」

取次ぎの士は、ためらった。

「お主は、取り次げばよいのだ」

「しばらく、お待ちを——」

青年は、ちょっと、待たされているうちに、建物の奥の空気を察知したように、すっと、式台に上った。

自分で、勝手に、書院を通ると、座をきめた。

取次ぎの士とともに、年配の下屋敷用人が、玄関へ出て来て、

「おや？　姿が、見当らぬではないか」

と、眉宇をひそめた。

とたんに、書院から、
「これに、在る」
大声が、あがった。
用人は、急いで、書院に入ると、険しい視線を、青年にあてた。
「お手前様が、ここにおいでなされるのは、当家の迷惑に相成ります」
「余計者は、姿をかくしていろ、というわけか」
青年は、笑った。
「そうはいかなくなったので、やって来たのだ」
「何卒、おひきとりの程を――」
「多喜殿に、会いたい」
「多喜様は、ただいま、風邪で、臥牀中でござる」
「では、こちらから、見舞いに参上する」
青年は、立って、廊下に出た。
廊下の曲り角には、用人の指令によって、数人の士が、行手をふさいでいた。
むりに通れば、刀を抜くという気色を示していた。
青年は、無腰であった。

「お主ら、勘ちがいをして居るのではないか。わたしは、いま世間をさわがせている噂を、これ以上、大きなものにせぬために、姿を現したのだ。……多喜殿に、会って、話さねばならぬのだ。あけてもらおう」
青年は、二歩ばかり進んだ。
気早な士が、
「敢えて通られるなら、斬りますぞ！」
と、叫んで、鯉口を切った。
「間抜けどもが！」
青年は、吐き出した。
その時、士らの後方に、中年の婦人が、現れた。
「会いましょう」
婦人は、静かな表情で、云った。
「多喜様、相成りませぬぞ！」
用人が、叫んだ。
「見のがしてくれるがよい」
婦人は、抑えた。

青年は、婦人のあとにしたがって、その部屋に入った。
多喜というこの婦人は、当主淡路守の生母であった。
しかし、生母としての地位は、与えられていなかった。
掛人扱いのくらしを、この下屋敷ですごして居り、淡路守とは、もう十年以上も、顔を合せていなかった。
多喜は、青年と対座すると、無表情で、
「ご用のおもむき、うかがいましょう。……うかがっても、わたくしには、詮ないことでありましょうが――」
と、促した。
青年の方には、表情があった。心の動揺をかくしきれぬ眼眸を、多喜の顔へ送って、しばらく、声を出さなかった。

その五

「この世のことは、ままならぬ、と申しますが、どうやら、木下家も、妙な事態をまねきました」

かなり長い沈黙を置いてから、青年は、口を切った。
「……？」
木下淡路守利政の生母多喜は、黙って、青年の顔を、見まもっている。
「誰の罪でもなく、これは、いわば、おろかな迷信が生んだ結果といえます」
「……」
「それにしても、当主の登城駕籠の中に、首なし死体があったのは、まずかった。誰人の仕業か知らぬが、当主を怨んで、世間をさわがせ、木下家を窮地に追い込もうとのこんたんに相違ありません。……そう思われぬか？」
「思います」
多喜は、うなずいた。
「貴女に、お心あたりあれば、おもらし下さらぬか！」
「心あたりなど、ありませぬが……」
「しかし、下手人は、家中の誰人かに相違なく、それも、永い間、お脇づかえしていた者のように思われます。貴女は、先代に、十数年つかえて居られたのだから、見当ぐらい、つくのではありますまいか？」
「わかりませぬ」

多喜は、かぶりを振った。

多喜の態度は、あくまで、よそよそしいものであった。

青年は、話題を転じた。

「ところで、当主は、昨年中、この下屋敷に、幾度か、立ち寄られた模様ですな？」

「……」

「あまり長い時間ではないが、暫時の休憩をされて行った。……先代は、この下屋敷には、一度も立ち寄られぬしきたりであったが、当主は、そのしきたりを、破って居る。なぜですか？　貴女なら、ご存じのはずです」

「べつに――」

「おかくしなさらぬことです。……それがしの推量を申し上げてもよいのです。当主は、貴女に、金子をせびりに立ち寄ったのではありませんか？」

「……」

「当主は、貴女が、かなり多額のたくわえがあることを知って、それをせびりに立ち寄った――そうですな！」

「……」

多喜は、口を閉ざして、こたえなかった。

青年は、つづけた。

「貴女ほどの聡明なご婦人でも、つい、わが子可愛さに、おろかな振舞いをなさる。これも人情と申すものでありましょうが、金子をお与えになったのは、まずかった。……それがしも、不覚であったが、当主は、性情に、いやしいものがある。そのいやしさが、次第に、増して来た。いや、いやしさ、という批判は、酷にすぎる。人間の弱さ、と云いなおしてもよい。その弱さが、いやしいあらわれかたをして来た、と申せるのです。このままでは、そのいやしいあらわれかたが、ますます、度を過ぎて、ついには、公儀の咎めを受けるおそれなしとせぬ」

「……」

「それがしは、そのことを、心配して、貴女に、お心あたりがあれば、と思って、参上したのです。当主の性情の弱さを、巧みにつついて、いやしいあらわれかたをするように仕向けている者が、家中の中にいる――そのことです」

「……」

多喜の口は、あくまで、かたく閉じられて、ついに開くけはいもないようであった。

青年は、若いだけに、苛立ちの表情を示した。

「どうしても、お心あたりを、お教え頂けませんか！」
「……」
「冷たいおひとだ！」
青年は、吐き出した。
多喜の表情が、はじめて動いた。
「隼人殿――」
青年の本名を呼んでから、
「わたくしは、十六歳で、お家にご奉公してから、今までの二十余年間、おのが意志を、口にすることを許されませんでした。そのために、いつの間にか、どのような事柄に対しても、意見を述べぬ女子になって参りました。……木下家のことは、当主ご自身が、自覚されて、治めるべきであろうと存じます。わたくしのような立場の女子は、ただ、黙って、遠くから眺めているよりほかはありませぬ」
と、云った。
「しかし、貴女は、当主に、金子をせびられると、お与えになっています」
「当主にさからうことは、許されませぬ」
多喜は、きっぱりとこたえた。

「では、その金子によって、当主が、いよいよ、いやしい振舞いをしても、それは、自分のかかわり知らぬことだ、と云われますか？」
「いたしかたのない仕儀かと存じます」
多喜と隼人という青年の問答は、ついに、融け合わず、また、嚙み合いもせずに、終った。
青年は、木下家下屋敷を出た。
「一番わるかったのは、このわしであったのかも知れぬ」
青年は、歩き出し乍ら、そう呟いた。
しばらく、行ってから、青年は、われにかえったように、立ち停って、うしろを振りかえった。
尾行者はいないか、とたしかめた。
べつに怪しい人影は、見当らなかった。
青年は、急ぎ足になった。
青年の帰って行ったのは、千駄木町であった。
根津権現の裏手にあたるそのあたりは、小笠原左京大夫の抱屋敷にならんで、かな

り立派な構えの家がならんでいた。

あけぼのの里といわれるこの閑静な一廓には、若年寄とか大目付とか、幕府の要職に就いていた人の隠居所が、集っていたのである。

青年の家は、その中に、在った。

目立たぬが、よく眺めると、門扉の乳鋲ひとつまでが、こっているのであった。

青年は、潜り戸から入って、玄関へ歩いた。

植込みも、ほどよく吟味され、青年の肩にふれる枝葉も、手入れがゆきとどいて、かたちが美しかった。

玄関に立って、

「只今、戻った」

呼ぶと、すぐに、年配の用人が、迎えに出て来た。

「お戻りなされませ」

家の中に、女気がなく、用人が、青年の居間について来て、

「湯が沸いて居ります」

と、告げて、着換えを待った。

「今朝、町の湯屋に入って来た」

「はあ――」

「喜兵衛、お前は、わしが、街中を出歩くことを好まぬようだな？」

「相成るべくは、お一人にて、諸処をおひろいなさるのは、ご遠慮なされた方が、と存じまする」

「ははは……、わしは、二十一歳だぞ。血気に満ちた若者が、家の中に、とじこもって居られようか」

「お気持は、よくわかりまするが、無腰着流しで、お出かけなさるのは、如何なものでございましょう」

「わしは、大小を腰にするのを、好まぬ。袴も、窮屈だ。ざわざわという音が、耳ざわりだ。……町人のいでたちが、いちばん、気楽だな。やれ裃だ、それ素襖だ、と武士の衣服ぐらい面倒なものはないな。尤も、わしのような立場の者には、すべて、それは、にせの貸衣装でしかないが……」

「若様！」

喜兵衛は、一瞬、にがにがしげに、青年を睨んだ。

「いや、わかって居る」

青年は、喜兵衛が口にするであろう言葉を察知して、手をふると、

「下屋敷へ行って、多喜殿に、会って来た」
と、告げた。
「ほう、それは……」
「相変らず、冷たいおひとであった。なにやら、弁解めいたことを、口にされていたが、生れつき冷たいおひとなのかも知れぬな」
「お会いなされたのは、なにか、用向きがあってのことで――？」
「うむ。登城駕籠に、首なし死体を入れた下手人の心あたりはないか、とたずねてみた」
「お教えなさいましたか？」
「知らぬ存ぜぬの一点ばりであったな」
「お会いにならねばよかったのでござる。貴方様にとって、多喜殿は、遠いご婦人でございます」
「遠いご婦人か。……そうか。そうであったな」
青年は、ごろりと仰臥して、後頭で手を組み、足を火鉢の縁にのせた。
「ままならぬ世だ。……全く、ままならぬ世だ」
「若様。……貴方様は、すね人になろうとして、おいでございますか？」

喜兵衛は、語気強く、云った。
「もし、そうであれば、それは、とんでもないお心得ちがいと申すもの」
「べつに、世をすねては居らぬよ。ただ、世間の妙なしくみに、ふりまわされるのが、いやになって来ただけだ」
「ふりまわされては、居られませぬ」
「もうよい。下ってくれ」
喜兵衛は、鄭重に、頭を下げて、居間を出て行った。

その夜――そろそろ二更（午后十時）をまわろうとした頃合であったろうか。
几に向って、書物を披いていた青年は、突如、障子を破って飛来した一矢に、あやうく、頸根を貫かれるところであった。
居間の外は、濡縁になっていて、雨戸がなく、小庭があった。
弦音をきいて、反射的に、首をねじったおかげで、辛じて、生命を奪われるのから、まぬがれた。
青年は、用人の喜兵衛を、わざと呼ばずに、すっと立って、障子を、ほそめに開いた。

瞬間——。

濡縁の蔭から、黒影が、躍り上って来た。

白刃を摑んだ右手を、胴に巻きつけるようにして、躍りあがりざま、きえーっ、とひと薙ぎを送りつけて来た。

青年は、とび退った。

素手で闘い得る敵ではなかったが、床の間の刀架までは、距離があった。

曲者は、青年に刀を把らせるいとまを与えぬ、凄じい勢いの攻撃を、あびせて来た。

その一撃一撃を、ほとんど紙一重で、まぬがれつつ、青年は、あるいは、身を沈め、あるいは、脇へ跳んだ。

屋敷には、用人の喜兵衛のほかに、屈強の奉公人が二人いたが、青年は、わざと呼ばなかった。

身を危機にさらされたことに、青年は、一種の快味をおぼえていた。

——斬られはせぬ！

その自信もあった。

道場修業は、充分に積んでいたのである。

生れてはじめて、白刃の襲撃に遭って、青年は、その刺戟に、血汐を燃えたたせた、といえる。

しかし、その自信は、過信であり、素手で闘うことの無謀さを、青年は、間もなく、思い知らされた。

壁ぎわに追い詰められて、覆面の刺客が、じりじりと上段にふりかぶるや、はじめて、青年は、恐怖をおぼえた。

その一太刀を、のがれるすべはないようであった。

と——瞬間。

「刺客殿、そこまで！」

小庭から、声が、かかった。

刺客が、はねとんで、向きなおるのと、濡縁へ、その声の持主が、立つのが、同時であった。

大和川喜八郎であった。

喜八郎は、十手でやり合える敵ではないと看てとって、差料の鞘をはらうと、峰をかえした。

青眼につけ乍ら、

「危難に遭うのは、この町方ではなく、貴方の方でしたな」
と、青年に云いかける余裕をみせた。
刺客は、青年に第一撃を送った時の構えをとった。
右脚を胴に巻きつけるようにして、白刃をうしろにかくし、猫背になって、じりじりと肉薄した。
喜八郎は、それに対して、右まわりに、位置を移した。
位置が、完全にかわった。
その刹那(せつな)——。
刺客は、薙ぎの一撃をあびせるとみせて、その白刃を、手裏剣にして、喜八郎へ投げつけた。
ぱあん、と払いあげた時には、刺客の迅影は、大きく庭へ跳んでいた。
追っても、つかまえられる曲者ではないようであった。
喜八郎は、しずかに、障子を閉めておいて、
「無断参上の失礼をおゆるし下さい」
と、詫びておいて、端座した。
「お主に、危いところを救われて、礼を云うことになったが、……お主に、この屋敷

を訪問されたのは、いささか迷惑だと云わねばならぬ」
青年は、云った。
「ご迷惑を、重々承知の上で、お伺いしたのです。……どうやら、黒白をはっきりしなければならぬ時が、参ったようです。……貴方の正直なご返辞をお願い申します」
「……」
「まずこちらからの報告をいたしましょう。首なし死体が、何者か、判明いたしました。木下家出入りの医師瀬戸竹庵という御仁でした」
「瀬戸竹庵！」
青年は、大きく目を見はった。

その六

長い沈黙があった。
このまま、この沈黙がつづけば、喜八郎は、むなしく、ひきあげる結果をまねきそうであった。
喜八郎は、沈黙を破って、自分の推理を述べることにした。

「藩医瀬戸竹庵を、鳶の者にしたてて、首なし死体にした下手人が、何者で、その理由が、何であったか——そのことは、こちらがわかって居ることを申し上げているうちに、見当がついて来るはずです。……大名の年賀の登城は、辰刻（八時）でありますが、失礼乍ら、二万五千石、城なし大名の木下淡路守様は、順番到着のしきたりによって、大手御門を、卯下刻（七時）にはくぐって居られなければなりません。ということは、大久保の上屋敷を、夜明け前後に、すでに、出発されていなければならぬ。表玄関で、淡路守様が、登城駕籠に乗られた時、ごく近くにいる家臣の目にも、そのお顔が、はっきりと見さだめがたいほど、あたりが、うす暗かった。……替玉であっても、家臣たちは気がつかなかった。替玉は、駕籠に乗るとみせかけて、乗らなかった。すでに、その時、駕籠の中には、首なし死体がのせてあったからです。淡路守様は、行列が、出発した時、居室で、ねむり薬をのまされて、こんこんとねむりこけて居られた。……およそ、そんなところであったろうと存じます」

「……」

「では、どうして、そんな人騒がせな珍事を、故意にひき起したのか？　……考えられるのは、木下家に意趣を抱いて、改易の不幸に遭わせてやろう、と計っての一手段であったこと。あるいは、ご当主を脅かして、次は貴方ご自身の番だ、という予告の

仕業であったこと。さらにまた、考えられるのは、この珍事をきっかけにして、家中一統を騒がせて、なにかの大きな改革を企てていること。……この三つのうちのいずれかと存じます。こう申し上げれば、貴方には、どうやら、見当がついて来たのでありますまいか」

「……」

「貴方は、わたしに向っては、松本竜太郎という、きわめてありふれた仮名をお使いになりましたが、ご本名は木下隼人といわれますな。そして、今日、今川小路の木下家下屋敷をおたずねになった。貴方が、自由に、下屋敷に入ることがおできになるのは、それが許されるご身分だからだ、と察知されます。……木下隼人と名のる貴方は、もしかすれば、淡路守様と最も近い関係にある御仁ではあるまいか。実は、木下家騒動の原因は、貴方という存在にあるのではあるまいか。貴方ご自身は、その意志はなくとも、周囲の者が、貴方をかしらに据えようとして、騒動を起しているのではあるまいか」

喜八郎は、たたみかけて、述べた。

隼人の顔面は、しだいに蒼ざめていた。

「おことわりしておきますが、わたしは、たかが、隠密廻りの町方にすぎません。お

大名の家で何事が起ろうが、首を突っ込むことなど、許されて居らず、また、こちらも、出過ぎたまねはしたくありません。貴方の前に坐っているのは、八丁堀の町方としてではなく、正月元旦に、徹宵して、将棋をさした知己であるとご承知置きねがいたいのです。したがって、貴方が、どんな秘事を、口にされようが、わたしは、胸におさめて、他人にもらすようなことはありません。これは、誓ってお約束できることです」

「……」

「このたびの木下家騒動は、どうやら、貴方のお力で、解決されなければならないのでないか、と存じ、一人の知己として、わたしは、参上いたしました。敵となった家中一部の人たちは、貴方の一命を奪おうとして、刺客を送って来て居ります。貴方は、猶予しては居られぬことです」

「……」

隼人は、腕組みして、畳の一点へ、視線を落し、身じろぎもせぬ。

「この町方でよろしければ、個人として、いささか、お役に立ちたいと存じて居るのです」

喜八郎は、云うべきことを云うと、返辞を待った。

隼人は、ようやく、畳から視線をあげて、喜八郎へ移した。

「忝じけない」

頭を下げてから、

「このたびの騒動の原因は、たしかに、この隼人にある」

と、云った。

こんどは、喜八郎が、黙って、聴く番であった。

隼人は、まず意外な事実を、喜八郎に告げた。

当主淡路守と自分は、双生児である——その秘密であった。

双生児というのは、忌みきらわれた時代であった。

この生誕は、厳重にかくされて、あとから生れた隼人は、この千駄木町の家で、日蔭者として、育てられた。

隼人が、実父と対面したのは、元服した時であった。その時から、隼人の存在は、家中では、公然の秘密となった。

隼人は、年に一度か二度、そっと、上屋敷をおとずれて、実父淡路守利長と、一刻あまりの対談を、許された。利長は、隼人の器量が、嫡子利政よりはるかに上である

ことを、みとめたのである。

嫡子利政は、少年の頃は、利発であったが、十六歳の夏に、熱病をわずらって以来、思考が分裂する症状を示し、挙動に面妖な一面があらわれるようになっていたのである。

実父利長は、三年前、宿痾の心臓病が悪化して、もはやたすからぬ、とさとると、隼人を呼び、

「いざという際には、そちが、利政とすり代って、公の事を、つとめてくれぬか？」

と、たのんだのであった。

隼人は、やむなく、承諾した。

利長が逝き、利政が淡路守となって、木下家を継いだが、その時から、隼人が、身代りをつとめるようになった。

大名の公の生活は、きわめて面倒な儀礼を守らねばならなかった。

柳間詰の外様の小大名である木下淡路守は、さいわいに、目立たぬ存在で、智能を使わなければならぬ役など、幕閣から命じられるようなことはなかったが、それでも、江戸城内では、さまざまの作法にしばられ、落度は許されなかった。

熱病によって思考の分裂をきたした利政は、大きな行事の日など、なにかあやまちを犯すおそれがあった。そこで、そういう日は、隼人が、身代りになったのである。

しかし——。

このような奇妙な身代り状態を、つづけることはいかぬ、と隼人が、さとったのは、去年の春であった。

隼人が身代りとなって、登城しているあいだに、利政の方は、千駄木町の隼人の家へ、こっそりとやって来ていたのであるが、いつの間にか、遊興の味をおぼえた模様であった。

隼人は、用人の喜兵衛に、利政がやって来ても、決して、外へ遊びに出してはならぬ、と命じておいたが、窮屈な大名ぐらしから解放された利政が、こっそりと、出歩くのを、喜兵衛は、とどめかねたらしい。

利政は、それまでは、私意を通すようなことはなく、周囲の者の指図通りに、おとなしく振舞うのが、唯一の取柄であったが、隼人の家へ来るようになってから、しだいに、ねむっていた性情を目ざめさせて、わがままな態度を示すようになったのである。

市井に出て、さまざまの風俗を眺め、吉原の廓とか、深川の料亭などにあがったりしているうちに、

「こうなされませ。ああなされませ」

と指図されて、その通りに、木偶のようにおとなしく動くのに、いや気がさして来たのである。

そこで、隼人は、去年十月に、利政に会うと、きっぱりと、身代り御免を申し入れたのであった。

「それは、困る。わしには、公事はつとまらぬ。どうか、これまで通りに、代って欲しい」

利政は、頭を下げて、たのんだが、隼人の態度は厳しかった。

「これからは、貴方がすべてをつとめられ、木下家の家門をはずかしめないように、振舞われることです」

そして、隼人は、木下家上屋敷へ、二度と足を踏み入れることはない、と宣言したのであった。

隼人が、からだに、朱桜の刺青をしたのは、その直後であった。

こうしておけば、面貌は瓜二つでも、別人であることが、明白となり、利政の方も、あきらめてくれるであろう、と考えたのである。

この正月二日、異変が起るまで、隼人は、木下家とは全く無縁のくらしを送って来たのであった。

そして、このまま、日蔭者ののんびりした生涯がすごせる、と思っていたのだが……。

喜八郎は、隼人の告白を、終始黙って、きき取った。

隼人が、語り了った時、喜八郎は、口をひらいた。

「貴方は、ひとつだけ、見落されていたことがあるようですな」

「見落しているとは？」

「左様――。淡路守様が、上屋敷から解放されて、この家へ来られてから、遊興をおぼえられた、と申されましたが、どなたか――近習が、お供をされて居りましたか？」

「いや、小姓が一人だけついて来て、万端の世話は、この家の用人の喜兵衛がいたした」

「そのことです」

「……？」

「用人は、貴方の家来です。主人は、貴方です。淡路守様は、主君ではない」

「……」

「貴方は、用人に対して、淡路守様を外出させるな、と厳重に命じておかれた由ですが……、淡路守様が勝手に出て行かれて、喜兵衛は、とどめようがなかった、と――」

「たしかに、その通りであったが……」

「そこに見落しがあったようです。淡路守様をすすめて、外出させ、遊興の味をおぼえさせたのは、実は、用人喜兵衛であった――と考えられませんか？」

喜八郎に、云われて、隼人は、眉宇をひそめた。

喜八郎は、つづけた。

「用人喜兵衛とすれば、貴方と淡路守様を比べると、まるで月とすっぽん、比べもならぬ差がある。器量の秀れた者の方が日蔭の身にあまんじ、頭脳の弱い者の方が大名家を継いでいる。その不都合が、腹立たしい。わが主人を、いつまでも替玉にしておかずに、まことの藩主としたい。その気持を抱いたとしても、これは、すこしも、ふしぎではありますまい」

「……」

「主人の貴方には、内密にして、この企てを成しとげるために、家中に味方をつくって、準備をおしすすめていた、と想像して頂きましょうか」

「……」

「淡路守様の性情を一変させるように、大いにつとめて、家中の失望を買わせておき、いよいよ、騒動の第一段階として、登城駕籠に、首なし死体をのせておく。つまり、後日になって、当主が狂って、藩医を殺して、その残忍な行為をやった、と家中一統にうなずかせる。……やはり、日蔭者の隼人様の方がよい、という家中の輿論にするためのしわざであった」

「……」

「貴方は、そう思いたくない、としきりに心中では、うち消そうとしておいでですが、どうやら、この推測は、正しいのではありますまいか。思いあたるふしが、おありのはずです」

隼人は、こたえるかわりに、立ち上ると、廊下へ出た。

喜八郎は、待った。

――たぶん、用人は、もうこの家には、居るまい。

その通りであった。

隼人は、戻って来ると、

「喜兵衛は、出て行った」

と、告げた。

「上屋敷へ、おもむいたものと思われますな」

「何の目的で？」

「ご当主を、殺害する目的でしょう」

喜八郎は、平然として、予告した。

「それは、ならぬ！」

隼人は、血相を変えて、叫んだ。

「やむを得ますまい。用人は、われわれの話をぬすみぎきして、もはやこれまで、と覚悟をきめて、出て行ったのです。ご当主を殺せば、わが主人が、その座に就かざるを得ぬ。わが身をすてても、やりとげなければならぬ、と決死の覚悟をきめて、上屋敷へおもむいたのですな」

「そうはさせぬ！」

隼人は、立ち上った。すると、喜八郎が、語気鋭く、

「おちつかれることです。はれものは、膿を出さねば、癒りません。……上屋敷には、淡路守様が頭脳の弱いのを、よいことにして、私腹をこやしている重臣が一人や二人、いるはずです。この連中が、用人に、むざと、ご当主を殺させるはずもない」

「では、喜兵衛の方が、なぶり殺しに遭う！」

「用人の方も、上屋敷に、味方を持って居るのです。……双方をたたかわせるのが、膿を出すことになります。そうではありませんか？」

喜八郎は、冷たく微笑して、隼人を見据えた。

隼人は、大きく肩を喘がせた。

その七

木下淡路守利政は、こめかみをびくびく痙攣させていた。

淡路守の前には、江戸家老真杉仙左衛門が、端座していた。

その態度は、きわめて威圧的であった。

淡路守が、いかに苛立とうが、一切かまわず、云うべきことを云ってのけて、反省をうながす——その態度を、つづけていたのである。

「も、もう、よい。わかった。……わしが、隼人とすり代らねばよいのであろう。わかって居る」

「おわかりになって居られるならば、もとのお殿様におもどり下さいますよう——。木下家二百年のしきたりを、かるがるしく破ったり、五十に手のとどく老女を手ごめになされたり……そのような、あさましいお振舞いを、お止しあそばさねばなりませぬ」

「わかった！　つまり、わしに、元の木偶にもどれ、というわけだな。わかって居る」

「そのご様子では、一向に、ご得心ではないようにお見受けつかまつります。……向後、いささかでも、木下家のしきたりをお破りになる時は、くりかえし、このような、にがい諫言をいたさねばなりませぬ」

ようやく、真杉仙左衛門は、一礼して、座を立とうとした。

淡路守は、ちょっと、ためらっていたが、

「待て——」

と、呼びとめた。

「隼人は、どうするのじゃ？」

「どうする、とは？」

「隼人を、これまで通り、千駄木町に日蔭住いさせておくのか？　それとも……その方らの肚は、隼人を亡き者にすることに、きめて居るのではないのか！」

「もはや、殿ご自身とは、関りなきことにございます」

「いや、待て！　隼人は、わしの実弟じゃ。暗殺する、などという卑劣の手段は、許さぬぞ！」

「お言葉、うけたまわっておきます」

真杉仙左衛門は、出て行った。

淡路守は、大きく吐息した。

淡路守は、去年十月、隼人から、身代り御免を申し入れられて以来、市井を遊びまわる自由を封じられていた。

そのために、苛立って、老女を犯したりしていたのである。

——もう、わしには、あのひそかな愉しみは、許されぬのか！

淡路守は、江戸家老はじめ忠臣面をした重臣らが、憎かった。

「殿——」

不意に、次の間から、忍び声で呼ぶ者があった。

「誰だ？」

「喜兵衛でございまする」

「おお！　よう参った。これへ――」
千駄木町の隼人宅の用人は、襖を開けて、平伏した。
「どういたしたぞ、隼人は？」
喜兵衛は、するすると、膝行して来ると、
「主人は、江戸家老殿より、おん身と代ることを禁じられ、やむなく、千駄木町にて、蟄居いたして居りまする」
「すると、身代り辞退は、隼人の意志ではなかった、と申すのか？」
「はい。左様でございまする。……しかし、主人は、お殿様のお気持を汲みとり、よろしければ、江戸家老殿に内緒で、こっそり、身代りをつかまつる、とおつたえして参れ、と手前を、お遣しになりました」
「そうか。うれしいぞ。……わしの方は、一月でも三月でも、いや半年でも、身代りになってもろうて、すこしもさしつかえはないのじゃ」
「はい――」
「よし！　では、今宵にも――」
「いや、今宵はなりませぬ。おん身と代るには、主人の方より参上つかまつる由にございます」

「いつじゃ？　明日か？　明後日か？」
淡路守は、気ぜわしく、首を突き出した。
「数日うちに――」
喜兵衛は、こたえた。
「数日うちではおそい。はっきりと、明日か明後日ときめてくれ」
「では、明後日に――」
「よし！　わしは、場合によっては、半年が一年でも、この上屋敷には、戻らぬぞ」
「まずは、お気をしずめられませ。……千駄木町にて、お召し上りあそばしていた寐酒、少々持参つかまつりましたゆえ……」
喜兵衛は、そう云って、懐中にかくしていた瓢箪を、とり出して、淡路守にさし出した。
「うむ。よいものを持参してくれた」
淡路守は、受けとると、栓を抜いた。
隼人宅で与えられていた寐酒は、まことに美味だったのである。
瓢箪を、口にはこぼうとした――そのとたん、廊下と仕切る障子戸が、さっと開か

れた。

「殿！　それは、毒酒でありますぞ！」

鋭く云いはなったのは、先程出て行った江戸家老真杉仙左衛門であった。

そのうしろには、数人の屈強な若ざむらいが、従いていた。

「殿！　まだ、目が覚められませぬか！　登城駕籠に、首なし死体をのせた下手人は、こやつでありますぞ」

仙左衛門は、淡路守の手から、瓢箪を奪いとると、ゆっくりと、喜兵衛の前に、近づいた。

「喜兵衛、観念せい！　罪状ことごとく明白になって居るのだぞ。家中のうちで、その方の一味となった者も、すべて、調べ済みだ。……さあ、おのれが仕込んだ、このひさごの毒酒を、飲め！」

突きつけられて、喜兵衛は、じっと、江戸家老を、睨み上げた。

「おのれは、おのが主人を、永久に、木下家の主の座に就けようと、たくらんだのであろうが、あさはかであったのう。……この真杉仙左衛門の目の黒いうちは、そのような陰謀は、許さぬ。……今頃は、討手が、千駄木町に向って居る。その方は、主人の供をして、三途の川を越えるのだ」

腕におぼえのない喜兵衛であったが、突きつけられて、瓢箪の毒酒を観念して仰ぐには、あまりにも、心中に煮えくりかえる無念があった。

いきなり――。

瓢箪を、江戸家老へたたきつけると、はね起きて、次の間に遁れようとした。

今宵、この上屋敷へ忍び入るにあたって、手びきしてくれた味方は、三人もいたのである。

家中でこちらの味方になった者が、どれだけいるか、調べ済みだ、というのは、真杉仙左衛門のでたらめと考えられた。実は、まだ見当もついていないのではないか。

喜兵衛は、脇差を抜いて、次の間へ遁れようとした。

必死に抵抗しているうちに、味方が助けてくれるような気がした。

「斬れ！」

仙左衛門が、宿直の面々に、下知した。

「えいっ！」

一人が、喜兵衛の背中へ、袈裟がけに、一撃をあびせた。

喜兵衛は、はじけとぶようにして、畳の上を一廻転してから、起つと、

「くそっ！」

と、脇差をふりかぶった。

それを、五本の白刃が、包囲した。

仙左衛門は、淡路守を睨みつけて、

「殿、おわかりでありましょう。隼人様は、この用人めを使って、殿を堕落させた挙句、乱心狂死に追い込もうと企てて居ったのでありますぞ」

「……」

淡路守は、喘いだ。

「寐所の方へ、お移りを――」

仙左衛門は、促した。

宿直の士二人が、淡路守につき添うた。

淡路守は、意志を喪失したていで、ふらふらと廊下を歩いた。

喜兵衛の方は、容易に討ちとられなかった。

突然――。

三人ばかり、下級の士が、馳せつけて来て、無言で抜刀すると、喜兵衛をかばったからである。

「おのれらっ！」

仙左衛門は、眦をつりあげて、呶鳴った。

「出会えっ！　謀叛人だぞ！　出会えっ！」

邸内は、騒然となった。

喜兵衛をかばう下級の士は、さらに四人増し、それに向って、数十人が、殺到した。

座敷で、廊下で、庭で、死闘が展開した。

真杉仙左衛門は、主君の寐所の前で、大身の槍をひっ携げで、仁王立っていた。

隼人の姿が、その前に立ったのは、ほどなくのことであった。

隼人は、薄ら笑って、

「わしに、刺客を送りつけて来たのは、お主だったのか」

と、云った。

「斯様の事態にたちいたった上からは、やむを得ぬ仕儀かと存ずる。お生命を頂戴つかまつる」

仙左衛門は、槍をぴたりと構えた。まだ四十前であったし、腕におぼえがあった。

隼人の方は、無腰であった。

その時、庭から、ひとつの黒影が、跳びあがって来て、隼人をかばった。

覆面をしていたが、着流し姿は、一瞥で、町方同心と知れた。
「うぬがっ！」
仙左衛門は、双眼をひき剝いた。
覆面の蔭の眸子が、ほそめられた。
「それがしが、木下隼人殿に味方をするのは、正月に、将棋対手をして下さった——その誼みと、ご承知おき頂きましょう。決して、お手前様が、忍び崩れの猿まわしを使って、それがしを盲目にしようと計ったのを、恨みとしている次第ではありません」
その言葉のおわらぬうちに、仙左衛門は、槍をくり出していた。
大和川喜八郎の抜きつけの一太刀は、文字通り目にもとまらなかった。
仙左衛門は、廊下を泳いで、かたわらの障子戸にぶっつかり、それを紅に染めて、がっくりと膝を折った。

江戸家老が斃れると、騒動は、自然におさまった。
双方合せて死者七人、負傷者十二人に及んだ。
死者のうちには、喜兵衛も含まれていた。

江戸家老真杉仙左衛門を、喜八郎が斬ったのは、当主淡路守を若隠居させて、日出木下家から、十六歳になったばかりの次男を養子相続させる計画を樹てていたことが、判明したからであった。
佐野主膳から、
「江戸家老を斬ってもよい」
と、許しを受けていたのである。
「おわりましたな」
喜八郎が、隼人に云った折であった。
不意に——。
当主の寝所から、悲鳴がつらぬいた。
隼人が、奔って、障子をひき開けた。
畳を血の海にして、淡路守が、俯伏していた。
そのかたわらに、意外にも、下屋敷にいる筈の多喜が、短剣をつかんで、立っていた。
「多喜殿っ！」
隼人は、驚愕の叫びをあげた。

多喜は、崩れるように、死体のかたわらに坐ると、頭を垂れた。
「こうするより、ほかに、すべは、ありませんでした」
「し、しかし……、貴女は、この御仁の、生みの母親ですぞ！」
「その母親の権利を、ただ一度、こうして使いました」
「……」
「明日よりは、貴方が、木下淡路守様です」
「……」
「お許しを！」
多喜は、隼人が止めるいとまを与えずに、短剣で、のどを刺し貫いた。
それを見とどけて、喜八郎は、庭へ降りた。
多喜が、おそらく、そうするであろうと、思い乍ら、黙って、目撃していたのである。

朝——。
喜八郎は、八丁堀へ戻って来ると、わが家に入る前に、柳の湯に寄った。
ひと風呂あびて、二階へ上ると、もう町内顔なじみの連中が、数人そこにいた。

「旦那——お早いことで。下手人でも追って、夜あかしをなさいましたんで？」
「いや、なにか手柄になるような事件は、起るまいか、と野良犬のように、ほっつき歩いてみただけだ。何事も起らなかったな」
喜八郎は、二階番頭がさし出す番茶を飲み、お市豆をかじった。
将棋好きの一人が、
「旦那、元旦にお対手をなすった若いおさむらいは、ありゃ、どこの何様でござんすかねえ。色男で、気品があって、将棋が強くて、しかも、朱桜の刺青をしていなすったとは、しゃれた御仁ですぜ。何様か、おわかりになりましたかい？」
「わからんな。正体不明の男だな」
「旦那の目なら、見当ぐらい、ついているのじゃござんせんかねえ」
「いや、あいにく、おれは、市井をうろつくのが役目で、さむらいの世界には、首を突っ込む必要がないので、そっちを見通す目をやしなって居らぬ。……ただ」
「へえ、ただ？」
「あのさむらいは、もしかしたら、どこかのお大名だったかも知れぬ」
「へえ、そいつは、おどろきだ」
「もしかしたら、の話だ。刺青をしている大名が一人ぐらいいてもいい、という気が

して居る」
「それァ面白うござんすねえ」
「ひとつだけ、はっきりと、予言できることがあるな」
「なんでげす？」
「あのさむらいは、二度とふたたび、この湯屋の二階へは、現れぬだろうということだ」

流人島

その一

ばさっ、ばさっ、とはねあがる波浪の音と、それに合せる船体の軋(きし)りの中で、その三十石船の船底には、七人の男の押し黙った静寂があった。

伊豆大島から、江戸へ還って来る御赦免船であった。

赦免になって、大島からはなれる時には、男たちのあいだには、はしゃいだ空気があった。

ところが——。

船が、安房(あわ)を右方に望み乍(なが)ら、城ケ島の沖をまわって、江戸湾内に入った頃あいから、船底には、重苦しい沈黙が占めるようになっていた。

呉服の大店(おおだな)の手代であった者、腕のいい差物師であった者、宮大工見習いであった者、深川の一流料亭の板前であった者、吉原の引手茶屋の番頭であった者、茶道の家元であった者——いずれも、前身は、至極まじめにくらしていたかたぎたちであった。

ただ一人、浪人者が加わっていたが、志村金吾というこの男も、まだ二十五、六

で、風貌も物腰も、悪事を犯した人間とは思われなかった。
それぞれが、それぞれのやむを得ざる事情で、罪を、犯して、捕えられ、流人となって、大島で三年から七年をすごして来ていた。赦免になったのは、当然のことと、納得できる七人といえた。
やくざは、一人もまじっていなかったのである。
それだけに——。
江戸へ還って、どのようなくらしをすればよいか、と思案しているうちに、不安で口が重くなったようである。
ひとたび入墨者になると、島で犯した罪をつぐなったとしても、世間は、決して、すぐに許して迎え入れてはくれないのであった。
あたたかいわが家が、待っていてくれれば、話が別だが、いずれも、その家を持っていないようであった。
帆が下げられる音をきいて、一人が、篷窓へ、のびあがって、
「御浜御殿の森が見える」
と、呟いた。
誰も、起とうとはしなかった。

志村金吾は、板壁に凭りかかって、目蓋を閉じていた。
「旦那——」
となりにうずくまっていた嘉助という男が、忍び声をかけて来た。嘉助は、板前としては、名の通った男であった。辰巳芸妓に惚れて、世帯を持つ寸前で、振られて、女を刺し殺したのであった。
「旦那は、江戸に、ねぐらがおありなさるので——？」
「いや、ない」
「どうなさるおつもりですかい？」
「さあ……？」
志村金吾は、目蓋をひらいて、うすぐらい宙へ、眼眸を置いた。
「どうするかな」
「全くあてがおありなさらぬので——？」
「ない」
嘉助は、志村金吾と、大島で、茅舎をとなりあわせて、二年余くらした。
金吾は、島民の子供たちに、手習いさせて、魚や穀物を礼として受けとっていたが、それだけでは飢えをしのぎかねた。嘉助が、漁師の手つだいをしたおかげで、金

吾の口も、うるおったのである。

嘉助は、なんとなく、志村金吾という若い浪人者に、好意を寄せたのであった。

金吾は、おのれからは、すすんで口をきこうとせぬ、孤独な青年であったが、嘉助は、その人柄から、立派な家に生れた武士のような気がしたのであった。

どんな罪を犯したのか、金吾は語ろうとしなかったし、嘉助もたずねようとしなかったが、

——この御仁は、本当は、なんの罪も犯していないのじゃなかろうか。

そんな気がして、ならなかったのである。

ともあれ、嘉助は、島では、金吾のために忠実な下男の役割をつとめて来たのであった。

「嘉助、お前は、江戸で身を寄せるあてはあるのか？」

金吾の方が、訊ねた。

「へえ……。あっしの弟分で、多吉という奴が、本郷の菊坂で、世帯を持って居りますので、一時、そこへ厄介になろうか、と思って居りますが——」

それよりも、旦那のおちつき場所を、考えてさしあげなくちゃ、と嘉助は、腕を組んだ。

この時代——。

遠島——すなわち、島流しは、死刑に次ぐ重罰であった。

遠島には、期限がなかった。死ぬまでの流刑と同じであった。

徳川期に入ってから、流人第一号は、宇喜多中納言秀家といわれている。

関ヶ原役で惨敗して、捕虜となった秀家は、八丈島へ流されたが、歌道をたしなんで戦国武将中随一のこの文化人も、島に於ける貧しいくらしに、大名の誇りも喪失して、

「わが生涯の思い出に、白飯を腹いっぱい、くらってみたい」

と、云いつづけて、それが叶わずに、逝った、という。

囚人が流される島は、きまっていた。

御定書百箇条に、

「江戸より流罪の者は、大島、八丈島、三宅島、新島、御蔵島、右七島の内へ遣す。京、大坂、西国、中国より流罪之分は、薩摩、五島の島々、隠岐国、壱岐国、天草郡へ遣す」

と、きめてあった。

罪の軽重によって、近い島、遠い島という区別はされてなかった。
期限なしで、島流しをされるが、しかし、赦免の希望はあった。
将軍家の代がわり、日光参詣、芝上野両廟所に於ける法要などの際、赦免の沙汰があった。
これは、上野東叡山寛永寺の輪王寺宮から、赦免すべき流人の名前を書いて、将軍家に呈上して、沙汰を受けるならわしになっていた。
島流しに遭うた囚人のくらしは、悲惨なものであった。
幕吏は、囚人を島へおろすと、さっさと帰ってしまった。
囚人は、自分で、小屋をつくり、野草木実を採って、露命をつながねばならなかった。
水呑み百姓とか、極貧の裏店育ちとか、無職の旅鴉とか、木樵とか漁師など、もともと虫のように生きて来た、血気のある男なら、すぐに馴れて、生きのびるが、江戸や京大坂の市中で、労働と無縁なくらしをして来た者や、老人病弱者は、忽ち餓死してしまう。
尤も、幕吏の方でも、その悲惨を知っているから、新大橋を解纜した囚人船を、船手組屋敷のある鉄砲洲で、三日間停泊させて、囚人たちを、肉親知己と会わせて、その差入れ物を許した。
庶民で金二分、揚り屋者は金一両、揚り座敷者は金二両ときめて、それを島へ持って行くことをみとめていた。しかし、実際には、それよりも多くの金を、囚人たちは、懐中にした。そのおかげで、どうやら、赦免までの歳月を生きのびることができたのである。

いま、江戸へ還ろうとする七人も、おそらく、余分の金子を持参したので、餓死から免かれたに相違ない。
「おい！　上へあがって来い」
声があって、七人は、起き上った。
船は、すでに永代橋をくぐって、深川の佐賀町寄りを、新大橋へ向って進んでいた。
流石に、短くて三年、長いのは七年ぶりに、江戸の町を眺める男たちは、隅田川に沿うた景色へ、食い入るように、視線を当てた。
なつかしさに、思わず泪ぐむ者もいた。
やがて——。
船は、新大橋の下に入って、灰会所わきの石垣に着けられた。

他に幾艘かの船が着いていて、揚げ荷、積み荷に、人夫が忙しげに立ち働いていたが、赦免船へ好奇の視線を投げる者は、河岸道にはいなかった。

七人の男たちは、すでに浦賀の船番所で検閲を受けていたので、役人に見送られて、上陸すれば、そのまま、どこへ行こうと自由であった。

志村金吾は、嘉助と肩をならべて、河岸道に立った。

四年ぶりに、江戸の土を踏んだのである。

——おれは、還って来た！　生きて、還って来た！

胸裡で、そう呟いてみた。

四年前、同じこの場所で、流人船に乗せられる時、生きて再び江戸の土を踏む希望を持たなかった志村金吾である。

悦びに、胸がおどっている——そんな気分ではなかった。

ただ、踏んでいる土の重さ厚さを、たしかめている自分を、金吾は、見出していた。

黄昏が来ていて、隅田川には、家の燈影が落ちていた。

——深川へ入ろうか、それとも新大橋を渡ろうか？

期せずして、金吾と嘉助は、迷って、顔を見合せた。

その時——。

「小父さん。嘉助の小父さん——」

そう呼ぶ者がいた。

嘉助が、頭をまわすと、石垣上に建つ常夜燈へ、油をさして、あかりを入れている少年が、梯子の上から、見下していた。

嘉助は、眉宇をひそめた。

とっさに、少年の顔を、思い出せなかった。

「おめえ、誰だったっけ？」

「おいらだよ。奥山のチビ切さ」

「あ！」

嘉助は、思い出した。

浅草界隈を縄張りにする掏摸は、幾組かにわかれて、その頭数は二百人以上といわれていた。

組に属せず、一匹野良犬と称ばれる巾着切も、二十人あまりいたが、その最年少に、チビ切という少年がいた。

その身ごなしの敏捷さと、天性の指さきの器用さは、二十年熟練の巾着切も、及ばぬくらいであった。

そのチビ切が、掏摸組の中でも一番組織の大きい黒元結組の連中に、縄張りをあらしたと、追いまわされているところを、嘉助が、かばってやったのがきっかけで、親しくなった。

それから、チビ切は、嘉助が板前をしている深川の料亭の台所へ、しばしば遊びに来て、嘉助の仕事ぶりを眺めるようになった。

「おいらも、板前になりてえな」

「そうよ。おめえの器用な指さきなら、江戸一番の板前になれるぜ」

嘉助は、本気で、チビ切を、弟子にして仕込む肚になった。

しかし、それは叶わなかった。

嘉助が、裏切った辰巳芸妓を、刺し殺してしまったからである。

「おめえ、あのチビ切か。……おどろいた。おめえは、もう立派な兄貴じゃねえか」

嘉助は、近づいて、しげしげと、チビ切の顔をのぞき込んだ。

チビ切は、笑い乍ら、

「おいらはもう、チビ切じゃねえや。壱太というんだ」

「へえ。おめえ、かたぎになったのか」

「かたぎもかたぎ、八丁堀の旦那が、おいらの親分さ」

「……」

「大和川喜八郎といったら、小父さん、思い出すだろう」

「う、うむ」

嘉助は、死罪になるところを、町方同心の大和川喜八郎の弁護によって、島流しにされたのであった。

「大和川の旦那が、おめえの親分か？」

「そうよ。小父さんが島流しになっちまったから、おいら、板前になるのをあきらめて、ちょっくら手裏剣の見せ物なんかやったあと、大和川家の居候になったのさ。……小父さん、やっと、ご赦免になったんだね？」

「ああ、おかげで、わずか五年で、江戸の土を踏むことができた」

「行先は、きまっているのかい？」

「おれは、いいんだが、この旦那のおちつき場所がねえんだ。……チビ切、じゃねえ、壱太、どこかねえかねえ？」

壱太は、ちょっと考えていたが、

「引き受けたぜ」
と、胸をたたいてみせた。
「有難え。じゃ、たのむぜ。……旦那、この壱太という兄貴が、案内してくれます」
嘉助は、自分と壱太の間柄を、手短かに語ってから、とりあえず、今夜のねぐらは、壱太にまかせるように、すすめた。
志村金吾は、黙って、うなずいた。
嘉助は、新大橋を渡ったところで、別れて行った。
金吾は、壱太を先に立てて歩き乍ら、
「お前は、大和川喜八郎という町方同心の居候になっているといったが……」
「はい、そうです」
「その家へ、わしを、つれて行ってくれぬか？」
「旦那は、うちのあるじをご存じなんですか？」
「うむ」
「旦那も、御赦免船で、帰っておいでになったのでしょう？」
「うむ――」
「うちのあるじにつかまったのですか？　それで、仇討をしてやろうというのなら、

案内するのは、まっぴらだ」
「そうではない。……大和川喜八郎とわしは、幼馴染なのだ」
「なんだ、そうか。そいじゃ、うちのあるじは、大よろこびだ」
「いや、必ずしも、そうとは限るまい」
「どうしてです？」
「会えば、わかる」
金吾は、冷たい語気で、云いすてた。

その二

壱太が、家へ戻って来た時、喜八郎は、四十雀に、芸を仕込んでいた。
洟紙を小さく切ってならべ、すぐわきに米を山盛りにした一合升を置き、喜八郎が口笛を吹く。
すると、四十雀は、米を一粒くわえて、洟紙の上へのせ、くちばしで、器用に包んで、それを、神棚にはこんで行く。
神棚には、もう六包みばかり、供えられてあった。

小さな八太と九太が、片隅に竝んで、立膝にあごをのせて、見物していた。

「旦那様――」

壱太は、四十雀が十包みめを神棚にはこび了えるのを待って、呼んだ。

「志村金吾、という浪人者をご存じですか？」

「志村金吾？　……ああ、四年前に、島流しになった男だ。そろそろ、赦免になる頃だな」

「今日、御赦免船で、帰って来ました」

「そうか。帰って来たのか」

喜八郎は、その俤を思い泛べた。

志村金吾に縄目をかけたのは、喜八郎であった。

四年前の春の宵、旗本大番組倉本播磨家の用人見習い村井茂助が、柳原堤で、斬殺された事件が、起った。

目撃者がいて、下手人は、若い浪人者であった、と判った。

喜八郎は、その宵、偶然、目撃者が駆け込んだ両国橋ぎわの番屋に居合せて、すぐに、現場に急行した。

死体を調べ、頸根から袈裟がけの一太刀で事切れていること、茂助の両掌に土がついていることなどから、推測して、

――これは、物盗りの仕業ではない。

と、判断した。

村井茂助は、対手に向って、土下座して頭を下げたのであるが、許されずに、斬られてしまったのである。

茂助の懐中からは、財布がなくなっていたが、これは、辻斬り強盗とみせかけた、と考えられた。

喜八郎が、倉本播磨家の内情を調べあげるのに、さほどの日数は必要ではなかった。

当主播磨は、七年あまり、中風で臥牀していた。千世という一人娘がいて、二十一歳であったが、最近になって、ようやく、聟えらびがきまりかけていた。

当主が、全身不随の身になっているのであるから、当然、一人娘には、はやばやと聟が迎えられているべきであった。

それが、おくれているのは、外に実子がいたからである。

千世よりも三歳上の青年であった。播磨が、行儀見習いの女中を、手ごめにして、孕ませ、水戸の実家へもどして産ませた子であった。

女中の実家は、郷士であった。

播磨は、生れたのが男児ならば、引き取る、という条件をつけていた。しかし、子の母親は、手ばなすことをがえんぜず、実家から脱走して、江戸市中に身をかくした。

母子は、十年余も、裏店を転々としつつ、倉本家にも水戸の実家にも、消息を知られなかった。

ふとしたことから、母子の素姓が、倉本家に報され、一日、播磨は、その子を屋敷に呼んで対面した。

利発そうな顔立ちを視て、播磨は、すぐにも引き取ろうとしたが、それを拒絶したのは、当の少年自身であった。

すでに、正室を喪い、健康を害していた播磨は、側妾をえらんで、後継ぎをもうけることも叶わなくなっていたので、是非とも、少年を、屋敷に住まわせて、嗣子にしたかった。

少年は、しかし、かたくなに拒絶しつづけ、隙をうかがって、屋敷から脱走してしまった。

母親の許にかえった少年は、その裏店をひきはらって、さらに、幾年か、消息を断った。

それが、志村金吾であった。

村井茂助を斬った下手人の風貌が、志村金吾のそれと一致したので、喜八郎は、岡っ引を数人、八方へ走らせて、その住居をつきとめた。

志村金吾は、わるびれずに、縛についた。

しかし、白洲に於ては、辻斬り強盗を働いた、と云い張って、かくされた実情を、口にしようとしなかった。

倉本播磨の屋敷内では、金吾が牢に入れられて数日後、悲劇が起った。

千世が、自害して果てたのである。

喜八郎は、千世附きの女中を、屋敷の外へつれ出して、巧みな誘導訊問で、千世が懐妊していたことを、きき出した。

――村井茂助の子を孕んでいたのだ。

喜八郎は、判断した。

村井茂助が、女たらしであることは、すでに調べずみであった。茂助は、どんな女子も、ふらふらと惹き寄せてしまう妙な魅力をそなえた男であった。茂助にすてられ

乍ら、殆どの女は、恨んでいなかった。すてられて三年も経ってい乍ら、なお、茂助を忘れかねている女もいた。

女子にみつがせて、博奕につぎ込んでしまう、最もたちのわるい男であった。

賭場の借金がかさんだ時、茂助は、居直って、

「わしは、近ぢか、倉本家の聟になるのだ」

と、高言した、という。

まわりがあざけると、茂助は、にやにやして、

「あるじの娘に惚れられた身だぜ。そのあるじは、長年の中風で、頭が呆けている、と来れば、あとは、こっちの才覚次第というものではないか」

と、うそぶいてみせた。

——その放言が、志村金吾の耳に入ったに相違ない。

喜八郎は、内与力に、その旨を報告して、寛大の措置を願った。

しかし、金吾は、あくまで、対手が村井茂助と知らずに辻斬り強盗を働いた、と云い張りつづけたのであった。

遠島、という重罪は、いわば、金吾自身が、招いたようなものであった。

倉本播磨は、金吾が大島へ流されてからほどなく、逝き、倉本家は滅んだ。

いま——。

喜八郎は、志村金吾が、赦免になって江戸へ帰って来た、ときいて、あらためて、

——あの折、なぜ、志村金吾は、妹をだました村井茂助を、憎んで、斬りすてた、と供述しなかったのであろう？

と、思いやらずにいられなかった。

——志村金吾は、実父を憎んでいたに相違ない。これは、明白だ。あるいは、倉本家が滅び去るのを、のぞんでいたのかも知れぬ。

——そうだ。志村金吾は、村井茂助が妹をたらし込んでいる、ときいて、ひそかに、妹に逢ったのだ。逢って、本当に、茂助に惚れているばかりか、懐妊している事実までも、知った。そこで、茂助を、斬りすてた。茂助を斬りすてれば、千世が、自害する。そこまで、考え及んだのではあるまいか。志村金吾は、妹に、自分のような因果の子を、産ませたくなかったのだ。もとより、千世が自害すれば、倉本家は、滅ぶ。それを勘定に入れた上で、志村金吾は、凶行に及んだのだ。

「実父に対する憎悪、か」

喜八郎は、声に出して、呟いた。

「あわれな母親の生涯を眺めているうちに、実父に対する憎悪が、つのった、という

ことになるのか」
「旦那様――」
壱太が、呼んだ。
「うむ？」
「志村金吾という浪人者は、身を寄せるところがない、ときいて、豆六親分のところへ、案内しておきました」
「豆六のところへ――？　お前も、世話やきになったものだな」
「御赦免船に、嘉助の小父さんが乗っていたんでさ」
「ああ、辰巳芸妓殺しの板前の……」
「はい。嘉助の小父さんから、たのまれたんでさ」
「志村金吾は、島で、嘉助と親しくなっていたわけだな。……豆六の奴、よく、ひき受けたものだな。岡っ引が、御赦免者を居候させる、とはあまりきいたことがない」
喜八郎は、笑った。
「親分は、二つ返辞で、ひき受けてくれました。家へ、あの浪人をつれて行くと、前からよく知っていたように、どうぞどうぞ、と云って、よろこんで迎えているようなあんばいでした」

四年前、村井茂助殺しの下手人を、挙げるために、豆六は、喜八郎の命令で、奔りまわったものであった。そして、殺害の理由を、知って、金吾に対する寛大な裁きがなされることを、豆六も、のぞんだのである。
「旦那様、あの浪人者を、豆六親分のところへつれて行ったのは、いけなかったんですか？」
「いいや。わるくない。よく思いついた、とほめてやってもいいぞ」
喜八郎は、こたえた。
四十雀は、いつの間にか、自分の鳥籠へもどって、せっせと、餌をつついていた。
同じ頃合、豆六の家では、金吾が、豆六の仕事ぶりを、眺めていた。
どこかのさむらいの差料が、ようやく、研ぎあがろうとしていた。
「旦那は、島から無腰でお帰んなすったが、やはり、腰がさびしいものでござんすかね」
豆六が、訊ねた。
「いや、四年間も、刀を持たずにいると、いっそ、無腰の方がよい」
「しかし、旦那は、無念流の使い手で、おいでなさる」

「……」

「どうころんでも、町人になれる御仁じゃねえ。……やっぱり、腰に大小をたばさむように生れついていなさるんだから、よろしければ、あっしに、贈らせて頂きましょう」

「親切だな。どういうのだ？」

「旦那は、遠島になる御仁じゃ、なかったんでさ。ちゃんと仔細があって、女たらしの用人見習いを、お斬りなすったのですからね」

「……」

「おかくしになっても、ちゃんと、あっしどもには判って居りやす。貴方様は、あの村井茂助を、憎んで――」

「その話は、止してくれ。……それよりも、おれは、お主の弟子になって、研師になろうかな」

「旦那、人間には、それぞれ、分というものがありますよ。駕籠に乗る人、乗せる人、そのまた草鞋をつくる人――ってね。刀を腰にさす人と、これを研ぐ者と、そうして、作る者と、持ち分がきまっていまさあ。旦那は、刀を腰にさす御仁だ。研師にはなれませんや」

「おれには、いま、不吉な予感があるのだ」

金吾は、かたい面持で、云った。

「へえ？　どんな不吉な予感が、おあんなさるので――？」

「おれは、刀を腰にさすと、また、これを抜いて、人を斬るにちがいない。その予感だ」

豆六は、びっくりして、金吾を、まじまじと視かえした。

「冗談じゃねえ！」

つよくかぶりを振って、

「自分で、勝手に、そんな予感を、しなさるものじゃねえ」

「好んで、起しているわけではない。赦免になって、島からはなれる時、ふっと、その予感がして、それから、ずっと、意識の内にある。……子供の頃から、自分には幸せなくらしはない、という気がしていた。世間から白い目で視られる男として、すごすであろう、と――べつに理由もなく、そんな気がしていたが、どうやら、その通りになってしまった。おれの予感は、当るのだ」

「ばかばかしい。たった今から、そのわるい料簡は、すてて頂きてえものだ」

豆六は、研ぎあがった二尺三寸の白刃を、つと、金吾へ、さし出した。

金吾は、受けとって、じっと、刀身へ、眼眸を当てた。

「無銘ですが、佳い品でさ。一度も、人を斬っては居りませんで。さむらいのたましい、として、腰に佩びるしろものです」

「……」

金吾は、しばらく、沈黙をまもっていたが、豆六に返した。

「旦那は、これを持ちなすったからといって、べつに、また、人を斬りたくは、おなりになりますまい」

「しかし、これは、人を斬る道具だ。武士の魂、というのは、理窟にすぎぬ。……公儀では、腰に佩びるさだめをつくり乍ら、抜くことを禁じている。矛盾して居る。つまり、凶器であることをみとめているからだ。百姓町人の上の階級の証左として、威嚇のために、常に所持させておくが、かるがるしく抜いて振りまわされては、騒擾になるから、鞘からはなれないように、厳重に、抜かせないための法度をつくっているのだ」

「百姓町人に、無礼の振舞いがあれば、斬りすててよい、ということになって居りやすがね」

「無礼討ちにしてみるがよい。行跡不届きのかどで、追放の憂目に遭うのは、あきらかではないか。追放にならないまでも、出世ののぞみは、断たれよう」

「じゃ、旦那は、どうでも、明日からは、無腰で、街なかを歩く、と仰言るので――？」

「竹光でよいのだ」

「成程ね。無念流の使い手が、竹光をさして、お歩きなさる。これも、まんざら、わるくはありませんね」

豆六は、合点した。

小伝馬町牢屋敷の吟味与力・島村修理之丞が、牢屋敷前の往還で、何者かに斬殺されるという事件が起ったのは、その夜のことであった。

その三

奉行所に出仕した喜八郎は、すぐ、用部屋に呼ばれた。

内与力の佐野主膳が、一歩毎に大きく上半身を傾けて、入って来ると、

「島村が闇討ちに遭うたが、きいたな？」

「きき及びました」

「いま、死体を見て来たが、一太刀だ。見事な一太刀だ。あれほどの手練者は、江戸ひろしといえども、十指のうちに加えられような。お主が、殺ったのなら、合点がいくがのう」

そう云って、主膳は、笑った。

小伝馬町牢屋敷の吟味与力・島村修理之丞は、その役柄にふさわしい苛酷な性情の持主であった。

島村修理之丞の吟味を受けたばかりに、その凄じい拷問に堪えきれず、舌を嚙んだ者もいるし、犯しもせぬ罪を白状して、打首や遠島になった者もいた。

「吟味鬼」

囚人たちは、ひそかに、そう呼んでいた。

「島村を恨んでいた者は、五人や十人ではあるまいが、あれだけの使い手となると、ザラには居らぬから、すぐに見当がつく、というものだろうが……」

主膳は、じっと、喜八郎を、見まもった。

奉行所で、公然と、島村に楯ついたのは、喜八郎ただ一人であった。

島村が拷問にかけて、白状させたある強盗殺人の容疑者を、喜八郎は、白と主張してゆずらず、その男が打首になって一月ばかり経って、まことの下手人を挙げたことがあった。

しかし、再吟味ということにはならず、その下手人は、別の罪状で、遠島にされ、島村の地位はゆるがなかった。

爾来、島村は、喜八郎とは、口をきかず、会えば、必ずそっぽを向いたものであった。

主膳が、「お主が、殺ったのなら、合点がいくがの」と云ったのは、そのことを示していた。

喜八郎は、主膳が、見当をつけた者の名をこっちの口から云わせようとしている、とさとったが、わざと、沈黙をまもった。

主膳の方から、云った。

「昨日の夕がた、大島から御赦免船が、戻りついた。七人が赦免されたが、その一人に、志村金吾という浪人者がいたそうだな」

「はい」

「志村金吾は、四年前に、実父の倉本播磨の屋敷の用人見習いを、柳原堤で、斬って居る。一太刀でな。見事な一太刀でな。……頸根から袈裟がけの斬り様は、島村が斬

られたそれと、よう似て居る。志村金吾が戻りついた昨夜、島村は、闇討ちに遭うた。……どうだな?」

「……」

志村金吾を捕えたのは、喜八郎であったが、吟味したのは島村修理之丞であった。

喜八郎は、志村金吾の凶行は、情状酌量の余地が充分にある旨を、述べたが、島村修理之丞の配慮するところとはならなかった。

金吾が、懐中物を狙った辻斬りと云いはったためでもあるが、島村は、断乎として、打首にすべきである、と上申した。

町奉行の裁断で、遠島の刑が下されたが、島村は、それを不服としたものであった。

「どうだな?」

主膳は、喜八郎の返辞をもとめた。

喜八郎は、ようやく、口をひらいた。

「志村金吾が、報復の目的で、島村殿を斬った、と推量するのは、いささか早合点にすぎるような気がいたします。志村が、用人見習いを斬ったまことの理由を供述したにも拘らず、遠島になったのであれば、島村殿に恨みを抱いたであろう、と容易に考えられますが、当人はわざと重罪を受けたいかのごとく、ただの辻斬り強盗を働いた、と申しのべて居ります」

「それは、わしも、承知して居る。しかし、吟味されている際、志村金吾は、島村から、さんざんの侮辱を受けて居る。その恨みもあり、また、島で、島村のために、無実の罪をきせられて流された囚人に出会って、義憤をおぼえた、としたら、どうであろうな?」

「……」

「ともあれ、この件は、お主にまかせよう」

喜八郎は、奉行所を出た足で、豆六の家へ向った。

豆六はいたが、壱太があずけた志村金吾の姿はなかった。

「居候は、どうした?」

「つい半刻ばかり前に、ちょっと出て来る、と仰言って……」

「昨夜は、ずっと、この家にいたか?」

「へえ、それが、五つ(午后八時)頃まで、あっしと話しておいでしたが、なにか、急に思い立たれたらしく、お出かけになりましたよ。四つ(午后十時)過ぎに、

おもどりでござんしたがね」

「……」

島村修理之丞は、四つちょっと前に、牢屋敷を出て、すぐ斬られている。

時刻は、ぴったりと合う。

「……すると、志村が、斬ったのかな」

「旦那！」

豆六は、目に角を立てた。

「旦那は、吟味与力の島村の旦那を殺った下手人に、あの御仁をしたてようと、なさるんですかい。冗談じゃねえ！」

「居候させたからといって、ひいきにせずともよかろう」

「殺らねえ証拠がありまさ。証拠が――」

「なんの証拠だ？」

「志村さんは、あっしがお貸しした竹光を、腰にして、出かけなすったんでさあ。竹光で、島村の旦那を、斬れますかい」

「それは、証拠にならんな」

「どうしてです？」

「この家を出た時は、竹光をさしていたかも知れぬが、牢屋敷の前へ忍び寄った時には、よく斬れるやつを佩びていたかも知れぬ」

そう云われても、豆六は、ひき下らなかった。

昨夜、金吾と交した会話を述べたてて、金吾が刀を腰にさすことさえもいやがる人間になっているのだと、弁護した。

喜八郎は、ききおわると、

「実は、わたしも、志村金吾は、下手人ではない、という気持の方がつよかった」

「そ、そいじゃア……」

「まア待て。昨夜、出かけた、ときいて、疑惑の念が生じた。……戻るのを、待とう。……もし戻って来なければ、下手人と断定することになっても、それは、やむを得まい」

喜八郎は、そう云って、腕を組んだ。

「志村さんは、すぐ、戻って来まさあ。あっしは、あの御仁の人柄を、ちゃんと、看てとったのですぜ。こんどばかりは、旦那のめがねちげえというものですぜ」

豆六は、ムキになって、云った。

「そうであれば、結構だ」

その日、志村金吾は、ついに、豆六の家に戻っては来なかった。

金吾は、その朝、ふと思い立って、本所の小梅瓦町へ、出かけて行ったのである。常泉寺という古い寺の裏手に、五十軒長屋があり、そこが、金吾が母とくらした最後の家であった。母は、そこで逝ったのである。

隣りに、親切な大工夫婦がいて、母子に内職をさがして来てくれたり、母がわずらって寝付くと、炊事から洗濯の面倒をみてくれたものであった。

――まだ、あそこに、住んでいるかも知れぬ。

金吾は、そう思って、たずねてみることにしたのであった。

――尾けている者があるな！

そう直感したのは、河岸道をひろっている時であった。

枕橋を渡って、水戸家の下屋敷に沿うて、歩き出した金吾は、尾行者が三人に増えているのをさとった。

最初に尾けて来たのは職人ていであったが、あらたに加わった二人は、浪人者であった。

水戸家の高塀わきを、ものの二町も辿ると、尾行者たちは、急に大股に、追いついて来た。

浪人者の一人が、すばやく、前方へまわって、向い立った。

人影のない、春の陽ざしがあかるく落ちているばかりの、静かな往還であった。

「志村金吾殿、とお見受けする」

正面の浪人者が、云った。

「左様だが――」

「ちと、折入ってご相談いたしたき儀がある。ご同道ねがえまいか？」

「素姓も知らせずに、同道をもとめるのは、いささか礼儀知らず、と思われるが……」

「仔細があって、談合の済まぬうちは、名のるわけに参らぬ」

「お主らは、どうやら、誰人かの手先のようだな」

「ご同道、ねがおう」

「いやだと申したら？」

「やむを得ぬ。この場にて、討ち果さねばならぬ」

――おれの不吉な予感は、あたったようだ。もし、真剣を鞘の中に入れていたら、ここで、こいつらを、斬ることになったかも知れぬ。

金吾は、思った。

鞘の中は、竹光であった。

金吾は、南本所の多田薬師の境内へ、つれ込まれて、目かくしをされて、そこに待っていた駕籠にのせられた。

たとえ竹光を所持していても、その気になれば、金吾は、対手がたの刀を奪って、闘う腕前を持っていた。

それをしなかったのは、ただ、人を斬ることを避けたかったからである。べつに、何者が自分を虜囚にしようとするのか、そのことに興味をおぼえた次第ではなかった。

駕籠は、北へ向って進み、左へ折れた。

人足が踏む音で、金吾は、

——吾妻橋を渡っている。

と、さとった。

吾妻橋を渡ってからは、左折右折が、頻繁で、しだいに方角がわからなくなった。

——赦免になったおれを、戻り着いた時から、窺っていたことだな。この世で何もすることのないおれに、いったい、なんの用がある、というのか？

自分のような犯科者を、捕えて、目かくしして、拉致しようとしているのであるから、どうせ、ろくな用件ではあるまい、と思われる。

金吾は、おとなしく拉致されることに、ばかばかしさをおぼえ乍ら、駕籠にゆられていた。

やがて——。

駕籠は、どこかの屋敷へ、かつぎ込まれた。

門を入って、玄関へ到着するまでの距離を、金吾は、はかった。

——数千石の旗本屋敷のようだ。

金吾は、つれ込まれるのは、どこかの廃寺あたりだろう、と想像していたのである。

それが、宏壮な屋敷であったことは、金吾に、はじめて、興味を湧かさせた。

駕籠は、そのまま、屋内へかつぎ込まれた。

部屋へ坐らされてからも、なお、目かくしをとることを禁じられた。

衣ずれの音がして、上座に、女人が坐った。衣裳にたきこめた伽羅の香が、つよかった。

「目かくしをはずすがよい」
綺麗な声音が、命じた。
金吾は、孫次郎という能面をかぶった女人を、見出した。
——大奥の表使い、といったところだな。
金吾は、その衣裳から、推しはかった。
「美い男じゃの、そなた」
女人は、云った。
「用向きを、うけたまわりたい」
「そなたは、昨日、御赦免船で、この江戸へ帰って参ったそうな」
「左様——」
「腕が立つ、とききましたぞ。無念流の使い手とか……」
「まわりくどい話は、ご免を蒙りたい」
「そなたに、わが世直し大明神党に、入ってもらいたい」
「世直し大明神党？」
「同志百人。幕臣も、大名の家臣も、町人も、職人も、加わって居る」
「なんの目的で——？」

「世直しじゃ」
「いかなる手段で、世直しを？」
「大きな企てじゃ。しかし、その儀は、まだきかせられぬ。……そなた、党に入った証拠として、血判をせねばならぬ」
「入るとも入らぬとも、返辞をいたしては居らぬ」
「そなたは、好むと好まざるとに拘らず、入らねばならぬ」
「こちらには、意志というものがある。入るか入らぬか、それは、こちらの意志次第ではあるまいか」
「あいにくだが、そなたは、おのれの意志で、きめることはできぬ」
「何故に？」
「そなたは、昨夜、吟味与力島村修理之丞を、小伝馬町牢屋敷前にて、闇討ちにいたして居る」
「なに？」
「すでに、いま頃は、奉行所では、そなたを召捕るべく、手配をいたして居るに相違ない」
「ばかな！　わたしは、吟味与力など、斬っては居らぬ！」

金吾は、憤然となって、叫んだ。

「そなたが、いかに、わめこうとも、下手人たることは、明白なのじゃ。罪状は、まぬがれぬ！」

能面をかぶった女人は、冷ややかに、申し渡した。

その四

夜に入っていた。

金吾は、その部屋に、ただ一人、とりのこされていた。

腕を組んで、じっと端座をしつづけている金吾は、ようやく、空腹をおぼえていた。

自分が、吟味与力島村修理之丞を殺した下手人にされていることは、なにかの罠だ、と推測されたが、

——おれを罠におとしてみたところで、どうなるというのだ？

そのことに、腹立ちも起ってはいなかった。

帰してくれぬものなら、しかたがないから、坐っているだけのことだ、と自分に云いきかせて、動かずにいるのであった。

——しかし、空腹は、やりきれぬ。

豆六の家で、かるく朝食を摂っただけだったのである。

襖が、開かれた。

こちらの独語をきいたように、二人の女中が、膳部をはこんで来た。

しかし——。

それにのせられているのは、瓢と盃と、ほんのわずかの塩昆布だけであった。

「わたしは、夕餉を所望するが……」

金吾は、女中に云った。

「わたくしどもは、お申しつけの接待をいたすばかりでございます」

女中の一人が、瓢を把って、盃になみなみと、ついだ。

金吾は、やむなく、盃を口にはこんだ。酒は、いくらでも飲める体質であった。村井茂助を、柳原堤で斬った時、したたかに飲んでいたことを、金吾は、思い泛べた。

大島にいた四年間は、一滴も飲まなかった。板前の嘉助が、どぶろくをつくったが、金吾は、その誘惑に負けなかった。

赦免になって、江戸に戻りついてからは、勿論、飲んでいなかった。

いま——。

四年ぶりに、のどへ流し込んだ。

こくのある佳い酒であった。

つがれるままに、盃の数を重ねているうちに、急速に酔いが、からだをめぐって来た。

端座していられなくなり、胡座をかいたが、瓢が空になった頃は、床柱に凭りかかっていた。

「おからだを、おもみいたしましょう」

女中から云われて、金吾は、

「それも、命令か」

と、薄ら笑って、横になった。

二人の女中は、丹念に、金吾のからだをもみはじめた。

うとうとと、睡りかけた金吾は、そのうち、にわかに、内にたぎって来る精気を、抑えがたくなった。

——妙だな？

金吾は、おのれをいぶかった。

女を知らぬ身ではなかった。両国の水茶屋の女と、船宿で数度忍び逢ったこともある。

しかし、金吾は、遊蕩の血を持ってはいなかった。むしろ、婦女子をさげすみ、欲情を抑える自信があった。不幸な母の生涯を視ているだけに、愛してもいない女を抱くことに罪の意識があった。

島に流されてから、ついぞ、一度も、欲情を催したことはなかった。

まして、江戸へ戻り着いてから、そんな気持はみじんも起していなかった金吾である。

ところが——。

横になって、女中たちから、もまれているうちに、曾ておぼえのないくらいの激しい欲求が発して来たのである。

——どうしたというのか！

金吾には、判らなかった。

突如として、はね起きて、女中に襲いかかりたい衝動が、猛然と、からだ中に湧きあがった。

「もうよい。結構だ。……一人にしておいてもらいたい」

金吾は、女中たちに、云った。

女中たちは、そっと、顔を見合せた。意味ありげな表情になってから、つと、立って、出て行った。

「くそ！」

金吾は、起き上ってから、呻いた。

女の肌を抱きたい欲求が、これほどの凄じさで、自分を襲って来るとは、夢にも思わなかったことである。

朝――卯刻（六時）。

「姫様、お時刻にございます」

襖をへだてて、その声がした。

褥にねむっていた女あるじは、永いあいだのならわしで、その声とともに、身を起した。

もう三十を越えて居ろう。姫様と呼ばれるには、ふさわしくない年増になっていたが、気ままなくらしをつづけているおかげで、肌はまだ若く美しい。

枕もとに、孫次郎という能面が、置かれてあった。昨日、金吾を引見した女人は、この女あるじであった。

美貌であったが、いかにも冷たい、険のある眉目の持主であった。

起き上ると、すぐに、嗽ぎがはこばれて来た。

女中の一人が、うしろへまわって、お櫛をあげはじめた。

そのあいだ、前に、配膳がされた。

すなわち、髪を結わせ乍ら、朝食を摂るのであった。

これは、あきらかに、千代田城大奥の御台所と姫君、それに准じた徳川家の親族大名の奥方と姫君がしたがっているしきたりであった。

この女あるじは、いかなる素姓か、およそ、想像がつく、というものである。

御飯を容れた黒塗蒔絵の行器には、葵の紋が入っていた。

かるく二杯を喰べた女あるじは、うがいをしてから、化粧室に入った。

ここで、小盥で、顔を洗い、化粧をはじめた。

化粧は、自分でするのであった。

そのあいだ、年配の女中が、正面に鏡を持っていた。これが、ほんのわずかでも、揺れてはならないのであった。

白粉は、玉屋製の花の露というのを用い、紅は、京の小町紅であった。

紅猪口に刷いておいて、くすり指で、唇へぬり、ぬってから、上唇を、帛で、きれいに拭いた。

しあがった顔は、女中たちも見惚れるほどの美しさであった。

化粧のあと、便所に立つならわしであった。

入側に、湯桶小盥を置いた手洗い場があり、次が二畳で、戸棚を設け、下裳や足袋や不浄日の道具が、置いてある。

下裳は、白羽二重を用い、不浄日のみ桃色のちりめんをまとうのであった。

女あるじは、ここで、草履をはきかえて、奥の二畳の御用所に入る。練香が焚かれている。

ここは、万年と称ばれて、大変な深さに掘られ、永久に汲みとることはないのであった。

女中が一緒に入って来て、落し口に、女あるじがまたがると、うしろから、裳裾をまくりあげてしゃがませる。

用が済むと、女中が、よくもんだ美濃紙で、拭く。物心ついた頃からのならわしで、女あるじには、羞恥はないのであった。

次の二畳に出て下裳と足袋をとりかえ、入側で手洗いをすませ、再び、化粧室に戻って、衣裳をつける。

豪華な衣裳で、身を装うた女あるじが、座敷に出ると、そこに、老女が、待っていた。

「志村金吾という、あの美い男は、いかがいたした？」

女あるじは、訊ねた。

「昨夜、牀の中で、転々として、精気のあふれるのを、抑えがたいありさまでございました」

「ほほほ……」

女あるじは、面白そうに、高い笑い声をあげた。

「酒にまぜたあの薬が、それほどに、効いたかえ」

「はい、それはもう……、あの男、よう抑えたのが、ふしぎなくらいでございます。並の男ならば、女中に、襲いかかったに相違ございませぬ」

「ほほほ……、歯ごたえのある男よのう。どうしてくれようか」

女あるじは、ちょっと、思案していたが、

「そうじゃ、わたしが入浴の最中に、垢流し役を、つとめさせてくれよう」

「……？」

流石に、老女は、ちょっと眉宇をひそめたが、べつに反対しなかった。
女あるじの異常なまでに強い気象を、熟知していたので、反対してもむだとわかっているに相違ない。

巳刻（十時）になった。
干菓子と餡ものを、喰べている女あるじの許へ、一人の武士が、伺候した。
四十年配の、眼光の鋭い、痩せた武士であった。
「頼母、報告がおそいではないか！」
女あるじは、険しい語気で、なじった。
「申しわけありませぬ。赦免者が七人でありましたゆえ、これを一人ずつあたるのに、手間どりました」
「で——あったのか？」
「それが、いまだ……」
「たわけ！　手間どった挙句、見つけることが叶わぬのか？」
「七人のうち、五人まで——捕えて、裸にいたしましたが、身につけては居らず、あと一人、嘉助と申す者の行方をさがして居りますが……」

女あるじと頼母という武士の会話は、昨日御赦免船で江戸へ帰って来た七人のうちの一人が、何かを所持していたことを、示している。
よほど、重要な品に相違なかった。
「すると、嘉助という男が持っていなければ、当屋敷に虜囚にしている志村金吾が、身につけていることになるのじゃな？」
「御意——」
女あるじは、にっこりした。
「頼母——、その方が、嘉助という男を捕えて、それを見つけるのがはやいか、わたしが、志村金吾から取りあげるのがはやいか——競争いたそうぞ」
「かしこまりました」
頼母は、頭を下げてから、急に、女あるじに、冷ややかな視線を当てた。
「姫様、それがしの方は、捕えた五人は、のこらず、片づけました。あとの一人の嘉助も、捕えたからには、この世から消します。……したがって、貴女様も、取りあげられたあと、容赦なく、志村金吾の生命を断っておしまいなさるよう、願い上げます」
「承知しました」

頼母は、去った。

女あるじの入浴時刻は、未下刻（三時）であった。

大奥、大名屋敷奥向の湯殿は、町家のように、浴槽の下を焚いて、湯を沸かすのではなく、風呂番が、大きな玄蕃（桶）で、熱湯をはこび、浴槽に移し、加減をととのえるのであった。

湯殿は、高麗縁の八畳敷きにつづいて、四坪ばかりの板敷き（流し場）になっていた。

女あるじが、衣裳を脱ぐと、お付きの女中が持って下がり、入浴のあいだに、別の衣裳を持参する。

女あるじは、巷間で噂されているように、腰巻をまとって入浴はせず、やはり、一糸まとわぬ素裸で、浴槽に入った。

お湯がかりが、板敷きに入って来て、白い真岡の糠袋を手にして、待つ。

女あるじは、浴槽を出て、お湯がかりに、からだをまかせた。

背中から、腕、腰、そして脚を、丹念に、糠袋でこすらせ了えた頃、

「姫様――」

八畳敷きから、老女が、声をかけた。

「そろそろ、志村金吾を、呼んで参りましては、如何でございましょう？」

「そうじゃ。呼んで参るがよい。……加島、金吾が、脱いだら、その着物を、しらべるのじゃ」

「かしこまりました」

やがて――。

老女が、金吾を、湯殿の前に、みちびいて来た。

「ゆっくりと、召されるがよい」

老女は、八畳敷きに金吾を入れると、檜戸を閉めた。

――おれを、湯に入れて、どうしようというのか？

金吾は、着物を脱ぎすて乍ら、総身が火照るほどの精気の激しさを、入浴すれば、減じられるか、と思った。

板敷きとを仕切る玻璃戸を開けたとたん、金吾は、息をのんだ。

浴槽に、むこう向きに、一人の女人が、身を沈めていた。

「……」

息をのんで、凝視する金吾に対して、女人は、ゆっくりと、向きなおった。

その顔は、昨日と同様、能面をかぶっていた。

金吾は、棒立ったまま、動けなかった。
女人は、湯音をたてて、すっと、立ち上った。
豊かな胸の隆起も、下腹の黒い茂みも、かくそうとせず、金吾の視線にさらして、
「志村金吾、このからだが欲しゅうて、入って参ったのか？」
と、問うた。
「……」
金吾は、なにかこたえようとしたが、声が出なかった。
「欲しければ、抱くがよい」
「……」
「さ——寄って、抱くがよい」
女人は、促した。
金吾は、ふらふらと、歩み入った。
女人は、待っている。
——おれは、狂っている！　狂わせられている！
金吾の脳裡に、その呟きがあった。

その五

狂わせられている、と知りつつ、金吾は、おのが意志で、抑えることができぬまに、豊満な三十女の裸身を、かかえた。
「どうにでも、好きなように、いたすがよい。……好きなように」
女あるじは、その重心を、金吾の腕にあずけた。
「……」
金吾は、われ乍らあさましいと思いつつ、胸の鼓動を早打たせて、腕に力をこめると、ぎゅっと抱きしめた。
女あるじは、うっとりと、顔を金吾の肩にのせた。
金吾は、片方の掌を、ゆっくりとすべらせて、臀部にあてた。
熟れきった柔軟な果実が、こちらのむさぼり食うのを待って、そこにあった。
金吾は、喘いだ。
胸は胸に、腹は腹に、ぴたりと密着し、そして、怒張したそれは、黒い茂みの蔭を突いていた。

本能の奔騰するままに、金吾は、女あるじを流し場へ横たえようとした。

とたん——。

女あるじの口から、魂消る悲鳴がほとばしった。

はっとなって、顔をそらした金吾は、女あるじの耳朶から頸へ、べったりと吸いついている蛇を、視た。

金吾は、その尻尾をつかんで、とばしたが、その時、女あるじの方は、気を失っていた。

金吾は、頭上の天窓がひらかれ、ひとつの顔が、のぞいているのを仰いだ。

町人の顔であった。

金吾を見下して、にやりとして、なにか合図をしてみせた。

「なに?」

合図の意味が判らぬまま、金吾が、訊ねようとした時、玻璃戸が開かれた。

「どうされたのじゃ?」

老女が、険しい表情で、のぞいた。

金吾は、その手に、自分の着物が持たれているのを視て、とっさに、奔り寄ると、鳩尾へ拳を突き入れて、当て落した。

すばやく、着物をつけ終った金吾は、天窓から、細引がするするとおろされるのをみとめた。

それが何者か、何故に救出してくれるのか、不明のままに、金吾は、細引をつかんだ。

金吾が、屋根へ出ると、男は、薄ら笑い乍ら、

「お愉しみの邪魔をして、かんべんしておくんなさい、旦那」

と、云った。

「お主、何者だ?」

「盗人でさ」

「盗人?」

「盗人でも、もっぱらお武家屋敷をあらす夜働きでござんしてね。……この屋敷には、もう三日前から、逗留させて頂いて居りやす」

「……」

「だから、昨日からのことは、一部始終、拝見していまさ」

男は、金吾をみちびいて、別棟へ、跳び移ると、難なく、暗い一室へ、案内した。

食器や膳を置いてある場所であった。

男は、忍び入ってからは、ここにひそんですごしている模様であった。
「あっしは、影の男女吉と申しやす。お見知りおきを――」
「志村金吾」
「志村金吾様？　あっしは、どうも、むかし、どこかで、きいたようなお名前でござんすがね」
影の男女吉は、どこでその名を耳にしたか、すぐには思い出せないらしく、
「ま、いいや、袖すり合ったも、他生の縁というやつだ。こん後とも、よろしく、おねげえ申します」
と、頭を下げた。
「お主が、わたしを助けてくれたのは、気まぐれか？」
「気まぐれ、といえば、気まぐれでござんすがね。どうも、この家のお姫様のやりかたが、ちょっとばかり気にくわなかったんでね」
「……？」
「旦那は、昨夜、うまい酒を飲まされて、女中衆にあんまをしてもらいなすったでしょう」
「うむ」
「そのうちに、もやもやして来て、むらむらとして来た――そうで、ござんすね？」
「うむ」
「あれァ、酒の中に、媚薬てえしろものが、まぜてあったんでさ」
「そうだったのか」
「そいつが、今日になっても、効いていたから、旦那は、お姫様を、ふらふらと抱いちまったんでさあ。……尤も、あのお姫様の、むっちりとはりきった大年増の肌を、見せつけられちゃ、媚薬を飲まされていなくても、たいがい、ふらふらとなっちまうでしょうがね」
「あの女性が誰人か、判っているか？」
金吾は、問うた。
「先の公方様のご息女、と申し上げたら、びっくりなさいますかい？」
「十一代様のご息女だと？」
「はっきりと、つきとめたわけじゃありませんがね、どうも、そのくらしぶりから察して、あっしの臆測は、まちげえねえようでさ」
「お主は、千代田城内にも、忍び込んだことがあるのか？」

「へへへ……、まアね。ところで、旦那は、一昨日、御赦免船で、島から帰って来なすった七人のうちの一人だそうで？」
「あの女人が、そう云っているのを、きいたのか？」
「お姫様には、茨木頼母という腹心がついていて、そいつが、七人のうち、五人までとっつかまえて、片づけたらしい」
「なに？　あの連中が、殺されたと⁉」
「残ったのは、旦那と嘉助という男の二人きりらしゅうござんすよ」
「嘉助は、まだ殺されて居らぬのか」
「茨木頼母の方は、嘉助をとっつかまえて、殺し、お姫様の方は、旦那をもてあそんでおいて、片づける、という寸法らしゅうござんしたね」
「その理由を、きいたか？」
「そいつが、どうもね……。御赦免者七人のうち、誰かが、何かを、身につけて、帰って来たのは、たしからしゅうござんすね」
「何かを？」
「旦那は、おぼえがない、と仰言る？」
「うむ。べつに、大切な品など、身につけて帰って来たおぼえはないが……」

「すると、旦那ご自身も、知らねえうちに、身につけて、帰って来なすったことになる――」
「……？」
「たとえば、そのお着物でさ。どこかに、縫い込んであるとしたら？」
「この着物にか。そういえば、先程、あの老女が、これを手にしていたが、さがそうとしていたのかも知れぬ」
「ひとつ、さがしてごらんなすったら、如何ですかね」
「お主、さがしてくれ」
金吾は、着物を脱ぐと、男女吉へ、渡した。
男女吉は、器用な手つきで、着物をしらべたが、
「なにも、縫い込んじゃありませんね」
と、云った。
「すると、嘉助の着物に、縫い込んであるのかも知れぬ」
金吾は、親切で人の好かった板前の顔を思い泛べた。
「旦那、そいつが、どんな大切な品ものか、あっしも、一度、拝見してえ」
「茨木頼母という男が、嘉助をさがしに行った、というが……？」

「もう、いま頃は、そいつを、手に入れたかも知れませんぜ」
「嘉助は、いい奴だった。殺されたと思いたくはない」
「嘉助のおちつき先を、ご存じなので？」
「うむ、きいている」
「念のために、たずねて行きなさるか？」
「行ってみよう」
金吾が、立ち上ろうとすると、男女吉は、
「おっと、夜にならなけりゃ、抜け出られませんや。腕の立つ浪人者が、二十人ばかり、屋敷内のあっちこっちに、配ってあるんでさ。……いま頃は、目を光らせて、旦那がどこにひそんでいるか、かぎまわっていまさあ。……いまはめったに、動けねえ」
「しかし、いま行けば、嘉助を救えるかも知れぬ」
「人間の運なんてものは、神様だけが、ご存じでさ。おちつきなせえ。……運わるく、嘉助が殺されたとしても、その大切なしろものは、茨木頼母によって、この屋敷へ、持って来られる。そいつを、こっちが、頂戴すりゃ、嘉助の敵討にもなるんじゃありませんかね」

――この男、泥棒らしい、酷薄な性情を持ち合せているようだ。
金吾は、そう思った。
「旦那は、島にいた頃のことで、なにか、思い当るふしは、ありませんかね？」
「その何かの品のことか？」
「へえ」
「一向に――」
「島にのこされている囚人のうちの誰かが、嘉助の着物に、そいつを縫い込んだ、と想像してごらんなせえ」
「……」
「きっと、そうにちげえねえ。……この屋敷のお姫様と腹心が、躍起になって、手に入れようとしている品もの。そいつを、島に流されていた囚人が持っていて、御赦免者の着物に縫い込んでおく。こいつは、面白え謎ときだ。盗人としちゃ、首を突っ込んでみたくもなろう、というものでさ」
「おれには、思い当ることは、全くない」
「なに、あっしにまかせて下さりゃ、謎を解きますぜ。……そういう予感がして、この屋敷に、忍び込んでいた、といえば、自慢たらしいが、盗人にとって、一番大切な

のは、カンでしてね。そのカンが、あっしは、冴えていた、というわけでさ。この屋敷内に、ひそんでいるうちには、きっと、なにか、面白えことが起る、と思っていたんでさあ」

影の男女吉は、そう云って、にやりとしてみせた。

八丁堀の大和川家では、喜八郎と豆六が、さし向って、重い沈黙を守っていた。豆六が、すっとんで来て、御赦免者七人のうち、五人が殺された旨を、報せたのである。

志村金吾は、依然として、行方知れずになったままである、という。

喜八郎が、無言をつづけるので、豆六も、しかたなく、口をつぐんでいるのだが、やりきれたものではなかった。

ついに、豆六が、しびれをきらして、

「旦那、どうしなさる?」

と問うた。

「豆六!」

「へい」

「吟味鬼殺しの下手人は、やはり、志村金吾ではないようだ」

「へえ――?」

「五人の御赦免者が、殺されたのは、われわれをおどろかせる大きな理由が、蔭にかくされているような気がする」

「……」

「志村金吾は、どこかで、罠にかかっているのかも知れぬ。……吟味鬼殺しは、志村金吾の仕業だ、と何者かが、奉行所に、思い込ませようとしているような気がする」

「それが、何奴か、見当がつきますか?」

「見当が、つかんな」

「弱りましたね」

「もう一人、嘉助というのが、生きのこっているわけだな」

「へい」

「嘉助が、身を寄せたところを、志村金吾から、きいて居らぬか?」

「嘉助は、弟分の多吉という男が、本郷菊坂で、世帯を持っているので、そこへ行った、と志村さんは、仰言っておいでござんした」

「行ってみよう」

喜八郎は、豆六を連れて、本郷へ急いだ。
豆六は、喜八郎の足の早さに、息せき切り乍ら、
「それにしても、志村さんは、どこへ雲がくれしちまったんだろう?」
と、首をかしげた。
「……」
「殺されちまったんじゃござんすまいね!」
「吟味鬼殺しの下手人にしたてられているなら、殺されては居るまい」
「するてえと、どこかに、監禁されている?」
「まずそういうところだろうな」
菊坂の裏店に至った二人は、さがしまわるまでもなく、板前多吉の家を、すぐに見つけることができた。
とある裏店の木戸内が、ひどくさわがしかった。そこへ、町方同心と岡っ引が現れたのである。
住民の一人が、馳せ出て来て、
「お役目ご苦労様です。…… おねげえ申します。きっと、下手人を挙げて下さいまし。あんな善人を、殺しやがって!」

と、泪をこすって、云った。
喜八郎には、すぐピンと来た。
案内させて、その家に入ってみると、若い夫婦の無惨な死体が、折り重なっていた。
それが、多吉という板前とその女房であった。
嘉助が、昨日、その家に、身を寄せたのを、裏店の人々は、知っていた。
島帰りの御赦免者が、むかしの仲間をたよって来て、非道にも、夫婦とも斬り殺しておいて、金を奪って、逃げた。
人々は、てっきりそうにちがいない、と噂していたところであった。
喜八郎は、豆六と、木戸を出ると、
「いよいよ、五里霧中へ、足を踏み込むことになるな」
と、云った。

その六

昼があるから 夜が来る

女がいるから　男が来る　ホイホイ
忍ぶ恋路の　さてはかなさよ
今夜　逢うのが、生命がけ
よごす涙の白粉も
その顔かくす無理な酒

調子よくうたい乍ら、燈入れ道具をかついだ壱太が、河岸道に沿うてやって来た。
暮六つ前に、舟着場の常夜燈へ、つぎつぎとあかりをともすアルバイトを、壱太は、つづけているのであった。
灰会所わきの舟着場は、今日は、ひっそりとして、揚げ荷、積み荷の作業はなく、人影は見当らなかった。
壱太が、そこの常夜燈へ、油をさし、あかりを入れた時、
「おい、チビ切」
ひそやかに、呼びかけた者があった。
「なんでえ?」
振りかえって、見下した壱太は、豆しぼりを盗人かぶりにした男に、ちょっと、眉

宇をしかめて、
「誰でえ?」
「おれだ、嘉助だ」
男は、寄って来た。
「あ、小父さんかい」
壱太は、梯子から降りると、
「こんなところで、なにしてるんだい、小父さん?　御赦免船で帰り着いた場所に、舞いもどって来るなんて、縁起でもねえじゃねえか」
と、ひとっぱし大人ぶった口をきいた。
「おめえに、逢いたくて、待っていたんだ」
嘉助は、云った。
「なんの用だい?」
「おれと一緒に帰って来た志村金吾の旦那に、会いてえのだ。おめえ、志村の旦那のところへ、おれを、案内してくれねえか」
盗人かぶりの蔭の嘉助の顔は、ひどく緊張していた。
「あのおさむらいは、おいら、豆六親分の家に預けたんだ。だけど、たった一日で、

いなくなっちまったぜ」
「いなくなった？　行先は、ねえ筈だが……？」
嘉助は、目を光らせた。
「まさか、殺られたのじゃねえだろうな」
「小父さん、おいらと、一緒に来てくれ」
壱太は、さそった。
「どこへ――？」
「おいらが、居候している八丁堀の家さ」
「おれに、大和川の旦那に会え、というのか？」
「知っているんだ、おいら――」
「……」
「小父さんが、身を寄せた本郷の菊坂の家では、多吉っつぁんとそのおかみさんが、殺されたろう、おいら、きいたぜ」
「う、うむ」
「小父さんが、下手人にされているらしいな」
「冗談じゃねえ」

嘉助は、声をふるわせて、かぶりを振った。
「おれが殺すわけがねえ」
「……なら、そのことを、うちのご主人に、云いなよ」
「……」
「わるいことは、云わねえよ。小父さんが、いま、たよれるのは、大和川喜八郎という八丁堀の同心だけだぜ」
「……」
壱太は、嘉助を促して、歩き出した。
新大橋を渡り乍ら、嘉助は、
「チビ切――じゃねえ、いまは、壱太か。おめえ、大人になったな」
と、感慨をこめて、云った。
「あれから、もう五年、経っているじゃねえか。股ぐらも、茂ったぜ」
「おめえ、岡っ引になるつもりか？」
「いいや、二十歳になったら、かたぎのあきないをするつもりだぜ。見ててくれ、小父さん。おいら、大金持になってやるんだ」
「大金持になって、どうするんだ？」

「可哀そうな餓鬼を、百人も、いや、五百人でも、千人でも、居候させてよ、立派な男にしてやるんだ」

「おめえの考えは、立派すぎて、おれのような犯科者なんぞには、ピンと来ねえな」

嘉助は、そう云い乍ら、いまさら乍ら、ひろい江戸の市中で、たった一人ぼっちである辛さを、胸にかみしめた。

壱太が、機転をきかせて、嘉助をともなって来たことは、喜八郎をよろこばせた。

「多吉夫婦が、殺された時、お前は、どこにいた？」

「へい。働き口をさがしに、浅草へ行って居りました。世間がせちがらくなっていて、入墨者をやとってくれるような料亭は、どこにもなくて、うろうろしているうちに、日が暮れちまって、……戻って来てみると、あの騒動で、あっしが下手人にされている様子なので、あわてて、逃げ出したようなわけで……へい」

「お前が居候したために、多吉夫婦は、まきぞえをくらったようだな」

「旦那！　あっしは、べつに、誰からも、怨みを買っちゃ居りません。あっしが、島から戻って来るのを、待ちかまえていた奴がいた、なんて……そんなことは――」

「待て。御赦免船で、帰って来た七人のうち、すでに、五人が殺されていることをお前は、知らぬだろう」

嘉助は、大きく目をみはった。

「いずれも、素裸にされて、殺された。……残っているのは、志村金吾とお前の二人だけだ。魔の手は、お前にものびたが、さいわい、留守していて、まぬがれた。その代り、多吉夫婦殺しの下手人にしたてられた。志村金吾の方は、吟味与力殺しの下手人に、したてられた」

「いってえ、どこのどいつが、そんな、むごたらしいまねをしやがったので？」

「それが、判らぬから、当惑して居る。想像されるのは、七人の御赦免者のうちの誰かが、なにやら、重大な秘密を持って、江戸へ帰って来たのではあるまいか、ということだな」

「重大な秘密って、どんなことでございましょう？」

「お前には、思い当ることはないか？」

「なにも、ございません」

「わしが、調べた限りでは、志村金吾を含めて、七人の御赦免者には、娑婆で再び悪事を働くような凶悪な男は、居らなかった。世間が受け入れてくれるならば、片隅で、まじめに、ほそぼそとくらしてゆくことにあまんじる男ばかりであった。……その男たちが、次つぎと殺された。殺された五人に、その理由を問うても、おそらく、

お前と同じ返辞をするに相違ない。……で、隠密廻りの町方同心としては、腕を拱ねて、思案投げ首という次第だ」

「……」

「それとも、お前が、秘密を持ち乍ら、ひたかくしにして、そらとぼけているか、だ」

「滅相もない！　あっしは、ただ、御赦免になって、帰って来ただけの、包丁を使うことしか取柄のねえ男にすぎません」

「わしも、そう思う。しかし、お前は、生命を狙われて居る。狙われているからには、ふせがねばならぬ」

「どうしたらよろしいので――？」

「この町方に、協力することだ。ひとつ、思い出してもらおう。御赦免になるにあたって、お前ら七人に、殊更に、にわかに親しげに、近づいて来た囚人は、いなかったか？　あるいは、近づいて来ないまでも、なにやら、様子ありげに、お前らを眺めていた囚人が、いたかどうか。あるいはまた、お前の脳裡にすぐうかぶ、一風かわった態度の囚人は、いなかったか？」

「へい」

嘉助は、そろえた膝へ、視線を落して、じっと、まばたきもせずにいたが、

「あいつ……、もしかすれば、あいつが――」

と、呟いた。

「あいつ、とは？」

「倉蔵という、もう七十に手のとどく爺さんが、居りました。七年ばかり前まで、牢名主を、二十年もつとめた、と申して居りましたが」

「倉蔵？　……うむ。たしかに、牢名主をつとめていた年寄がいたな」

喜八郎は、思い出した。

「六十を越えたので、自分から希望して、島送りになったのであったな。その倉蔵が、どうした？」

「志村の旦那の小屋へ、時折り、麦や粟を、とどけてくれて居りました。倉蔵爺さんは、志村の旦那が、気に入ったようでございました。……御赦免船が、島をはなれる時、見送ってくれたのは、あの爺さんだけでございます」

それだけきけば、べつに、どうという疑わしいふしはない。

喜八郎は、腕組みして、しばらく、沈黙した。

「旦那――」

嘉助は、思いつめた表情で、
「志村金吾の旦那は、どうなったのでございましょう?」
と、訊ねた。
「行方が不明になったままだ」
「あの旦那なら、なにか、島で、思いあたることがあるかも知れません。ぜひ、さがし出して下さいまし。あっしも、お逢いしとうございます。おねげえ申します」
嘉助は、両手をついて、頭を下げた。
「お前に、たのまれなくとも、さがし出さねばならぬ」
喜八郎は、こたえた。
豆六が、姿をみせたのは、その折であった。
喜八郎は、嘉助をひきあわせてから、
「お前は、倉蔵という牢名主を知って居るだろう?」
と、訊ねた。
「知っている段じゃありませんや。あれは、牢屋敷はじまって以来の牢名主でござんしたね。あの爺さんのおかげで、牢内は、お役人を手こずらせるような面倒は、ひとつも、起りませんでしたからねえ」

小伝馬町牢屋敷の獄屋は、東西大牢二房、東西二間牢二房、百姓牢、揚り屋各一房、揚り座敷四房、そして女牢があった。
大牢というのは、有宿者の囚人を拘禁するところであった。二間牢というのは、無宿者の囚人を拘禁するところであった。
したがって、二間牢は、俗に「無宿牢」と称ばれていた。
幕府が、犯罪内容によって、囚人の収容区別をせず、有宿者と無宿者を分けて、拘禁したのは、理由があった。
無宿者には、破落戸、無職など、きわめて凶悪な徒が多く、有宿者とは同居させられなかったのである。
大牢、二間牢を、東西の二房に分ったのは、憎悪怨恨を抱く者同士が、入牢させられた時、これを遠くへだてておく必要があったからである。
大牢、二間牢は、いずれも雑居房であった。独房はなかった。
そこで、町奉行所では、囚人の中から、才幹と人望のある者をえらんで、牢名主に任命して、房内の自治をなさしめた。
揚り屋、というのは、御目見得以下の旗本、御家人、大名の家臣、そのほか士分の

取扱いを受ける出家、山伏、医師などを収容するところであった。

揚り座敷は、御目見得以上の旗本、それに準じた格式の高い僧侶などを収容するところであった。その構えは、勿論、大牢や二間牢、百姓牢よりも、はるかに贅沢につくられていた。

入牢は、町奉行の裁決した入牢証文によって、為される。

入牢証文は、囚獄・石出帯刀に宛てた、町奉行の花押のついた公文書である。

奉行所から、同心が、入牢者を連行して来ると、牢屋同心の首席である鎰役が、入牢証文と身柄をひきあわせ、同一人であることをたしかめた上で、受けとった。

入牢者は、縄を解かれ、素裸にされて、頭髪、口中までとりしらべられる。この際、金銭、刃物、筆紙類は、没収されるが、実際には、衣類に縫い込んである小判などは、黙って見のがされた。

とりしらべにあたる張番（牢屋下男）が、知って知らぬふりをしたのである。

というのは、その検査にあたって、発見した金銭を、見廻り与力にさし出せば、それは、奉行所に没収され、張番のふところには入らぬ。ところが、黙って見のがしてやると、入牢してから、牢名主が、これを取りあげる。すると、牢名主から、張番に、こっそり、配当がある、という次第であった。

衣類をかついだ素裸の入牢者が、牢内へ、突き込まれると、

「それっ！」

とばかり、囚人どもが、躍りかかって、凄じい乱打をあびせた。

但し、入牢者が、前科者で、そのしるしの入墨が施してあると、牢名主は、

「まけてやる」

と、云って、囚人どもに手出しをさせなかった。

牢名主は、牢内のしきたりを、入牢者に申しきかせる。娑婆では、とうていきくに堪えないような卑猥な俗語をつないだ「しゃべり」であった。

牢内に於ける限り、牢名主に、絶対の主権があった。

毒を以て毒を制する政策によって、採られた牢名主制は、牢屋敷の外では想像もつかぬ残忍苛酷なしきたりをつくった。

牢名主の下に、添役、角役、二番役、三番役、四番役、五番役、本役、本役助、詰番、詰番助、五器口番などがいて、それぞれの役を分担していたが、いわば、牢名主の股肱腹心といったところで、憎んだ囚人に、ありとあらゆる制裁を加えた。

牢名主は、牢屋下男（張番）と結託しているので、酒でも、料理でも、煙草でも、自由に入手することができたし、博奕も公然と行わせた。

凶悪な破落戸が考え出した私刑、であった。およそ人間の思いつく最も残虐きわまる制裁であった。

その七

世人の目には絶対にふれない、完全に隔離された獄舎に於ける私刑というものが、いかに残忍無慚な行為であったか。

張番の牢屋下男は、囚人によって、買収されているから、獄舎内では、どんな行為でも、平然とできたのである。

八代将軍吉宗は、獄舎内の残虐行為を耳にして、

「その罪の定らざるほどは、いまだ罪人にあらず、いかにもいたはりて、食物などよくととのへてあたふべし」

と、下達したが、その効果はあらわれなかった。

寛政年間にも、老中松平定信は、獄舎内の悪弊をかぞえあげた風聞書を、牢屋敷に下して、その答弁をもとめた。すると、役人たちは、狡猾に、弁解して、その事実を否定してしまい、定信は、ついに、その惨状を知り得なかった。

その私刑には——。

「茶樽」というのがある。牢内備えつけの水桶を、二人で持ちあげて、俯伏させた囚人の背中に、どすんと落すことをいう。

「きめ板」と称するのがある。長さ二尺、幅五寸ばかりの板で囚人の背中を乱打するのである

「詰蓋」というのがある。便器の蓋で、囚人の二の脚をなぐりつけるのである。

「汁留」と称するのがある。数日間、汁その他塩気のものを、一切食わせないのである。

寒中に、四斗樽の中に水を満たして、その中に沈める、大小便を食わせる、素裸にして全身にぬか味噌をぬりつける、仰臥させておいて、かわるがわるその腹へ尻餅をつかせて死にいたらせる——かぞえたてれば、きりのないほどの私刑が、一年中、小伝馬町牢屋敷内では、くりかえされているのであった。

囚人の生殺与奪の権は、牢名主の手ににぎられていた。牢名主は、専制君主であった、といえる。

たとえば、一人の囚人を憎んで、殺してやろう、と思いたったならば、十日ばかり前から、その囚人が病気である旨を、申し立てておく。そして、いずれかの手段によ

って、死にいたらしめればよいのであった。牢屋下男は、買収してあるから、躰に傷を負わせても、見て見ぬふりをしてくれる。

したがって、牢名主の人柄によって、獄舎内の状況は、非常にちがったものになった。

いま、大島にいる倉蔵という男が、牢名主であった期間は、その二間牢は、私刑によって殺された者は、一人もなかった、という。

牢内への差入れは、かなり寛大な許可であったので、牢屋敷の裏手の通りには、牢見舞いにやって来た人々が需める衣服、手拭い、塵紙、食物などを差し入れる店が、軒をならべていた。

有宿者が入っている大牢には、この差入れ物が多く、しぜん、空気もやわらいだものであったが、無宿者の入っている二間牢には、ほとんど差入れ物がないので、空気は険悪になり、つい、殺気立つと、憎悪のあまりの私刑が多くなる、という次第であった。

ところが——。

倉蔵には、どこからともなく、何者とも知れず、三日に一度、たくさんの食物の「届け物」があった。倉蔵は、それを、公平に、囚人全員に分配して、牢内の空気を

平穏なものにすることに努めたのであった。

「豆六、お前は、牢屋下男で、懇意なのが、二人や三人は居るだろう?」

喜八郎は、訊ねた。

「へい、居りやすが——」

「倉蔵に、どんな届け物がされたか、また、差し入れたのがどんな奴であったか、きいて来てもらおうか」

「承知しました」

豆六が立とうとすると、喜八郎は思いついて、

「それから、倉蔵が牢名主をつとめていた期間に、なにか、変った出来事でも起らなかったか——そのことも、きき出すのを忘れるな」

「合点、承知!」

豆六は、とび出して行った。

喜八郎は、再び、嘉助と向い合うと、

「島では、倉蔵は、裕福なくらしをして居ったか?」

と、訊ねた。

「裕福、というほどのことでもございませんが、小商人の隠居ぐらし程度には、のんびりして居た様子でございます」

「倉蔵には、志村金吾やお前のほかに、つきあっていた男が、いたか？」

「いえ、一人もいなかったようでございます」

喜八郎は、そのほか、べつに重要でもなさそうな事柄を、三つ四つ質問してから、嘉助に、次の間で、やすんで居れ、と命じた。

「てまえは、お世話様になっても、よろしいのでございましょうか？」

嘉助は、怯ず怯ずと、喜八郎を視やった。

「この家以外に、お前が、目下その五尺の身を安心してやすませるところは、あるまい」

「へえ――」

嘉助は、うなだれた。

「明日までには、お前がかくれる場所を、考えておいてやろう」

「有難う存じます」

嘉助を、次の間に移してから、一刻ばかり後、豆六が、急いで、帰って来た。

「恰度うめえことに、張番をつとめあげて、いまは、一人娘の嫁ぎ先の湯屋で、番台に坐っている爺さんが居りやした。倉蔵が牢名主をしていた二間牢の係になって、十年以上も、つきあって来た爺さんですから、ずいぶん、くわしゅうございました」

豆六は、きき出したことを、報告した。

倉蔵への差入れ物は、べつに、珍しい品はなかった。冬は綿入れ、夏は帷子の衣服とか、さほどぜいたくではない料理、甘酒、それから、書物などであった。

「どんな書物であったか、きいたか？」

喜八郎は、書物を差し入れさせる牢名主は珍しい、と思った。

揚り屋とか揚り座敷の武士や僧侶は、書物の届け物をもとめるが、大牢、二間牢で、それを差し入れてもらう囚人は、きわめてまれであった。ゆっくりと、本を読む雰囲気など、みじんもなかったのである。

「三国志とか、水滸伝とか、そんな読み本だったようでござんす」

「差入れの中には、勿論、小遣い銭も含められていたろうな？」

小遣い銭は、一箇月五百文を限度として、差入れを許されていた。享保の頃までは、差入れの銭は、まず、牢名主に渡されていた。しかし、牢名主が、着服して、本人に渡さないので、いまは鎰役（牢屋同心）があずかって、必要の都度に、渡すようにしていた。

その銭は、日常用品や駄菓子などの買物についやされていた。

囚人が、欲しい品を、牢屋外鞘のキメ板に記しておけば、牢屋下男が、買って来てくれるのであった。

「倉蔵に差し入れられた銭は、さだめの五百文だけだった、と申して居りました」

「誰(た)が、差し入れたか、その爺さんは、知らなかったか？」

「若い女が二人、かわるがわる現れて、差し入れたそうで……。しかし、女たちは、誰かに使われている者らしく、ただ、命じられるままをしている様子だった、と爺さんは云って居りましたね」

「お前が、きき出したことだけでは、倉蔵はますます立派な人柄だった、ということになるな」

「あっしのきき出しかたが、下手くそだと仰言るんで――」

「そうは云って居らぬ。もし倉蔵が、悪党だったのなら、尻尾をつかまえさせぬあっぱれな奴だ、というわけだ」

「どうも、あっしがきいたところでは、倉蔵は、なにかのまちがいで、入牢しちまった善人ということになりますよ」

「牢名主をつとめていた期間に、変った出来事は起って居らぬか？」

「それですがね、八年前に、牢内に熱病が流行(はや)ったことがありましたねえ。旦那、おぼえておいでですか？」

「うむ、……百人以上が、ばたばたと死んだな」

「倉蔵が、牢名主をつとめていた二間牢は、一人のこらず、死んで居ります」

「ふむ。倉蔵一人だけが、生き残った、というわけだな」

「へい、そうなんで。……変った出来事といえば、それぐらいでさ」

「倉蔵一人だけが、生き残ったか。たしかに変った出来事だな。……八年前というと、それから一年経たぬうちに、倉蔵は、自分から、願い出て、島送りになった」

――そこらあたりが、くさい！

喜八郎は、胸中で、呟いた。

しかし、豆六が調べた限りでは、倉蔵に怪しむべき所業は、何もないのであった。

無宿牢を、長い歳月、平穏に治めてくれた功績者以外の何者でもないのである。

「旦那！」

豆六が、真剣な面持で、云った。

「あっしが、ひとつ、大島へ行って参(めえ)りますか」

「……」

「倉蔵に会って、なにか、かくしていることを、吐かせてみては、いかがなもので——？」

「吐くまいな」

「あっしを、よほど、見くびっておいでだ」

「そうではない。もし倉蔵が、悪党なら、二十年間も善人の仮面をかぶり通した一筋縄ではいかぬしたたか者だ。尋常一様の訊問で、泥を吐く筈がない。お前が、大島へ渡るのは、無駄だな」

「へえ——」

豆六は、不服げに、首を振った。

「それよりも、当時の牢屋下男に、あと幾人か、あたってみるがよい」

喜八郎は、命じた。

牢屋下男、といっても、ただの下男ではなかった。牢屋敷には、四十数人の下男がいたが、かれらは、御抱席の御家人であった。つまり、二刀をたばさむことのできる身分を与えられていた。

抱席というのは、御家人の最下級で、一代限りであった。その職にあるあいだは、御家人として待遇されるが、非役になると、御家人の身分を剝がれた。食禄は、一両二分一人扶持であった。

町人職人は、三両一人扶持のさむらいを、あなどって、サンピンとあざけっているが、牢屋下男の御家人は、そのサンピンの半分にも過ぎない食禄をもらっていたのである。

したがって、囚人から袖の下を取ったり、賄料をごまかしたり、差入れ物を横取りしたり、小さな悪事を犯したのである。

ろくな奴がいなかったのも、いたしかたがなかった。囚獄の悪弊は、牢屋下男によって生じた、ともいえる。

同じ頃合——。

志村金吾は、影の男女吉という武家屋敷専門の盗賊のかくれ家に、いた。

南本所番場町の横丁に、目立たない駄菓子屋があった。そこであった。

おもてから眺めると、平家であったが、かくし二階が設けてあった。

金吾は、そのかくし二階で、男女吉とさし向っていた。

「やっと、思い出しましたぜ、旦那——」

男女吉は、云った。

「何を思い出した？」
「あっしが、旦那のお名前を、以前どこかできいたことがある、と申し上げましたね。それでさ。旦那は、吟味鬼の島村修理之丞に、とりしらべを受けて、島送りになった御仁でござんすね」
「うむ――」
「あっしも、ちょうど、その頃、小伝馬町へほうり込まれていたんでさ」
「そうか」
「旦那は、たしか、吟味鬼のために、あやうく、打首にされるところでござんしたね」
「ああ、そうだった」
「あっしも、下手をすりゃ、獄門になるところだったのでさ」
「うまく、まぬがれたものだな」
「旦那、世の中には、どこにだって、表と裏がありますぜ」
「……」
「吟味鬼だって、人間でさ。あっしは、情婦に命じて、吟味鬼に、こっそり、三百両、贈ったんでさ」

「あの男が、賄賂を取ったというのか」
「贈った当人が、云うんだから、まちげえはありませんや」
「そうか。あの男が！」
「旦那は、もう吟味鬼を殺った下手人に、見当がついておいでですね」
「わたしを監禁した屋敷の、あの女性の腹心である茨木頼母とかいう男のしわざか？」
「十中八九までは、その見当は、はずれては居りませんや。……あっしが、あの屋敷に忍び込んだのも、吟味鬼が、あのお姫様に、こっそり、逢いに来たのを、見とどけたからなんでさ」
去年の暮もおしつまったある宵のことであった。
男女吉は、偶然、吟味鬼の島村修理之丞と、街なかですれちがった。
その時、ふっと、なんとなく、そのあとを尾けてみることにした。
島村修理之丞が、入って行ったのは、あの屋敷であった。
男女吉は、尾行ついでに、屋敷内に忍び込んだが、ふつうの大名旗本屋敷とは、建物の構造がちがっていて、天井裏を匍いまわるのに、時間を費やした。
島村修理之丞と女あるじが対座している座敷の上に辿りついた時には、密談は終っ

ていた。

「しかし、あっしは、これは、ただの会見じゃねえ、とピン来て、それから、時どき、あの屋敷に、忍び込んで、様子をさぐっていたんでさ」

その八

昨日は、また冬へ逆戻りするのではないか、と首をすくめていたのが、一夜明けると、急に、ぽかぽかと、日向では肌がじわっとなるくらいの狂い陽気になった。

その日の夕刻、一艘の船が、新大橋の下に入って、灰会所わきの石垣に着いた。

忙しい日で、いつもの倍の船が着いていて、揚げ荷、積み荷に、人夫たちの懸声が、絶え間なく、ひびいていた。

どこからやって来たともないその船から、降り立ったのは、一人の老人であった。

「あれァ、御赦免船みてえだが、ちがうのかね」

人夫の一人が、けげんそうに、小首をかしげた。

「冗談じゃねえや。爺さんが一人、降りただけじゃねえか。役人の姿も見かけねえぜ」

仲間が、ばかばかしげに、云った。

その船からの揚げ荷はなかった。

河岸道に降り立った老人は、舳先から見送る船頭に、いくども鄭重に頭を下げておいて、歩き出した。

常夜燈の蔭には、豆六と壱太が、ひそんでいて、

「……」

「……」

顔を見合せた。

老人の足どりは、かなりのろかったので、尾行は、楽であった。

「旦那のカンが当っているか、いねえか——ここは、千番に一番のかねあいだぜ」

豆六が、壱太に、小声で云った。

「江戸町奉行所随一の同心が、盛ったお膳立てだぜ。敵が、よだれをたらして、食いつくのは、あたりめえよ」

壱太は、ひとっぱし兄貴ぶりの口をきいた。

老人は、大島へ流されていた倉蔵であった。

倉蔵を、今宵、江戸へもどり着かせたのは、大和川喜八郎のトリックであった。

すなわち——。

吟味鬼・島村修理之丞の密書を携えた使いを、こっそり、大島へ遣したのである。

倉蔵は、島村修理之丞が暗殺されたことを、知らない。

首尾よく事がはこんだゆえ、この使いの者の迎えの船で、江戸へ還るべし。

その内容を、倉蔵が、疑うか疑わぬか、喜八郎は、賭けてみたのである。

吟味与力の島村修理之丞が、内密でさし向けた船であるから、おそらく、倉蔵は、疑わずに乗るであろう、と予想したのである。

はたして——。

倉蔵は、その船で還って来た。

島村修理之丞の密書に応えて、江戸へ還って来たことは、倉蔵が、このたびの謎の事件で、主役をつとめていることになる。

ゆっくりと、倉蔵は、新大橋を渡って行く。

豆六と壱太は、そのあとを尾けた。

やがて——。

倉蔵が、立ったのは、八丁堀の吟味与力の屋敷であった。

島村修理之丞が暗殺されると、嗣子がなかったので、改易になり、一家は、ひきはらって、いまは、別の吟味与力が、住んでいる。

しかし、そのことは、倉蔵は、知らぬ。

「ごめん下さいまし」

潜り戸を押すと、案内を乞うた。

「なんだ？」

「倉蔵が、戻って参ったとお取次ぎ下さいまし」

門番は、老人がやって来ることを、あらかじめ主人から申し渡されていたような様子で、

「案内いたす」

と、みちびいた。

「おそれ入ります」

倉蔵は、卑屈なくらいの物腰で、あとに従った。

倉蔵が、通されたのは、書院であった。

——地獄の沙汰も金次第で、もとの牢名主も、書院に通されたか。

倉蔵の汐焼けた顔には、皮肉な薄ら笑いが刷かれた。

倉蔵は、それから、半刻近くも、待たされた。
廊下に跫音が、近づいて来た。
倉蔵は、崩していた膝をなおした。
入って来たのは、島村修理之丞ではなかった。大和川喜八郎であった。
倉蔵は、喜八郎を知らなかった。
喜八郎は、小伝馬町の牢屋敷にいて、何かを調査していたのである。そこへ、壱太がすっとんで来て、倉蔵が、島村修理之丞の旧屋敷を訪れた、と報せたので、急いで、こちらへ、まわって来たのであった。そのために、半刻を必要とした。
「倉蔵だな」
「へい」
倉蔵は、頭を下げた。
「わたしは、町方同心大和川喜八郎だ」
「へ、へい――」
倉蔵は、不審げに、ちらと、上目越しに、喜八郎を、見やった。
「なぜ、吟味与力殿が、現れずに、町方同心が現れたか、いぶかっているようだな」
「……いえ、その――島村様に、お目にかかりたく存じまして……」

「島抜けして、戻って来たわけだ、お前は」
「島抜けなんて……、島村様が、船をさしまわして下さったので――」
「面妖しいな」
喜八郎は、微笑した。
「と仰言いますと？」
「死人が、お前を迎えに、使いをやるはずがない」
「えっ⁉」
「吟味与力島村修理之丞は、先般、何者かに、牢屋敷門前で、暗殺された」
「げっ！」
倉蔵は、血相を変えた。
「うろたえるな、倉蔵！　お前も、二十数年、猫をかぶり通して来た悪党ではないか。往生際は、いさぎよいものにしてもらおう」
「……」
倉蔵の膝に置いたこぶしが、わなわなと、ふるえた。
「吟味鬼とお前が組んだ大仕事を、さぐりあてるのは、ひと苦労したぜ。どうやら、針孔が通ったので、お前を、島から呼び戻したのだ。もうろくしたようだな、倉蔵。

……吟味鬼の密書を、受けとって、すこしも、疑わなかったらしい、尤も、お前は、吟味鬼からの通報を、今日か明日か、と首を長くして、待っていたのであろうが……」

「……」

「お前のへまは、先般ご赦免になった囚人七人のうちの一人の着物に、一枚の絵図面を、こっそり縫い込んでおいたことだ。……お前は、知らなかったのだ」

「……」

「御赦免船が、灰会所わきの船着場へ、戻り着いた時、赦免者が、下帯をはじめ、衣類をぜんぶ、着かえさせられる、というしきたりは、昨年から、節約令によって、廃止されたことをな」

「う、うっ！」

倉蔵は、呻いた。

「お前は、脱ぎすてた赦免者の着物は、牢屋敷の倉へ、しまわれる、と思い込んでいた。……お前は、絵図面を、吟味鬼に渡せば、自分の取分がなくなる。宝を吟味鬼に一人占めにされるおそれがある、と考えて、そんな狡猾な手段を思いついたのであろう。……お前は、絵図面を、赦免者の一人嘉助の着物に、ひそかに縫い込んでおいた。そのために、七人の赦免者のうち、五人までが、殺された。十五夜御殿の茨木頼母の凶刃によってな――」

「……」

「茨木頼母は、相当な頭脳の切れ者だ。……お前が、吟味鬼から、絵図面を送って寄越さねば、宝の在処が判らぬ、とつよく強請された、ときくや、茨木頼母は、お前がどうやって、江戸へ絵図面を、送りとどけるか、思いめぐらした。よもや、すなおに、吟味鬼まで、送りとどけはすまい、と考えた。……手段がひとつある。赦免者の着物へ、着ている当人に知らせずに、縫い込んでおく。そうすれば、絵図面は、牢屋敷の倉におさまる。こんな安全なかくし場所はないわけだ。それから、吟味鬼が、いよいよ、準備万端ととのえ終った時、お前は、江戸へ還って来て、絵図面を、その倉から取って来て、吟味鬼に渡す寸法だ。……茨木頼母は、そう看破した。炯眼（けいがん）というべきであったな。ところが、悪事というやつは、とかく、ぐれはまになりやすい。茨木頼母は、嘉助だけを、殺して着物を剝ぐことに、失敗した。そして、皮肉にも、嘉助は、わたしの家へ、舞い込んで来た、という次第だ」

「旦那！」

倉蔵が、はじめて、口をひらいた。

「そこまで、お調べがゆきとどいていなさるのなら、しらばくれても、はじまりません。……しかし、あっしのことを、どうして、怪しいと、目をおつけになったのか、それを、うかがわせておくんなさい」

「お前だけが、島で、志村金吾と嘉助に、親しげに近づいている。そのことだな。……そこで、念のために、お前のことを調べてみた。お前は、牢屋敷はじまって以来の、立派な牢名主だった。立派な牢名主、というのが、かえって、怪しい、と睨んだ。それから、八年前、牢内に、熱病が流行った時、二間牢で、お前だけが、生き残った、というのも、臭いと思ったな」

「成程――、これは、茨木頼母以上の炯眼でございますな」

「お前は、牢名主の権力を利用して、秘密の仕事を、二間牢の囚人どもにやらせた。囚人どもに、その秘密をしゃべられるのは、まずいので、熱病をいい機会に、一人残らず、毒殺してしまった。そうだな？」

「その通りでございます。おそれ入りました」

倉蔵は、頭を下げた。

次の瞬間――。

その手に、匕首がひらめき、喜八郎の胸を襲った。

「たわけっ！」

喜八郎は、苦もなく、匕首をたたき落して、

「宝を失ったいま、お前に、なんの生甲斐がある。じたばたせずに、獄門にかけられたらどうだ！」

翌日――。

喜八郎の家には、嘉助と豆六がいた。

「びっくり、じゃねえ、ひっくりだあ。あとへ、けえる、がついて、あんまりのご公儀の腐りはてかたに、げろげろの、げろが出やす」

豆六は、ずけずけと云った。

喜八郎は、微笑して、

「十万両が、ぶじに、千代田城の御金蔵にもどったが、……十万両は、個人にとっては、夜空の星のように手のとどかぬ金だが、公儀にとっては、焼石に水だな」

「その十万両で、ご政道がたちなおるものなら、話が別ですがね」

豆六は、首を振った。

この奇怪な事件の発端は、前将軍家の息女が、茨木頼母という旗本書院番頭を使っ

て、江戸城金蔵から、十万両を盗み出したことであった。
姫君は、その十万両のかくし場所に困った。
そのうちに、何者とも知れぬ盗賊団に、掠奪されたのであった。
しかし、盗賊団といえども、十万両の大金を、おいそれと、費消することはできず、これを、一時隠匿することにした。
その隠匿場所が、意外であった。
小伝馬町牢屋敷には、秘密の地下道が、設けてあった。
その地下道の、どこかに、埋められて、巧みに壁を塗られてしまった。
この事実を、吟味鬼の島村修理之丞が、なにかのひょうしに、知った。
島村修理之丞は、十五夜御殿という前将軍家息女の住む屋敷を、ひそかにおとずれて、さぐりを入れているうちに、盗賊団の首領が、二間牢の牢名主をしている倉蔵、と見当をつけた。
島村修理之丞は、倉蔵と手を組むことにした。
倉蔵は、隠匿場所は、絵図面にしてある、と云ったが、どっこい、たやすく、それを、島村修理之丞に渡しはしなかった。
そのうち、自分の方から願い出て、島流しになってしまったのである。

島村修理之丞は、あせって、こんどは、十五夜御殿の茨木頼母と、結托して、十万両を掘り出そうと企ったのである。
その結果は——。
茨木頼母に、暗殺される因果応報の目に遭うたのであった。

「志村金吾の旦那は、いま頃、どこにひそんでおいでなんですかねえ。もう、濡れ衣はかわいたし、大道を大手を振って、歩いてもかまわねえのに……」
豆六が、云った。
「志村金吾は、影の男女吉、という夜働きの家に、居候になって居る」
喜八郎が、どこからどうして、つきとめたのか、笑い乍ら教えた。
「へえ、そうですかねえ」
「どうやら、犯科者には、盗人の家の方が、研師のところよりも、居心地がよいらしい。しばらく、そこに、ごろごろさせておいてやろうではないか」

解説

清原康正

戦後の時代小説が生み出した剣のヒーローといえば、ヒーローの独特の存在感とエピゴーネンを数多く輩出させた影響力から見て、何といっても、柴田錬三郎が創造したニヒル剣士・眠狂四郎が筆頭にランクされる。その柴田錬三郎が入院先の慶応病院で急逝したのは一九七八年六月三十日午前二時四十五分のことであった。一九一七年三月二十六日の生まれだから、享年六十一歳。その日の新聞各紙の紙面には、あまりにも早すぎる死を惜しむ多方面からの声が寄せられていた。

それからもうすでに二十七年、四半世紀以上が経つ。この間の時代状況の変遷、とりわけ、二〇世紀の世紀末の混沌と不安とを引きずったままに新世紀を迎えてからの変化のありようもあって、時代小説界の分布図も大きく変わってきている。だが、柴田錬三郎の作品が今も次々と文庫化されていることに注目する必要があろう。その死

後、二十七年経っても、なお、次々と文庫作品が刊行され続けている作家という点からも、稀有な存在となっている。

なぜ、今も、柴田錬三郎の諸作品が現代読者を惹きつけてやまないのか？

ずばり、一言でいえば、滅法、面白いのである。四半世紀以上も前の作品というと、現代社会のスピード感には追いつかないだろうと思われるかもしれない。そんな危惧を、柴田錬三郎の作品は完全に払拭するのである。

柴田錬三郎は、文学の基礎は「エトンネ（人を驚かすこと）」にあるとして、「小説というものは、元来、嘘をつくものである。嘘を、まことらしくみせているだけで、どんなに私生活に忠実そうな私小説だって、やはり嘘である」という揺るぎない信念を持っていた。嘘、つまりは、自由奔放にして円転滑脱な想像力と創造力である。柴田錬三郎にとって、「根も葉もある嘘」こそが小説であり、そこに「花も実もある絵空事」を求める執筆姿勢を一貫して崩すことがなかった。

徹底した虚構派であったが、それが単なる荒唐無稽という底の浅い面白さに終わってはいないところに、柴田錬三郎の凄味を感じさせるのである。その諸作品の根底には、独特の死生観をのぞかせていた。さらには、そこから派生する虚無感が、それぞれの主人公たちに、孤独の極限の姿、既成のモラルに抗する姿、自虐の精神を保持す

る姿など、深みのある陰影をもたらせる要因ともなっていた。

柴田錬三郎は正統的な伝奇ロマンの系譜を受け継ぐ作家であるのだが、こうした要因をオブラートに包んで作品の核の部分に仕込んで、読者を楽しませてくれたのである。しかも、その豊饒なロマンの世界には、柴田錬三郎が生きて見つめてきた大正から昭和の戦前と戦後の日本社会への冷徹な観察眼が行き届いていることが感じられる。これも大きな魅力となっていた。

四話の連作からなる捕物帳のスタイルをとった本書からも、こうした特色、面白さを堪能することができる。江戸町奉行所の隠密廻り同心・大和川喜八郎が江戸の町で起こる難事件に名推理で挑み、さまざまな形の悪に敢然と立ち向かうストーリーの核の部分に、柴田錬三郎の社会と人間に関する冷徹な観察眼を見出すことができるからである。

第一話「南蛮船」では、大和川喜八郎は美人と評判の女たちが何者かに拉致される事件を追う。この不思議な事件が起こる前に、主人公の設定が先ず描写される。

物語は、「まことに、奇妙な家であった」という書き出しで始まっている。わずか三部屋という狭い家に、三十二歳の貧乏同心・喜八郎と「上は十四歳から、下は六歳まで」「いずれも両親の顔を知らぬ」少年たちが九人も同居している、という設定で

読者の興味を惹きつけてしまうのである。

食い盛りの少年を九人も抱えた喜八郎は、三十俵二人扶持の貧乏同心である。金に換算して年十二両。「女中でさえ、年三両の給金」なのに、これでは暮らしがつく道理はないのであったが、そこが、面白いところで、「義理人情と心意気の尊重される江戸の市井」では、「この私設孤児収容所には、食いきれぬほどの品ものが贈られるあんばい」と、柴田錬三郎は江戸っ子たちの心情をとらえている。この家へやって来た順番に、壱太、弐太、参太、四太……九太と名づけられた少年たちの相互扶助の暮らしぶりと秩序のありようも面白い。これらの少年たちが、喜八郎が手がける難事件の探索とどう関わっていくか、どんな働きを示すか、これも物語の展開を楽しむ上で重要なポイントともなっている。

そして、物語の進展に沿って、江戸町奉行所、小伝馬町の牢屋敷、人口が百万を越す江戸の町のことなどが時代考証も含めて描写されていく。喜八郎や少年たちの活躍を通して、柴田流解釈によるこうした江戸情報に接する面白さもある。例えば、町奉行に関しては、「都知事、警視総監、裁判所所長を兼ねた存在」というのはよく言われていることなのだが、この三つに柴田錬三郎は「東京駅・上野駅の駅長と、そして自衛隊の隊長を兼ねているようなもの」と加えている。こうしたちょっとした描写の

背後に、柴田錬三郎自身は「雑書の類」と称する史料・文献の渉猟のあとをうかがうことができ、物語の展開を楽しむうちに、結構な江戸通になっていることに気づかされるのである。

事件の探索を始めた喜八郎は、夜明けの往還で虚無僧にいきなり斬りつけられる。「平常は、飄々乎として、とらえどころのない挙措動作」を示す喜八郎だが、「剣を把っては、同心はおろか、幕臣中、右に出る者がないくらい、異常なまでの強さ」という設定の剣の腕前のありようも、四話を通してたっぷりと描き込まれている。また、少年たちの存在に加えて、内与力の佐野主膳や岡っ引の豆六の存在も、本書の大きな魅力となっている。「生来片足が不自由であったが、奉行所随一の利け者」の佐野主膳は、『柴錬捕物帖　岡っ引どぶ』に登場した盲目の与力・町小路左門の魅力と同等のものがあり、こうした脇の人物の創造の巧みさも、柴田錬三郎が得意とするものであったことを痛感させる。

この第一話では、天保のこの時代に、呂栄など南洋諸州の日本人町に今なお存在している日本人たちのある企みを、喜八郎が解き明かしていく。拉致されていた同僚の妻を助け出したところで、この第一話は終わっており、事件の具体的な解決は明示されてはいない。だが、「面倒なものだ、人間が生きるということは――」という喜八

郎のラストの呟きが、事件が持つ重さを象徴している。

第二話「埋蔵金十万両」では、巾着切・白魚の吉が尾羽打ち枯らした浪人者の懐中からすり取った純度の高い小判に疑問を抱いた喜八郎が探索を開始し、甲金十万両の争奪をめぐる事件に巻き込まれていく。

喜八郎を終生の宿敵と狙う浪人者・天王寺左膳が事件にからんでくる。この左膳との対決の模様を通して、喜八郎が二十歳の時に鹿島神道流の道場に入門したことや左膳と決闘したことなど、喜八郎の過去が明かされてもいく。さらには、七太と六太が相次いでさらわれ、甲金探索から手を引かぬと、小童が次々と行方知れずになるとの脅迫状が届く。

莫大な甲金の埋蔵場所をつきとめた喜八郎が事件の黒幕と対峙するまで、ひねりにひねった設定で謎解きのプロセスを楽しませてくれる。喜八郎と左膳の決闘も抜かりなく用意されている。ラストで、喜八郎は事件の決着を意外な形でつける。物語は喜八郎がおだやかに語りかける場面で終わっているのだが、喜八郎の優しさ、人柄がよく象徴されたセリフとなっている。

第三話「お家騒動」では、先ず、正月元旦の湯屋で喜八郎が二十歳ばかりの眉目ひいでた長身の青年武士と将棋をする設定から始まる。その青年武士は朱桜の刺青をし

ていた。そして、備中足守藩二万五千石の木下淡路守の初登城の駕籠の中で首なし死体が見つかるという事件が起こる。

佐野主膳の命令で探索に乗り出した喜八郎は、松本竜太郎を名乗る青年武士が自宅で刺客に襲われたところを助け、首なし死体が木下家出入りの医師と判明したことを告げて、この人騒がせな珍事についての自分の推理を青年に述べる。青年の本名は木下隼人で、木下淡路守とは双生児の弟にあたるという秘密を、隼人が喜八郎に明かす。江戸家老が企んだお家騒動であったが、この物語も、ラストにひとひねりがなされていて、哀切な母性という思わぬ結末が用意されており、柴田錬三郎のストーリー展開のうまさを楽しむことができる。

第四話「流人島」では、喜八郎は伊豆大島から御赦免船で江戸へ還って来た七人の男のうち五人が次々と殺されていく事件の謎を追う。あとの二人、浪人者・志村金吾と深川の一流料亭の板前だった嘉助と、喜八郎は遠島の際に関係していた。金吾と嘉助を通して、江戸時代の遠島のことが描出されていく。

小伝馬町牢屋敷の吟味与力・島村修理之丞が斬殺される事件が起こる。金吾は尾行していた浪人者二人に目隠しされて連れ込まれた屋敷で、能面をかぶった女人から、わが世直し大明神党に入ってもらいたい、ともちかけられる。この女あるじと腹臣の

茨木頼母との会話から、七人のうちの誰かが何かを島から所持して還ったことが分かる。金吾の行方不明と五人殺しを知った喜八郎と豆六の探索が始まり、江戸城金蔵から盗み出された十万両の埋蔵場所を記した絵図面の争奪戦と醜い人間関係が、この奇怪な事件の背後に存在することを突き止める。金吾の設定に加えて、金吾を助ける影の男女吉という武家屋敷専門の盗賊のキャラクターも、物語の興趣を盛り上げるものとなってる。

豆六が「さむらいのたましい、として、腰に佩びるしろもの」と金吾に差料を用意したところ、金吾は「これは、人を斬る道具だ。武士の魂、というのは、理窟にすぎぬ」「刀を腰にさすと、また人を斬るにちがいないから、竹光でよい」と言う。刀を「人を斬る道具」とする金吾のこの考え方は、眠狂四郎のそれにダブルイメージすることもできる。

本書は、「週刊読売」の一九六九年九月十二日号から翌年五月八日号にかけて連載され、一九七〇年八月に読売新聞社より刊行された。柴田錬三郎の捕物帳としては、一九六七年五月から翌年九月にかけての新聞連載『柴錬捕物帖　岡っ引どぶ』がある。こちらは大江戸八百八町に起こる怪事件を、もと武士で暗い過去を持つ岡っ引・どぶが探索する、ハードボイルドタッチの捕物帳であった。本書の第一話の紹介で触

れたように、盲目の与力・町小路左門の存在が注目されたのだが、どぶ一左門と喜八郎一主膳、この二組の存在は、柴田錬三郎の捕物帳作品の中で屹立した存在といえる。この佐野主膳はじめ、岡っ引・豆六、巾着切・白魚の吉、青年武士・木下隼人、島帰りの浪人者・志村金吾、もと板前の嘉助、影の男女吉、そして壱太から九太までの九人の少年たち……、いずれも立派に主役を張るだけのキャラクターであることも、本書の魅力の一つとなっている。

また、『柴錬捕物帖　岡っ引どぶ』の第一話「名刀因果」では、どぶが貧しい少年のために力を尽すのだが、ラストで「ま、なんとか、まっとうな道を、歩いてもらいてえものだ」とどぶに呟かせている。まだ大人の汚れにまみれていない少年の純真さを見つめるどぶのこの視線は、そのまま本書の主人公・大和川喜八郎のそれとも重なるものだ。

この喜八郎にしても、どぶにしても、彼らが関わる事件は、江戸市井に生きる庶民たちの犯罪ではなく、すべて武士階級が起こしたものである。権力の妄執が生み出した犯罪といってもよい。こうした設定に、柴田錬三郎の社会と人間を見つめる冷徹な観察眼の一端が表れている。その意味では、『柴錬捕物帖　岡っ引どぶ』同様に、本書も柴田錬三郎の社会派捕物帳といった趣をすら感じさせる。

権力犯罪を起こす武士たちの腐敗ぶりに比して、九人の少年たちのあっぱれな暮らしぶりの描写が、爽やかな風となって全編に吹きわたっている。柴田錬三郎の戦後を考えてみた場合、この九人の少年たちが敗戦直後の戦争孤児たちを想起させもする。あのヒーロー・眠狂四郎に戦後の混血児問題をからめた柴田錬三郎だけに、戦争孤児たちのことが柴田錬三郎の念頭にあったと推察しても、あながち的外れとは思えない。社会派の捕物帳というゆえんである。

|著者|柴田錬三郎　1917年岡山県生まれ。慶大支那文学科卒。在学中より「三田文学」に作品を発表。1951年「イエスの裔」で直木賞受賞。1956年創刊の週刊誌に「眠狂四郎無頼控」を連載、ニヒルな剣士と円月殺法は剣豪小説ブームを呼ぶ。1970年『英雄ここにあり』で吉川英治文学賞受賞。伝奇小説の醍醐味を堪能させる作品を多く残し1978年６月逝去。代表作『赤い影法師』『岡っ引どぶ』『運命峠』ほか。

貧乏同心御用帳
柴田錬三郎
© Eiko Saito 2005

2005年３月15日第１刷発行
2006年３月24日第６刷発行

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

発行者――野間佐和子
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン―菊地信義
製版――豊国印刷株式会社
印刷――豊国印刷株式会社
製本――加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-275023-6

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

酒井順子　結婚疲労宴
酒井順子　ホメるが勝ち！
酒井順子　少子
佐野洋子　嘘ばっか〈新釈・世界おとき話〉
佐野洋子　猫ばっか
佐野洋子　コッコロから
佐川芳枝　寿司屋のかみさんうちあけ話
佐川芳枝　寿司屋のかみさんおいしい話
佐川芳枝　寿司屋のかみさんとっておき話
佐川芳枝　寿司屋のかみさんお客さま控帳
佐川芳枝　寿司屋のかみさんエッセイストになる
桜木もえ　ばばばたばたナース秘密の花園
桜木もえ　ばばばたばたナース美人の花道
桜木もえ　純情ナースの忘れられない話
斎藤貴男　バブルの復讐〈精神の瓦礫〉
佐藤賢一　二人のガスコン(上)(中)(下)
佐藤賢一　ジャンヌ・ダルクまたはロメ
笹生陽子　ぼくらのサイテーの夏
笹生陽子　きのう、火星に行った。
佐伯泰英　変化〈交代寄合伊那衆異聞〉
佐伯泰英　雷鳴〈交代寄合伊那衆異聞〉
司馬遼太郎　王城の護衛者
司馬遼太郎　俄〈浪華遊侠伝〉
司馬遼太郎　妖怪
司馬遼太郎　尻啖え孫市
司馬遼太郎　真説宮本武蔵
司馬遼太郎　風の武士(上)(下)
司馬遼太郎　戦雲の夢
司馬遼太郎　最後の伊賀者
司馬遼太郎　播磨灘物語 全四冊
司馬遼太郎　箱根の坂(上)(中)(下)
司馬遼太郎　アームストロング砲
司馬遼太郎　歳月(上)(下)
司馬遼太郎　おれは権現
司馬遼太郎　大坂侍
司馬遼太郎　北斗の人(上)(下)
司馬遼太郎　軍師二人
司馬遼太郎　日本歴史を点検する
司馬遼太郎　歴史の交差路にて〈日本・中国・朝鮮〉
陳舜臣　金達寿　国家・宗教・日本人
司馬遼太郎　井上ひさし　岡っ引どぶ正・続〈柴錬捕物帖〉
柴田錬三郎　お江戸日本橋(上)(下)
柴田錬三郎　国志〈柴錬痛快文庫〉
柴田錬三郎　江戸っ子侍(上)(下)
柴田錬三郎　貧乏同心御用帳
柴田錬三郎　ビッグボーイの生涯〈五島昇その人〉
城山三郎　この命、何をあくせく
白石一郎　火炎城
白石一郎　鷹ノ羽の城
白石一郎　銭の城
白石一郎　びいどろの城
白石一郎　庖丁ざむらい〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　観音妖女〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　刀〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　犬を飼う武士〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　出世長屋〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　お舟〈十時半睡事件帖〉

白石一郎　東海道をゆく〈十時半睡事件帖〉
白石一郎　海よ島よ〈歴史紀行〉
白石一郎　乱世を斬る〈歴史エッセイ〉
白石一郎　海将（上）（下）
白石一郎　蒙古襲来〈海から見た歴史〉
志水辰夫　帰りなんいざ
志水辰夫　花ならアザミ
志水辰夫　負け犬
新宮正春　抜打ち庄五郎
島田荘司　占星術殺人事件
島田荘司　殺人ダイヤルを捜せ
島田荘司　火刑都市
島田荘司　網走発遙かなり
島田荘司　御手洗潔の挨拶
島田荘司　死者が飲む水
島田荘司　斜め屋敷の犯罪
島田荘司　ポルシェ911の誘惑
島田荘司　御手洗潔のダンス
島田荘司　本格ミステリー宣言
島田荘司　本格ミステリー宣言II〈ハイブリッド・ヴィーナス論〉
島田荘司　暗闇坂の人喰いの木
島田荘司　水晶のピラミッド
島田荘司　自動車社会学のすすめ
島田荘司　眩（めまい）暈
島田荘司　アトポス
島田荘司　異邦の騎士
島田荘司　改訂完全版　異邦の騎士
島田荘司　島田荘司読本
島田荘司　御手洗潔のメロディ
島田荘司　Pの密室
塩田潮　郵政最終戦争
清水義範　蕎麦（そば）ときしめん
清水義範　国語入試問題必勝法
清水義範　永遠のジャック&ベティ
清水義範　深夜の弁明
清水義範　ビビンパ
清水義範　お金物語
清水義範　単位物語
清水義範　神々の午睡（上）（下）
清水義範　私は作中の人物である
清水義範　今どきの教育を考えるヒント
清水義範　春高楼の
清水義範　イエスタデイ
清水義範　人生うろうろ
清水義範　青二才の頃〈回想の'70年代〉
清水義範　日本ジジババ列伝
清水義範　日本語必笑講座
清水義範　ゴミの定理
清水義範　日からウロコの教育を考えるヒント
清水義範　世にも珍妙な物語集
清水義範　ザ・勝負
清水義範　おもしろくても理科
清水義範　もっとおもしろくても理科
清水義範　どうころんでも社会科
清水義範　もっとどうころんでも社会科
清水義範　いやでも楽しめる算数
清水義範　はじめてわかる国語

椎名誠　フグと低気圧
椎名誠　犬の系譜
椎名誠　水域
椎名誠　にっぽん・海風魚旅〈怪し火さすらい編〉
椎名誠　もう少しむこうの空の下へ
東海林さだお　やぶさか対談
真保裕一　取引
真保裕一　震源
真保裕一　盗聴
真保裕一　朽ちた樹々の枝の下で
真保裕一　奪取（上）（下）
真保裕一　防壁
真保裕一　密告
真保裕一　黄金の島（上）（下）
真保裕一　発火点
真保裕一　夢の工房
大荒　周防　渡辺精一訳　反三国志（上）（下）
篠田節子　贋作師
篠田節子　聖域
篠田節子　弥勒
笙野頼子　居場所もなかった
下川裕治　桃井和馬　世界一周ビンボー大旅行
篠原章　沖縄ナンクル読本
篠田真由美　未明の家〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　玄い女神〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　翡翠の城〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　灰色の砦〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　原罪の庭〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　美貌の帳〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　桜闇〈建築探偵桜井京介の事件簿〉
篠田真由美　加藤俊章絵　レディMの物語
重松清　定年ゴジラ
重松清　半パン・デイズ
重松清　世紀末の隣人
重松清　流星ワゴン
重松清　ニッポンの単身赴任
重松清　ニッポンの課長
新堂冬樹　血塗られた神話
新堂冬樹　闇の貴族
島村麻里　地球の笑い方
島村麻里　ふたたび
柴田よしき　フォー・ディア・ライフ
柴田よしき　フォー・ユア・プレジャー
新野剛志　八月のマルクス
新野剛志　もう君を探さない
新野剛志　どしゃ降りでダンス
殊能将之　ハサミ男
殊能将之　美濃牛
殊能将之　黒い仏
殊能将之　鏡の中は日曜日
嶋田昭浩　解剖・石原慎太郎
新多昭二　秘話　陸軍登戸研究所の青春
首藤瓜於　脳
首藤瓜於　事故係生稲昇太の多感
島村洋子　家族善哉
仁賀克雄　切り裂きジャック〈闇に消えた殺人鬼の新事実〉

島本理生　シルエット
島本理生　リトル・バイ・リトル
白川　道　十二月のひまわり
杉本苑子　孤愁の岸(上)(下)
杉本苑子　引越し大名の笑い
杉本苑子　汚名
杉本苑子　女人古寺巡礼
杉本苑子　利休破調の悲劇
杉本苑子　江戸を生きる
杉田　望　金融夜光虫
鈴木輝一郎　美男忠臣蔵
瀬戸内晴美　かの子撩乱
瀬戸内晴美　京まんだら(上)(下)
瀬戸内晴美　彼女の夫たち(上)(下)
瀬戸内晴美　蜜と毒
瀬戸内寂聴　寂庵説法
瀬戸内寂聴　新寂庵説法　愛なくば
瀬戸内晴美　家族物語(上)(下)
瀬戸内寂聴　生きるよろこび〈寂聴随想〉
瀬戸内寂聴　寂聴天台寺好日
瀬戸内寂聴　人が好き［私の履歴書］
瀬戸内寂聴　渇く
瀬戸内寂聴　白道
瀬戸内寂聴　いのち発見
瀬戸内寂聴　無常を生きる〈寂聴随想〉
瀬戸内寂聴　わかれば『源氏』はおもしろい〈寂聴対談集〉
瀬戸内寂聴　寂聴相談室人生道しるべ
瀬戸内寂聴　花芯
瀬戸内寂聴　瀬戸内寂聴の源氏物語
瀬戸内晴美編　人類愛に捧げた生涯〈人物近代女性史〉
梅原　猛／瀬戸内寂聴　寂聴・猛の強く生きる心
関川夏央　よい病院とはなにか〈病むことと老いること〉
関川夏央　水の中の八月
関川夏央　やむにやまれず
先崎　学　フフフの歩
妹尾河童　少年H(上)(下)
妹尾河童　河童が覗いたインド
妹尾河童　河童が覗いたヨーロッパ
妹尾河童　河童が覗いたニッポン
妹尾河童　河童の手のうち幕の内
妹尾河童／野坂昭如　少年Hと少年A
清涼院流水　コズミック流
清涼院流水　ジョーカー清
清涼院流水　ジョーカー涼
清涼院流水　コズミック水
清涼院流水　カーニバル一輪の花
清涼院流水　カーニバル二輪の草
清涼院流水　カーニバル三輪の層
清涼院流水　カーニバル四輪の牛
清涼院流水　カーニバル五輪の書
清涼院流水　秘密屋文庫　知ってる怪
曽野綾子　幸福という名の不幸(上)(下)
曽野綾子　私を変えた聖書の言葉
曽野綾子　自分の顔、相手の顔〈自分流を貫く生き方のすすめ〉
曽野綾子　それぞれの山頂物語〈今こそ主体性のある生き方をしたい〉
曽野綾子　安逸と危険の魅力
蘇部健一　六枚のとんかつ

蘇部健一　長野・上越新幹線四時間三十分の壁
蘇部健一　動かぬ証拠
蘇部健一　木乃伊男
そのだちえ　なにわOL処世道
宗田　理　13歳の黙示録
曽我部　司　北海道警察の冷たい夏
田辺聖子　古川柳おちぼひろい
田辺聖子　川柳でんでん太鼓
田辺聖子　私的生活
田辺聖子　愛の幻滅
田辺聖子　苺をつぶしながら〈新・私的生活〉
田辺聖子　不倫は家庭の常備薬
田辺聖子　おかあさん疲れたよ(上)(下)
田辺聖子　ひねくれ一茶
田辺聖子　「おくのほそ道」を旅しよう〈古典を歩く11〉
田辺聖子　薄荷草の恋
谷川俊太郎訳／和田　誠絵　マザー・グース全四冊
立花　隆　田中角栄研究全記録(上)(下)
立花　隆　中核VS革マル(上)(下)
立花　隆　日本共産党の研究全三冊
立花　隆　青春漂流
立花　隆　同時代を撃つ〈情報ウォッチング〉I〜III
高杉　良　虚構の城
高杉　良　大逆転！〈小説三菱・第一銀行合併事件〉
高杉　良　バンダルの塔
高杉　良　懲戒解雇
高杉　良　労働貴族
高杉　良　広報室沈黙す(上)(下)
高杉　良　会社蘇生
高杉　良　炎の経営者(上)(下)
高杉　良　小説日本興業銀行全五冊
高杉　良　社長の器
高杉　良　祖国へ、熱き心を〈東京にオリンピックを呼んだ男〉
高杉　良　その人事に異議あり〈女性広報主任のジレンマ〉
高杉　良　人事権！
高杉　良　小説消費者金融〈クレジット社会の罠〉
高杉　良　小説新巨大証券(上)(下)
高杉　良　局長罷免-小説通産省
高杉　良　首魁の宴〈政官財腐敗の構図〉
高杉　良　指名解雇
高杉　良　燃ゆるとき
高杉　良　挑戦つきることなし〈小説ヤマト運輸〉
高杉　良　辞表撤回
高杉　良　銀行大合併〈短編小説全集(上)〉
高杉　良　エリートの反乱〈短編小説全集(下)〉
高杉　良　権力必腐〈日本経済混迷の元凶を糾す〉
高杉　良　金融腐蝕列島(上)(下)
高杉　良　小説ザ・外資
高杉　良　銀行大統合〈小説みずほFG〉
高杉　良　勇気凜々
高橋源一郎　日本文学盛衰史
高橋克彦　写楽殺人事件
高橋克彦　悪魔のトリル
高橋克彦　総門谷
高橋克彦　北斎殺人事件
高橋克彦　歌麿殺贋事件
高橋克彦　バンドネオンの豹

高橋克彦　蒼夜叉（あおやしゃ）
高橋克彦　広重殺人事件
高橋克彦　北斎の罪
高橋克彦　総門谷R　阿黒篇
高橋克彦　総門谷R　鵺（ぬえ）篇
高橋克彦　総門谷R　小町変妖篇
高橋克彦　総門谷R　白骨篇
高橋克彦　1999年〈対談集〉
高橋克彦　星封陣
高橋克彦　炎立つ　壱北の埋み火（ほむら）
高橋克彦　炎立つ　弐燃える北天
高橋克彦　炎立つ　参空への炎
高橋克彦　炎立つ　四冥き稲妻
高橋克彦　炎立つ　伍光彩楽土〈全五巻〉
高橋克彦　白妖鬼
高橋克彦　書斎からの空飛ぶ円盤
高橋克彦　降魔王
高橋克彦　鬼怨（上）（下）
高橋克彦　火〈北の燿星アテルイ〉
高橋克彦　時宗　壱乱星
高橋克彦　時宗　弐連星
高橋克彦　時宗　参震星
高橋克彦　時宗　四戦星〈全四巻〉
高橋克彦　京伝怪異帖　巻の上　巻の下
高橋克彦　天を衝く(1)～(3)
高橋克彦　ゴッホ殺人事件(上)(下)
高橋　治　男波　女波（上）（下）〈放浪一本釣り〉
高橋　治　星の炎
高樹のぶ子　氷の衣
高樹のぶ子　妖しい風景
高樹のぶ子　エフェソス白恋
高樹のぶ子　満水子（上）（下）
田中芳樹　創竜伝1（超能力四兄弟（ドラゴン））
田中芳樹　創竜伝2（摩天楼の四兄弟（ドラゴン））
田中芳樹　創竜伝3（逆襲の四兄弟（ドラゴン））
田中芳樹　創竜伝4（四兄弟脱出行（ドラゴン））
田中芳樹　創竜伝5（摩天楼・都市（ミラージュ・シティ））
田中芳樹　創竜伝6（染血の夢（ブラッディ・ドリーム））
田中芳樹　創竜伝7〈貧士のドラゴン〉
田中芳樹　創竜伝8〈仙境のドラゴン〉
田中芳樹　創竜伝9〈妖世紀のドラゴン〉
田中芳樹　創竜伝10〈大英帝国最後の日〉
田中芳樹　創竜伝11　〈銀月王伝奇〉
田中芳樹　創竜伝12　〈竜王風雲録〉
田中芳樹　魔天楼〈薬師寺涼子の怪奇事件簿〉
田中芳樹　東京ナイトメア〈薬師寺涼子の怪奇事件簿〉
田中芳樹　巴里・妖都変〈薬師寺涼子の怪奇事件簿〉
田中芳樹　クレオパトラの葬送〈薬師寺涼子の怪奇事件簿〉
田中芳樹　西風の戦記（ゼピュロシア・サーガ）
田中芳樹　夏の魔術
田中芳樹　窓辺には夜の歌
田中芳樹　書物の森でつまずいて……
田中芳樹　白い迷宮
田中芳樹　春の魔術
田中芳樹　運命〈二人の皇帝〉　原作：幸田露伴
田中芳樹　「イギリス病」のすすめ　文：土屋守
田中芳樹　中国帝王図　画・文：名月皇

2006年3月15日現在